風雲急!! 魔裟斗とやるのは、五味か、川尻か!?

kamipro

紙のプロレス

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

enterbrain MOOK

2009
135
特別定価940yen



元祖・プロ格闘技の
恐ろしさを見よ!!

K-1をナメくさりやがって!!

待望の本誌初登場!!
K-1、世間、そしてMMAを語る!
魔裟斗
ロングインタビュー

kamiproなりの総力特集
ザ・K-1

修斗王者に圧勝!! 魔裟斗戦やれんのか?
“俺たちの五味隆典”座談会PART.2!!

“ぱいーん”な特別対談実現!
エメリヤーエンコ・ヒョードル×青木真也

やるか、やられるか!?
“K-1を作った男”が語る他流試合!!
石井教義

世の中には榊原イズムが足りない!?
榊原信行語録で振り返る
K-1vsPRIDE

噂の“ステロイド超人”
ホセ・カンセコとは何者か?
町山智宏

魔裟斗までたどり着け!
運命のカルバン戦直前インタビュー
川尻達也

じつは本誌初登場なんです。
愛と涙と感動のK-1競技論!!
角田信朗

好評シリーズ第3弾は
井上京子だ!
1993年の女子プロレス

ン副社長


GENDAI
食物繊維が豊富
ヘアボールコントロール&
ダイエット効果をサポート
栄養バランス抜群
ペットの青汁
大地の恵み
―犬猫用栄養補助食―
チーズ味
かつお味
国産・大麦若葉使用
国産大麦若葉
ペットの青汁
健康ふりかけ
NET16g（2g×8袋）
国産大麦若葉
食べやすい
粉末タイプ
大地の恵み
いつものごはんにかけるだけ
犬猫兼用
GENDAI 現代製薬株式会社 〒190-1222 東京都西多摩郡瑞穂町箱根ヶ崎東松原 8-4 TEL. 042-556-1971 FAX. 042-557-2516 http://www.gendai.ne.jp/

kamipro

2009 No.135 CONTENTS

表紙写真／吉場正和

まさかの総力特集
特集 K-1

©K-1



舞妓Haaaaaaaaan!!!と館長Haaaaaaaaan!!!
(パリのエッフェル塔前にて)



1をわれるか!?

K―1を初めて食べちゃうぞっ‼

今月号の特集テーマは、な、な、な〜んと「K―1」です。風雲急を告げる〝魔裟斗vs総合格闘家〟を入り口に、その重要な魔裟斗のインタビューから、どうでもいいターザン山本!の恨み節までを通して、〝元祖・プロ格闘技団体〟の本領に迫っていきます。

普段から桜井〝マッハ〟速人ばりに「K―1をナメくさりやがって!」る方は、よ〜く読んでK―1の底力を感じ取ってください。よろしくネッ‼(サスケ調)。

……というわけで、『kami-pro』が、イチバン「K―1をナメくさりやがって!」きたじゃないかという声を無視して話は進めるが、そのK―1が誕生したのは1993年のこと――。それは豊饒なプロレス・格闘技文化が形成されていた時代でした。

プロレス界では当時のマット界の盟主・新日本プロレスが4大ドームツアーを敢行していずれの会場も満員にし、ターザン山本率いる『週刊プロレス』が実売20万部という怪物雑誌に成長。

プロレス団体はインディーを含めて30を超える盛況ぶり。なにより〝強さ〟へのロマンに酔いしれることがまだできた(だから対極である〝いかがわしさ〟も上質に成立していた)。

一方で格闘技は、UWFやそこから派生したリングス、パンクラス、そして修斗やUFCが新しい格闘技の価値観を作り上げていく真っただ中。その実験的過程は刺激的でじつに興奮できた。

〝90年代チルドレン〟の中邑真輔ではないが、プロレスも格闘技もなんでもおも



K-1 食うか、食

いが、プロレスも格闘技もなんでもおもしろがれた。
そんなマット界黄金時代の覇者がK-1だった。
K-1は、時にはそのムーブメントを採り入れ（過剰に表現すれば〝吸収〟し）、あるときは他流試合や決闘によってさまざまなものを叩き潰してきた。
地上波中継を背景にしたメディア戦略や、刺激的で斬新なマッチメイクによって、他団体とのイベント戦争を制してきた。詳しい説明は省くが、PRIDEや『ハッスル』も、そもそもは〝K-1の一部〟だったのだ。
――K-1って、本当はおそろしいんです。いたって簡単でわかりやすい、「食うか、食われるか」のルールの中で勝ち抜いてきた。試合でも、イベントでも、テレビの世界でも――。
そしてK-1が〝食う〟ことによって作り上げてきた現代の格闘技文化を、あるときは選手が、またあるときは観客が、そして他団体が食わんとする――すなわち利用していく。
7月の魔裟斗の対戦相手はいまだに流動的だが、K-1の幻想を〝食う〟絶好の機会なのである。
食うか、食われるか。大晦日の対DREAM3連敗やモンスター路線のイメージが強いけれど、一つだけ言えることは、K-1はいつだって〝食う側〟だったからこそ、いまがある――。
ということで食うか、食われるか、ヒーヒー言わせてやるぜー！（『とんがらしMEN』調）。



“反逆のカリスマ”というフィクションと世界王者という真実を生きた男

待望の本誌初登場

"ジャンルを作った男"が最後の2試合を前に本音で語るロングインタビュー

魔裟斗

「中量級をメジャーにするためには"魔裟斗"になるしかなかった」

日本格闘技界最大のスター選手の一人である魔裟斗が、残り2試合を行なう大晦日での引退を発表した。K-1だけでなく、格闘技の表舞台に中量級というジャンルを作り上げた先駆者である魔裟斗は、いかにして自らの存在をメジャー化させていったのか。さらに"K-1中量級の象徴"として、K-1ヘビー級や総合に対してどんな思いを抱いていたのか?

聞き手　堀江ガンツ　撮影　吉場正和　試合写真　乾晋也



残り2試合。今年の大晦日、格闘技界に一時代を築いた魔裟斗が29歳の若さで引退する。

ただ単に世界チャンピオンになっただけでなく、K—1に中量級という〝ジャンル〟自体を作り上げた魔裟斗。彼の台頭、そしてK—1 MAXの成功がなければ、PRIDE武士道や『HERO'S』といった、総合格闘技中量級のビッグイベントにも開催のGOサインが出るのは難しかっただろう。そういった意味では、魔裟斗はK—1にとどまらず、格闘技界全体に巨大なる地殻変動を起こした存在であったのだ。

この7月には総合格闘家との対戦も噂される魔裟斗。そのラスト二つの大勝負を前に、これまでの歩みを語ってもらった。

——まずは今回、大晦日での引退を発表されたわけですけど、「自分がやるべきことはすべてやった」という達成感みたいなものはありました?

魔裟斗　「(K—1 MAXの)チャンピオンにもう一回なる」っていうのが最大の目標だったんで、それはとりあえずクリアできたな、目標達成したなっていうのはありましたね。

——そういったファイター個人としての目標を達成したことプラス、魔裟斗選手はK—1 MAXというジャンルを作り上げたわけじゃないですか。そういったことへの満足感はどうですか?

魔裟斗　そんなこと考えてなかったですね。最初に(K—1 MAXが)できたときは考えたこともありましたけど、もう闘ってるあいだはそんなの超越してました。ジャンルをどうするなんてことより、俺は「チャンピオンになりたい」っていう気持


ちのほうが全然強かったんで、まったく考えてなかったです。
——目の前の闘いに勝つことにそれだけ没頭してたというか。
魔裟斗　そうですね。
——ただ、それはK—1 MAXのチャンピオンというものが大きな価値を持ったからこそ、そこを目指すために没頭できたというのもあると思うんですが、MAXができる前は「自分が中量級をメジャーにする」というような思いってあったんじゃないですか？
魔裟斗　俺がまだK—1に出てない頃は、ヘビー級の選手がうらやましかったですね。ただ、俺が（K—1に）出れば逆転させる自信はありましたから。これは昔から言ってますけど。
——「俺がK—1を背負うんだ」って思った瞬間ってありますか？
魔裟斗　K—1を背負うんだっていうことはなかったですね。そういう質問をされると「あ、俺ってK—1の代表なんだ」「MAXだけじゃなく、K—1すべて含めてそういうふうに見られてるんだ」って思ったりするだけで。言われて初めて「そこまで言われるぐらいになったのかな」って感じですね。
——ここまで来るのにはいろんなことがあったと思いますけど、一番苦しかった時期はいつでしたか？
魔裟斗　やっぱり全日本キックを辞めて練習場所のないときですよね。あのときはキツかったです。全日本辞めてから4カ月ぐらい練習場所がなくて、パンクラスの道場で一人で練習したときはまだよかったぐらいで。ホントにロードワークしかできない時期がありましたからね。東京に出てきたばかりで友だちもいないし、何をしていいかわからない。その4カ月が精神的にもの凄くキツくて、俺は〝暇〟っていうのが嫌いになって、人生観が変わりましたよ。だから、ある意味で俺にとってはもの凄く大きな4カ月間ですね。
——団体を離脱して、練習場所もないときは、キックボクサーとしての存在を抹殺されるような恐怖ってありましたか？
魔裟斗　まだ21歳だったんで、そこまでは考えてなくて。「どうしようかな、昔みたいにまた工事現場で働こうかな」とか悩みましたよね。「帰ろうかな？」とか。
——業界のルールの外に出たことで、道がなくなったわけですからね。
魔裟斗　そうですね。道はまったく閉ざされてました。
——光明が見えたのはいつですか？
魔裟斗　そのあと日本で試合をやったのが『コロシアム2000』（00年5月26日、東京ドーム）だったんですよ。もちろんそれが大きかったけど、自分にとっては、その前にタイに行って練習ができたことが何より嬉しかったですね。
——ちゃんとした練習を再びできることが、何より嬉しかった、と。
魔裟斗　すげえ嬉しかったです。練習はキツいけど凄く楽しい、俺はいま生きてるぞ、みたいな。
——これまでは練習ができないという、キックボクサーにとっては手足が縛られたみたいな状況だったわけですからね。
魔裟斗　タイに行く前は、やることないから午後3時に家でワイドショー観てたりしたんですよ。そういう状況が嫌で嫌で仕方がなかった。午後3時に何やってんだ俺、みたいな。練習がやりたくてもできないんだから。
——その状況から東京ドームの大舞台に出られたんだから、それは嬉しいですね。
魔裟斗　いや、ドームとかそういうのは関係なかったですね。試合ができること自体が俺には大きなことだったんで。だけど、このドームが大きなきっかけにはなったんですよ。この試合をたまたま当時のTBSのプロデューサーが観ていてくれて、それがK—1 MAXにつながったんです。だから俺が『コロシアム2000』に出てなかったら、たぶんK—1 MAXはTBSでやってないですね。
——あの大会はそんな大きな役割をはたしてましたか！　どこで道が開けるかわからないもんですね。
魔裟斗　あと『コロシアム2000』だけじゃなくて、そのもととなったテレビ東京の『格闘コロシアム』も俺の人生を変えましたから。
——佐藤ルミナや謙吾と一緒に『格闘コロシアム』のイメージファイターをやってたんですよね。
魔裟斗　最初にその話が来たとき、俺は嫌だって言ったんですよ。「練習時間が少なくなるから、俺は出たくないです」って言ったんですけど、出たことで意識が変わりましたね。テレビに出たことでプロ意識を持ったし、俺はこれで食っていこうと思いましたから。それによって試合に対する意識も変わって、魅せる試合をしなきゃいけないと思うようになりましたから。
——じゃあ、いったん競技者として場を奪われたからこそ、いまの魔裟斗選手があるという部分もあるんですね。
魔裟斗　イメージファイターになったのは、俺がまだ全日本キックにいた頃ですけどね。
——でも、当時から魔裟斗選手のパブリックイメージは、いわゆる「遊んでるけど強いぜ」みたいな感じではありませんでしたっけ？
魔裟斗　それはTBSに出るようになってからですよ。テレ東のときは素の不器用な、テレビに出ても何もしゃべれない俺でしたから。
——その素の自分を〝魔裟斗〟っていうキャラクターに変えていったのはご自分ですか？
魔裟斗　まずテレ東に出るようになって





90年代末、魔裟斗が世に出るきっかけとなった、テレビ東京の格闘技情報番組『格闘コロシアム』。魔裟斗は佐藤ルミナ、謙吾とともに“イメージファイター”となったが、まだその表情にはあどけなさが残る。そして写真下が、K-1 MAX初期の魔裟斗。“チャラいけど強い”イメージをビジュアル含めてあえて作っていたのだ。

テレ東の『格闘コロシアム』に出たことによって
プロ意識を持ったし、俺の人生が変わりましたね



プロ意識を持って、考えが変わってきて、TBSの話が来てから「中量級を注目させるには、どうすればいいか」っていうことを考えるようになったんです。そして、いかに自分をプロデュースするかっていうことを考えて、ああいう発言につながったんですよ。

——あえて傲慢な感じの話し方をしていた、と。

魔裟斗　素の俺としては全然そんなこと言いたくなかったというか、自分で言って「おもしれえな」って客観的に思ってましたからね（笑）。やっぱり、おもしろいヤツがいないと、ヘビー級しかいなかった当時のK—1で勝負ができないと思ったから、俺がメチャクチャ言いまくろうと思って。で、予想どおり注目を浴びたんです。ただ一つの誤算は、俺がヒールになってたってことなんです。

——とくにもとからの格闘技ファン、キックファンから目の敵にされて、第1回のK—1 MAXは凄い試合してるのに大ブーイングでしたもんね。

魔裟斗　あれにはちょっと「あれれれ？」みたいな。

——そんなつもりじゃなかったのに。

魔裟斗　注目を浴びるまでは予想どおりなんだけど、俺が悪者になることは予想してなかったです。それはちょっと落ち込みましたね。

——選手としては誰よりも真摯に競技に挑み、リング外はプロとして〝魔裟斗〟というフィクションのイメージ作り上げていく作業をしていたわけですよね。

魔裟斗　まあ、あの〝作った俺〟も、すべてが嘘でもないんですけどね。多少、大げさに脚色してはいるけど、火のないところに煙は立たないわけで、ああいう自分も間違いなくいた。実際、すげえ遊んでたし。ホントのことではあるけど、あそこまで出すのも勇気がいることだから。

——じゃあ、ある種、役作りというか。自分を「魔裟斗だ」と思い込ませていた部分もありました？

魔裟斗　そうです。いまでもリング上では〝魔裟斗〟ですけど、リングを降りると全然違いますよ。



07年6月、『HERO'S』ミドル級王者のJ.Z.カルバンがK-1MAXに出場し、魔裟斗と激突。魔裟斗はこの“外敵”相手にガンガン前に出るケンカスタイルで応戦。組みついてくるカルバンを時にはぶん投げ、時にはヒザを突き刺し、フルマークの判定で完勝した。

——素の魔裟斗さんって、これまでテレビではあまり出してませんでしたけど、半年ぐらい前に『さんまのまんま』に出てたのを観たんですよ。あの番組を観て「魔裟斗ってホントはこんな人なんだ！」って思った人、多いんじゃないですかね。ボクが思いましたから（笑）。

魔裟斗　だからね、俺は自分が出てるトーク番組みたいなのは観れないんですよ。

総合格闘技はおもしろいと思わない。総合の選手と闘うならボコボコにする

素の自分が出てるから、恥ずかしくなっちゃう。〝魔裟斗〟になるスイッチが入ってる俺はいいんですけど、入ってない素の俺をテレビで観るのはダメですね、恥ずかしくて。だからよく言われますよ、普段の俺に会うと「全然違うね」って。

——逆に言えば、〝魔裟斗〟でいるときは相当気が張ってたってことですよね。

魔裟斗　いまはもう普通にスイッチ入っちゃいますけどね。このインタビューも〝魔裟斗〟でしゃべってますから。

——〝魔裟斗〟モードでしたか（笑）。その魔裟斗として大きなことを常に言わなきゃいけないっていうキツさはありました？

魔裟斗　プレッシャーはありましたね。チャンピオンになったあととか、負けたらどうなるっていうのもあるし。負けられないと思ってましたから。

——持ち上げるために言った自分の言葉に責任を持たなきゃいけないわけですからね。

魔裟斗　そうですね。

——そういう意識でやってる魔裟斗選手からすると、周りは……。

魔裟斗　（さえぎって）俺、下を見てないからわかんないですよ。下の人間見てもしようがないし。「下の人をどう思う？」とか言われても、見てないからわからない。

——でも、イラついたりはしませんか？「俺はこんだけやってるのに」みたいな。

魔裟斗　下が何をしようがイラつかないですよ。逆に俺を超えられちゃったときのほうがイラつくんじゃないですか？いまは笑って見てますから。〝コスプレくん〟とかね。「やれやれ！」みたいな。全然頭にこないし。

——彼に抜かれたら頭にくるでしょうね（笑）。引退撤回しなきゃいけなくなるんじゃないですか？

魔裟斗　それは絶対ないです（キッパリ）。

——失礼しました（笑）。逆に魔裟斗選手が見上げる存在っていうのは、現役生活の中でいましたか？

魔裟斗　……昔から尊敬する選手とかいないですね。10代の頃は前田憲作さんと一緒に練習させてもらって、凄いなって尊敬しましたけど。それ以降は……。

——K—1のヘビー級に対してライバル心みたいなものは？

魔裟斗　悔しさはありましたよ。

——それは知名度だったり、視聴率だったりという部分ですか？

魔裟斗　その頃は視聴率なんて全然考えてなかったけど、まあ、知名度ですよね。ぬるい試合やって負けても、なんとも思ってないんだなっていうのもあったし。

——ぬるい試合ですか。

魔裟斗　だってそうでしょ？　基本的に俺は「負けたら終わり」と思ってやってるけど、ヘビー級は何回負けても、テレビに出てくるわけじゃないですか。ぬるいなって思いましたよ。

——総合格闘技についてはどう思ってました？

魔裟斗　全然おもしろいと思ってなかっ

たし、いまでもおもしろいと思わないで
負ける姿を解説席で観てて、かなり腹が立
に引退する気かよ」みたいな感じですよ。
るしかないってやってきた結果なんで。

引退まであと2試合だけど、いまでも本気で強くなるための練習をしてるから

たし、いまでもおもしろいと思わないです。だから俺も総合の選手とやるときは、いつもケンカ腰ですから。（JZ）カルバンとやった試合もそうだし、KIDとやった試合もそうだし。だからもし次に総合の選手と試合するんだったら、俺はケンカのつもりでいきます。

——競技としての「試合」ではなく。

魔裟斗　ボコボコにぶん殴ってやりますよ。俺の中では〝敵〟ですから。

——〝対戦相手〟と〝敵〟は違うわけですか？

魔裟斗　K—1ファイターと総合の選手は違いますね。K—1ファイターは普段顔を合わせるじゃないですか。ベスト8の選手なんて、試合が終わったら、みんなでわいわい同じバスでホテルに帰るんですよ。だからK—1ファイターが敵なのはリング上だけなんですよ。でも、総合の選手は違うじゃないですか。もう顔合わせないからケンカ腰でできるし、何やってもいいや、みたいな。そういう感覚になるんですよ。

——なるほど。だから必然的におもしろい試合になるんですね。

魔裟斗　俺の気持ちがそうなんですよ。「てめえ！」みたいになってるし。だってカルバンとやったとき、ぶん投げましたけど、俺は普通、ぶん投げないもん。あれはわざとやってるんですよ。相手が敵だし、ケンカだから。

——じゃあ、去年の大晦日は〝敵〟である総合格闘家にK—1ファイターが次々と負ける姿を解説席で観てて、かなり腹が立ったんじゃないですか？

魔裟斗　いや、あのときはなんにも思ってないです。

——でも、総合格闘家っていうのはK—1の本職じゃないわけですから負けるわけにはいかない相手ですよね。

魔裟斗　だから、いまもキツい練習やってるんですよ。負けられないのは今回だけじゃなく、ずっと思ってたことだけど。

——では、そういう負けられない闘いを長年続けてきたことを、あらためて振り返ってみてどう感じてますか？

魔裟斗　キツかったけど、一瞬でしたよ。あっという間。ただ、まだ終わってないし、いまでも本気で強くなるつもりで練習やってますからね。俺の練習見たら「ホントに引退する気かよ」みたいな感じですよ。強くなるための練習、厳しい練習してますよ、いま。だからあと2試合、強い自分のままでいこうと思ってるし。自分でも「よくやるよ」って思うぐらいキツい練習してますから。



まさと■1979年3月10日、千葉県出身。97年に全日本キックでデビュー。99年に全日本キック離脱後、02年にK-1 MAX日本トーナメントに優勝。第1回K-1 MAX世界大会はベスト4。03年にK-1 MAX初優勝。昨年、5年ぶりにK-1 MAX王者に返り咲き、今年、あと2試合での引退を表明した。174cm、70kg。

——現役であるかぎりは、常に昨日の自分より強くあることを課しているんですかね？

魔裟斗　そういう性格なんじゃないですか？　だから、引退まであと7〜8カ月で、周りから「もう引退しちゃうんだ」とか言われるんですけど、俺からしたら「まだ、あと8カ月もあるんだよ」って感じなんですよ。すげえつらい練習が8カ月続くんだから。

——命を削るような大一番があと2試合も残ってるわけですからね。

魔裟斗　だから俺の中ではまったく終わりじゃないですよ。

——では、あと2試合ですけど、最後にどういったものを見せたいと思ってますか？

魔裟斗　最後、とにかく熱い試合をやって、倒すことを考えてますよ。強さ見せて記憶に残る、これからの人生の土台になるような試合をするつもりです。

——魔裟斗選手は、ご自分がいなくなったあとのK—1 MAXについては、何か考えていることはありますか？

魔裟斗　考えてないですね。俺はいままでの経験上、先のことを考えて成功したことはないんですよ。いまできることをやるしかないってやってきた結果なんで。練習場所もなく走ることしかできないときも、俺は走ることをやめなかったし、パンクラスで一人でサンドバッグを打つしかできないときも打ち続けたし。その積み重ねがあったいまがあるわけだから。逆に（03年に）チャンピオンになったあとは、これから先のことばっかり考えてたから、そのあとなかなかチャンピオンになれず、逆に自分のやりたいことができなかった。そういう経験があるから、もう辞めたあとのことは考えない。だからいまは、あと2試合というか、とにかく7月に最高の試合をやることしか考えてないんで。いまは、あとのことなんて知らない。

——このジャンルがどうなるっていうのは、いまの自分が考えることじゃない、と。

魔裟斗　俺は自分が最高の試合をすることだけしか考えてないから。これまでだってそうだったんですよ。自分のことだけ考えて、リングに集中してたからやってこれたわけであって。よけいなこと考えてたら失敗するから。俺はあと2試合、最高に試合をするだけですね。

——では、最高の2試合に期待してます！

【09年5月9日／都内・某ホテルにて収録】



1990.6.30　全日本キックボクシング
○佐竹雅昭vsドン・中矢・ニールセン×
(1R 2分30秒 TKO)

前田日明との異種格闘技戦戦で名を挙げ、実力はともかく当時のキック界でトップクラスの大物となっていたニールセンに、佐竹雅昭が挑戦。佐竹は初のキックルールだったため、下馬評では「佐竹不利」と言われていたが、頭突きまで繰り出すケンカ空手でKO！ 絶対に勝たねばならぬ闘いでの集中力、これが正道会館の強さでもあった。



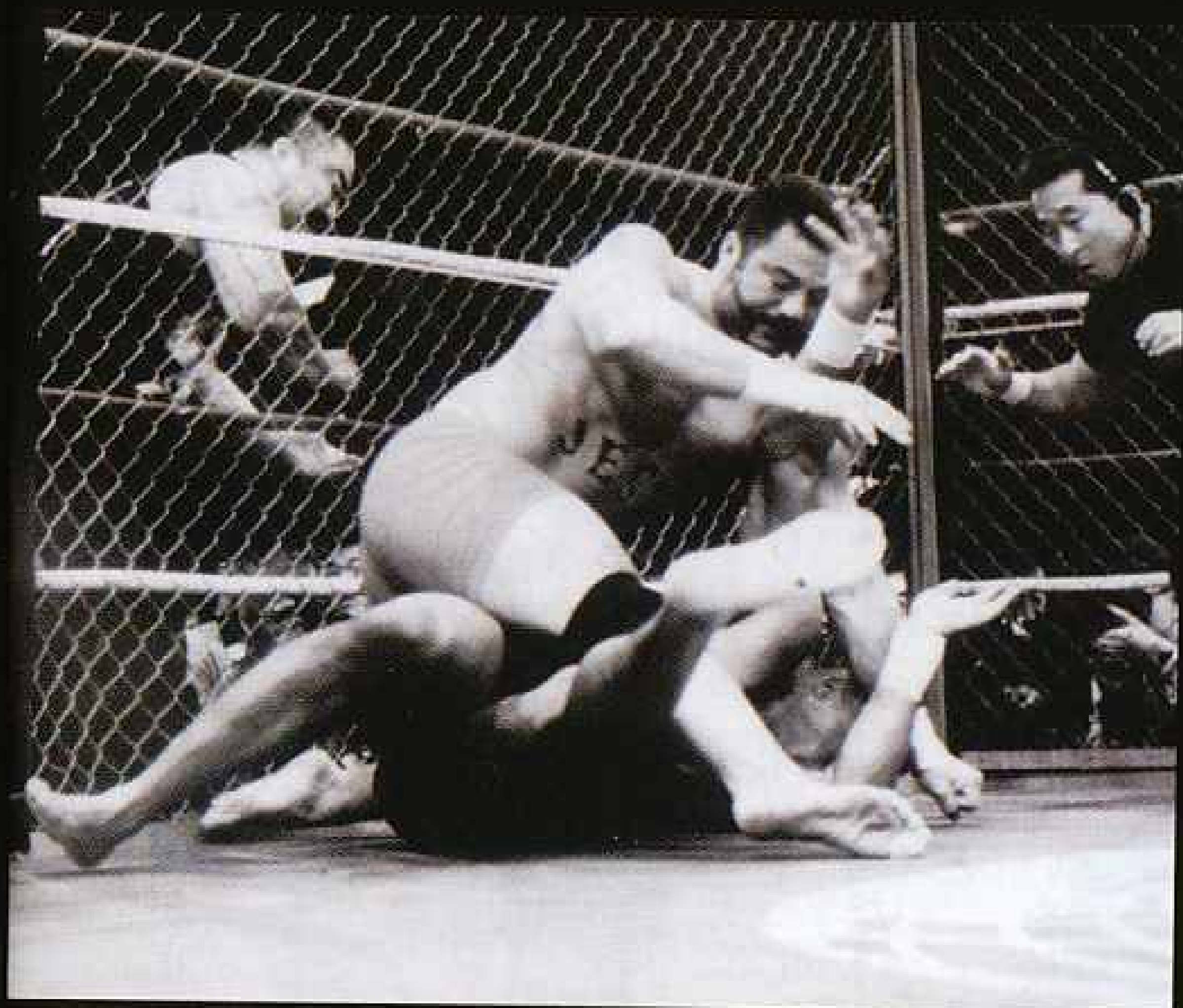
1993.10.3　KARATE WORLD CUP'93
○アンディ・フグvsチャンプア・ゲッソンリット×
(判定)

極真空手史上最強の外国人と呼ばれたアンディ・フグが極真から正道へ移籍し、『カラテワールドカップ』に出場。この大会には"ムエタイの巨象"と呼ばれたチャンプアも参戦し、フグvsムエタイ戦士が実現。フグは空手ルールながら"立ち技最強"ムエタイを下し、いよいよ翌年K－１ルールに挑むことになった。



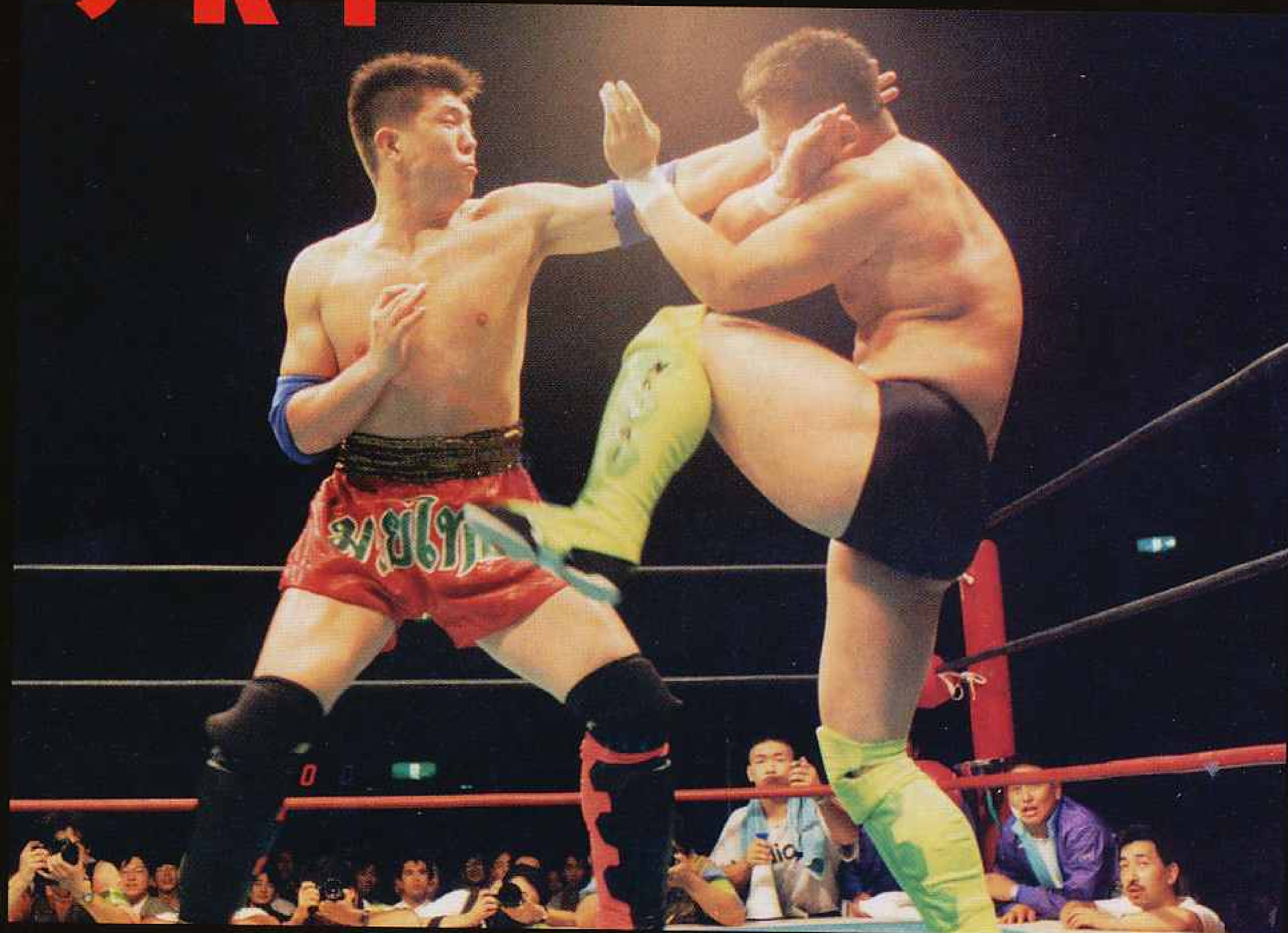
1991.6.4　USA大山空手vs正道空手5対5マッチ
○佐竹雅昭vsウィリー・ウィリアムス× (判定)

正道会館の東京本格進出第一弾イベントは、USA大山空手との５対５対抗戦という全盛期の新日本プロレスを彷彿させる形式に。こういった企画はこれまでの格闘技界にはなく、正道会館が斬新なところだった。この大将戦で、正道会館のエース佐竹雅昭が、伝説の"熊殺し"ウィリーを判定で下し、スター街道を歩み始めたのだった。



1994. 12.10　K-1
○キモvsパトリック・スミス×
(1R 3分13秒　TKO)

最強幻想の真っ只中にあったホイス・グレイシーを初めてKO寸前まで追いつめ、そのミステリアスなムードも含め一躍時の人となったキモをK-1が招聘。なんとパトスミと日本初の金網アルティメット戦をマッチメイクし、またK-1が格闘技界に一石を投じたのだった。



1992.10.29　リングス
○佐竹雅昭vs長井満也× (1R 1分24秒 KO)

当時、蜜月関係を築いていたリングスと正道会館だが、正道会館の自主興行が増えるにつれ、その関係は微妙になっていった。そんな中で組まれた正道vsリングスジャパンの直接対決。異様な緊張感の中、佐竹は反則ギリギリのナックルから掌底で、長井をKO！　この一戦を最後に佐竹はリングスを離れ、正道は翌年第１回K－１GPを開催。メガイベントとして独り立ちを始めるのだった。



1995.9.3　K-1
○本間聡vs成瀬昌由×
(19分2秒 TKO)

佐竹vs長井戦以降、完全に関係が切れていた正道会館とリングスだが、リングスジャパンの成瀬昌由が、リングスマットで敗れた本間聡へのリベンジのため、K-1のリングに乗り込んで、正道会館vsリングスの他流試合が実現。本間が成瀬を返り討ちにして、リングスが正道会館に敗れるかたちとなった。



1995.7.16　K-1
○角田信朗vsジョー・サン×
(1R 1秒40秒 KO)

これまで空手ルールとリングスルールだけで闘っていた角田が、初のK-1ルールに挑んだ一戦。なんとキモの師匠にしてジョー・サンと、空手vsジョーサンドー（ジョー・サンが作り上げたとされる武術）の他流試合を行なった。この一戦で角田のプロとしてのケレン味が爆発！ 超ハイレベルなK-3グランプリを食うインパクトを残した。



1994.4.30　K-1
○パトリック・スミスvsアンディ・フグ×
(1R 19秒 KO)

第１回、第２回のUFCで狂気の闘いぶりを見せ、強烈なインパクトを残したパトスミがK-1に初来日。フグと空手vs街のケンカという異次元他流試合が組まれた。当初はK-1ルールではかませ犬だと思われたパトスミだが、なんとフグを秒殺KO！　極真世界２位のフグがケンカ屋に敗れる姿は、格闘技界に衝撃を与えた。



マスター・イシイ

kamipro特選
K-1と他流試合

K-1（正道会館）が人気を博し、ここまで巨大化した要因の一つとして、黎明期から緊張感あふれる他流試合をダイナミックに展開し、ファンに提供してきたことがあった。ここではK-1系のリングで行なわれてきた、歴史に残る他流試合を振り返ってみよう。

構成／堀江ガンツ　写真協力／K-1



1997.11.9 K-1
○村浜武洋vs前田憲作×
(3R終了判定)
シュートボクシング軽量級のエースとして、実力日本一との呼び声も高かった村浜。しかし、大半はSBルールだったため、当時のキック界からは正当な評価を受けていなかった。そんな中、K-1初の軽量級（フェザー級）トーナメントで全日本キックのエース前田憲作との一戦が実現。村浜は判定で前田を下し、あらためてその実力が本物であることを証明した。



1995.12.8 K-1
○角田信朗vs ブルース・"ドラゴン"・ジョー×
(1R 1分28秒 KO)
ジョー・サン戦でその魅力を大爆発させた角田が、今度はジョーサンドーに続き、カンフー戦士を迎撃。図々しくもあのブルース・リーと同じ"ドラゴン"の異名を勝手に名乗るブルース・"ドラゴン"・ジョーをわずか98秒でKO！ 勝利のポージングまで披露し、またしてもK-1を角ちゃんワールドに染めた。



1995.12.8 K-1
○田村潔司vsパトリック・スミス×
(1R 55秒 ヒールホールド)
経営危機に陥ったUWFインターが新日本プロレスとの対抗戦に打って出る中、ただ一人背を向け、試合から干されていた田村がK-1で素手のバーリ・トゥードに出陣。レスラー生命を懸けて、この他流試合に挑んだ田村は、タックルからヒールホールドで秒殺勝ち！ 一躍、UWFの象徴にまで躍り出るターニングポイントとなる試合となった。



1997.7.20 K-1
○フランシスコ・フィリォvsアンディ・フグ×
(1R 2分37秒 KO)
極真の世界王者が極真会館所属のまま初めてK-1に参戦。元極真世界2位にして前年度K-1 GP優勝者であるフグと対戦。フィリォはこの夢の闘いを1ラウンド、右フック一撃でKO勝ち。極真神話を完全復活させるような衝撃的な勝利を挙げた。



2001.8.19 K-1
○ミルコ・クロコップvs藤田和之× (1R 39秒 TKO)
アンディ・フグ追悼大会で、K-1vs猪木軍の闘いが開戦。初バーリ・トゥード参戦となるミルコは、圧倒的不利の下馬評を覆し、ヒザ蹴り一発で藤田にTKO勝ち！ この試合の緊張感と衝撃が、のちの大晦日『猪木祭り』へと繋がり、ミルコは怪物化するなど、格闘技の歴史を大きく動かす闘いとなった。





2002.4.28 PRIDE.20
△ミルコ・クロコップvs ヴァンダレイ・シウバ△
(3R 終了 ドロー)
これまでプロレスラー相手に総合でその強さを発揮していたミルコが、ついにバリバリの総合格闘家シウバと対戦。これがK-1vsPRIDE本格開戦の第一戦だった。ストライカー同士でミルコ有利かとも思われたが、シウバはミルコの打撃に倒れず、判定なしルールながら、シウバが試合内容で上回った。この翌年、ミルコはPRIDEへ本格参戦することになる。



2001.12.31『猪木祭り』
○ミルコ・クロコップ vs永田裕志×
(1R 21秒 KO)
藤田和之を破り"プロレスラーハンター"の異名を得たミルコに、プロレス界としてリベンジすべく、我らが永田さんが出陣。試合前は「ミルコを蹴り倒す！」と"やっちゃっていいんだね？"的な自信をみなぎらせた永田さんだったが、ミルコのハイキックの前にわずか21秒で昇天。白目を剥かんばかりの失神負けを喫した。



2004.12.31 『Dynamite!!』
○魔裟斗vs山本"KID"徳郁× (3R終了判定)
総合格闘家ながらK-1 MAXで旋風を起こしたKIDと魔裟斗のスーパースター対決が大晦日に実現。魔裟斗はKIDの変則的なパンチで1ラウンドになんとダウンを奪われるが、2ラウンドにダウンを奪い返し、判定勝ち。魔裟斗があえてケンカ腰で殴り合いに応じたこともあり、名勝負となった。



2003.12.31『Dynamite!!』
－アレクセイ・イグナショフvs中邑真輔－ (無効試合)
『Dynamite!!』で、K-1のイグナショフと新日本プロレスの若きIWGP現役王者・中邑大輔が対戦。中邑のタックルにイグナショフがヒザ蹴りを合わせるという、ミルコvs藤田の再現のような結末でイグナショフKO勝ちとなったが、中邑がすぐさま立ち上がったため、後日、無効試合となった。



2003.3.1 K-1MAX
○魔裟斗vs武田幸三× (3R終了 判定)
K-1 MAXスタートと同時に大スターとなった魔裟斗と、史上4人目の外国人ムエタイ王者となった武田幸三による、日本人頂上対決が日本トーナメント決勝で実現。武田の強烈なローキックを耐え抜いた魔裟斗がパンチを中心に攻め込み、フルマークの判定勝ち。実力日本一をあらためて証明した。

勝負師の他流試合論



正道会館宗師
石井教義

大晦日のK-1勢3連敗の印象が強いかもしれないが、元来K-1は“他流試合のプロ”なのである。
そして正道会館が“他流派荒らし”と恐れられていた時代から前面に立って指揮してきたのは石井教義氏だ。
競技として、イベントとして、テレビコンテンツとして、“他流試合”をこなしてきた石井氏に勝負師のあり方を聞いた。

聞き手／ジャン斉藤　写真協力／K-1

「これから僕がケンカする相手はFIFAでありIOCなんです」





――石井館長！ 今日はK―1の〝原点〟となった正道会館のお話からうかがわせてください。

石井 そういう話なんだ。ずいぶん古い話になるかもね（苦笑）。

――よろしくお願いします。まず正道会館は〝常勝軍団〟と呼ばれていたわけですけども、他流試合や決闘を繰り広げてそれを制することで、どんどん巨大化していったイメージがあるんです。

石井 初期の頃の正道会館はそうだね。他流試合を繰り広げていって、それがK―1につながったということじゃないかな。

――最近のK―1には、そういった対立概念的なものが失なわれているように思えるんですが。

石井 いや、いまのK―1には、そういったものは必要ないと思うけどね。

――あ、必要ありませんか。

石井 うん。これからそれを誰がやらなくちゃいけないかといったら、そこはDREAMや『戦極』とか、新しいイベントがどんどんやるべきだと思うけどね。K―1はそれをやっちゃダメだよね。僕は必要ないと思う。

――なるほど。90年代のプロレス・格闘技文化を考えると、プロレスから派生していったUWFやリングスなどはともかくとして、K―1は斬新なイメージ戦略やイベント展開によって、プロレス界からすれば結果的に〝K―1に食われた〟という印象が強いんですね。

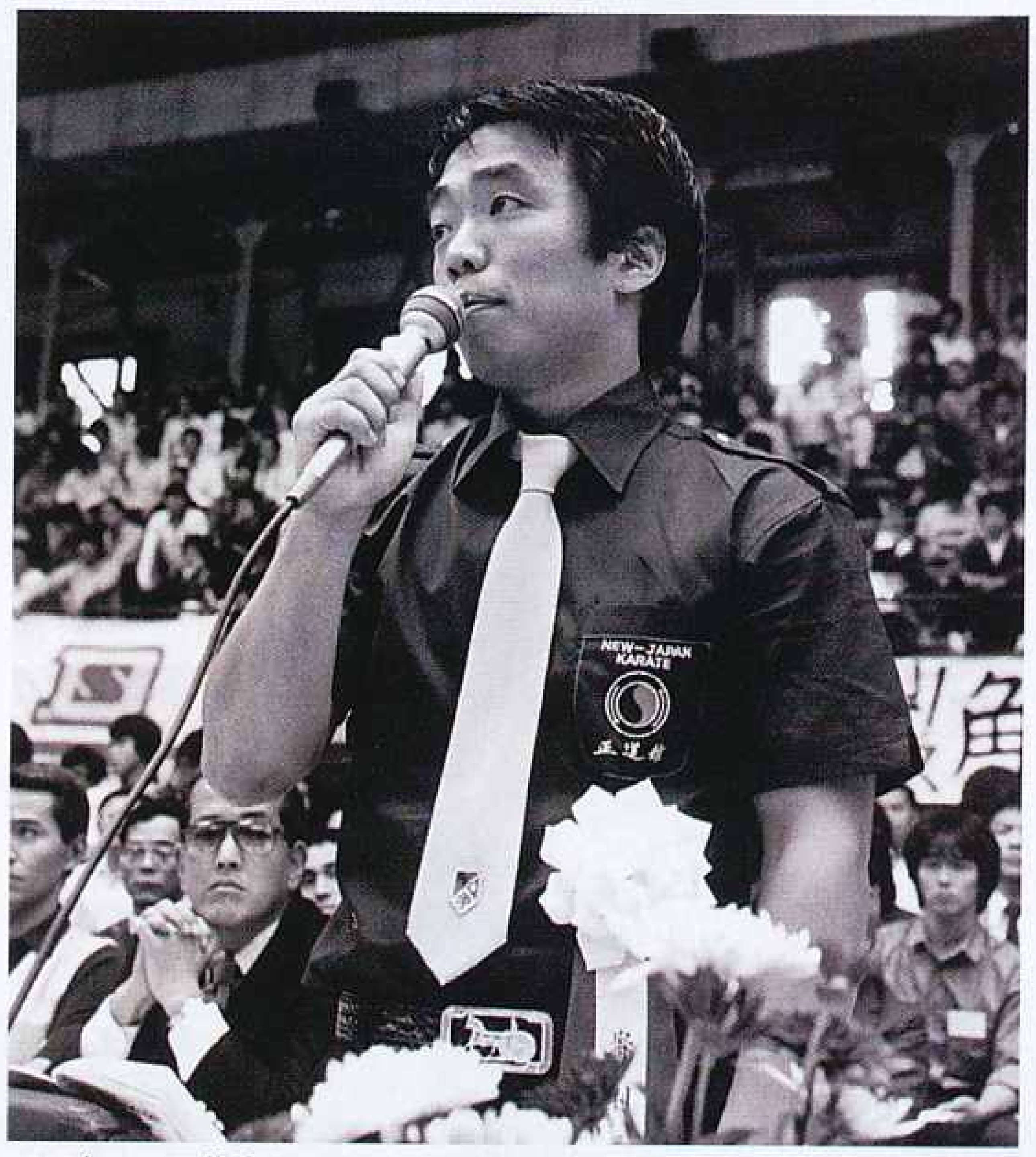
石井 それはプロレス側からの視点だろうね（笑）。確かにね、僕がK―1を作った90年代はプロレスの全盛時代だった。30以上も団体があり、大仁田（厚）さんが有刺鉄線電流爆破デスマッチをやり、新日本が福岡ドームで大会をやってたという。

――もしかしたらプロレス最後の黄金期でしたね。

石井 そんなときにK―1を作ったんだけど、僕は全盛期のプロレスをライバルとは思ってなかったよ。同時期にできたJリーグやプロ野球がライバルだと最初から言ってたからね。

――Jリーグやプロ野球にケンカを売っていた、と。プロレスのムーブメントがジヤマだと思ったり、うまく利用してやろうという気持ちはありませんでしたか？





1982年――石井館長が初めて手がけた空手イベント。アマチュアの大会ながらなんと大阪府立体育会館が満員に！ 写真は会場前の様子。館長いわく5万人に空手指導していたこともあって、観客のほとんどは館長の教え子だったというが、当時からイベンターとしての才覚を発揮していたのだった。

石井 いや、それよりテレビを活用したかったよね。K―1を大きくするためにはテレビが絶対に必要でしょう。実際にテレビと連動することで大きくなっていったし、あんまりプロレスのほうに目は向かなかったね。

――たとえば前田（日明）さんは「リングスはK―1に利用された」というような言い方をされてますけども。

井教義

石井 いや、マエちゃんはそんなこと言ってないと思うよ。そんな心の狭い人じゃないでしょ。周りの人が話を膨らませて言っているだけだと思うよ。

――それではプロレス側が被害妄想気味に捉えてるということなんでしょうか。

石井 そうだろうね。確かに僕らがリングスに上がったのは事実だし、僕はリングスの札幌大会で〝新・空手バカ一代〟を宣言したよね。それで佐竹（雅昭）や角田（信朗）がリングスに上がったんだけど、それはリングスとの契約に基づいて選手を送り込んだだけであって。その前に僕らはUSA大山空手との対抗戦を成功させてるわけだよね。あれ、入場料、一番上が2万円だからね。

――当時からいうと、相当高い金額設定ですね。

石井 そうだよ。それがソールドアウトになって、会場に入れないお客さんが入り口で中央突破を試みて「入れろ」「入れない」とかで揉めちゃって。で、入れなかったお客さんたちが代々木第二を囲んでずっと会場から漏れてくる歓声を聞いていたっていう。

――熱い時代ですね（笑）。

石井 それで前田さんがリングスを旗揚げしたときは、彼が頼れるのは（クリス・）ドールマンが中心で、僕らにも「協力してもらえないか」って言われたんで了解したんだよね。で、正道会館のリングス参戦を機にチケットがソールドアウトになったりして盛り上がっていったわけだよね。

――リングスがおもしろかった時期の一つですね。

石井 そうそう。だから僕らがリングスを利用したっていうことはないと思うよ。少なくとも貢献はしているし。もちろんリングスに上がる以上は（正道会館の）プロモーションにはなるけども、それはお互いさまじゃないの？ そもそもリングスに上がってるときに、僕は『格闘技オリンピック』という独自の真剣勝負の闘いをやってるから。その後、僕らはリングスに「契約をしましょう」と言ったんだけども、向こうは契約書を送ってこなかったんだよね。契約書がないものをリングには上げられないじゃない。ただそれだけのこと。

――正道会館としても、独自のイベント形態は構築していたということですね。

石井 そうだよね。実際、『格闘技オリンピック』で総合の試合をしたわけよ。あれは92年かな。だからUFCができる前に総合のイベントをやって成功したわけでしょう。でも、その後は総合のイベントはやってない。それは前田さんがリングスで総合のイベントをやってるからだし、もともと僕は立ち技をやりたかったわけだし。



前田日明、アンディ・フグ、ピーター・アーツ、トム・ハーリック、スタン・ザ・マン、神風杏子……錚々たる顔が見える格闘技オリンピックⅢ『カラテワールドカップ'92』の集合写真。このとき館長が翌年からスタートするK-1構想をあきらかにした。そのとき歴史が動いた!!(松平定知調)。

石井

今後のK―1は、スポーツという一つのカテゴリーに入らなくちゃいけない

――いま「UFC」という言葉が出ましたけど、K―1はキモvsパトリック・スミスや、田村潔司vsパトリック・スミスのVTマッチをやったりと、時代の流れに敏感というか、新しいものに対するアンテナが常に効いてますね。

石井　あたりまえでしょう。いまお客さんが何を求めてるかっていうことが、一番大切なんじゃないの？「いま、みんなが何を一番観たいか。知りたいか」ということを考えながら、そのニーズの範囲の中で自分たちのやりたい方針を出していく。それが大きくブレたら、お客さんはものを買わないよね。

――K―1を作ったときはJリーグやプロ野球をライバルに定めていたということですが、石井館長のアンテナには、既存のプロレスや格闘技はとくには引っかからなかったんですか？

石井　いや、そういうふうに自惚れてはいなかったけれど。プロレスはプロレスで大先輩だし、リスペクトしてたし。僕もどちらかというとプロレスファンだったから。力道山、馬場さん、猪木さん。ジャンボ鶴田くらいまで観てたしね。

――たとえばアントニオ猪木vsウィリー・ウィリアムがあるとすれば、石井館長はウィリー側、つまり空手側の視点に立つというイメージがありますが……。

石井　そんなことはないよ（笑）。猪木vsウィリーでいえば、僕は芦原（英幸）先生に呼ばれて会場で観てた。ただほら、極真というのはプロレスという禁断の実を食べてからおかしくなったんだよね。みんな辞めたでしょう。中村忠さんが辞め、大山茂さんも辞め、みんな辞めていった。

――プロレスと関わることで何がおかしくなってしまうんですか？

石井　それは目指すものが違うからでしょう。プロレスは肉体を使ってのパフォーマンスだから、簡単なものをいかに難しそうに見せるかというのがプロレスだから。体操っていうのは、いかに難しいものを簡単そうに見せるかというものだから。だからアマチュアスポーツとプロスポーツって、そのくらい差があるわけだよね。で、極真はやっぱりアマチュアだから、アマチュアがプロスポーツという禁断の実を食べると、ますますそっちに傾倒していくよね。それだけの大きな違いがありますよ。だから、どちらかというとK―1が他流試合うんぬんということに対しては、もうそういう時代じゃなくて、これからはプロスポーツという大きなジャンルの中でK―1というカテゴリーを伸ばしていかなくちゃいけないと思うんだよね。

――それが先ほど言われた、「他流試合をやる必要ない」ことにつながるわけですね。

石井　そうだね。いまのK―1が上のステージを目指すためにはやっちゃダメ。たとえば『国際K―1連盟』という組織を作ったり、K―1ワールドカップという国別対抗戦も行なったりしていかなくちゃならないし、そうなるとやっぱりスポーツという一つの大きなカテゴリーの中に入らなくちゃいけないから。



〝PRIDE〟って、いい名前だよね。己のプライドを懸けて闘うわけだから

――これからは競技としての道をきわめるべきだ、と。

石井　K―1はプロレスとはまったく違う。プロレスはWWEを頂点にするように、毎日試合ができる一つのパフォーマンスでしょう。逆にそういうふうに開き直ったら、プロレスってもっともっと大きく伸びる可能性があると僕は思うんだよね。もっともっとエンターテインメントの中での凄さ、肉体のパフォーマンスとしての凄さを出すべきだと思うね。そういった意味では「プロレスをビジネスにしてみたいな」という気持ちはいまでも凄くあるよ。

――FEGはかつて『W―1』というプロレスイベントをやりましたけども、それはいま館長が言われたような動機が一つのきっかけとなったわけですか？

石井　そうそう。だってK―1も総合も（選手は）みんな引退していくわけだから。でも、プロレスというものがあって、そこを基盤にメディアに露出していきながら俳優やタレントとかいう道が広がってくるのであれば、それは選手にとってもいいことでしょう。

――いまの高田延彦さんはその成功パターンですね。石井館長の中では、従来のプロレスが持っていた幻想、つまりストロングスタイルの魅力がはぎ落とされた理由の一つには、K―1のブレイクもあると思いますか？

石井　いや、それはK―1というより、総合（格闘技）の影響だろうね。UFCやPRIDEによって、たとえば腕ひしぎ逆十字があんなに極まらない技なんだということがわかっちゃったわけ。プロレスに近いルールのなかで真剣勝負が行なわれてきたことへの衝撃は大きかったと思うよ。だから立ち技のK―1だけだったらプロレス幻想というのはまだまだ続いたと思うよ。僕はそう思うけどね。

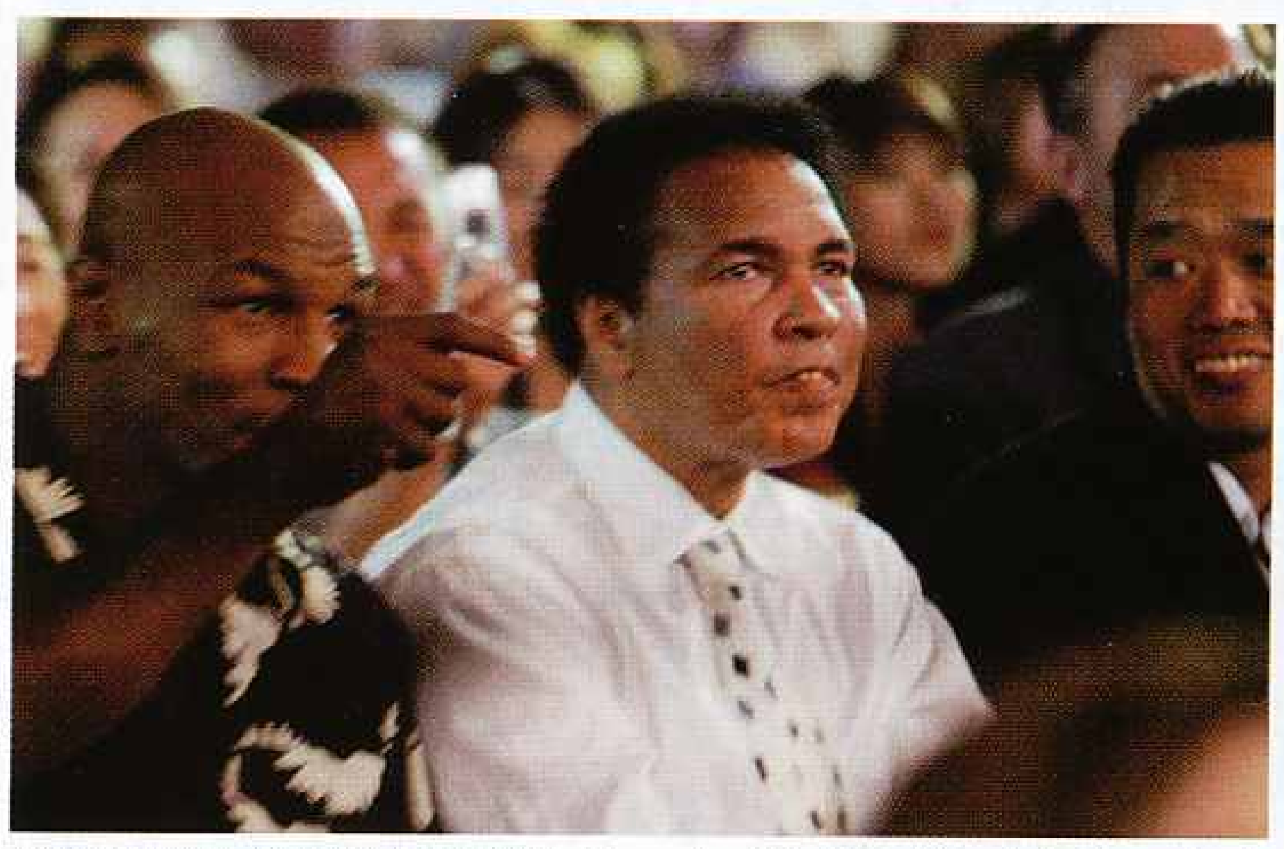
――では、プロレスに対するK―1の影響は……。

石井　それはないかな。ないと思うけど、あるとすれば、〝迫力〟の部分じゃないかな。それまではキックボクシングがあったけど、正直言ってライト級くらいのクラスでしょう。身長が170センチに満たなくて、体重60キロくらいの選手がいくら強いって言っても、190センチで100キロくらいの選手の横にくると強いようには見えなかったわけだよね。それがK―1がヘビー級からスタートした理由なんだけどね。

――簡単に言ってしまうと、「なめられない」ということですよね。

石井　もちろんそうだよね。だって横に並んだら、佐竹なんかプロレスラーよりデカいんだもん。ピーター（・アーツ）にしてもそうだし、2メートル近いヤツが打ち合う、蹴り合うというのはやっぱり迫力があるよね。





極真会館館長・松井章圭氏とのツーショット、そしてマイク・タイソン、モハメド・アリとのミラクルスリーショット!!　そういえばK-1、PRIDEをかき乱したタイソンは何をやってるんだろうか。

教義

――K―1はイメージ戦略も優れていたと思うんですね。たとえばキャッチフレーズのつけ方にしても。「ミスター・パーフェクト」や「南海の黒豹」だったり。

石井　選手にキャラクターづけをしていくということだよね。そうやって思い入れを込めさせて、テレビを見させていく。その手法はやがてアマチュアスポーツに移っていったんだよね。

――卓球や柔道のテレビ番組なんかにも導入されてますね。

石井　あれはもともとプロレスが始まりですよ。「黒い魔人ボボ・ブラジル」「人間発電所ブルーノ・サンマルチノ」とかさあ（笑）。

――そうなんですよね（笑）。あたりまえかもしれないですけど、格闘技にもそういった幻想は必要ですね。

石井　そうだね、必要だろうね。たとえば〝最強〟なんてのは、結局は幻想でしょう。

――その幻想が――たとえば極真、リングス、UFC、プロレス、あらゆる格闘技の幻想――K―1に集約されていったイメージがあるんですけども。

石井　どうなんだろうねぇ、幻想があったかどうかはちょっとわからない。ただ、普段はプロレスを観ない人たちでも「K―1は観よう」という子たちが増えたのは事実だろうね。ゴールデンタイムに進出したり、女性のための格闘技の見方みたいな番組も作ったり、そういうレクチャーもしてきたからね。K―1がスタートしたから、いまの格闘技のムーブメントがあるというのは事実だよね。

――いわゆるプロ格闘技の確立ですね。

石井　それが現代になって拡がりが出てるというのはあるんじゃないかな。「日本発、世界に通用するようなスポーツビジネス」って、いままで日本にはなかったじゃない。すべて輸入というか。ゴルフにしても、野球にしても、プロレスもそうだからね。K―1は唯一、アジアから世界へのムーブメントを起こしやすかったというのは事実だろうね。

――現在の格闘技文化を考えると、K―1がなければPRIDEもなかったわけですが、石井館長はPRIDEにはどのようなイメージを抱いていたんでしょうか？

石井　〝PRIDE〟って、いい名前だよね。バラちゃん（榊原信行・元PRIDE代表）が最初、話を持ってきたときに、「あ、ええ名前やなあ」って思ったもん。人間、何を懸けて闘うかっていったら、己のプライドを懸けて闘うわけだから。



正道会館恒例の夏合宿のヒトコマ。かつて所属していた平直行の顔が見える。

石井

総合は団体対抗戦をどんどんやって勝ち残ったところが生き残るべき

——将来的に、K—1とぶつかり合う予感はありました？

石井　もちろん。そうなるだろうなと思ったから、僕は両方やろうと思ったんだよ。これは〝三角形のトライアングル〟というか、立ち技と総合とプロレス。この3つできちんとトライアングルを組んでおけば、その中で選手を回せるし、プロレスラーでもシュート志向のある人間はPRIDEに出せばいい。で、PRIDEの中でも打撃の優れてる人間は立ち技に出したらいいし。K—1ができなくなったら総合にいけばいいじゃないか、みたいな。そういう考え方はあったよね。

——ただ、その途中でK—1とPRIDEが対立してしまう状況が生まれてしまいました。

石井　そうだね。それは僕が捕まってからじゃない？

——それ以降、館長はどのようにPRIDEを見ていたんでしょうか。

石井　PRIDEと対立するんであれば、PRIDEと同じようなものをやればいいんじゃないかって思ってたよね。簡単なことだよね。まあまあ、昔の話だから、そんな話はどうでもいいじゃん。いまはみんな仲良くやってるんだから（笑）。

——元鞘になってますし（笑）。もしも館長が最前線にいたら、PRIDEとどう張り合っていたんだろう、どういう言葉をもってあの状況を語っていたんだろう？という興味があるんですね。

石井　そんなの決まってるよ。ああいうふうにはなってなかったんじゃない？一緒に仲良くやってたんじゃないかな。そうしたらPRIDEはもっと早くアメリカに進出しただろうし、もっといい状況があったんじゃないかなと思うんだけどね。だって、あのまま仲良くやってたとすると、『Dynamite!』という大きなイベントをやりながら、PRIDEは中・軽量級の若い選手たちが出るような大会になってたかもしれないよね。まあまあ、そこはうまくやれたんじゃないのかなあ。もしかしたら、プロレスもやってるかもわからんしね。結局、2001年にマルサが入ってから磁場が狂ったよね。あのへんの流れはおもしろいよね（笑）。

——まるでシナリオがあるかのような流れですよね。

石井　そういうこと。まあ、それでもうまく淘汰されて、またいいようになってきてるから、いいんじゃないの？

——お話を戻すと、他流試合を仕掛けていくのはDREAMであり『戦極』だということですが。

石井　そうだよね。これからは総合がそういうことをやっていったほうがいいんじゃないかな。だって、総合はライバルがいっぱいいるじゃない。UFCもそうだし、『戦極』、DREAM、あと前田さんがやってる『THE OUTSIDER』とかさ。対抗戦をどんどんやって勝ったところが生き残る。ファンはそれを求めてると思う。

——たとえば、DREAMはK—1との全面対抗戦よりも、『戦極』との対抗戦のほう

がロマンはありますね。

石井　うん。そっちのほうがロマンあるでしょ。僕はもともとK—1と総合のファイターたちが絡むのは反対なんだけどね。必要ないでしょう。やっぱりK—1は競技にしていかなくちゃいけないね。

——すると、昨年の『Ｄｙｎａｍｉｔｅ‼』のK—1 vs 総合格闘技というのはあまり……。

石井　あまり意味がない。世界の人たちからすれば戸惑っちゃうよね。フランスなんかは、K—1は立ち技でリングスポーツだと認識しているし、「K—1＝総合」というふうになったら、フランスでテレビ放送できなくなっちゃう。

——ああ、フランスは総合の規制が厳しいみたいですね。

石井　で、観てるファンの人たちもわけがわからないでしょう。日本にだって「K—1が総合か何かわかんない」って言う人は多い。「DREAMも『戦極』もみんなK—1でしょ」って。そういうふうにしか見えないんじゃあ、そこはやっぱり分けないとダメ。

——一般人からすると、いつまで経っても「K—1と何が違うの？」という疑問から抜け出せないというわけですね。

石井　うん。だから総合は統一したほうがいい。どんどんやっていったらいいんだよね。UFCはやりたがらないんだろうけど（苦笑）、そこはやったもん勝ちですよ。

——それで、7月の魔裟斗さんの相手が総合格闘家になるというお話もありますけども。ここまでのお話からすると、「やるべきではない」と？

石井　やる必要があるのかな？　MAXで闘ってきた相手とやったほうがいいんじゃない。川尻（達也）くんという手もあ

せ～のっ、青春ダイナマイッ‼
石井教義 プライベートアルバム


プライベートじゃないが、館長のバット折り‼


極真時代の館長。なんだか凄くファンキーだぜ。


こちらは青春真っただ中の19歳。笑顔がまぶしい。


秘蔵中の秘蔵ショット、中央が4歳の石井館長。

俺が川尻くんだったら、頭突きを入れてでも魔裟斗を倒す

るみたいだけど、彼は武田幸三くんとしか闘ってないでしょう。できれば、全盛期のキックボクサー武田くんと闘ってほしかったな。

——では、谷川さんのセンスは古いと感じますか？

石井　そうは思いませんよ。現在プロデューサーとして、目の前の視聴率とか、目の前の集客の部分があるからね。だって、いまDREAMもK—1も両方プランニングしてるじゃない。だからその両方がつながるようにしてるんだと思う。彼らがやると言って、魔裟斗がそれを受ければそれはやればいいんだけどさ。

——館長のおっしゃるようにK—1サイドから見ると、本質としてはやる意味はないですが、DREAMからすればケンカを仕掛けたいところなんでしょうね。

石井　まあ、僕が川尻くんだったら、頭突きを入れてでも魔裟斗を倒すけどね。極端なことを言えばね。

——頭突きですか！（笑）。

石井　うん。そのくらいの気構えでいく選手と、これから引退して第二の人生を目指そうと考えてる選手。そこはずいぶん差があるからね。そこは全然違うと思うよ。守りに入るヤツと、攻めて何も失うものがないヤツの差は大きい。川尻くんでも五味くんでも、もしやるとなれば、魔裟斗が考えてるような、そんな甘くて簡単な試合にならないと思うよね。

——しかし、頭突きですか。いやあ、いまちょっと背筋がゾクッとしました（笑）。

石井　そのくらいの気構えでいくってなると、それだけで相手は硬くなるからね。硬くなったら一発もらえば倒れちゃうから。魔裟斗だっていまは決して打たれ強いほうじゃないし。福岡大会を見るかぎり、まだファイターの顔つきになってないから。これはちょっと過激な物言いだけど、HIROYAくんなんてリング上で叩き潰してやらないとダメでしょう。潰さなくとも、怖さは感じさせないと。

——そこは危険信号を感じますか。

石井　うん。感じるね。やっぱり、僕は他流試合のプロだから。

——他流試合のプロ！

石井　だって、佐竹vsドン・中矢・ニールセンの時代から他流試合をやってきたんだからね。その前には各団体で他流派荒らしとかさ、常勝軍団と言われてきたわけだから。「敵のリングに行って勝つ」ことがどういうことかっていうのも全部わかってるからね。

——常にアウェーなわけですし。

石井　そうそう。極端なことを言えば、疲れたときは金玉を蹴られたふりしてでも僕らは休むからね。勝負とはそんなもんでしょう。

——でも、それはプロモーターとしての石井教義とはまったく別の顔ですね。

石井　それはもちろん。だってもっと昔からいえば、寸止め空手、全空連全盛の関西に四国から一人で乗り込んでいって、極真を広めてきたわけでしょ。毎日毎日道場破りが来てさ、そんな20代をすごしてきたわけだから。で、師匠はケンカ十段の芦原英幸だよ。それが50（歳）になったからといって、その気がもがれたわけじゃないから（キッパリ）。

——いやあ、シビレますね（笑）。

石井　でも、もういまはK—1として作り上げたわけでしょ。もっと上のものを作り上げる。これから僕らがケンカする相手はFIFAでありIOCであり、いわゆるメジャーリーグであり、国々の規制であ

るわけです。

——つまり、ケンカの質が違うわけですね。

石井　うん。そういった部分とのケンカになってくるよね。だからその部分のケンカはいまから頑張らんとあかん人たちがやっていかんとあかんっていうか。

——いま館長のお話にあったような「殺気」って、いまの選手から失なわれつつあるように思うんです。

石井　そうだよね。ハッキリ言って、闘争心を失なってヤワになった選手なんかは必要ないんだよね。自分を守ろうとしてる選手なんて魅力的じゃない。ファイターというのはいつもハングリーじゃないとダメ。ファイターってお金を持った瞬間に、守りに入った瞬間に弱くなるんだよね。マイク・タイソンがなんで強かったかというと、彼は入ったお金を全部使うからだよ（笑）。

——なるほど（笑）。凄く根源的ですね。「お金がないから闘う」っていう。

石井　そうそう。いまはちょっと売れたらさ、テレビにも出るし、お金ももらえるわけでしょ。そうなるとバカらしくなるよ、命懸けで闘うことがさ。

——極端な話、ファンよりスポンサーを気にしてる選手が最近は多いですよね。

石井　だから「強い相手とはやりたくない」ってなっちゃうでしょ。負けたくないからね。

——最近観た試合のなかで、ハングリー精神や殺気があると思った選手はいます？

石井　いやいや、若い選手はみんなハングリーですよ。何かを倒そうって上を向いてる挑戦者はみんなハングリーですよ。だから結局、年末のバダ・ハリだってそうでしょ。「ちょっとバイトがてらに試合するか」って出てきたのと、一生懸命トレーニングをして「食ってやる！」って思ってる人間との差ってあるじゃない。だってあれ、20日前ぐらい前に一日に2回ダウンしてるわけでしょ。そんなものを上げるほうがダメだし、上がる選手もダメ。単なるお金儲けで上がってるんだから。

——あのリングに上がってしまった時点で、勝負師じゃないというか。

石井　ダメだね。話にならない。そこで勝負をしてしまうなんて。勝負をナメちゃダメですよ。だからね、K—1は競技化すべきなんです。ちゃんと競技化して「チャンピオンが一番偉い。一番ギャラが高い」っていうふうにしていかないと、みんな試合をしなくなる。K—1はそういうふうに競技として確立していく作業はやっていって、逆に真剣勝負で緊張感のある試合を自分の趣味としてやりたいなっていう。たとえば青木真也vs五味隆典とかね。

——青木vs五味！　いやぁ、それは館長の趣味として、ぜひ実現させていただきたいです！（笑）。

石井　そういう一試合だけでイベントをやる。それだけでみんな観に行くでしょ（ニヤリ）。

——絶対に行きますね。それはもう、みんなの趣味でもありますから！

石井　今回、五味くんが修斗の大会に出るっていうのも、ちょっと観たいよね。あれはちょっとお互いに意地がかかってていいな、みたいな。

——ケンカですよね。

石井　うんうん。「五味、おもしろいじゃん」みたいな。彼は原点に戻ったかみたいなところはあるでしょ。僕はそういう試合はいいと思うよ。あと、川尻くんも好きなんだけどねえ。おもいきりがいいし、わかりやすい子だし。青木くんも好きだし。僕は彼なんかも大好きだよ。マッハvs青木は名古屋まで観に行ったんだもん。おもしろかったねぇ、あれは。

——彼らはハングリーですか？

石井　そうだと思うよ。青木くんなんて、ああやって自分を追い込んで凄く頑張ってるし。自演乙もああいう格好してふざけてるように見えるけど、凄く努力してると思うよ。凄くいい子たちだと思う。

——そういうアンテナはいつも働かせてるんですね。

石井　そんなのあたりまえでしょう。いつの時代でも挑戦者でいてほしいから。人間は挑戦する心があるかぎり、あるいは少年時代の夢を追いかける気持ちがあるかぎり、いつまで経っても青年なんだよね。守りに入ったときに年寄りになってしまう。だからいつも自分をゼロにリセットして物事をやっていかなくちゃならない。その気持ちだけはみんなに忘れないでいてほしいなと思うよね。それは『kamipro』も一緒だよ。早くルイ・ヴィトンとかエルメスの広告を取るようになってよ。

——頭突きを入れてでもそういう広告を取るように頑張ります（笑）。今日はシビレました！

【09年4月某日／都内某所にて収録】

緊張感のある試合を自分の趣味でやりたい。たとえば青木真也vs五味隆典とかね



いしい・かずよし■1953年6月10日、愛媛県出身。正道会館宗師。K-1の元プロデューサー。93年にK-1を立ち上げ、地上波放送を獲得。プロ格闘技イベントの礎を築いた。

石井

川尻　大好きな『ｋａｍｉｐｒｏ』の取材か、頑張ろっと（棒読みで）。

――なんかとってつけたような言い方ですね～。さっきも写真撮影をお願いしたら、笑顔で両手に『格通』と『ゴン格』を持ってポーズしてましたけど。

川尻　フフ。今日はなんの話題ですか？

――そりゃあ、いまや格闘技界のキーパーソンである川尻さんに〝あの話〟を聞かずにはいられないなと思いまして。

川尻　試合も正式決定しましたしね。

――いえいえ、新婚生活について話を聞きたいな、と。

川尻　なんすか、それ！　また（携帯サイトの）ｋａｍｉブログとかのネタ探しでしょ？　イヤですよ（冷たく）。

――残念だなぁ。じゃあプロレスについて話しましょうか？

川尻　……確かに昔はテレビで観たり、『ファイヤープロレスリング』もやったりしてましたけど。

――いやぁ、前号のインタビューでまさか川尻達也の口からリック・ルードの名前が出るとは思いませんでした（笑）。

川尻　まぁ、やっぱり腰クネパフォーマンスは衝撃的でしたから（笑）。

――パフォーマンスといえば、川尻さんってマイクアピールがお上手ですよね。

川尻　そうですか？（ちょっと嬉しそうに）。周りからはめっちゃ噛んでるって言われますよ。

――でも、ほかの格闘家に比べたら言うこともよく整理されていて、しゃべりっぷりも堂々としてるなって。

川尻　ぶっちゃけ、事前に何言うか考えてますからね（笑）。試合全体のイメージトレーニングとして、ちゃんと最後のマイクアピールまで意識してますよ。

――なるほど。ちなみに北岡（悟）さんは勝ったあとにコーナーでガッツポーズするところまで練習してるらしいですよ。

川尻　ハハハ！　でも、けっこうそのくらいまでみんな考えてると思いますよ。やっぱりそういうパフォーマンスも含めてプロ意識ってことでしょうし。

――じゃあ、今度は川尻さんにもルードばりに腰クネをやってもらって……。

川尻　（さえぎるように）あの、そろそろ本題に入ってもらってもいいですか？

――了解です!!（笑）。さて、ついにＪＺカルバンとの大一番が決定したわけですけど、そもそも川尻さんはいつからカルバンを意識してました？

川尻　けっこう前から注目してましたよ。僕、修斗でカルバンが（ヨアキム・）ハンセンとやったときに会場で観てたんですよ。言い方は悪いですけど最初は噛ませ犬なのかなって思ってたら、ハンセンが苦戦してたんで驚いた記憶がありますね。

――その頃から注目してた、と。

川尻　で、カルバンが『ＨＥＲＯ'Ｓ』に参戦したときに「あ、ハンセンと闘ったヤツだ」って思ってたら、あれよあれよとトーナメントで優勝して。「コイツは本物だな」って感じでしたね。

――当時はどちらかというと『ＨＥＲＯ'Ｓ』よりＰＲＩＤＥのほうが本格派って見方も多かったですよね。

川尻　もちろん僕もＰＲＩＤＥに上がってたときは「あっちよりもレベルが高い」って意識でしたけど、カルバンだけは特別だなって思ってましたよ。とくにシャオリンを圧倒したのには驚いたし。僕は会見でカルバンのことを「つけ入るスキがない」って言いましたけど、スタンドもできてグラウンドもできて、逆に「何ができな



勝たないと てよくないでしょ？」

09年マット界“主演男優賞”ノミネート

川尻達也

かねてから対戦をアピールしていたJZカルバン戦がついに決定！
そしてその勝利の先に見据えるのは、実現への期待が集まる魔裟斗戦。
いまや“時の人”となったクラッシャーが、格闘技人生最大の正念場を語る！

聞き手／鈴木佑　撮影／タイコウクニヨシ　試合写真／乾晋也



魔裟斗戦実現へ向けて5.26『DREAM.9』で大一番!

「僕がカルバンに
格闘技界にとっ

いの？」って聞きたいくらいですよ。
――穴がなかなか見つけにくいというか。
川尻　こっちとしては強さプラス、キャリアで培ったうまさで勝負するしかないなって。本当に今回はいままでで一番危機感がありますよ。つけ入るスキがないからこそ、すべてにおいて試合を支配するしか勝つ手はないっていうか。青木（真也）くんとやったときのカルバンは動きがよくなかったんで、「こんなものなのかな」って思ってたんですよ。でも、あとから聞いたらそのときはけっこうヒザが悪かったみたいで。きっと今回は万全の体調できちゃうだろうし……どうしようかな（笑）。
――ある部分でそのカルバン戦以上に注目されてるのが、実現が期待されている魔裟斗戦なわけですけど。
川尻　それはもう、前から言っているように本当にファンの声次第ですね。
――で、実際にウチのケータイサイトで「魔裟斗と闘ってほしいファイターは？」というアンケートをしたところ、川尻さんがダントツで1位だったんですよ。


カルバンにとって川尻戦は『DREAM.2』での青木戦以来、約1年ぶりの試合。川尻はカルバンvs青木の一戦を「僕と青木くんはファイトスタイルが違うんで参考にはなりませんね」と語る。はたして試合はアルバレス戦ばりの乱打戦になるのか、それとも……？

川尻　え、そうなんですか？　……それだけ周りから期待されてるってことだし、単純に嬉しいですよ！　それに応えたいなとも思いますし。まぁ、いまは本当にカルバン戦が最大の難関なんで、あくまでもそれを乗り越えることにしか集中してないですけど。
――魔裟斗戦はそれからの話だ、と。
川尻　……でも、やっぱり「K―1をなめてる！」とか言われると、おもしろくはないですよねぇ。べつにこっちは全然なめてないわけですし。まぁ、売られたケンカは買いますよ（キッパリ）。
――前号のインタビューのときは、魔裟斗戦に関して「僕が相手でいいのかな」って言ってましたけど、ここまでお膳立てをというか状況が整ってくると……。
川尻　（さえぎるように）なんか僕からやりたいって言ったわけじゃないのに、そういう雰囲気になってるから「それは違うだろ！」っていうのはありますね。「もう一度K―1ルールでやるとしたら」って聞かれたから魔裟斗選手の名前を出しただけで。正直、向こうは大晦日の結果を引きずってるだけじゃないですか。
――K―1サイドがDREAMとの対抗戦で、K―1ルールで3連敗しましたね。
川尻　そりゃK―1ルールでは魔裟斗選手との実力差は歴然としてると思うし、恐怖感だってありますけど、試合になれば勝ちにいきますよ。「K―1ルールだから……」なんて気はさらさらないです。試合は勝たないといけないですよね。
――川尻さんは魔裟斗さんの試合はずっとご覧になってました？
川尻　もちろん。もともと立ち技好きですし、単純にいちファンとしてすげえなって思ってましたよ。僕は魔裟斗選手のことは「日本の宝」だって言ってましたし。やっぱり有言実行っていうか、自分を追い詰めて結果を出す姿勢がカッコいいですよね。辞め方一つとってもカッコいいし……僕にはないものです（笑）。



魔裟斗のラストファイト第1戦は後継者と目されるHIROYAとのエキシビションマッチ。試合後、魔裟斗は「7月13日と大晦日、去年以上の闘いを見せる覚悟でいます」と並々ならぬ決意を表明。K-1を"破壊"した川尻との一戦、それは究極の他流試合だ！

尻達也

――でも、実際に7月に魔裟斗戦が実現するとして、試合スパンは1ヵ月ちょっとしかないんですけど調整に支障は？
川尻　いや、K―1の練習に専念するなら1ヵ月がちょうどいいかなって思ってます。たとえばの話、カルバン戦がなくて7月に魔裟斗戦だけがあったとしても、たぶんK―1の練習に専念するのは1ヵ月前からだったと思うんで。もちろんカルバン戦のダメージもあるでしょうけど、それを抜きにしたらスパンとしては問題ないです。1ヵ月以上K―1の練習をやると、総合の選手としては弱くなっちゃうんですよ。まぁ、もともと魔裟斗選手とは今年の大晦日にできればって思ってたんですけど、状況も変わってきましたし。
――そういえば五味（隆典）さんが魔裟斗戦に名乗りを挙げるんじゃないかって噂もありますけど、それについては？
川尻　べつにそれはそれでいいんじゃないですか？　そういうのはファンやプロモーターが選ぶものであって、僕がどうこう言うことじゃないんで。
――そのあたりはクールですね。ちなみに川尻さんは五味さんといままで会話したことってあります？
川尻　いや、基本的にないですよ。やっぱり先輩だから、修斗のときでも一応「お疲れさまです」ってこっちから挨拶するんですよ。でも、軽く150回くらいはシカトされてますから（笑）。
――ダハハハハ！
川尻　まぁ、単純に「あぁ、この人はこういう人なんだな」って。
――なるほど（笑）。あの、最近の川尻さんからは「自分で格闘技界を盛り上げたい」って発言がよく見受けられますけど、そういうジャンルを背負う意識が芽生えたターニングポイントっていうと？
川尻　やっぱり2007年、PRIDEが消滅して丸1年間試合がなかったときですね。もう二度とああいう状況になってほしくないんですよ。それこそ結婚して守らなきゃいけないものがある中で、1年間も試合がなくて無収入っていうのは考

川尻

これまでに五味選手には挨拶して150回くらいシカトされました(笑)

えられないんで。昔は桜庭(和志)さんや(エメリヤーエンコ・)ヒョードル、(ヴァンダレイ・)シウバとかスターがたくさんいましたけど、もう誰かに頼ってられる状況でもない。だったら自分の力で格闘技界を盛り上げることが、生きていくための術っていうか。とにかくいまは必死なんですよ。だって闘う場所がなくなったら生きていけないんだから。そうなったら、もう肉体労働するしかないです(笑)。

――ジャンルを背負うという意味では、魔裟斗選手との試合って他流試合ですよね。武田(幸三)戦もそうでしたし、同じ総合でも宇野(薫)戦や五味戦もそういう側面が強かったと思うんですよ。いままでの格闘技の歴史を振り返っても、他流試合が大きな熱を生み出してきたというか。

川尻　そうですね。やっぱりやる側としても意地が出てくるし、それが観る側にも伝わって盛り上がるんでしょうね。他流試合、さらに日本人対決だと選手の背負ってるものがより見えるっていうか。結果もシビアになってきますし。そういう試合こそ負けられないですよね、絶対に。

――あと、今度の『DREAM.9』はゴールデンタイムで放送されますけど、意識する部分はありますか?

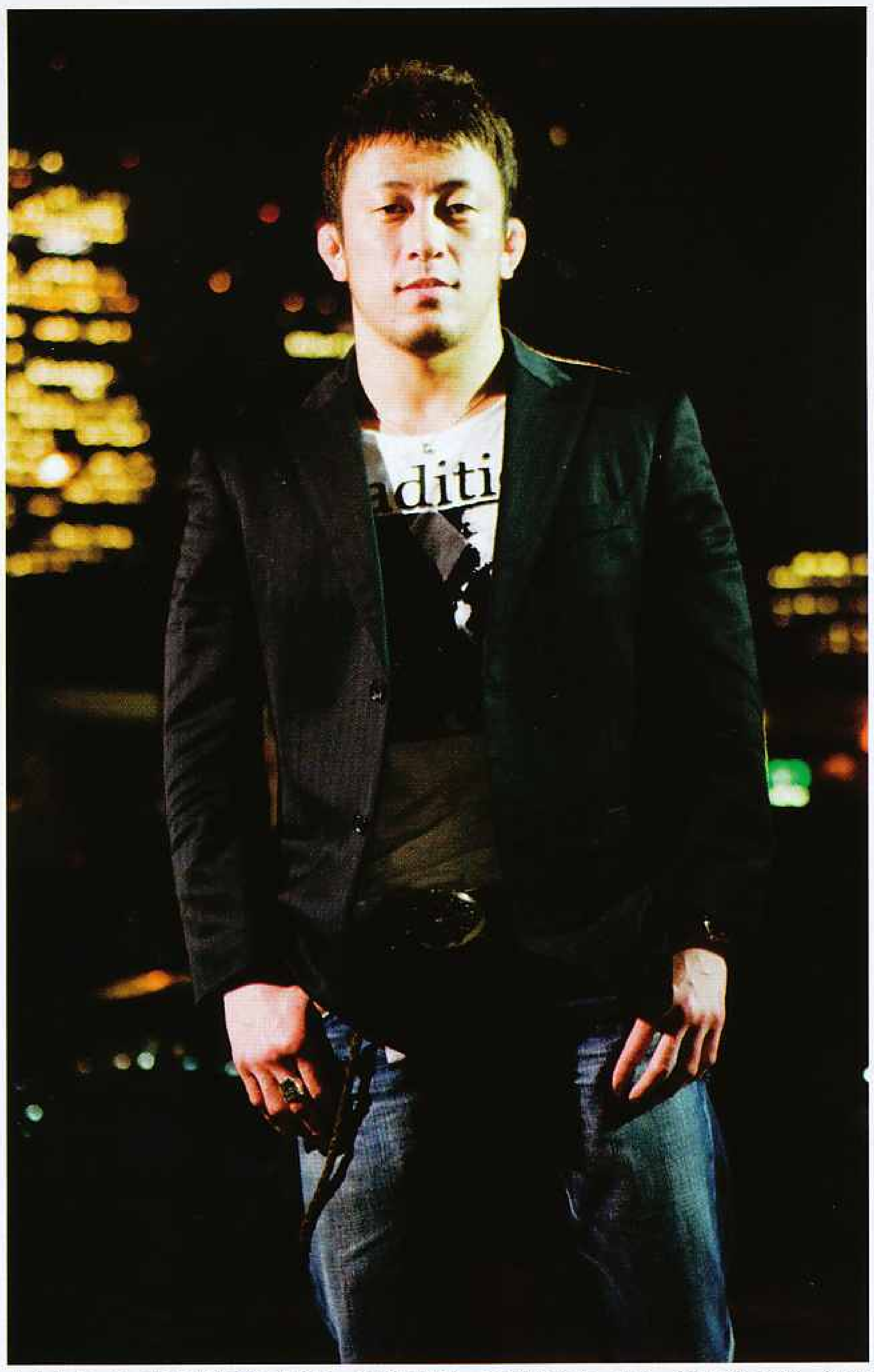
川尻　それはもちろん。盛り上げるって言った手前、僕の試合がテレビで全カットされたら意味ないですし(笑)。会場を盛り上げてて、テレビを観てる人も盛り上げて……でも一番大きいのは自分で自分を盛り上げるってことですね。これは僕も正念場ですけど、DREAMにとっても正念場だと思うんですよ。たとえば今回チケットの値段を下げるっていうのも、たくさんの人に観てもらって熱を取り戻そうってことでしょうし。

――なるほど。しかし、結婚した年にこれだけドラマチックな状況に身を置くことになると思ってました?

川尻　いや、全然! こんな一年、なかなかないですよね? カルバン戦、魔裟斗戦、それにライト級のベルト、これを全部乗り越えたら……いや、もう乗り越えますよ、本当に!(キッパリ)。だって、これでカルバンに10秒くらいでスコーンって負けたら、みんなドン引きでしょ?(笑)。

――きっと会場は水を打ったように静まり返ると思います(笑)。

川尻　カルバンは巨大な存在ですよ、最大の壁だと思ってます。でも、だからこそそれをクリアすれば、そのあとも「いける!」っていう確認にもなるんですよ。僕の格闘技人生って、振り返るといつもいいところで負けてるんです。ここで勝てばもっと上にいけるって場面で取りこぼして。五味戦もそう、(ギルバート・)メレンデス戦も(エディ・)アルバレス戦もそうだし。だから僕は自分のことを"助演男優賞"って言ってるんですけど、今回は格闘技界の"主演"になれるかもしれない。それに、僕がカルバンに負けたら格闘技界にとっていいことはないと思うんですよ。



かわじり・たつや■1978年5月8日、茨城県出身。04年修斗ウェルター級王座に君臨。05年からはPRIDEで活躍。08年のDREAMライト級GPでは準決勝でエディ・アルバレスと格闘技史上に残る壮絶な殴り合いを展開。同年の『Dynamite!!』では初のK-1ルールで武田幸三から見事なKO勝利。5.26『DREAM.9』ではJZカルバン戦に臨む。171cm、69.9kg。

――マスコミ的にも困っちゃいます(笑)。

川尻　だから、これは僕にとってチャンスであると同時に、格闘技界にとってもチャンスだと思うんです。そして魔裟斗戦、やってやりますよ。リングに立つだけ、いい試合をするだけじゃダメなんです。カルバンだろうが、K―1ルールだろうが絶対に落とさない。もう取りこぼせない。とにかく自分の力で突き抜けるだけですよ!

――今年の"主演"になることを期待してます!

【09年4月24日/都内・DEEPジムにて収録】

この取材後、DREAMは世間に届かせる目玉企画として、スーパーハルクトーナメントの開催を発表した。文中で「今回はDREAMも正念場」と語った川尻に、この"世界超人選手権"に関して追撃取材!

「やっぱり世間には曙vsボブ・サップみたいな試合に注目が集まるってことですよね。いまのDREAMには結果が求められてますし、これまで僕たちが視聴率獲れなかったから、このトーナメントが企画されたんでしょうし。僕としては今回をチャンスにして、世間に"本物"を見せるだけです。僕は僕のやり方で盛り上げたい。……しかし、このトーナメントって専門誌より一般誌向けですよね、まぁ『kamipro』は別でしょうけど(笑)。あっちは映った姿だけでおもしろいと思われるでしょうし、こっちは観てる人が納得できる試合じゃないと放送もされないと思うんで、絶対に内容も勝負も視聴率だって負けられないです!」

よくぞ言った! スーパーハルクの開催により、カルバン戦に向けてさらにターボがかかったクラッシャー。世間のド肝を抜くような"本物"を見せつけろ!

1
2000.4.12 プロ修斗　北沢タウンホール
×vs中山巧
(1R 2分44秒 チョークスリーパー)

アマ修斗で優勝してプロデビュー戦を迎えたわけですけど……このときは会場全体に聞こえるくらい、完全に心がポキッて折れましたね。プロとして試合することに全然自信がなかったです。いまも試合前に怖さを感じることはあるんですけど、このときの怖さはいまと違って単純にビビってたっていうか。それが試合に出たから負けたんだと思います。

2
2001.4.8 プロ修斗　北沢タウンホール
△vs鈴木洋平
(2R終了 判定0-1)

デビュー戦から1年ぶりの試合だったんですよ。この試合の前にも何回かオファーはあったんですけど全部断ってました。2連敗したらもう終わりだと思ってたので、とにかく自分が納得できるまで鍛えようって感じで。当時はマッハさんとちょくちょく練習してたんですけど、やるたびにボコボコにされて殺されかけてましたね(笑)。

3
2001.5.22 プロ修斗　北沢タウンホール
○vs鈴木洋平
(1R 2分42秒 チョークスリーパー)

鈴木選手は前回の対戦時に一本取れそうだったんですけど、試合中に「このままなら判定でも勝てるな」って気が緩んじゃったんですよ。そうしたら結局はドローになって。やっぱり一本取れるところでいかないと勝てないんだなって思いましたね。それ以降は自分から一本狙いにいくように心がけました。

4
2001.9.27 プロ修斗　北沢タウンホール
○vs高田和道
(1R 3分03秒 腕ひしぎ十字固め)

この試合は下から三角取って、そこから腕ひしぎで極めたんですよ。いまの僕からは考えられない技を駆使して(笑)。当時は寝技が大好きで、グラウンドだったら誰にも負けないって自信がありました。スタンドの練習も我流でミット打ちをやったりしてましたけど、試合で出すことについてはあまり意識してなかったです。

5
2002.3.13 プロ修斗　北沢タウンホール
○vs滝田J太郎
(2R 1分22秒 TKO)

新人王トーナメントの1回戦ですけど、この時期はもうイケイケで、修斗のクラスBの選手相手なら負ける気がしなかったですね。試合が終わったらその場で「次の試合組んでください」ってアピールして、3ヵ月連続とか平気でやってましたから。滝田選手のセコンドには宇野さんが付いてたんですけど、当時はまだまだ雲の上の存在でしたね。

6
2002.4.21 プロ修斗　北沢タウンホール
○vs山崎剛
(2R終了 判定3-0)

これは僕がグラウンドで固め続けて勝ったんですけど、内容的にはつまらなかったですね。さすがに反省して「一本かKOじゃないとダメだな、気持ちよくないな」って思ったんですよ。まぁ、なんにしろ勝つには勝ったんで、風呂に入ってたときに「もう俺もクラスAか、信じられないな」って浮かれてたんですよ。そしたらその2日後に原チャリでトラックと正面衝突しそうになって、「あぁ、人生ってこんなもんなんだな……」って、なんかシミジミしたのを覚えてます(笑)。

7
2002.5.28 プロ修斗　北沢タウンホール
○vs杉江"アマゾン"大輔
(2R 4分19秒 TKO)

アマゾン選手はとにかく寝技が強かったです、1Rはけっこう苦戦して。でも、パンチを当てたあとにマウントが取れたんで、総合のグラウンドはパンチありきなんだなっていうことを確認した試合です。この頃は試合さえできればいいって感じで、リング上では完璧に天狗になってましたね。あ、べつに私生活ではオラオラしてなかったですよ!

8
2002.7.19 プロ修斗　後楽園ホール
○vs椎木努
(1R 4分42秒 チョークスリーパー)

とにかく初の後楽園ってことで、嬉しくて興奮してましたね。初めてマッハさんの試合を観たのも後楽園だったし、修斗イコール後楽園っていうか。とくに後楽園で印象に残ってるのはフランク・トリッグvsマセロ・アグアです。トリッグがパウンドでボコボコにしたんですけど、その殴る音が会場に響き渡って、「こりゃ半端じゃないな」って衝撃を受けましたね。僕は下北の試合が多かったんですけど、後楽園はいまでもやりたいなって思います。

9
2002.10.27 プロ修斗　NGKホール
○vs尾松賢
(1R 4分40秒 腕ひしぎ十字固め)

新人王の決勝戦だったんで、取りこぼしたら大変なことになると思って対策万全で臨んだのを覚えてます。相手は打撃が得意だから、しっかり倒して寝技で勝負しようって感じで。試合後、プレッシャーから解放されてリング上ではしゃいでたら、周りがみんなシーンとしてたんですよ。アウェーだからあたりまえなんですけど、「やべー、スベッった」と、思いましたね(笑)。

©サステイン

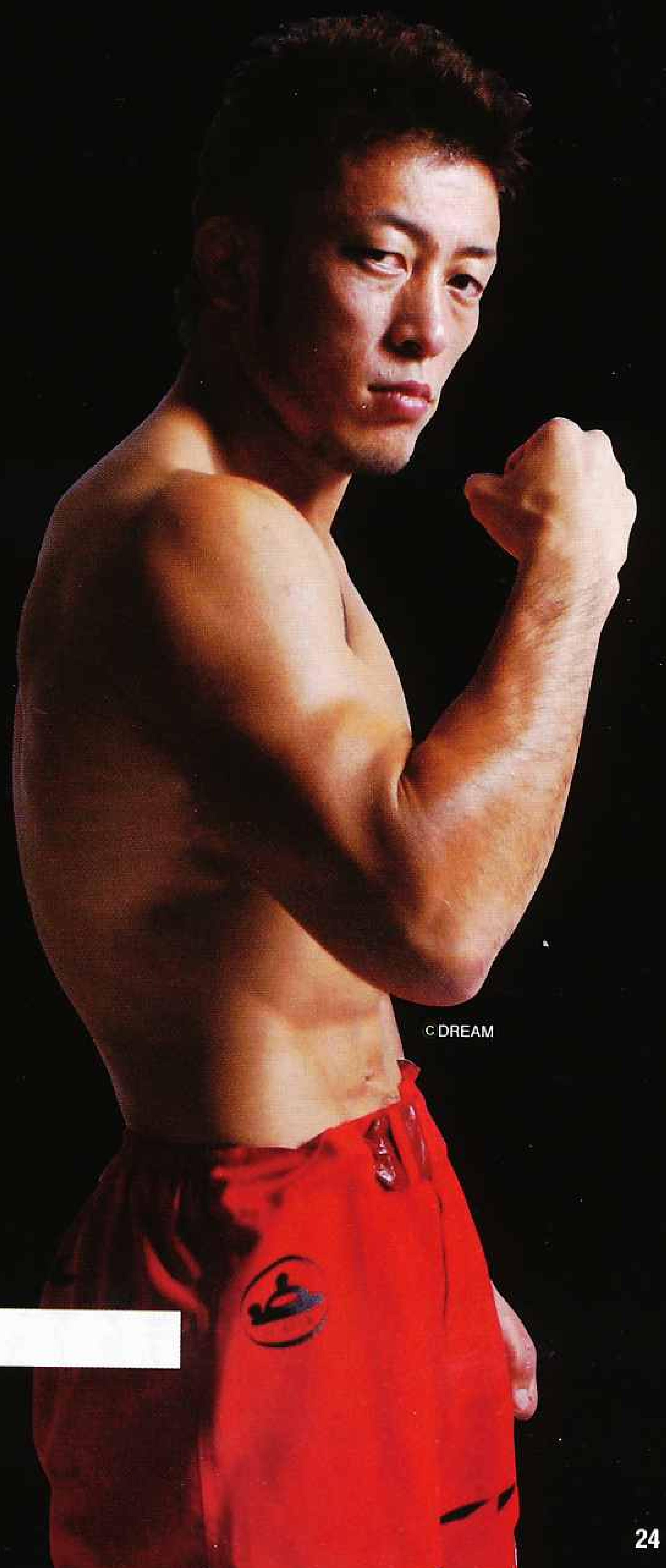


10
2002.12.14 プロ修斗　東京ベイNKホール
×vsビトー"シャオリン"ヒベイロ
(3R終了 判定0-3)

この年は連戦連勝だったんですけど、最後の最後に調子に乗ってた鼻をボキッて折られました。シャオリンがアメーバみたいにベタッてくっついて、全然離れないんですよ。僕も力ずくで無理矢理にスペース作って逃げようとするんですけど、まったくできなくて。これが世界のトップの寝技なんだって完璧にへこみましたね。打撃をもっと出せるようにしないと、世界と闘っていくには話にならないって思い知らされた試合です。

格闘技経験ゼロの若者が、桜井"マッハ"速人に憧れてMMAデビューをはたしたのが00年の春。あれから9年――修斗では世界ウェルター級王者として君臨、その後PRIDEを経て、現在はDREAMで活躍するクラッシャーが、その激闘の歴史を振り返る!

構成／鈴木佑　撮影／乾晋也



©DREAM

試合レビュー

©サステイン



14

2004.3.22 プロ修斗
後楽園ホール

△vs宇野薫

(3R終了 判定1-0)

雷暗戦の試合後、僕が「ベルトに挑戦させてください」ってマイクアピールしたら、そのすぐあとにUFC帰りの宇野さんがリングに登場して「チャンピオンとやらせてほしい」って言ったんですよね。当時は「ふざけんなよ! 俺の話聞いてたのか?」って頭にきましたよ。この頃はまだバイトしてたんですけど、宇野戦が決まって辞めたんですす。もうここで負けたら格闘技を辞めて、普通に公務員になろうと思ってましたから。試合自体は凄く勉強になりましたよ。それまで強けりゃいいって思ってたのが、うまいっていうのも重要なんだなって気づいたというか。



©UPPER

11

2003.5.30 プロ修斗
北沢タウンホール

○vsタクミ

(1R 4分11秒 TKO)

この試合の前にアブダビコンバットの日本予選に出たら肋軟骨をケガして、さらに指まで脱臼しちゃって本当は試合できるような状況じゃなかったんですよ。タクミ選手も道場を新しく出したばっかりで、たぶんそっちのほうに忙殺されてロクに練習もできてなかったと思うんですよね。でも、お互いにそういう状況でもやりたいっていう気持ちがあって。技術的にはひどい内容だったんですけど、闘いを通して気持ちの部分で共感し合えたし、3年越しのリベンジもはたせたので凄く印象に残ってる一戦ですね。



©UPPER

15

2004.9.26 プロ修斗
後楽園ホール

○vs ミンダウガス・ラウリナイティス

(2R 2分00秒 TKO)

これは……よくわからないリトアニア人ですね。タイトルマッチに向けた前哨戦みたいな感じで、凄くゆる〜い相手でした。だから印象に残ってるのは名前が長いってことくらいかな。



©サステイン

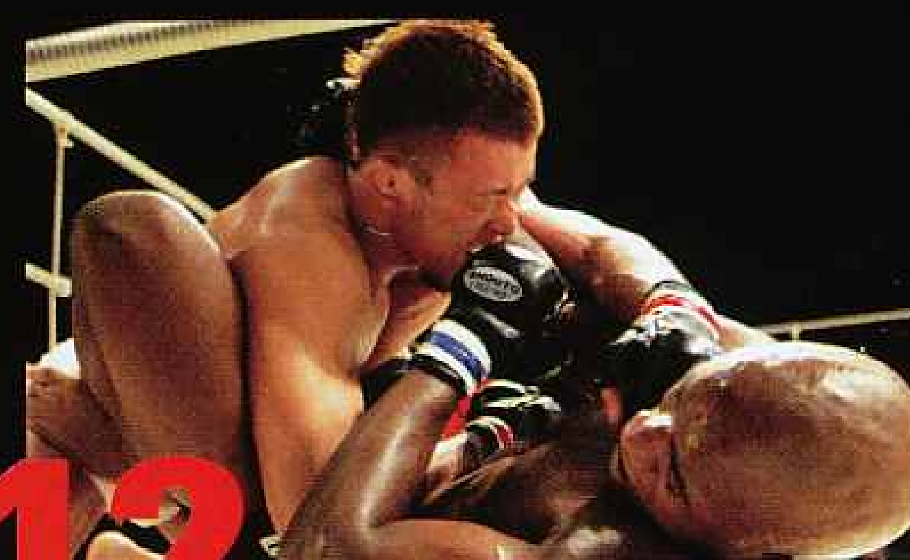
17

2005.4.23 プロ修斗
博多スターレーン

○vsヤニ・ラックス

(1R 4分42秒 TKO)

チャンピオンになって一発目の試合だったんで、いつにも増して負けられないっていう気持ちでしたね。あとは相手がやけにでかかったのを覚えてます。このへんからパウンドを多用するようになってきたんですよ。だんだんと勝ち方のコツがわかってきた感じですね。



©サステイン

12

2003.8.10 プロ修斗
横浜文化体育館

○vs イーブス・エドワーズ

(3R終了 判定3-0)

当時、イーブスはUFCのトップだったんで、凄く恐怖を感じたのを覚えてます。あそこまで怖いなって思ったのは初めてですね。台風で飛行機が来なきゃいいのにって本当に思ってたくらいで(笑)。メチャクチャ打撃が強いし、八隅(孝平)くんがスコーンってKOされた映像とか観て「うわ、怖ぇ〜!」って。一応、試合に勝つには勝ちましたけど、僕がグラウンドで固め続けた感じだったんで、自分としても納得いってないし、お客さんもつまんなかったと思いますね。

©サステイン



16

2004.12.14 プロ修斗
国立代々木第2競技場

○vs ビトー“シャオリン”ヒベイロ

(2R 3分11秒 TKO)

これに勝てたからいまがあるというか、負けてたらいまごろ工事現場で働いてたと思います(笑)。前回の対戦時は「こりゃダメだ」って感じた部分もあったけど、同時に「でも倒されなきゃいける」って確信もあったんですよ。テイクダウンされない技術もかたちになってきてたんで。シャオリンもDREAMに来ましたけど、あいかわらず寝技は強いなって感じましたね。ただ、また試合したいかって言われたら……。こういう地味な選手とおもしろい試合するのは地味にたいへんなんですよ(苦笑)。



©サステイン

13

2003.12.14 プロ修斗
東京ベイNKホール

○vs雷暗暴

(1R 4分21秒 TKO)

このときはイーブス戦があまりにひどかったこともあってか、「ここで下手な試合したら終わりだからね」っていう坂本さん(サステイン代表)の伝言を、マネージャーから聞いたんですよ。これはやばいと思って、「雷暗選手に勝つならパンチしかない」って相当気合いが入りましたね。僕としてはこの試合はウェルター級王座挑戦者決定戦みたいなイメージでした。みんな雷暗選手に勝ってウェルター級王座に挑戦してたんで。

クラッシャー本人が語る激闘の軌跡

川尻達也全試





川尻達也全試合レビュー



18

2005.5.22　PRIDE 武士道 -其の七-
有明コロシアム

○vsキム・インソク

(1R 3分28秒 TKO)

PRIDE初参戦だったんですけど、あんまり気持ちよかったっていうのはないです。むしろ「会場デカッ!」てビビってました。この頃から声をかけてくれる人が増えたんですけど、なんか不思議な感覚でしたね。デビューから変わらず同じことをやってるのに、急にみんなの反応が変わるから「俺、べつに変わってないんだけどな」って。



19

2005.7.17　PRIDE 武士道 -其の八-
名古屋レインボーホール

○vsルイス・ブスカペ

(2R終了 判定3-0)

ブスカペは地味だけどやっぱり難敵だと思います。とにかく打たれ強いんで、闘っててこっちが嫌になっちゃうっていうか。「まだくっついてくるの?」っていうくらいしつこいんですよ。終了ゴング間際の踏みつけは「もう立ってくるなよ!」って感じでしたね。

20

2005.9.25　PRIDE 武士道 -其の九-
有明コロシアム

×vs五味隆典

(1R 7分42秒 チョークスリーパー)

いままでで一番のターニングポイントになった試合です。これで僕の人生が変わりましたから。おもいっきり自信をへし折られて「まだまだだな」って思い知らされて。試合自体はやってて楽しかったですよ。それまでは試合であんまり打ち合うこともなかったんですけど、打撃が気持ちよくなってきたっていうか……危ない傾向ですかね?(笑)。たしか試合後に五味選手から勝利賞を渡されたんですよね、ちゃんとあとで「これは君のだから」って返しに行きましたけど……うん、やっぱ自分の中でこの試合の位置づけは大きいですね。



22

2006.6.4　PRIDE 武士道 -其の十一-　さいたまスーパーアリーナ

○vsチャールズ・"クレイジー・ホース"・ベネット

(1R 2分30秒 ヒザ十字固め)

ベネットは弱い選手じゃないけど"イロモン"っていう認識だったんで、この試合のオファーをもらったときは「俺もここまで落ちたか……」って思いましたね。ああいうリング上でヘラヘラしてるタイプは好きじゃないし。ここからまた這い上がってやるって感じでした。この試合は足関で勝ったんですけど、なんだかファンの人がポカンとしてたので、「あぁ、俺は足関で勝っちゃいけないんだな」ってちょっと反省しました(笑)。



21

2006.2.17　プロ修斗　国立代々木第2競技場

○vsヨアキム・ハンセン

(1R 0分08秒 反則失格)

伝説のキン●マ直撃事件ですね(苦笑)。お客さんに申し訳なかったと同時に、とにかく痛かった……(しみじみと)。食らった瞬間は痛くないんですよ。で、大丈夫だと思ったら、その直後に地獄がやってきて。「やばい、まだ始まったばかりだから、ここでやめるわけにはいかない!」って思っても、足に力が入らなくて。まぁ、唯一良かったのは、修斗の会場を満員にできたことですね。ハンセンは今回のカルバンみたいな感じで、自分が上に登るためには絶対に倒さなきゃいけない相手だと思ってます。



24

2006.10.14　プロ修斗
パシフィコ横浜

○vsペール・エクルンド

(1R 4分12秒 TKO)

ひさびさの修斗の試合ですね。当時ウェルター級チャンピオンだったので、防衛戦の前に一回修斗に出ときたいなと思って。でもファンに望まれてなかったのか、勝っても全然盛り上がらなかったからつらかったです。やっぱり周囲が望むような試合をしたいなって思いましたね。



23

2006.8.26　PRIDE 武士道 -其の十二-
名古屋レインボーホール

○vsクリス・ブレナン

(1R 0分29秒 KO)

このときは最初にジョシュ・トムソンとやるはずだったんですよ。でもケガしてこの相手になって。試合自体は気持ちいい勝利でしたね、ヒザ蹴りで完勝して。つい嬉しくて飲みすぎちゃって、一夜明け会見は二日酔いでたいへんでした。そうそう、このときは秒殺で調子に乗って、ラウンドガールに抱きつこうとしたんですけど、ファンからちょっとブーイング浴びたんですよ!……あんまり青木くんのことをどうこう言えないかな?



25
2006.12.31 PRIDE男祭り2006 さいたまスーパーアリーナ

×vsギルバート・メレンデス

(2R終了 判定0-3)

これは「俺の勝ちにしてくれ」って思った試合です。この負けでだいぶ人生狂ってるんで。ここから試合が1年間なかったわけですけど、もし勝ってたら待ってるあいだのファンの期待値も違ってたでしょうし。このときはトレーナーの山田さんが大阪で例の事件に巻き込まれて、たいへんなことになってたんですよね(苦笑)。山田さんがいたらもっと冷静に闘えたかもしれないです、安心感も違うんで。この試合のケガが原因で、ウェルター級のベルトも返上したんですよね。防衛期限を守れなかったのもありますし、修斗王者というよりは川尻達也として、もう一度ファンに認めてもらわないといけないと思ったんで。



26
2007.12.31 やれんのか! 大晦日! 2007 さいたまスーパーアリーナ

○vsルイス・アゼレード

(2R終了 判定3-0)

1年ぶりの試合ですね。もうこの頃は、とにかくPRIDEの再開を待つしか手段がないって感じでした。スタッフを裏切るのもイヤだったし、僕一人じゃなく石田くんとかマッハさん、青木くんがいたから待てたっていうのはありますね。試合自体は日本人トップバッターだったんで、「俺が爆発させなきゃ」って思ったんですけど、いまいち火をつけられなくて……。でもそのあとに石田くんと三崎さんの試合で盛り上がったからよかったですね。



27
2008.3.15 DREAM.1 さいたまスーパーアリーナ

○vsブラックマンバ

(2R終了 判定3-0)

この試合は厳しかったです。スカッと一本取って終わらせようと思ってたんですけど、意外と寝技も手強くて。スタンドで打ち合おうとは思わなかったですね。ちょうどこのときはアバラをケガしてたんで、さすがにあのヒザもらったらヤバイなって。トーナメントの1回戦だったし、下手こくわけにはいかないってのもあったっていうか……僕の弱い部分が出ましたね。じつはあのメンバーの中で一番やりにくくなって思ってたのがマンバだったんですよ。これは「トップに行きたいなら乗り越えろ」っていうことなんだろうなって思いましたね。



28
2008.5.11 DREAM.3 さいたまスーパーアリーナ

○vsルイス・ブスカペ

(2R終了 判定3-0)

前回の対戦時よりは圧倒できたんですけど、KOじゃなかったのがダメでしたね。そうそう、たしか試合前の会見でブスカペが「カワジリはブサイク」って言ったんですよ。うちの母ちゃんが怒ってました(笑)。このときは自分の試合よりも宇野さんが石田くんに勝ったことに、素でムカついてたことのほうをよく覚えてます。まさか負けるとは思ってなかったから悔しくて。もう次は俺しかいないだろって感じでしたね。まぁ、次の日には宇野さんにも石田くんにも失礼だったと思って謝罪したんですけど。でも正直、いまでも僕の中では間違ったことはしてないと思ってますよ。



29
2008.7.21 DREAM.5 さいたまスーパーアリーナ

×vs エディ・アルバレス

(1R 7分35秒 TKO)

僕が"助演男優賞"を獲った試合ですね。メレンデス戦みたいな打ち合いでしたけど、これがそのときと違うのは単なる勢いじゃなく、勝つための打ち合いっていうか。ただ、マウントを取ったときに「勝った!」って思って、少し油断しちゃったのがまずかったですね。そのあとのエディのリカバリーが凄くて、しこたま殴られて。周りからも評価いただいた試合ですけど、トーナメントは負けたら終わりなんで、「あぁ、落ちたな」って思いましたね。自分の実力が落ちたってことじゃなくて、「また壁を破れなかったな」って感じでした。



30
2008.12.31 Dynamite!! ～勇気のチカラ2008～ さいたまスーパーアリーナ

○vs武田幸三

(1R 2分47秒 KO)

これはもううまくいきすぎました。100回やったら1回の勝利がいきなりきたっていうか。もともとこのときは、最初に魔裟斗戦のオファーだったんですよ。でも、武田選手も男気があって好きなファイターだったので、相手にまったく不足はないって感じで。試合は相手の裏をかけたっていうか、自分のやりたいことができましたね。試合後は知り合いのスポーツバーで何回も繰り返し観ましたよ、「おまえ、自分好きだな」って言われるくらい(笑)。これまでにも100回くらい観たんじゃないですかね。


31
2009.3.8 DREAM.7 さいたまスーパーアリーナ

○vsロス・エバネス

(1R 4分05秒 チョークスリーパー)

とにかくでかくて重かったですね。あきらかに70kgの選手じゃないなって。僕はリングに上がって向かい合ったときに、相手をでかいって思うことはまずないんですけど。まぁ、実際に計量オーバーでしたしね。でも、実力的にはまったく問題なかったです。このときは試合がしょぼかったですけど、煽りVと試合後のマイクも入れて合格点ということで!



続!!〝俺たちの五味隆典座談会!!〟

こうなったら、魔裟斗、川尻、青木ともやるしかねぇ!!編

「帰ってきたぜ~!!」と五味隆典が5・10修斗JCBホール大会で劇的復活!! と同時に、前号(No・134)で物議をかもした「〝俺たちの〟五味隆典座談会」も早くも帰ってきた! 今回は復活後の五味のビジョンについて、全格闘技ファン必読の超妄想トークが炸裂する!

構成/真下義之　大会撮影/乾晋也

元祖・プロ格闘技の真実

ザ・K-1

座談会出席者

橋本宗洋
フリーライター。本誌執筆のほか携帯サイト『kami-pro Move』でも連載コラム執筆中。業界最重量ライターとして知られていたが、昨年ダイエットに成功。現在、若干リバウンド中?

堀江ガンツ
本誌編集部。ちっちゃな頃から熱狂的プロレスファン、UWF信者としてならし、『週プロ』のプレッシャー』会員という恥ずかしい過去も持つ。人気企画・変態座談会主宰者としても活躍中。

[司会]ジャン斉藤
本誌編集長。〝雀鬼〟こと伝説の麻雀師・桜井章一の内弟子を経て、『kami-pro』編集部へ。永久電機などアントニオ猪木の怪しげな事業の調査や破綻系興業の観戦がライフワーク。

――たったいま5・10修斗JCBホール大会終了したばかりですけど、前号（本誌No・134）に引き続き「俺たちの五味隆典座談会」を行ないます。

ガンツ いやあ～、まさに帰ってきたね、〝俺たちの〟五味隆典が！

橋本 ホントに凄かった！ 正直、五味は前回の座談会を読んで怒ったと見たね（笑）。

ガンツ 勝利した五味がコーナーに駆け上がったときに俺と目が合った気もするし。

橋本 ズバリ、気のせいだよ！（笑）。五味はいまごろコメントルームで「ある雑誌にいろんなこと書かれましたけど」と言ってるかも。

――髙田vsヒクソン戦後のリングス後楽園ホール大会での前田日明のように「おたくのガンツくん、問題ありますよ！」と。

橋本 最近の読者には元ネタがわからないよ！（笑）。

ガンツ ちょっと！ 俺は五味をメチャクチャ応援してるじゃない！

――そうだ、悪いのは俺だった（笑）。

ガンツ だってね、会場で五味ファンらしき若者に「ガンツさんですよね？」と声をかけられて「一緒に写真撮ってください」ってせがまれたもん。修斗の会場で俺が話しかけられるってありえないでしょ？ 「最後のパンチは一回目の（ルイス・）アゼレード戦と一緒だよね」って言ったら「そうなんですよ！」と。一緒に喜びを分かち合ったんだから……（しみじみと）。

――まあ、そもそもあの発言（詳しくは前号を参照）がなかったら、普通の五味隆典座談会なんですけどね。

ガンツ 要するに、五味隆典は応援してるけど〝五味サイド〟はどうなんだ？ 何をやってるんだ？ ってことの意思表明です。

橋本 業界的にはどんな反応があったの？

――裏ではいろいろありましたよ。「やりすぎだ！」と言う関係者が多かったけど、なぜか皆さん顔が笑ってるのが印象的でしたねぇ。

橋本 ククククク。

――川尻達也調で言うと、〝五味サイド〟にはまだまだ言いたいことが原稿用紙30枚くらいあるんだけど。今回は魅力的だった五味隆典を語りましょう！

ガンツ しっかし、あれこそ五味隆典だよね！

橋本 あの最後の右フック！ 遠い間合いからの変則的なフックでダウンさせ、すかさずパウンドでたたみかけるというね。

ガンツ あと、フィニッシュの直前のレバー打ち！ あれでもう勝負は決まってたよ！

橋本 しかも試合タイムは2ラウンド4分ちょっと。これはPRIDEルールで言うと、1ラウンド後半なわけですよ。時間かけて相手の逃げ道をふさいだ上で倒す、五味の最も得意なパターン。今回は1ラウンド開始時に相手と拳を合わせなかったのも「いいぞ！」って思ったな。

ガンツ 自信を取り戻してノッてる五味だったね。これは中蔵（隆志）との相性の問題もあると思う。今回は中蔵に「一発食らったら倒される」っていう、必要以上の警戒心と「絶対、負けられない」っていう気負いが見えた。逆に五味は北岡（悟）戦のときは「寝たらヤラれちゃうなぁ……」って迷いが見えたけど、今回は「スタンドでもレスリングでも負けねぇ」って余裕があって、会場も大歓声で迎えたし。オダてるとどこまでも上がっていくタイプというか（笑）。



[09.5.10修斗伝承]
東京・JCBホール大会
○ 五味隆典 vs 中蔵隆志×
（2R 4分41秒 KO）

帰ってきたぜ～!! 五味は、会場の大声援をバックに1Rは互角の攻防を展開。2R終盤には右ボディに左フック、強烈な右ストレートでダウンを奪取し、すかさずパウンド連打でKO！ ひさびさにコーナーに駆け上がる"五味劇場"を爆発!!

――たぶん、試合後にトップロープに上がったのは、最後の『PRIDE男祭り』（06年）の石田光洋戦以来ですね。

橋本 逆に石田戦以降はスカ勝ちがなかったってことだけど。でも去年の五味があの勝ち方で、あそこまで喜んだかはわからないね。

ガンツ （セルゲイ・）ゴリアエフ相手に勝って喜ばれても困っちゃうしさ。中蔵もこの試合に懸ける思いが伝わったし、中蔵を追ったドキュメンタリーがあったらいい作品になってたと思うよ。

橋本 中蔵とは親しいわけでもないけど、負けたあとに切なくなっちゃったもんな……。でも、今日の中蔵は五味にとって、かつての石田であり、川尻であり、マッハだった。ひさびさに「いいケンカ相手が見つかった」というか。

――じゃあ「北岡はなんなんだ？」って話だけど（笑）。

橋本 確かに、五味にとっての北岡って難しい存在だねぇ。なんていうんだろうな。中蔵や川尻は、敵対校の番長だったんですよ。でも北岡は「長ラン着てねぇじゃねぇか！」って感じで（笑）。

――運動部所属で不良じゃないけど、ケンカをやるとじつは一番強いヤツって学校にいたじゃないですか？

橋本 「サッカー部のアイツには手を出すな！」ってヤツね。不良とは普段からの節制が違うし（笑）。

ガンツ ただ、今回の五味は「勝ったら復活できる」というリカバリー要素が大きかったんじゃない？ 北岡戦は追われる立場で、「勝っても現状維持」で「負けたらマイナス」だったからヤル気が出なかったのかな。

橋本 今回はシチュエーションもよかったし、その重みを五味自身が理解してたんだろうね。

ガンツ 五味にとってさ、今回の修斗は精神的なVIP待遇だったと思うんだよね。みんなが五味を歓迎した雰囲気で、ノリノリになって。『戦極』のときは違う意味で充分すぎるぐらいVIP待遇だけど、精神的に満たされなかったというかさ。

――そこは〝憧れ〟の問題なんじゃないですか。

橋本 そういえば、今日の煽り映像でも「修斗への憧れ」を口にしてたね。音楽やファッションだったりさ。

――『PRIDE武士道』のときだって、「PRIDEのトップファイターみたいになりたい」というモチベーションだったでしょう。

ガンツ 「PRIDEのトップファイターになりたい」「ヴァンダレイ・シウバみたいになりたい」という憧れが原点で、いつの間にかメインを任されて「あれ？ 俺、そうなってる？」って感じでノリノリになって。



どね。

に対してそう思ってたはずだし。

と激突するわけですよぉぉぉぉ！

続 "俺たちの五味隆典"座談会!!

橋本 逆に『戦極』みたいに、最初からVIP待遇すぎて「どうぞ好きにしてください」と言われると、「え〜っと……」って考え込んでしまうのかな。

ガンツ 五味が一番光るのはライブじゃない？ ライブでノリノリで出てきてスカ勝ちで盛り上がったら最高に気持ちいい。その快感を求める男だよね。でも熱狂的ライブ空間という意味では、『戦極』はまだ作り上げてる最中だから。

橋本 たぶん五味は『戦極』を「さぁ、PRIDEの続きが始まった！」と思ってたんじゃないかな。でも実際は「これから作らなきゃいけない」リングだった。そこにギャップがあったのかもしれない。

――それはDREAMライト級GPを「かつて通った道だから」って見下ろしたり、『戦極』ライト級GPが〝ロード・トゥ・五味〟になったことからもわかりますね。

ガンツ しかし、〝ロード・トゥ・五味〟って凄いパラドックスだよね。王者として扱ってくれる『戦極』にきたら、神棚に置かれて、「誰が自分を倒すか？」ってイベントを開催されて。ケンカっ早い五味にはキツかったのかもしれない。

橋本 自分で選んだことではあるけど、PRIDEと地続きでもなくて、〝ロード・トゥ・五味〟じゃケンカができずに居心地が悪くて、わけわかんなくなったのかな？

――『戦極』時代の五味に笑顔を見れたのは、テレビ東京（『戦極G』）の放送がスタートしたときですね。番組で「やっぱりテレビがないと」みたいなことも言ってたし、やっぱりテレビに映りたいんだなって微笑ましくなって。

ガンツ 次のステージを用意してもらえないと足踏みしちゃう人かもしれない。目の前においしいものがあると燃える、わかりやすいタイプというか（笑）。

橋本 でも、現実的にこのあとの五味ってどうなると思う？ 前日計量でも言ってたけど、「フリーになった」ということをやたら強調してたよね。

ガンツ 今後に関しては、五味自身も発言はマチマチですよね。

橋本 UFCは？

ガンツ ありでしょう。実際、1年前は『戦極』とUFCの選択だったわけだし。ただ、せっかく今回の勝利で日本国内での五味の熱が復活したわけだから、この流れを止めないでほしいね。秋に行なわれる『バーリ・トゥード・ジャパン2009』（以下VTJ）に上がるとかさ。

橋本 VTJなら、現在の修斗ランキングと関係なく、タイミングとネゴシエーション次第でいろんな選手が出られるでしょ。とりわけ修斗出身なら……ならば、相手は〝あのバカ〟しかいないよね。〝あのバカ〟は修斗の現役チャンピオンでもあるんだけど（笑）。

――それなのに、今日の修斗では凄く居心地が悪そうでしたけど（笑）。

ガンツ もうやるしかないでしょう！ 五味隆典よ…………、青木真也とやってくれ！

五味にとって中蔵は、ひさびさの「いいケンカ相手」だったね（橋本）



修斗20周年の記念セレモニーに登場した川尻、青木には場内から大歓声！　忘れがちなことだが、じつは"現役"修斗ミドル級王者でもあり、しばらく防衛戦の要請がない青木はどこかしら居心地が悪そうでもあった。

橋本 なんでそんなにタメて言うんだよ（笑）。

ガンツ （無視して）五味には燃える相手が必要なんだから、青木とやるしかないって！ 中蔵戦の勝利で〝一丁あがり〟と思わないでさ。

――だから、この件で言いたいのは、安田（隆夫、『ドン・キホーテ』）会長、よろしくお願いします！ と。

橋本 なぜ、安田会長（笑）。

――なぜって、今回の修斗は『ドン・キホーテ』がバックアップしてるでしょ。この不景気な時代にこうして素晴らしいイベントが堪能できるのは、安田会長のおかげですよ！ ついでに秋山成勲事件でスポンサーから降りた日清食品様、DREAMへのスポンサー復帰ありがとうございます！（笑）。

ガンツ ありがとうございます！ こうなったら、みんなで「とんがらし麺」を食べないと！

――いや、あれってホントにおいしいんですよね〜。毎日ヒーヒー言ってます。

橋本 何を言ってるんだよ（笑）。確かにいまはスポンサーに支えられる時代だけどさ。

ガンツ ぶっちゃけ、今回の五味の修斗参戦は安田会長の力なしではありえなかったと思うしね。

橋本 まあ、五味は青木戦はイヤがるだろうけど、結果的にメチャクチャ焚きつけられる相手だよね。秋なら、五味のタイミング的にも空いてるだろうし。でもさ、肝心の青木のスケジュールはどうなんだろう？

ガンツ あ〜、秋にはDREAMが2大会あるからなあ。そこで青木は必要になってくるよね。

――大丈夫ですよ。今回、石井（教義）館長にもインタビューしたんですけど、館長も「趣味で青木vs五味をやりたい」って言ってましたから。ここは館長に一肌脱いでいただいて、DREAMと谷川さんを説得してもらいましょう！ 館長、よろしくお願いします!!

魔裟斗戦に色気を持ってるのは川尻よりも断然五味!!（ガンツ）

橋本 今日はお願いごとが多いね（笑）。でもねぇ、五味には魔裟斗戦という大問題もあるじゃん。魔裟斗vs川尻というプランもあるけど、谷川さんも魔裟斗vs五味戦には興味が……。

ガンツ （さえぎって）いや…………………。

橋本 どうした、ガンツ？

ガンツ ………やるべきだね、魔裟斗vs五味（ポツリと）。

橋本 だから、どうしてあたりさわりのない発言をするのに、いちいちタメるんだよ。しかも「やるべきだ」なんて、おまえになんの権限があるんだ（笑）。

ガンツ （再び無視して）正直、「魔裟斗vs川尻と魔裟斗vs五味、どっちが観たい？」と言われたら、俺個人は五味なんだよ。それは川尻に魅力がないわけじゃなくて「どちらが魔裟斗戦に色気があるか？」って考えたら、断然五味だもん！

橋本 川尻は「DREAMのためになるなら」ってモチベーションだろうから。川尻がそうやってマット界を背負う姿勢は正しくて美しいし、「川尻にこそ頑張ってほしい」とも思うけ



どね。

——ただ、五味の場合は魔裟斗への"怨念"さえ感じさせますもんね。魔裟斗へのジェラシーも含めた五味の超個人的なモチベーションは凄まじいですよ。

ガンツ　PRIDE時代から、魔裟斗を強烈に意識してた人がこのタイミングで復活し、対戦相手の座が空いてるわけですよ！　もうね、カッコつけて口にしないだけで、内心は「魔裟斗とやりてぇ！」ってギラギラしてるはずだよ！

橋本　極論すると、この7〜8年、五味は魔裟斗に「なんで俺はおまえじゃないんだ！」と思い続けてきたと思うんだよ。魔裟斗はJリーグの選手やプロ野球選手に「俺だって負けないぐらい凄いことやってるんだ！」と思ってただろうけど、五味は魔裟斗に対してそう思ってたはずだし。

ガンツ　………整理してみよう。

橋本　は？　今度はなんだよ（笑）。

ガンツ　（無視して）大晦日までの流れを簡単に整理してみましょう。まず、川尻が『DREAM・9』でJZに勝つでしょ（キッパリ）。

橋本　また言いきったね（笑）。

ガンツ　するとね、ここ数年のMMAの戦績上では、川尻は五味の完全な"格上"になるわけですよ。……ところが川尻は「魔裟斗と闘う」なんて計算はせず、カルバン戦で全力投球するから、勝ちはするけどボロボロになってしまう危険性もある。

橋本　微妙に説得力あるなぁ。

ガンツ　そこで川尻のダメージが深かったために、魔裟斗の相手として五味が急浮上する。五味はこの千載一遇のチャンスを活かして、魔裟斗と激突するわけですよぉぉぉぉ！

——なんてドラマチックな妄想なんだ（笑）。

ガンツ　ただし！　川尻は魔裟斗戦を奪われた悔しさもあれば、MMAでは五味の格上ですから。秋のVTJを前にしてこう言うと思うんだよね。「五味くんの挑戦、受けてもいいよ」（川尻のモノマネで）。

橋本　似てないけど、続けて。

ガンツ　ところが、五味のほうは「オメー、一回俺に負けてるの覚えてねーのかよ！」とかなんとか言うわけだ！　それで決戦の舞台は秋のVTJですよ‼

橋本　あれ、VTJは青木vs五味じゃないんだ。

ガンツ　……………………………そうだったねぇ。

橋本　なんなんだよ、おまえは（笑）。

——妄想の助け船を出すと、青木はDREAMでヨアキム・ハンセンとのラバーマッチを一本勝ちで制して、ライト級のタイトルを奪取してるんですよ。一度はハンセンに破られたフットチョークを改良したアオキプラッタⅡとかで。

ガンツ　で、ストライクフォースでメレンデスを倒して二冠王になる、と。そんときはアオキプラッタⅢかな。

橋本　こらこら、ナガタロックじゃないんだから（笑）。

——打撃戦しか大喜びしない頭の悪いアメリカ人もそれにはビックリしてね。で、「五味選手と川尻選手の試合？　一昔前のスタイルなんだよなあ」と、またよけいなことを言ってVTJに燃料を投下する、と。

ガンツ　そして五味と川尻の勝者が「ナメくさりやがって！」ってことで大晦日に青木戦ですよ！　でも、今回の『Dynamite‼』はおそらく魔裟斗の引退試合がメインになるし、川尻vs青木はまだDREAM色があるからいいけど、五味vs青木はその雰囲気にはそぐわないでしょ。

——そこで館長の出番です。大晦日のJCBホールで館長プロデュースのワンマッチ興行でやるんですよ。『Dynamite‼』との二元中継決定だ！

橋本　妄想が止まらないなあ。でもさ、川尻はカルバンに勝ってるのに、五味戦を乗り越えないと大晦日に出られないのは理不尽すぎないか？

——いや、川尻も魔裟斗戦を五味に奪われたら許せないでしょ。

ガンツ　そうそう。それに川尻は"漢"（おとこ）だからねぇ。リスクなんか考えず「五味くんと闘えるなら、どこ

続・俺たちの"五味隆典"座談会!!

でもいい」と言うに決まってますよ！

——その気持ちを汲んだ安田会長も「よっしゃ、やったれ！」と。

橋本 言いそうだねえ（笑）。

ガンツ そこで、VTJも因縁の再戦の舞台として、有明コロシアムあたりを押さえるんじゃない？

橋本 いや、VTJといったら、やっぱり東京ベイNKホール（現在閉鎖中）しかないだろ！

——だったら修斗マニアの安田会長も「なんでNKじゃねぇんだ！」ってことで、きっと私財を叩いてNKを買い取ってくれますよ（笑）。

ガンツ 「どうせなら『ドン・キホーテ』道頓堀店えびすタワー支店の観覧車を取りつけちゃえ！」と。

——もちろん『ドン・キホーテ』六本木店屋上で取りつけるはずが、住民運動で幻となったジェットコースターも作るでしょうね（笑）。

橋本 ククククク。ディズニーランドの目の前に『ドンキ』の観覧車とジェットコースターがドーンと建っちゃうのか（笑）。いや～、この妄想年間スケジュールは夢があるなぁ！

ガンツ でも、もう一回格闘技界を盛り上げるためには、これくらいやらなきゃ絶対ダメですよ！

——ここまでやって、さいたまスーパーアリーナのアリーナバージョン（2万人収容）が満員になるか、ならないかでしょ。今日のJCBの盛り上がりも凄かったけど、かつてはスタジアムバージョン（4万人収容）であの熱狂があったわけだから。

ガンツ というか、そういう妄想を実現させていったのがPRIDEでしょ？ 今日の修斗が盛り上がったのも、PRIDE物語の続きでもあったわけですし。

橋本 修斗の理念からいったら、五味と中蔵なんて組めるわけがないんだよね。でも「おもしろいからやろう！」と。廣田（瑞人）vs石田もそう。佐藤ルミナのタイトルマッチも「泣けるからやろう！」と。「おもしろいこと」を追求すれば、事情なんて乗り越えますよ！

——……いやあ、現実では乗り越えられないなあ。

橋本 なんで最後の最後で冷めるんだよ（笑）。

——おもしろいものが事情を乗り越えるのなら、いまのテレビはこんなにつまらなくなってないですよ。それはテレビや格闘技にかぎった話じゃなくて。



3,600人（超満員札止め）をマークした修斗JCBホール大会は、五味の復活劇で総立ちの大熱狂！ 凄まじいまでのグルーヴを生み出したが、ここで満足することなく、この熱量を「世間に届かせる」執念が各プロモーションには必要不可欠だ。

ガンツ 今日の修斗の会場には、我を忘れるぐらい五味を応援してるファンがメチャクチャいたじゃない。あの異常な熱にヒントがある気がするけどね

橋本 うん。今日の五味の熱狂してる感じを流したら、確実に伝わると思うよ。

——もちろんその熱は伝わるし、絶対におもしろいんだけど、いまは伝える前に見向きされない時代じゃないですか。いまや大衆に共通する文化はなくなってきて、世代によって興味の対象が分かれているし、最近でいえば国全体が巻き込まれたのってWBC（野球）ぐらいでしょ。そのWBCでさえ、日本テレビが放映権を見送るくらいビジネスとして壁は凄く高くなっていた。今日の修斗だってあのラインナップでPPVじゃないでしょう。

ガンツ 前回の修斗のPPVがあまりよろしくない結果だったのかな？ 凄くもったいない話だよね。

——おもしろいだけじゃどうしようもできないハードルはありますよね、残念ながら。「おもしろいからなんとかなる」とは思いたいけど、さっきの妄想スケジュールだって、テレビ的には興味はないでしょう。格闘技界的には青木vs五味は観たいけど、テレビ的には魔裟斗vs小比類巻（太信）のほうが入りやすい。

担当・真下 ……いまの話を聞いて思ったのは、先日、忌野清志郎さんが亡くなったじゃないですか？ 告別式では竹中直人、大竹しのぶ、甲本ヒロトが弔辞を述べたんだけど、あるサイトでヒロトの弔辞全文を読んだらムチャクチャ感動的なんですよ！ ヒロトは清志郎から音楽的な魂を継ぐ後継者であり、弔辞自体も詩のような素晴らしさだった。だから、ファンがテレビで「観たかった」のはヒロトの弔辞なんですね。ただ、ネットでその動画を探しても、どのニュースも竹中直人の少しオーバーに思える感情的な弔辞ばっかりなんですよ！

橋本 竹中直人のほうがわかりやすいのかなあ。昔のPRIDEやK－1には、ヒロト的なものを「あえて流そう」と時間をかける余裕があったんだけどね。

——初期は競技自体が新鮮でエクストリームスポーツとしての興奮もあったから。いまは視聴率も下がってるから勝負しづらいんでしょうね。『kamipro』のNo．129で「テレビなんかにわかってたまるか！」と銘打ってテレビ特集をやりましたけど、それは反語でもある。「テレビのせいで……」なんて思うんじゃなくて、「テレビにわからせてやる！」べきなんですよ。いまプロモーションがやるべきことは、この二つの精神をもって闘うことですねぇ。

ガンツ 妄想年間スケジュールを現実化することで世間をアッと言わせたいよ。というわけで、魔裟斗、五味、川尻、青木、格闘技を頼んだぞ！

——石井館長、安田会長よろしくお願いします。格闘技バンザ～イ！（笑）。

一同 格闘技バンザ～イ!!

【09年5月10日／都内・『kamipro』編集部にて収録】

プロモーションはコアな熱量を「テレビにわからせる」べき（斉藤）

あの“熱き抗争”をプレイバック！

元PRIDE代表

榊原語録で振り返る

K-1 vs PRIDE



吹けよラッパ！呼べよ嵐！！

ここ数年の格闘技界で最も熱かった闘いといえば、やはりK―1とPRIDEの仁義なき闘いだろう。この二大メジャー団体が全力でしのぎを削ったことで、多くの夢のカードが実現し、とんでもない熱となったことは間違いない。ここでは、そんな熱き抗争を彩った一方の大将、榊原信行元PRIDE代表の言葉で振り返ってみよう。

構成／堀江ガンツ　撮影／乾晋也、平工幸雄

元祖・プロ格闘技の真実

ザ・K-1

僕は基本的にK-1の石井館長をリスペクトしてるし、またご一緒することもあるかもしれない

▲03年3月、榊原信行氏はDSEの代表に就任。そしてミルコ・クロコップの電撃移籍を機に、PRIDEはK-1との協力関係を解消し、両メジャーイベントは一気に戦争状態に突入したが、そのときのコメント。このとき、すでに現場は離れている石井館長のことは持ち上げつつ、現状のK-1にはキバを剥く大人のケンカを展開した。なお、現場のトップである谷川プロデューサーに対しては「谷川さんの言うとおりにこの業界は動いてますから（笑）」と、皮肉めいたほめ殺し一発。

『PRIDE武士道』も地上波で一般の人に観ていただかないとそれ以外のレベルでやってる大会と一緒に思われたら癪ですからね

▶これまで「ライブでの熱を高めてから」と、安易にPRIDE本戦に出したり、地上波に出したりしていなかった『PRIDE武士道』の選手たちを、これからは地上波放送に出していくと宣言。その理由として「それ以外のレベルでやっている大会と一緒にされないため」と、いちいち『HERO'S』に言及するのだから、バラマニアにはたまらないのだった。

このあいだのK-1さんがやったのなんだったっけ？……ロマネコンティ？

▲『HERO'S』の前身ともいえる、K-1が主催したMMAイベント『ROMANEX』。このPRIDEの商売敵ともいえるイベント開催について、当然のごとくバラさん節が炸裂！　ワイン通らしく高級ワインの名前とわざと間違える嫌味っぷりを発揮。さすが！

どのみちK-1が全面的にバックアップしてやる話なんだから

◀当初、『HERO'S』は元・新日本プロレス執行役員である上井文彦氏がプロデュースする実行委員会が運営を行ない、K-1（FEG）は選手貸し出し等でサイドから協力するということが表向きの発表だったが、榊原代表はアッサリとFEGの興行であることを暴露。発言自体がガチンコでありバーリ・トゥード（なんでもあり）。それがバラさん節だ！

ボビーが上がってるリングにシウバやミルコら命を懸けて闘う男たちを立たせることはありえない

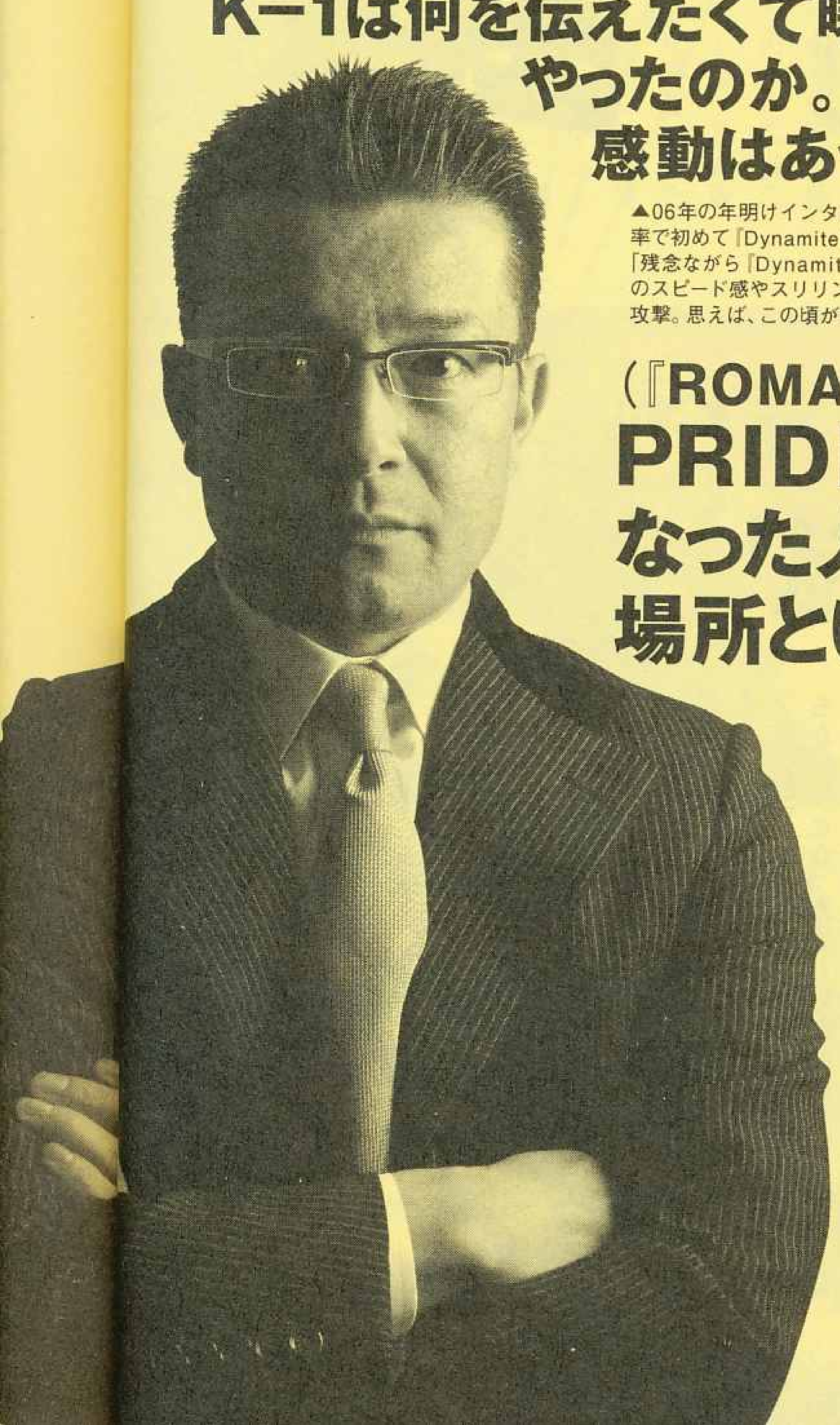
▶しかし、このシウバやミルコらが命懸けで闘うリングに、俳優・金子賢を上げて、文字どおり命懸けでクレイジーホース・ベネットと闘わせるのだから、鬼なのであった。

PRIDEで限界を迎えて引退したグッドリッジが活躍できるんだからヒース・ヒーリングもきっと活躍できるんじゃないですか？

▶PRIDEヘビー級で活躍したヒーリングの『HERO'S』参戦についてコメント。「（ヒーリングはノゲイラにスピニングチョークで簡単に負けた時点で、3強（ヒョードル、ノゲイラ、ミルコ）とのあいだには歴然とした差がありましたから」と、PRIDEから脱落した男扱いしたうえで、そんなヒーリングでも『HERO'S』なら活躍できるんじゃないですか？　という二重に嫌味な発言。さすがだ。

K-1は何を伝えたくて曙vsボビーをやったのか。そこに興奮や感動はあったのか

▲06年の年明けインタビューでの発言。05年大晦日にPRIDEが平均視聴率で初めて『Dynamite!!』を上回ったあとだけに、ラッパの音色も絶好調！「残念ながら『Dynamite!!』からは興奮も感動もなければ、スポーツとしてのスピード感やスリリングさも伝わってこなかった」と、ここぞとばかりに攻撃。思えば、この頃がPRIDEの最盛期だった……。



（『ROMANEX』は）PRIDEで通用しなくなった人が通用する場所という印象ですね

▶ゲーリー・グッドリッジが、PRIDEのリングで引退試合を行ないながら、『ROMANEX』であっさり復帰し、しかも勝ってしまったため、この発言。競合イベントの弱みをズバリ突くためには、"PRIDEの番人"として長年活躍した功労者に対しても「通用しなくなった人」扱いするドライな感覚。恐るべきビジネスマンだ。

僕が見せたいのはセコンドにいる清原選手や関根勤さんの姿じゃない。それで視聴率が上がったって、僕らの見せたいものは見せられない

▲リング上もリング外も芸能人大量動員の『Dynamiye!!』との違いを強調する榊原代表。それでも毎年大晦日は芸能人は呼ばなくても、ジャイアント・シルバはちゃっかり呼んで視聴率対策をしているから抜け目がない。

『HERO'S』の選手でPRIDEに来たら輝く選手は現実的には二人います。それ以外の曙さんとかはまったく興味ありませんけどね（笑）

▲このときの「二人」とはKIDと須藤元気だったと言われているが、聞いてもいないのに曙さんにも言及。しかし、元力士の戦闘竜獲得には自ら動いたことが関係者の口から明らかになるなど、じつは相撲好き疑惑があったりする。

前田日明という人のことを僕はよく知りませんけど、それなりのカリスマ性がある方らしいんで、いいと思いますけどね

▶リングス活動休止後、3年間の潜伏期間を経て『HERO'S』のスーパーバイザーに就任した前田日明に対して、榊原代表がコメント。かつて格闘技界のカリスマとして絶大な影響力を誇った前田日明に対して「僕はよく知りませんけど」と、現在の知名度についてまずはチクリやったうえで、「それなりのカリスマ性がある方」と、カリスマ性が絶大ではないことに言及し、しかもそのカリスマ性すら伝聞でしかなく、自分にとってはよく知らない人ということを、この短い言葉の中ですべて語っているのだから恐ろしい。まあ、こういうことを言ってるから、あとで「ざまあみろ！」「○○は○○の世界へ帰れ！」などと言われてしまうのだが（笑）。

最終的に生き残るのは……K−1ですね。だって、PRIDEは競合イベントが世界中にたくさんあるけど、K−1は全然ないんだもん。ボクも総合格闘技じゃなくて、K−1やっときゃよかったかな〜（笑）

▲PRIDEオーナーの座を降りた直後のインタビューでの発言。ここまでしのぎを削ってきたK-1を最後に高く評価するのかと思いきや、「K-1は独占市場だから楽でいいね」という、単なる皮肉であったことが発覚。さらに「PRIDEが新しいオーナーに移ったのを機に、ボクがK-1の競合となる、新しい立ち技団体でも作ろうかな（笑）」と、その独占市場を自らが破壊せんとする、ブラックジョークまで飛び出すのだから、その魔王ぶりは秋山成勲どころではないのであった。

（06年のボブ・サップ"敵前逃亡"のバックにはPRIDEがいるという噂について）ウチの"子飼い"のマイケル・コネット弁護士を通じて僕が"遠隔操作"した件ですね（笑）

▲06年3月にK-1オランダ大会で起きた「ボブ・サップ敵前逃亡事件」。アーネスト・ホーストと試合が予定されていたサップが、試合前に会場をあとにしてしまったこの事件だが、サップの顧問弁護士がDSEの顧問弁護士でもあったことなどから、この敵前逃亡のバックにはDSEがいるとの説が浮上。その噂におもいきり乗ってボケたあと、鋭い目つきで「（遠隔操作は）ありえないです」と答える榊原代表。いちいちボケてからの否定は、その落差が大きいだけに強烈だ。

『kamipro』もアメリカ進出したほうがいいんじゃない？いまアメリカは、オリンピックスタジアムで10万人興行やるぐらい格闘技人気が高まってるんだから。10万人きっと集まるよ（笑）

▶PRIDEの経営権をロレンゾ・フェティータに譲渡したあと、本誌のラストインタビューでの最後の発言。最後の最後に、ロサンゼルス・メモリアム・コロシアムで行なわれ、招待券バラ撒き疑惑があった『Dynamite!! USA』に対する皮肉で締めた。最後の最後までバラさん節。いやはやこの男、やはり怪物だ。

どっかのトーナメントみたいに2つも3つも主催者推薦枠があるとトーナメントの魅力が半減してしまう

▲06年にPRIDEが総力を結集して開催したPRIDE無差別級GP。しかし、この大会に"60億分の1最強の男"であるヒョードルが、拳のケガのため間に合わないことが濃厚になると、1回戦シードの主催者推薦枠の設置案についても言及。しかし、それはヒョードルだけの特例ということだが、わざわざ、KID、元気、宇野の3人がシードとなった『HERO'S』のトーナメントを皮肉りながら語るところが、榊原代表の榊原代表たるゆえんなのだろう。

交流するっていっても、『HERO'S』の選手でPRIDEに来ておもしろいのは、誰かいます？　秋山選手ぐらいじゃないですか？

▲PRIDE最後の大会となった『PRIDE.34』に桜庭和志がサプライズ登場したのを受けて、新生PRIDEと『HERO'S』の交流機運が高まったことに対するコメント。せっかくサクによって両イベントに"夢の懸け橋"がかかったかと思いきや、『HERO'S』の選手でPRIDEに上がったらおもしろいのは、よりによって「秋山成勲ぐらい」と、いきなり橋をぶっ壊しにかかる榊原代表。退陣してもバラさんぶりはまったく衰えることを知らなかったのだ。



（PRIDE無差別級GPは）桜庭選手を推薦したいと思います（笑）

▲桜庭和志離脱という大激震に見舞われながらも、直前に迫った「PRIDE無差別級GP成功のために全力をつくす」と宣言した榊原代表。しかしその直後、無差別級GPに主催者推薦枠が設けられそうなことに話が及ぶと、離脱直後の「サクを推薦したい」とブラックジョーク。どんな窮地に追い込まれても、決して目が笑っていないユーモアは健在なのだ。

7月、魔裟斗vs川尻or五味が実現か?
“総合格闘家の打撃”をリアルに解説

元・全日本キックボクシングヘビー級王者

郷野聡寛 打撃を語る

—なぜ総合格闘家がK-1ルールで勝てたのか?—

バッチこーい! 野球通の郷野が打撃……といっても野球ではなく、総合格闘家の打撃を語る! 立ち技の技術に定評があり、かつて全日本キックのヘビー級王者にもなった郷野は、昨今のK-1vs総合格闘家をどう見ているのか?

聞き手&撮影/堀江ガンツ　試合写真(『Dynamite!!』)/乾晋也



郷野　いや～、今日は「打撃の話」だって聞いてたんで、ちゃんとマイバット持参っスよ!

—マイバットって……「打撃」違いですよ!

郷野　えぇーっ⁉ こっちの打撃じゃないの?(大げさに驚いて)。

—もちろん野球じゃなくて、K—1ルールでの総合格闘家の打撃について語ってもらいたいんですけど。ま、せっかくなんで野球の打撃も語ってもらいましょうか。

郷野　ホントに野球語っちゃっていいんですか(笑)。

—じつは今日、DREAMに元メジャーリーガーのホセ・カンセコの参戦が発表されたんですよ(笑)。

郷野　え、マジで? 格闘技なんてやってんの?

—なんか去年、ボクシングの試合に出たらしいです。

郷野　へぇ、そうなんだ。で、誰とやるんすか?

—チェ・ホンマンです(笑)。

郷野　凄いなあ。いやあ、次のDREAMは川尻vsカルバンとか、フェザー級GPとか、バチバチのカードが並んでると思ったら、それだけじゃ終わりませんでしたね(笑)。しかしビックリですよ。カンセコって俺が中学生ぐらいの頃のスターでしたからね!

—ファミスタにも「かんせこ」として入ってましたよね(笑)。

郷野　俺は中学生の頃、部屋にカンセコのポスター貼ってましたよ(笑)。

—じゃあ、来日したらサインでももらいに行きましょうか。

郷野　いやー、20年前だったらほしかったですけどねぇ……。

—わかりました(笑)。では、本題に入りまして、今日は総合格闘家がK—1ルールでK—1ファイターに勝つという現象がなぜ起こるのかということを元・全日本キックボクシングヘビー級王者でもある郷野さんにうかがいたいな、と。

郷野　全日本ヘビー級王者、そんなこともあったなあ(笑)。でも、どうしてあういう現象が起こるかっていうのは、一言で言うのは難しいですけどね。

—郷野さんが全日本キックに出たときは、純粋にキックボクシングの技術で上回って勝ってましたよね。

郷野　そうだけど、あの頃の全日本キックヘビー級のレベルっていったら、たかが知れてましたからね。その中でやったら、全然負ける気がしなかったからベルト獲りに行ってみただけで。でも今回はK—1の名前のある選手ですからね。

—K—1WORLD GP準優勝者とか、元ムエタイ王者とかですからね。

郷野　そういう実績のある選手に向こうの土俵で勝つっていうのは快挙ではあると思うんですけど、だからって総合の選手がK—1で通用するとは全然思わないんだよなぁ。いまのトップどころとやって勝ったわけじゃないですからね。俺は大晦日の試合は、最初の勢いや体力で押し切られちゃうK—1選手のほうに問題があったと思うし。

—K—1側に問題ですか。

郷野　だって武田(幸三)選手は、もうあまり見えないらしいじゃないですか。武蔵さんも長年のダメージが溜まってるし、バダ・ハリは3週間前にK—1の決勝で3試合やってるし。そういったコンディションに問題のある選手だったら、総合の選手の勢いや体力の波に飲み込まれちゃうっていうのがあっても全然おかしくないと思うから。

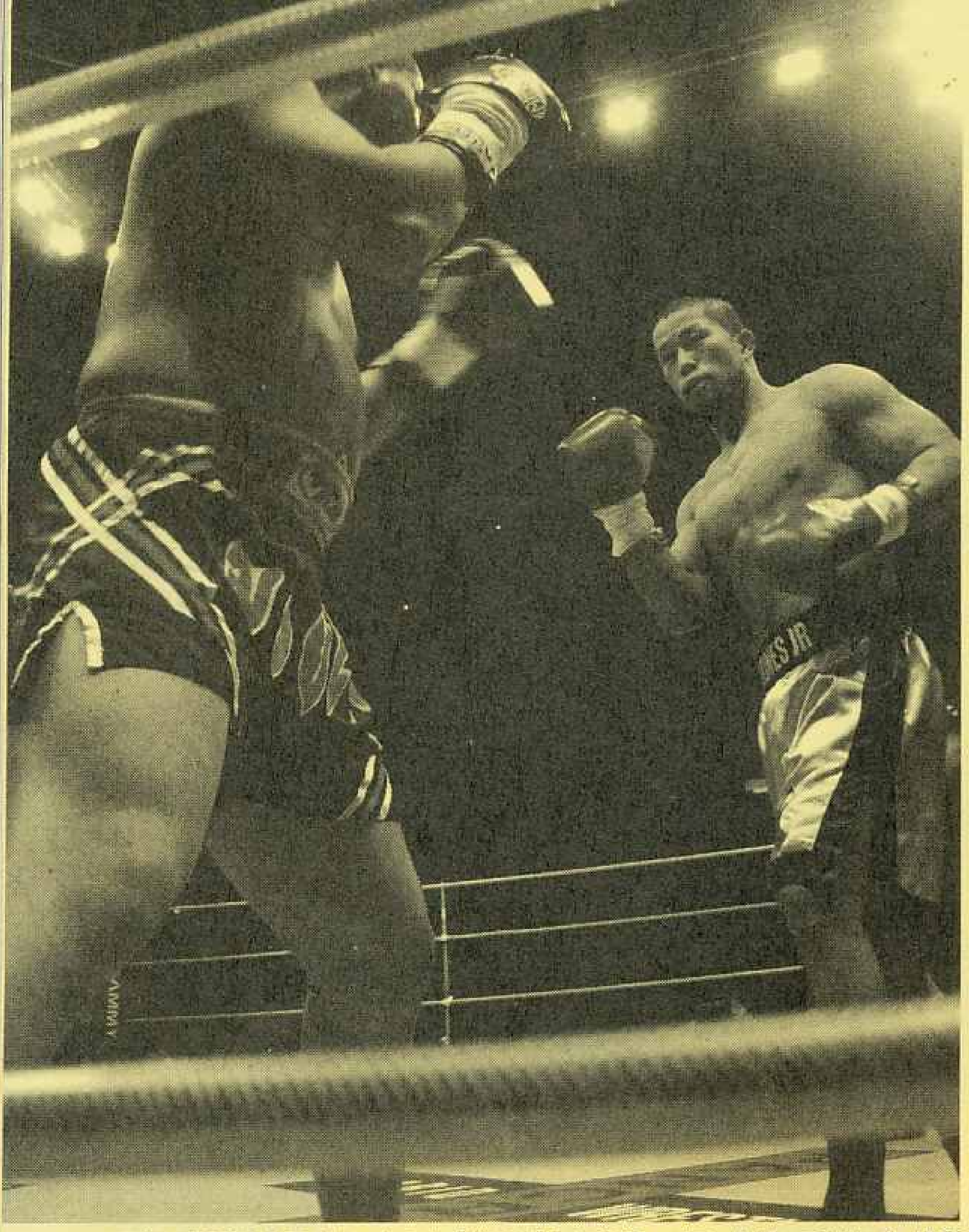
—武田、武蔵、バダ・ハリのダメージの蓄積に問題がある、と。

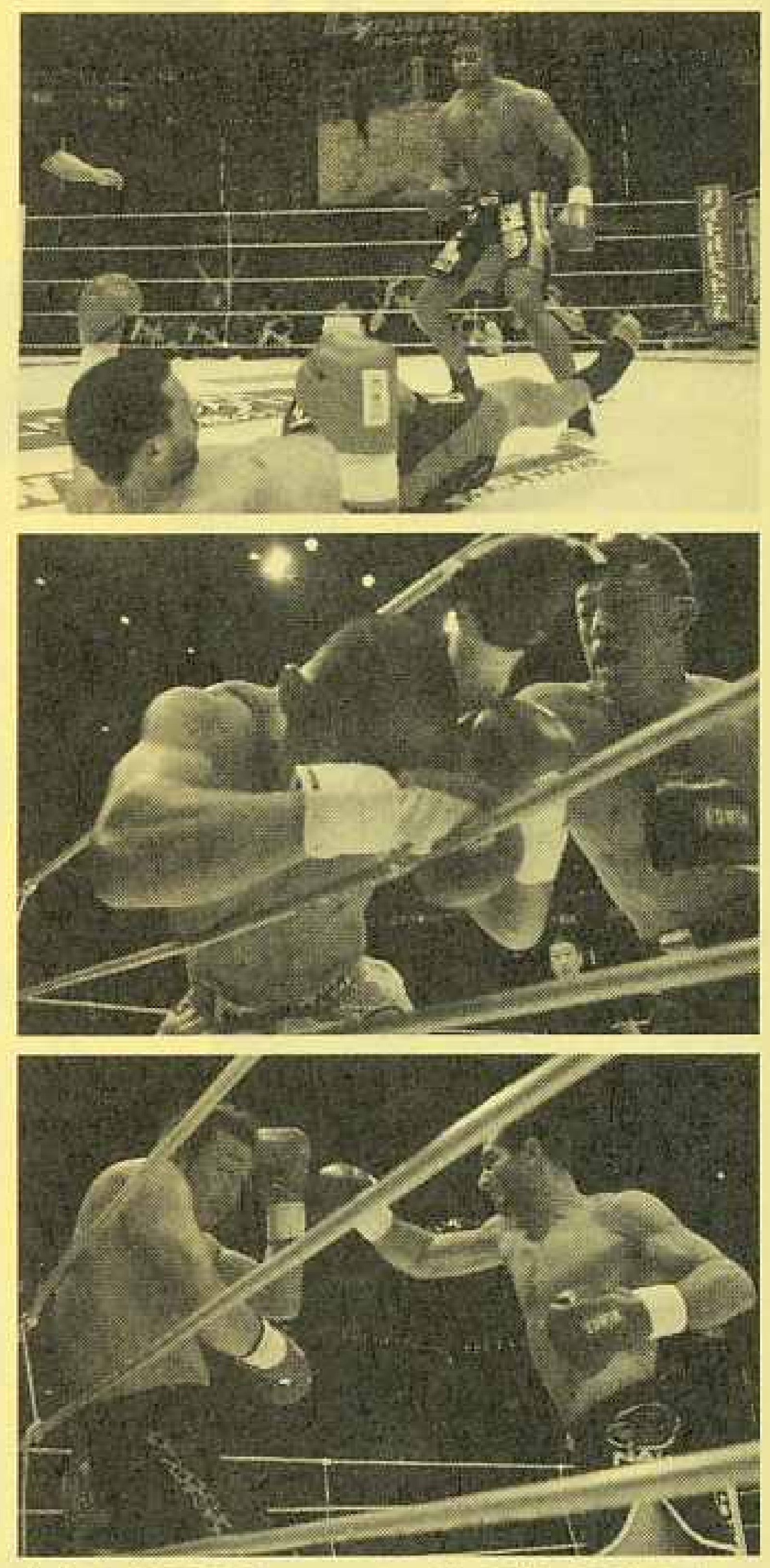
郷野　だからこれが魔裟斗だったら全然違うと思うんですよね。魔裟斗は打たれ強いし、ディフェンスもしっかりしてるし。JZ(カルバン)とやったときも、最後のほうはJZが削られて削られて首相撲で振り回されてましたからね。あの魔裟斗vsJZを観てるから、総合の選手が魔裟斗クラスとK—1ルールでやったらああなっちゃうんだろうなって思いますよ。

—ディフェンスも強い魔裟斗を崩

すのは大変だ、と。
郷野　でもK―1自体が「倒し合え」っていうコンセプトだから、「まず守る」っていうことをやったらイッパツで干されるだろうけど、もし俺が1ラウンドから体力ラッシュをかけてくる相手とやるとしたら、完全に鉄壁のガードに徹しますけどね。もう嵐がすぎ去るまで肉のカーテンですよ（笑）。
――K―1ファイターが〝郷野スタイル〟で闘ってたら、負けてなかった、と（笑）。
郷野　そんなことをやっていたら、試合に使ってもらえなくなるんじゃないかなって思いますけどね。「K―1向きじゃない」っていうことで。
――いま魔裟斗選手が7月に川尻（達也）選手か五味（隆典）選手と試合をするんじゃないかと言われてます。
郷野　川尻も武田選手をKOしてるし、五味くんのパンチも強いと思うけど、この二人に限らず、総合の選手が魔裟斗とやったら、ジャブとローだけでコントロールされちゃっても全然不思議ではないと思いますけどね。

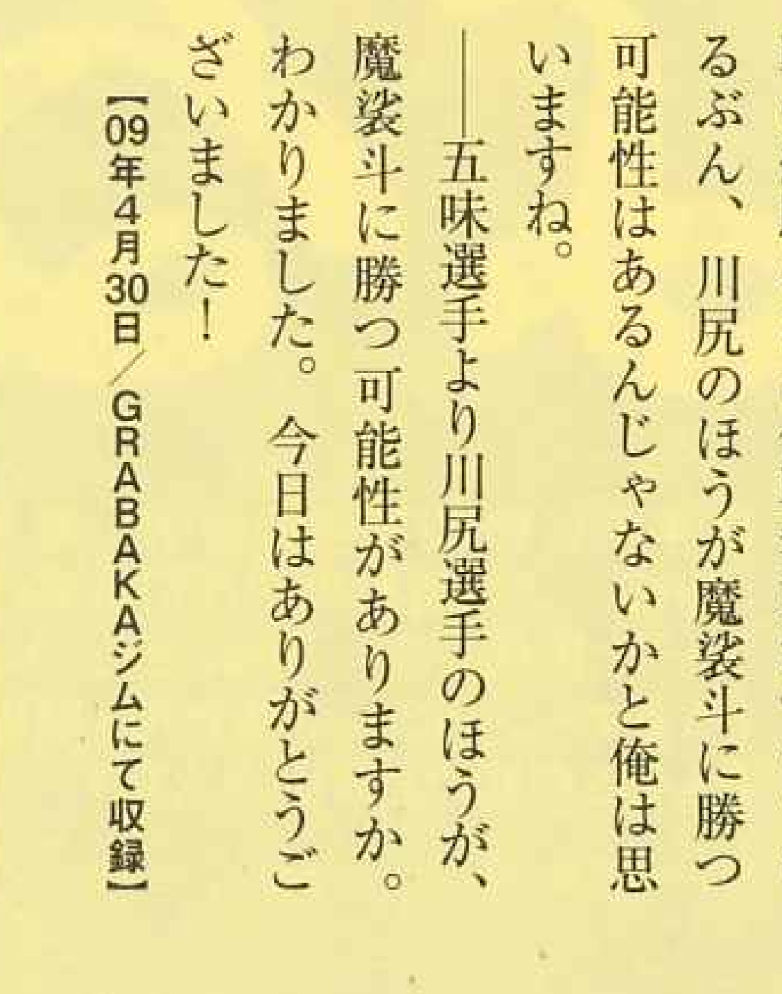
五味君より川尻のほうが魔裟斗に勝つ可能性はあると思いますね


05年に郷野は全日本キックの公式戦3試合に出場。パワーと勢いではなく、技術で本職のキックボクサーを圧倒し、全日本ヘビー級のベルトを腰に巻いた。しかし、3戦目で桜木裕司に逆転負け。戦績は2勝1敗だった。


昨年大晦日の『Dynamite!!』では、アリスター、川尻、ムサシが、それぞれバダ・ハリ、武田、武蔵とK-1ルールで対戦したが、3試合とも総合格闘家が1ラウンドKO勝ちを収める衝撃的な結果となった。

――やはり、まともにやると立ち技の技術差はそれぐらいありますか。
郷野　パンチ一つとっても、日本のトップクラスのボクサーと普通にやり合えるっていうじゃないですか。そこにキックの技術が加わるわけだから、そう簡単にはいかないと思いますけどね。『kamipro』情報ではどっちがやりそうなんですか？　五味くんと川尻と。
――結果次第ですね。二人とも5月に総合の大一番があるじゃないですか。
郷野　ああ、そうか。じゃあ、コンディション面でも圧倒的に総合側が不利で、ますます勝てる確率が低くなっちゃうじゃないですか！　魔裟斗は万全でくるのに。凄い逆ハンデだなぁ。となると、総合側としては1月から試合をしてない俺が行くしかないかぁ（笑）。
――70キロまで減量して出ますか！（笑）。
郷野　うん、もしホントにできるんだったら、70キロまで減量する価値はありますよね。ヘロヘロになって時速200メートルくらいの歩きっぷりになっちゃうかもしれないけど（笑）。魔裟斗っていう世界のトップがどんなもんか、体験してみたいですよね。
――郷野選手だったらどういう闘い方をしますか？
郷野　まともにやり合ったら勝てないから、やっぱり守って守ってチャンスを待ちますね。そんな俺だとせっかくの引退試合を興ざめなものにしてしまいそうだから、やっぱ辞退しておきます（笑）。
――でも、総合格闘家の打撃レベルが全体的に凄く上がってるのも確かですよね。
郷野　そうでしょうね。みんな打撃の練習はしっかりやってるんでしょうね。俺なんか打撃に関しては、総合よりもキックルールのほうがやりやすいぐらいでしたから。
――キックルールのほうがやりやすい？
郷野　普段、練習は打撃と組み技で分けてやっていて、打撃の練習は普通にキックボクシングの練習になっちゃっているから、キックルールのほうが総合より普段の練習に近いんですよね。
――ああ、なるほど。
郷野　それに普段のスパーは16オンスのグローブでやってるから、総合の小さいグローブだと感覚が全然変わっちゃうんですよ。
――ボクシンググローブだとガードもできるし。
郷野　そう。あとはやっぱり、練習で魔裟斗のような強いキックボクサーと練習なんてできないじゃないですか。だから総合の選手が魔裟斗と試合で向かい合ったら、もう結果を張られてるような感じがして入っていけないんじゃないですかねぇ。打ちにいっても当たる気がしない、逆にもらいそうな気がするって感じで。で、その結果を破るには「もういっちゃえ！」って体力と勢いで突っ込んでいくしかなくて、でもそこをジャブやローで挫かれて、ってなるんじゃないかな。
――じゃあ、総合格闘家というフィルターを通じて、あらためて魔裟斗の強さ、底知れなさが見られそうですか。
郷野　そんな気がしますね。ただ、川尻には山田（武士トレーナー）さんがついてますから。山田さんのところの選手が何年か前の大晦日に魔裟斗とやっていますし、そういう魔裟斗戦の経験のある作戦参謀がついているぶん、川尻のほうが魔裟斗に勝つ可能性はあるんじゃないかと俺は思いますね。
――五味選手より川尻選手のほうが、魔裟斗に勝つ可能性がありますか。
わかりました。今日はありがとうございました！

【09年4月30日／GRABAKAジムにて収録】


ごうの・あきひろ■1974年10月7日、東京都出身。96年に修斗でプロデビュー。01年にグラバカへ移籍しパンクラスで活躍し、05年からPRIDEに参戦。06年のウェルター級GPではベスト4の成績を残した。176センチ、77キロ。

——今回K—1特集ということで、か
って『SRS』の司会者を務め、初期

ないかな」ってオファーが来たんだ
よね。その頃はまだ藤原紀香もそん

——そうみたいですね。いま清原さ

——え、何かバッシングでも?

全員が感情移入できる格闘家だった



K-1とダジャレのコラボイラストを初公開!

『SRS』初代司会者マーシーが語る

K-1への異常なる愛

田代まさし

昨年秋に約12年半の歴史に幕を下したフジテレビの格闘技情報番組『SRS』。この番組の初代司会者としてK-1にも深く関わってきたのがマーシーこと田代まさし。『kamipro』へは、約6年ぶりとおひさしブリーフの登場となるマーシーは、ここ数年K-1同様、波瀾万丈な人生を送ってきたのは皆さんもご存知のとおり。そんなマーシーがK-1に対する異常なる愛を告白!

聞き手/阿修羅チョロ　試合撮影/乾晋也　写真協力/K-1

K-1の一番いい時代を間近で観れて俺はスゲー幸せだった

—今回K-1特集ということで、かつて『SRS』の司会者を務め、初期K-1事情にも精通している田代さんに登場いただきました。

田代　おひさしブリーフです！（笑）。

—お、おひさしブリーフです（笑）。

田代　でも、俺もいろいろありながらもK-1はずっと観てきてるけど、ここ数年元気がないよね。ちょっと衰退してきちゃったっていうか。……俺と一緒で（苦笑）。

—そうかもしれませんね（笑）。

田代　まあでも、俺はK-1はいまでも大好きだし、『SRS』って番組を通じて、K-1に関われたってことはいまでも誇りに思ってるからね。

—『SRS』もそうですけど、K-1とテレビというのは凄い密接な関係にあったわけじゃないですか。

田代　お互い相乗効果でK-1もドンドン大きくなっていったし、テレビもスゲー視聴率を獲ってたからね。でも、けっこう『SRS』が始まった頃って、まだ格闘技ってマニアックな位置にあったと思うんですよ。

—そうですね。放送が始まったのは96年の4月なので、K-1が始まって3年目で、PRIDEはまだ誕生していないですからね。

田代　そういう状況を打破したいっていうフジテレビのプロデューサーが、俺が格闘技を凄い好きだっていうのを知ってて「ネームバリューのある田代くんに司会をやってもらえないかな」ってオファーが来たんだよね。その頃はまだ藤原紀香もそんなに人気がある時期ではなかったし。

—K-1とともにビッグになっていった感じですよね。

田代　そうそう。で、二人で『SRS』を始めて、深夜なのに10パーセント以上視聴率を獲ったこともあったし。こんなこと言ったら生意気かもしれないんだけど、そういった部分では、一般層に対してK-1とか格闘技のおもしろさを伝える使者として、自分でも貢献できたんじゃないかなっていう自負はあるよね。

—残念ながら番組自体は08年9月で終了となりましたが、田代さんはいろいろあって01年12月に番組から外れるまでの約5年間、司会として関わってきたわけですからね。

田代　最後は自分が事件を起こして降板させれられたりして、K-1もそうだし、プロデューサーとかにもいろいろ迷惑をかけちゃって申し訳ないと思ってるんだけど。

—プロデューサーというのは、清原（邦夫）さんのことですよね？

田代　そうです。いまは海外に行っちゃったみたいだけど。

—そうみたいですね。いま清原さんはフジテレビのニューヨーク支局に勤務しているということで。

田代　『SRS』の司会ってことで声をかけてくれたのが、その清原さんなんだけど、当時、K-1って自分でお金払って観に行ってたぐらいだから。

—あ、そうなんですか。

田代　旗揚げの頃から好きでずっと観に行ってたんで。そういった部分では「え〜っ、それが仕事にできちゃうんだ」って。こんないい話絶対ねえなと思って二つ返事で「やらしてください」って言ったんだけど。

—当時K-1絡みで思い出に残ってるエピソードって何かあります？

田代　K-1の大会のときって、『SRS』用の解説者席に座って観てたんだけど、俺のコメントについてネットで書かれたことがあるんですよ。



『SRS』を通じてK-1とともにブレイクしたのがマーシーや浅草キッドとともに番組を彩った格闘ビジュアルクイーン。初代の藤原紀香を筆頭に、2代目・畑野浩子、3代目・長谷川京子、4代目・東原亜希、5代目・西山茉希とみんな売れっ子に。これもマーシーのおかげ!?

—え、何かバッシングでも？

田代　いや、「田代が黙ってるときはいい試合で、しゃべってるときはたいした試合じゃない」って書かれたことがあって（笑）。それ見て「スゲェ、見抜かれちゃってるな」って。

—実際にそのとおりだった、と。

田代　そう。俺、ファンだから解説よりも試合のほうが先に気になって。

—ダメじゃないですか！（笑）。

田代　仕事としてはダメなんだけど、いい試合だとどうしても観ちゃう自分がいて。で、おもしろくない試合だと、なんとかつながなきゃとか、みんなを楽しませなきゃって思ってしゃべりが多くなるんだよね。

—そのへんは芸人魂が出てくるんでしょうね。

田代　あとは、番組で関わっちゃうと、どうしてもK-1のいい部分も悪い部分も見えてきちゃうでしょ？

—K-1にかぎらず、深く関わると見たくない場面も目に入ってくることはよくありますよね。

田代　選手や関係者のいろんな素行とかも見えてきちゃうからね。でも、そういうのを含めてK-1の一番いい時代をず〜っと間近で観れて俺はスゲー幸せだった。

—まるでもうK-1は終わっちゃったような言い方ですね（笑）。

田代　いやいや、そういう意味じゃないんだけど（苦笑）。でも、いまのK-1を観てて思うのは日本人が乗れるスターがいないってこと。初期の頃は佐竹（雅昭）も頑張ってたんだけど、そんなには日本人が応援するキャラではなかったでしょ。でも、アンディ・フグという選手は日本人全員が感情移入できる格闘家だったと思うし。俺はK-1で一番印象深い選手はアンディなんだよね。

—ある意味、日本人よりも日本人らしいところもありましたし。

田代　しかもアンディには好敵手もいっぱいいたからね。でも、もう時代的にも才能的にもアンディみたいな選手は二度と現われないだろうなぁ……（しみじみと）。

—なかなか難しいでしょうね。

田代　俺、アンディのスイスの家にも2回行ってるし、アンディの葬式も、俺が二回目の事件を起こしたあとだったんだけど行ってるしね。俺が行ったら迷惑かなって思ったんだけど、俺はアンディの葬式だけは絶対行きたいって思って、死に顔を見に行ってスゲー悲しかったのを覚えてて。あ、そうだ。アンディとの思い出で忘れられないことがある。

—え、なんでしょうか？

田代　アンディってスゲー強く握手するのよ。

—それは驚かせようとして？

田代　いや違うんだよ。一回聞いたことあるの。「なんで、そんなに強く握るの？」って。そしたらアンディは「格闘家はホモが多いんだよ。オレはそう思われたくないから、強く握るんだ」って（笑）。

—そんな理由でしたか（笑）。

田代　「やさしく握って勘違いされるのがイヤでオレは強く握るようにしてるんだ」とも言ってたんだけど、そんとき俺は強く握られて、その男らしさで好きになっちゃったんだよね。逆に（笑）。

—田代さんには逆効果だったわけ

俺にとってK-1の"K"は"館長"とか"和義"の"K"のイメージが大きい

ですね（笑）。

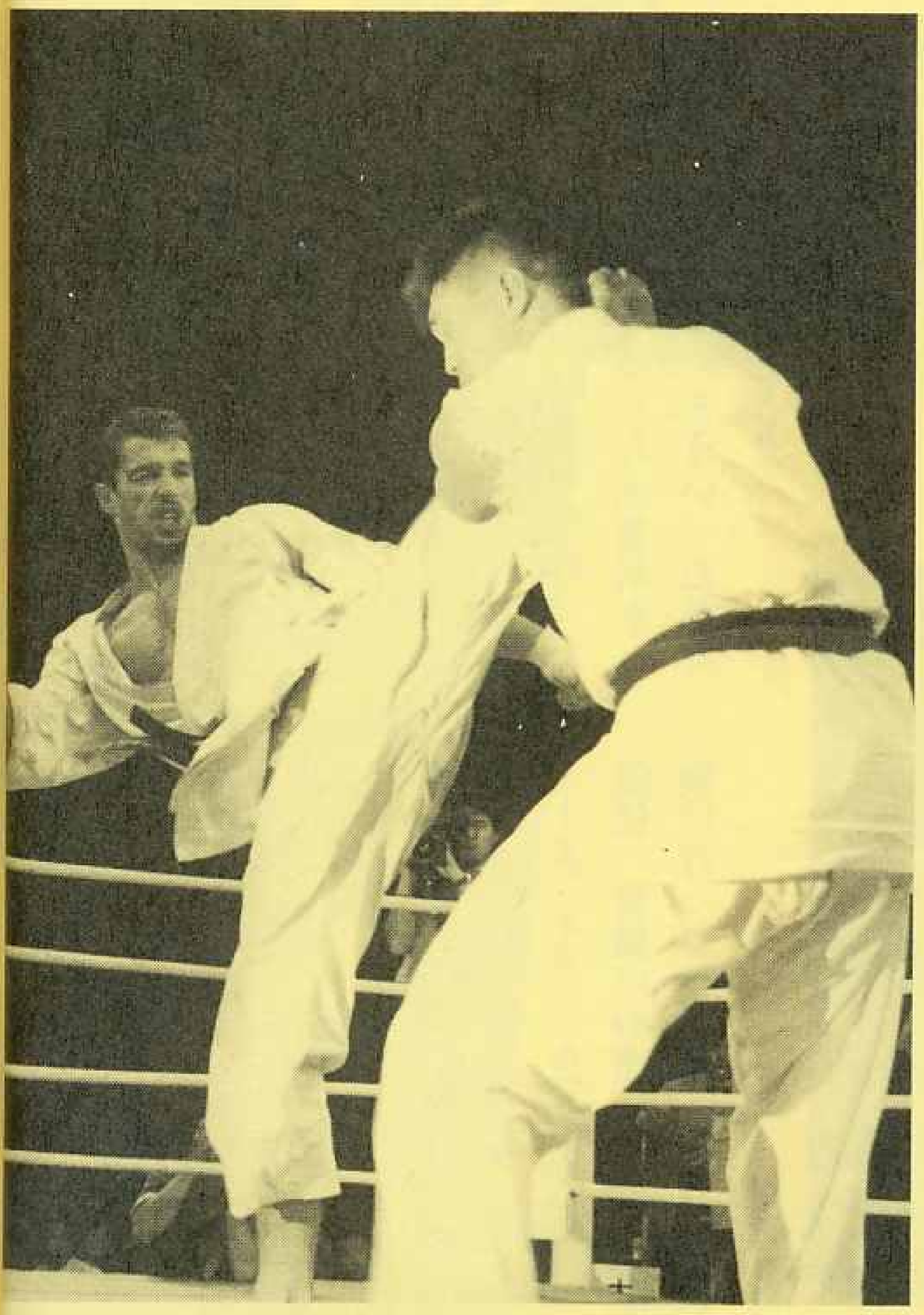
田代　そうそう（笑）。アンディだったら抱かれてもいいなって当時は思っちゃったからね。

——いまのK-1のスター選手といったら魔裟斗さんの名前が挙がると思うんですけど、魔裟斗さんも年内引退を発表しましたしね。

田代　日本人のスターという部分では魔裟斗は凄い選手だと思うよ。しかも、俺みたいに下に落ちた人間からすると、一回ダウン食らっても逆転勝利したりする魔裟斗の試合とかを観ると凄く勇気づけられるし、「魔裟斗みたいに頑張らなきゃ」っていう試合をしてくれるよね。そういった意味では、MAXも魔裟斗がいるかぎりは……っていうのがあったと思うんだけど。どうなっちゃうんだろうね。アンディみたいにガイジンでもいいんだけど、みんなが応援したくなるキャラを持った選手が生まれてこないと厳しいんじゃない？

——数年前にはボブ・サップがK-1にビースト旋風を巻き起こした時期もありましたけど。

田代　いや、サップって見た目もインパクトあるし、話題性って部分では視聴率も獲ってたし、一般の人にもおもしろいと思うんだろうけど、試合自体はどうなのかっていったら、「う〜ん」っていうか。格闘技が好きなコアな人はそんなに乗れなかったと思うし、浅いファンとかでも感情移入はできなかったわけでしょ。



マーシーの一番思い入れの深いK-1ファイターは35歳の若さで亡くなったアンディ・フグ。格闘技以外にもCMやバラエティ番組などタレントとしても活躍したフグとは共演する機会も多かったという。

——感情移入できるキャラではないですよね。

田代　最近だとバダ・ハリはちょっと感情移入できるかなって思って期待してたんだけど。

——田代さんと同じくアウトローの匂いはしますよね。

田代　するね（笑）。彼なんかはリアルなケンカ屋だし、凄く魅力もあるんだけど、やっぱり、アーツやホースト、アンディにはかなわないなって。やっぱ、オーラがない。

——あまりオーラを感じない？

田代　俺は感じない。それに、こないだのバダ・ハリの反則暴走とか観てて思ったのは、谷川（貞治）さんがちょっとダメだなって。

——それはどういう意味でですか？

田代　あのとき石井館長がいたら、あんな裁定はしなかったと思うから。たぶんだけど、「皆さんはこの試合の続きが観たいと思ってるでしょうから、後日、再試合を組みたいと思います！」って、その場で言ってたよなって。過去にもそういう場面を何度も観てきてるしね。

——その試合のときも現場にいたみたいですけど、いまは前面には出てきていないですからね。

田代　やっぱり館長の前面に出てたときのパワーとかカリスマ性って、俺は端から見て凄いなって思ってたし。カードの組み方もそうだし、連れてくる選手もそうだし、石井館長って格闘家というよりもプロモーターとしてのセンスが抜群だなって思って凄く尊敬してたからね。谷川さんも頑張ってるのは凄くわかるし、いろいろと大変だとも思うんだけど、やっぱり、俺にとってK-1の"K"は"館長"というか"和義（教義）"の"K"のイメージが大きいんで。

——そうですか。K-1や『SRS』といえば、藤原紀香さんのイメージもかなりデカいと思うんですけど。

田代　そうだね。俺は『SRS』の前に藤原紀香が『なるほど・ザ・ワールド』のアシスタントをやってるときから知ってて。俺のタイプとは違うんだけど「このコは絶対売れる」って思ってた。そういう霊感みたいなのが凄いあるのよ。工藤静香なんかもそうなんだけど、おニャン子クラブの初期の頃から「このコは売れるな。スゲー光ってる」って思ってたし。俺と一緒に仕事をすると、みんな俺を踏み台にしてビッグになっていくっていう法則があって（笑）。

——そうなんですか（笑）。

田代　藤原紀香も最初は格闘技のことあんま知らなかったけど、やりながら好きになっていったのがファンとかにも伝わっていった感じだよね。

——イベントでも披露してたことがありましたけど、紀香さんと娘さんのエピソードはおもしろいですよね。

田代　そうそう、いろいろあるんだよ。俺が藤原紀香とテレビに出てるのを一緒に観てたら、娘が「あの人嫌い」って言うんで「なんで？」って聞いたら、「パパのこと胸で誘惑しようとしてる」って言いだして（笑）。

——アハハハハ！

田代　そのくせ、娘は自分の胸に詰め物して胸を大きく見せようとしてたんだよね（笑）。

——娘さんも凄いですね。娘さんはいくつぐらいのときの話ですか？

田代　まだ小学校の低学年だったと思うんだけど。

——もうすでに女ですよね（笑）。

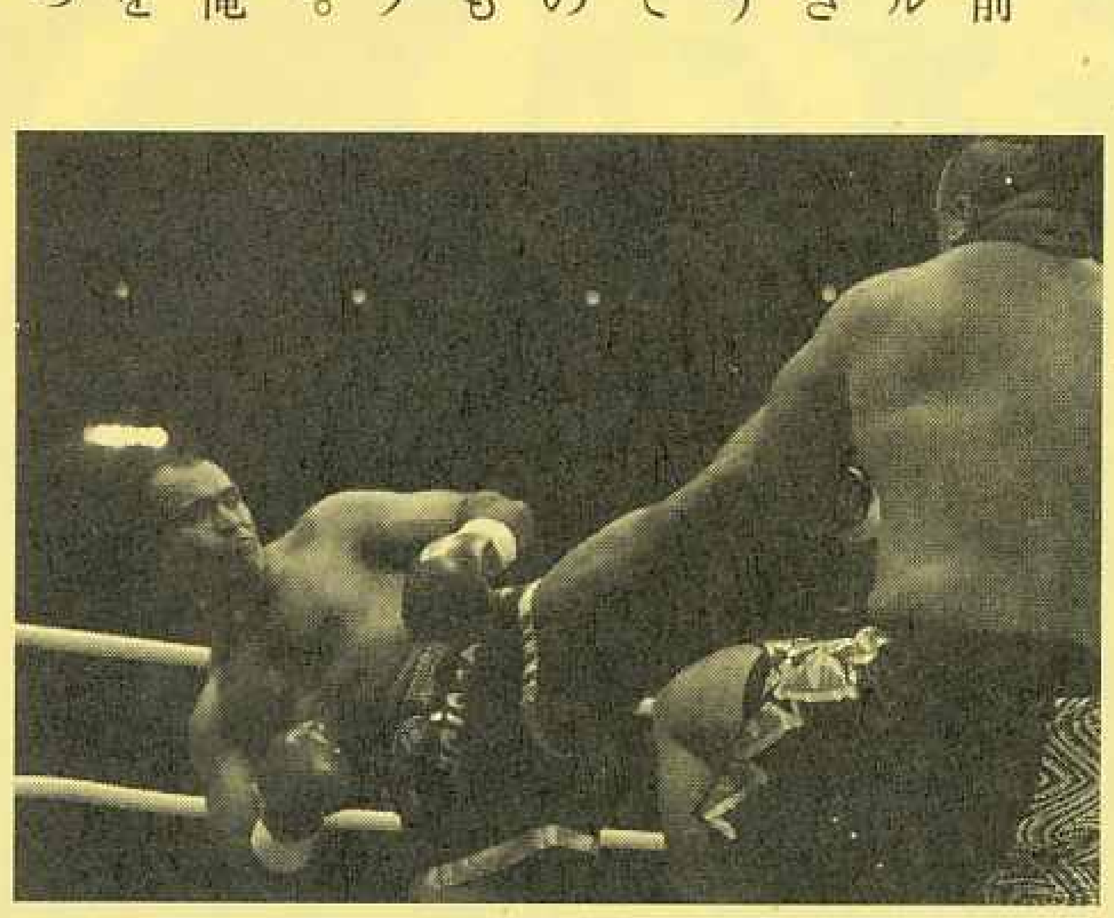
田代　そう。ヤキモチ焼いてんのよ。そのあとにK-1の会場に娘を連れてったことがあって、楽屋で藤原紀香に「これ、ウチの娘」って紹介したら、「こんにちは〜」ってちゃんと挨拶してくれたのよ。で、俺が娘に「キレイなお姉さんでしょう？」って言ったら、娘が「べつにぃ」って本人の目の前で言ったの（笑）。

——それは気まずいですね（笑）。

田代　そんなこと言われて、紀香は持ってたメイク道具をバーンって落としちゃって。俺も「なんてこと言うんだ！」って焦ったんだけど。ヤキモチ焼いてたんだよね、ずっと。

——同じく『SRS』でもよく一緒に仕事をされていた谷川さんについてはどう思われます？　先ほどもチラッと話題に出ましたが。

田代　谷川さんは、石井館長ほどじゃないけど、やっぱりカードの組み方とかも格闘技だけじゃなくプロレスも観てきてる人だからうまいなとも思うし。ただ、石井館長との大きな違いは、館長は格闘家だったわけだけど、谷川さんの場合は俺たちみたいな普通のファンと同じスタンス



マーシーのK-1ベストバウトはフィリォvsバンナ、フィリォvsホーストと2試合ともフィリォ絡み。いつの試合かは各自調査で押忍!!

もあって、自分が闘えないからリングに自分の思いを投影させるタイプの人でしょ。そこが館長とは違うところっていうか。それで、ファンの支持イコール、視聴率みたいなところが前面に出てきてからちょっとどうかなって。凄い人だっていうのはわかるんだけど、館長ほどのカリスマ性はないと思うんだよね。

——確かにカリスマ性はないですね（笑）。関係者受けは凄くいいんですけど、ファンの評価はあまり芳しくないところもありますし。

田代　残念なことにね。さっきのサップじゃないけど、一時期、谷川さんはモンスター路線っていってキワモノというか、キャラクターを重視したときがあったじゃない？

——ありましたね。

田代　それまでのK—1って、ガチの真剣勝負っていうのがウリだったのが、ちょっと悪い言い方すると『ハッスル』的な要素を入れちゃったっていうか。そこが谷川さんのプロレスも通ってきた人の作り方っていうのかな。K—1にそれを持ってきちゃダメだって個人的には思ったし。

——谷川さんに対するファンからの批判的な声もありますけど、当時はモンスター路線でもかなり視聴率を獲ってたんですよね。

田代　そういう意味では、その作戦が成功しちゃうから、谷川さんも「これでいいんだ」って思っちゃったところがK—1を衰退させる原因になっていっちゃったんだなと俺は読んでたよ。……まあ、よけいな心配をしてたおかげで、その後、俺自身が衰退しちゃったんだけどね（笑）。

——また、自虐的な（笑）。でも、田代さんは何度か塀の中に入ってK—1を観られない状況のときもけっこう長くあったわけですよね？

田代　だから、そのときスゲー気になって。新聞とかも入らなかった時期があったんで、看守の人に試合結果とか聞いたことあるよ。「昨日のK—1、どっち勝ちました？」って。

——あ、そうなんですか（笑）。

田代　そうやって結果を教えてもらったり、刑務所に入ったときは格闘技系の雑誌を人に手紙で頼んで入れてもらって毎月読んでたし。カール・ゴッチが死んだとかも雑誌で知ったし、刑務所の中でもずっと格闘技はリスペクトしてたね。これは余談なんだけど、刑務所の中にいる人たちって、格闘技が好きな人たちが多いからね。で、あまりにも人気があるから、刑務所側が一回、大晦日に『Dynamite!!』に見せてくれたことがあったみたいで。

——あ、そうなんですか。

田代　そしたら、凄いわかりやすい図式なんだけど、翌日から囚人同士のケンカが多発して、次の年から『紅白歌合戦』に変えられちゃって、俺は観れなくてスゲー悔しい思いをしたんだけどね。でも、K—1にかぎらず、いまって格闘技業界全般が元気がないじゃない？

——元気はないですよね。

田代　俺も実際、刑務所から出てきて仕事がなかったりするし。世界的な不況っていうのもあって一般の人もそうだと思うんだけど、どの業界も衰退していってるよね。K—1が視聴率獲って、PRIDEが盛り上がってた全盛期ではないんだけど、そのためにどうしたらいいかって考えちゃうと、理想論になっちゃうけど、スター選手が生まれないと。

——結局、スター待望論になってしまいますね。

田代　力道山、タイガーマスク、沢村忠……、ああいう、みんなが感情移入できるヒーローが出てこないと救われないっていうか。

——力道山やタイガーマスク、沢村忠のブームっていうのも、やっぱりテレビの力が大きかったわけで。

田代　そうそう。いまはテレビ業界



「カリスマ性もあるしプロモーターとしてのセンスが抜群だった」と石井元館長をリスペクトするマーシー。フグの葬式以来、顔を合わせていないというマーシーだが、再び顔を合わせる日は来るのか？

K-1とダジャレのコラボ!?
マーシー画伯のイラスト公開!!



最初に紹介するのはフランシスコ・フィリォと悪そうな仲間が睨みを効かせているイラスト、作品名はフランシスコ・不良。ろくでなしBLUESチックです。



続いて披露してくれたのが、ディズニーもビックリのベルナルドとドナルドダックの融合イラスト、作品名はマイク・ベルナルド・ダック。ダジャレはともかく絵はメチャうまいです！



これはK-1とも関わりのあったボクシングの有名なプロモーター、ドン・キングとドンキーコングが一体化した作品。タイトルはドン・キングコング。まさにミニにタコ級の一品です！



こちらは武田幸三の試合に感動して描いたというダジャレ抜きの本格派イラスト。ちなみに『SRS』でこのイラストを紹介すると本人から「ありがとうございます」と礼を言われたという。



最後に紹介するのは、ダジャレではないがヒクソンっぽいガウンを着た格闘家のイメージイラスト。このほかにも伝説のムエタイ戦士などド直球なイラストも多数。個展開催も近いか!?

K−1も俺も、両方とも復活できればいいなぁと思うよね

も落ち込んじゃってるけど、凄いスター選手が出てきて、みんなが騒ぎ出せばテレビだって絶対ほっとかないからね。観たいものを提供するっていうのがテレビだから。お笑いなんかもそうだしね。

――確かにここ数年、テレビではお笑い番組が凄く多いですしね。

田代　ホントそうだよね。たいして名前を知らない人を出してきて、そこそこおもしろいネタをやれば、メチャメチャ高い視聴率は獲れないけど、それなりに数字を獲れるからいいやって考え。ホントにおもしろい人たちはやっぱ値段も高いわけだからテレビではあんまり観れなくなってきてる。テレビ局もあんまり制作費を出せなくなってきてるからね。

――みのもんたさんとか高額のギャラのタレントは使いづらくなってるっていいますからね。

田代　ホントにおもしろい人を使うより、中身は多少薄くなっても若手でちょっとおもしろいヤツを使ったほうが効率がいいやって考えでしょ。テレビを観てるとそういうとこが見えちゃって。それは長くは続かないと思うけどな。

――そうなったら、「俺の出番だ！」っていう思いはないんですか？

田代　いまは、いろんな意味でリハビリ中って言ってるんだけど、声をかけてくれるところがあったらね。ギャラなんかは全然安いからさ（笑）。

――いまなら若手価格だ、と（笑）。

田代　そうそう（笑）。で、今日はね、K−1特集っていうんで、俺がどのぐらいK−1をリスペクトしてたかっていう証拠を持ってきたんだよね。

――えっ、なんですか、突然？

田代　俺って凄くダジャレが好きなんですよ。

――よく存じ上げております（笑）。

田代　ダジャレの絵もずっと描いてて。ダジャレって誰も絵で表現しないじゃない？　それにダジャレって一瞬で消えていくものじゃん。

――基本的には一発芸ですよね。

田代　でも、絵にするとそれが一生残っていくわけ。なんでこんなくだらないことのために俺は一生懸命、絵を描いてるんだっていうのが凄い好きで。で、K−1も凄い好きだったから、K−1とダジャレをミックスさせて表現したのがこの絵なんだよね……（と言って、デカいバッグの中からイラストを数点取り出す）。

――K−1とダジャレのコラボ！　まさに「K−1（笑）」の世界ですね。

田代　（無視して）え〜と、まず最初は、サム・グレコがグリコの格好しているサム・グリコ。

――……す、凄い！

田代　もっと凄いのもあるよ。フランシスコ・フィリォが仲間と一緒に不良になってるフランシスコ・不良。

――ダジャレはともかく、絵はメチャクチャうまいですね。

田代　あと、マイク・ベルナルド・ダッグっていうのも描いたことあるんだけど……（次から次へとイラストを披露するマーシー）。

――なんだかわからないですけど、田代さんのK−1に対する異常な愛はヒシヒシと伝わってきました！

田代　でしょ。ほかにもPRIDEやプロレスとか、いろんなジャンルのイラストもあるんだけどね。一番思い入れがあるのはK−1だけど、PRIDEや極真も大好きだから。

――個展とかやったほうがいいんじゃないですか？

田代　どっかで本にするのか個展を開くのか、なんかしら可能性は残ってるかなって。俺の中では秘密兵器だと思ってるんだけどね。

――マーシー画伯としての活躍も期待してます。ちなみに、K−1にかぎらず格闘技関係の仕事もやっていきたいっていう願望はあるんですか？

田代　話があれば全然やりたいけど、いろいろと難しいんじゃないかな？　べつに俺としては、仕事とは関係なしに石井館長や谷川さんから「田代くん、元気？」って言ってもらえたら凄く嬉しいし。それだけで、よかったなって思えるし。

――石井館長とは、ここ最近どこかで会われたりしたんですか？

田代　いや、会ってない。一回目の事件を起こしたあとにアンディの葬式で会って謝りに行ったきりで。そのときはもう『SRS』も降板したあとだったんだけど、「ご迷惑おかけしました！」って頭を下げたら、石井館長は俺のことを抱きしめて「心配するな。大丈夫だよ」って言ってくれて。俺、スゲー感動して涙出そうになったんだよね。

――そんなことがありましたか。

田代　「心配しなくても、戻ってこれるよ」って。あれはグッときたなぁ……（しみじみと）。まあ、そのあとで館長があんな目に遭っちゃうんだけどね（苦笑）。

――人生いろいろですねぇ。『kamipro』としても逮捕歴のあるサスケさんとの対談やダジャレイラストコーナーとかいろいろ企画したいと思ってますので、またよろしくお願いします！

田代　こちらこそ、お願いしますよ。ちょっと前に、世間から許してもらうにはどんな方法があるかって考えたときに、身体を鍛えてガチンコの試合に俺が出たら、みんな許してくれるんじゃないかなって思って。

――え、ガチンコデビューですか！

田代　一瞬考えたんだけど、でも、この歳でガチンコやったら死んじゃうかもしれないじゃない？

――可能性は充分ありますよね（笑）。たしか、いまは52歳でしたっけ？

田代　そう。だから、ガチンコは無理でも『ハッスル』ぐらいだったらなんとかなるかなと思ったりして。

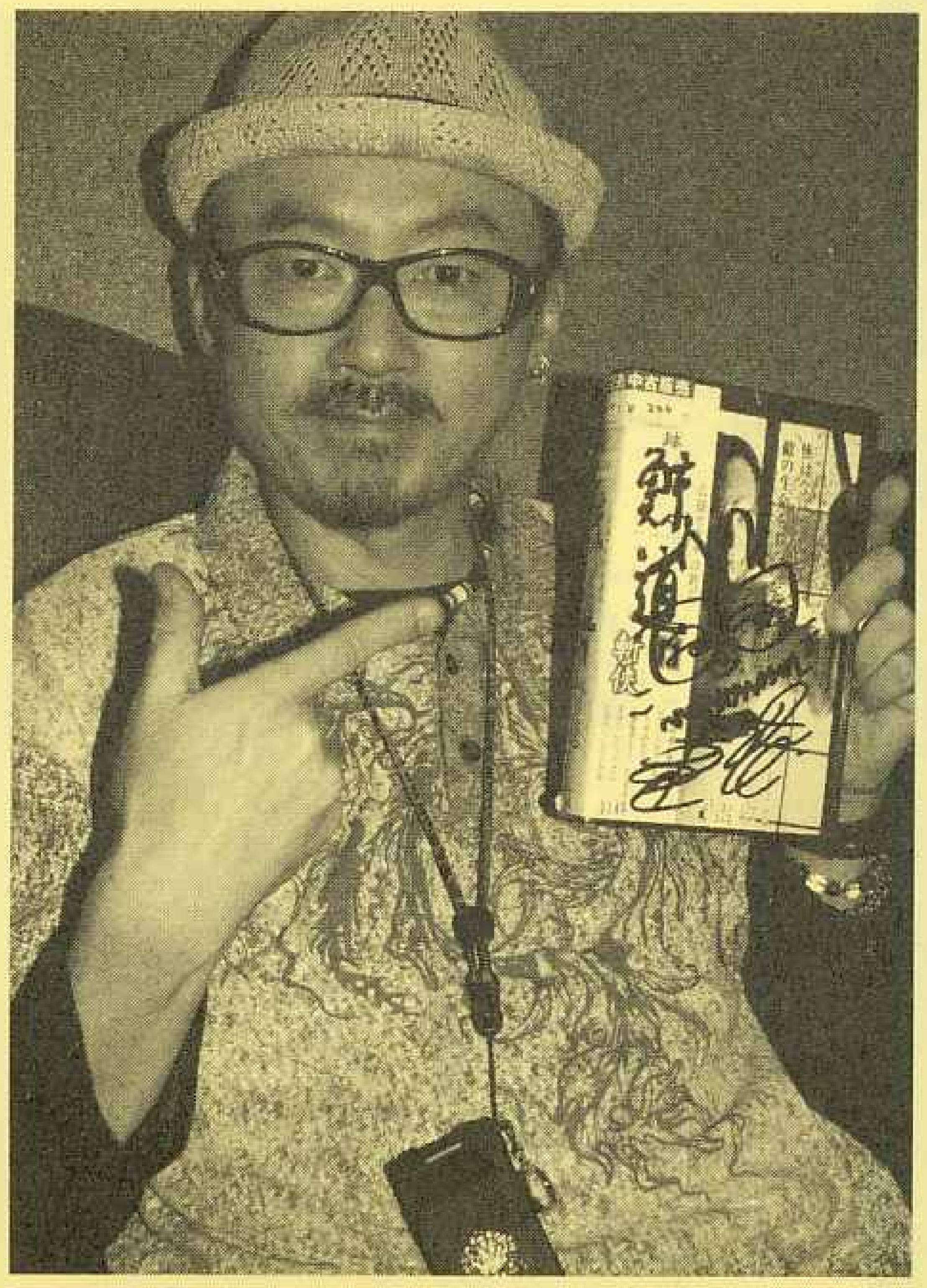
――それはいいかもしれないですね。

田代　吉田豪ちゃんに冗談でその話をしたら、「じゃあ、『ハッスル』に問い合わせてみますよ」ってホントに連絡する勢いだったんで、「やめて、やめて」って言ったんだけど（笑）。

――泰葉さんに続いて、逆境ファイターとして『ハッスル』には参戦してもらいたいですね。それか前田日明さんの『アウトサイダー』に出るっていうのもありかもしれませんけど。

田代　それも言われた（笑）。今回はK−1特集ってことだけど、全盛期に比べるとK−1も衰退したって部分は俺と一緒だと思うんで、両方とも復活できればいいなぁとは思うよね。……「一緒にすんな！」とかツッコまれそうだけど（笑）。

【09年4月29日／都内・某所にて収録】



たしろ・まさし■本名・田代政。1956年8月31日、東京都出身。73年、鈴木雅之らとシャネルズ（のちのラッツ＆スター）を結成。お笑いを中心にタレントとして活躍するも、数度にわたるスキャンダルを起こし塀の中へ。08年6月に出所してからは雑誌連載やトークイベント等を中心に活躍中。マーシーが手にするサイン入りビデオ（マーシー監督作『実録・鯨道』）を1名にプレゼント。宛先は143ページ参照！
田代まさし公式サイト→http://www.tashiromasashi.com/



原タコヤキ君presents 『mimipro』



カリスマ司会者の原タコヤキ君が毎週多彩なゲストを迎えてお届けするポッドキャスティング番組。ドッキリもあるよ!?

試合結果



注目の試合、重要な大会は細かくお届けしています。写真はもちろん各試合の短評も充実! 試合後のコメントもここで読もう!

ニュース



カード発表の記者会見や衝撃的な発表など記者会見の内容をいち早くお届け! また、会見内容もできるだけ詳しくお伝えします!

最新号情報

次号の表紙は? 内容は? そんな疑問にいち早くお答えします! 雑誌『kamipro』および書籍kamipro booksシリーズの発売情報はこちらで!



このほかにもインタビューや読者プレゼントなど企画満載!

紙

プロレス&MMAのニュースサイト

kamipro.com

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

カミプロドットコム

無料です!

レッツ毎日アクセス http://www.kamipro.com/

なぜK-1(正道会館)は『週刊プロレス』で
大きく取りあげられていたのか!?



K-1人気が落ちたのは石井元館長が最後まで僕の面倒を見なかったからですよおおお!

“おじいちゃん”のうらみ節サク裂!!

元『週刊プロレス』編集長 現・葛飾区在住

ターザン山本!

〜石井館長ごっつぁん伝説〜

元祖・プロ格闘技の真実
ザ・K-1

90年代前半、UWF系のファンを中心としたプロレスファンを大量に動員して、人気を得ていった正道会館関係の格闘イベント。それらをプロレス雑誌にもかかわらず、当初から大きく取りあげていたのが、ご存知、ターザン山本時代の『週刊プロレス』。あのK-1と『週プロ』の蜜月の裏にはいったい何があったのか? お暇な方は読んでみてください。

聞き手 堀江ガンツ 写真協力 K-1

石井館長ほど超一流の自作自演ができる人はいませんよおお！

―山本さん、今日はちゃぶ台をひっくり返さないでくださいよ（笑）。

ターザン　今日はひっくり返さないよ。でも、もうあの店は行けないな……。

―『ターザンカフェ』の日記によると、昨日、一緒に飲みに行った人の発言にキレて、ちゃぶ台をひっくり返して大暴れしたそうですけど、いったい何があったんですか？

ターザン　いやあ、昨日は（葛飾区）立石の『ときわ』という店に元「シネマイッキ塾」の塾生3人と飲みに行ったわけですよ。そこでキレたんだよね。

―彼らがターザン山本の触れてはならない部分に触れたんですか？

ターザン　いや、ターザン山本！の非公式サイトってあるじゃない？

―ああ、『ターザン山本！　非公式ファンクラブ』ですね。

ターザン　そこで俺の女装した写真を勝手に載せたりしてるわけよ。

―昔、山本さんが風俗雑誌でスッポンポンになったり、女性用下着を着けたり、化粧したりした写真が、大量にアップされてるんですよね（笑）。

ターザン　あれをやられるとさ、いま検索の時代でしょ？　僕がいろんな社長とか女性と会ったりして、その人たちが家に帰ってあらためて「ターザン山本！」を検索したら出てくるじゃない。

―バッチリとトップに出てきたりしますよね（笑）。

ターザン　あの被害ってもの凄く大きいんだよ。だってあれをテレビ局やラジオ局の人たち、それから一般人の女性が見たら引くよ。俺もそれに気づいて、友人に「潰してくれ」って頼んで潰したんですよ。

―あ、山本さんが潰しましたか！

ターザン　そしたら、その一緒に飲みに行った人が「あんなサイトを潰すなんて、しょっぱい」と言ったから、頭にきたわけよ！　ネットというのは匿名社会じゃないんだよ。誰がやったか全部わかるんですよ！　もう頭にきて、暴れてそのまま帰ってやったよ！

―結局、無銭飲食（笑）。

ターザン　残った彼らは普段の倍の値段取られたって聞いたけどね。倍っていっても4500円だけど。

―また、異常に安い店に行ってますね（笑）。では、今日は山本さんが触れてほしくない話ではなく、触れてほしい過去の栄光時代のお話をうかがおうと思います。

ターザン　もはや俺には過去も栄光もないよ！



K-1グランプリ誕生以前、92年3月に行なわれた、正道会館主催の『格闘技オリンピック』が、なんと『週刊プロレス』の表紙をゲット。プロレスと格闘技の人気逆転現象は、もうこの頃からスタートし始めていたことがわかる。

―過去の栄光しかないような気もしますが……。今回はK―1の特集なんですけど、山本さんは『週刊プロレス』編集長時代、早くからK―1というか正道会館を大きく載せてましたよね。あれはやっぱり石井（元）館長との関係が深く関わっていたわけですか？

ターザン　そうだねえ。あれは館長のほうから僕に近づいてきたんですよ。正道会館が東京に進出してくる頃、僕は『週プロ』の編集長だったから、絶大な影響力を持っていたんだよね。で、館長は自分が手がけた正道空手をなんとか世の中にアピールしたいっていう、もの凄い願望と欲求と執念と情熱と情念が働いていたんだけど、それをアピールするにも、当時は格闘技マスコミの存在感が希薄だったわけよ。

―地上波のテレビなんてもちろんないし、雑誌も『フルコンタクト空手』とか、きわめてマニアックなものだけでしたよね。

ターザン　もう空手雑誌なんてさ、実際に空手をやっている人だけが見てるミクロの世界でしょ。世間にアピールするには、まるで役に立たないわけよ！

―そこで当時、影響力があり、発行部数も多かった『週プロ』を押さえにかかった、と。

ターザン　うん、そこでプロレス雑誌にK―1が載ったら一番いいんじゃないかと考えた石井館長は頭いいよね。さすが目ざといというかさ。それで僕に近づいてきたわけですよ。で、近づかれたら、俺弱いじゃない。

―ホイホイ乗りますよね（笑）。

ターザン　普通、プロレス雑誌の編集長なら、そういう人が近づいてきても、業界的視点に立って新日本や全日本というプロレス団体のことを考えて、断るじゃない。石井館長なんて、もう見るからに日本マット界制覇の野望を持ってるんだから、そういう人が来たら脅威に感じるし、ヤバいと思うよね。

―なんで、ヤバいとわかっていながら話を聞いたんですか？

ターザン　僕は〝なんでもあり〟の人間だから、おもしろければいいじゃないかと思って。あと石井館長は凄く頭のいいスマートな人だっていうのを感じたんだよね。この人はこれから絶対に伸びていくなという予感もしたし。また石井館長がうまいわけですよ。「プロレスの興行とかで、成功してるいろんなものを知りたいんで、教えてください」って下手に出てくるわけですよ。

―うまいですねえ。

ターザン　そしたらまた俺は調子に乗るわけですよ、「エンターテインメントとしての興行とはこういうもんです」とか言ってさ。

―上から物事を教えるのが大好きですからね、山本さんは。

ターザン　一揆塾生と違って、石井館長はちゃんとした地位があるわけでしょ。その人が下からくるから、それであっさりプライドをくすぐられるわけですよ。でも、ホントは石井館長はもう興行について自分なりにきっちりと研究してて、べつにあえて僕に聞かなくてもそんなことはわかってるわけですよ。それなのに、なぜか「山本さん、教えてください！」って言ってくる。それでこっちは気持ちよくさせられたんだよね。

―なるほど。人の心をつかむ術を知ってるんですね。

ターザン　そう！　あの人はさ、非常に物事のポイントを心得ているというか、口説きがうまいというか、殺し文句が抜群なわけよ。もうとっくに自分の中では答えが出てるのに、僕の意見を参考にしてるふりしてさ。あれはもう全部、館長の自作自演ですよぉぉぉ！　あの人ほど、超一流の自作自演の人はいないよ！

―石井☆自演乙☆和義って感じですか（笑）。で、館長が相談に来るときは、高いお店とかが用意されてるんですか？

ターザン　いや、ベースボール・マガジン社の近くにある『喫茶室ルノアール』ですよ。

―いい食事をしながらとかじゃないんですか？

ターザン　違う。相談事のときは、館長がわざわざ水道橋まで来るから、編集部近くの喫茶店で話すわけですよ。でも、そのあとしばらくす

石井館長には銀座の一流クラブや温泉旅行まで行かせてもらったよ

ると、相談と関係ないときにいろんなところに連れていってくれるんだよね。銀座で一流のクラブやスキヤキとかステーキのうまいとこ連れていってもらったり。あるときなんか、「疲れてるでしょ、温泉行きましょう」って、二人で新幹線に乗って熱海まで行ってきましたよ。

――石井館長とターザン山本が二人で温泉旅行！（笑）。

ターザン　温泉で一泊して。もの凄い大きなスイートルームで食事して、夜は女の人が肩や背中や腰をマッサージしてくれるじゃない。もういたれりつくせりですよ！

――凄いですねえ。

ターザン　そういうさ、これと思った人間、力のある人間、自分が利用できる人間には徹底的にやるんじゃないの。だから僕も嬉しいよね。普段は行ったことない別世界が見れるわけじゃない。「えーっ、銀座のおネエちゃんすげえな！」みたいな。

――自腹でなんていったらお金数えちゃいますもんね。

ターザン　自腹なんてできませんよ！　座っただけで5万円とかさ、そんなのどうやって行くんだよ！　石井館長の攻勢はそれだけじゃないよ。僕はあの頃、プロレス関係のいろんなテレビ番組出てたでしょ？　だから「テレビ番組用の洒落た服を作ってあげる」っていうんで、わざわざ大阪から仕立屋さんが僕の寸法を計りに来て、編集部で寸法計ってるんですよ。

――編集部でやってるんですか（笑）。まあ、オーダーメイドで、わざわざ大阪からっていうのがポイントなんでしょうね。

ターザン　そう！　館長が行きつけのオーダーメイド屋の親父さんを呼んできて、それをベースボール・マガジン社で堂々とやってるんだよ！

――見るからに買収工作ですね、それは（笑）。

ターザン　100パーセント賄賂ですよ！　でも俺、賄賂はある部分、その人の好意だと思ってるんですよ。人の好意を無視したら野暮になるでしょ。

――また都合のいい解釈を（笑）。

ターザン　いいじゃない。俺のことを思ってやってくれてるんだから。それにお金をもらったわけじゃないしね。僕はお金はもらったことないから。

――え、そうなんですか？

ターザン　お金はもらったことありませんよ。服だったらいいじゃない。まあ、厳密に言えばいけないのかもわかんないよ。でもそんな難しいこと言ってもしょうがないじゃん、世の中。

――あとケータイももらったんでしたっけ？

ターザン　そうですよ。まだケータイが普及してない時代に、こんな真っ黒い重たいケータイを持って「これ使ってください」って来たわけですよ。「なんのために使うんですか？」と言ったら、「いつどんなときでも山本さんにホットラインを作るため」って、またそんな殺し文句を言うんだよねえ。

――そんなの編集部に電話したらいつでもつながるじゃないですか（笑）。

ターザン　ねえ。だから僕のケータイ通話料は、ずっとK-1が払ってたんですよ。

――山本さんの個人的な通話料まで負担してましたか。

ターザン　『週プロ』を辞めたあとも使ってたからね。

――図々しいですねぇ（笑）。

ターザン　でも、『週プロ』辞めて何年かしてから、K-1の事務所の人が「あの電話返してくれ」って言ってきたんだよね。そのとき「石井館長はしょっぱい」って思ったね。

――というか、返すのはあたりまえですよ！（笑）

ターザン　（無視して）好意としてケータイを渡したんだったら、僕がどんなに落ちぶれようとも、死ぬまでそれを続けるべきだよ。要するにさ、あれを返してくれということは、もう僕は役に立たないってことでしょ？

――1万パーセント、そのとおりです。ボクが館長ならもっと早く返してもらってますけど（笑）。

ターザン　そうすると、役に立つときだけ利用したことになるじゃない。そしたら石井館長の価値が落ちるじゃない。

――べつに落ちませんよ（笑）

ターザン　俺の中では落ちるんですよぉぉぉぉ!!　ある人なんか、僕にお中元でホテルの宿泊券を10万円分送ってきたけど、『週プロ』辞めたらもうないもん。

――でも、山本さんの全盛期には会社の資本金まで出してくれたんですよね？　けっこう有名な話ですけど。

ターザン　いや、あのときは「山本さんはもう会社の一員という立場じゃない。これから自分の事業を興したほうがいい」って言ってきたわけですよ。何かと思ったら、紙袋に100万円の束が10個あるんですよ。

――1000万円分の札束ですか！

ターザン　「な、なんですか、これ？」って言ったら、「これで株式会社を興してください」って。俺はそのときさ、何もわかってなかったんだよね。そこでベースボール・マガジン社に見切りつけてさっさと独立すればよかったわけ。でも、俺はやっぱり編集バカ、プロレスバカだったんですよ。ビジネスマンになりきれないんだよね。館長のメッセージは「ベースボール・マガジン社で仕事しながら別個に会社持ってやればいいよ」ってことだったんだよね。でも、残念ながら僕はそれがわからなかった。それで1000万もらって帰り、カミさんに相談したら、カミさんが知らないあいだに会社作ってたの。

――なぜか勝手に（笑）。

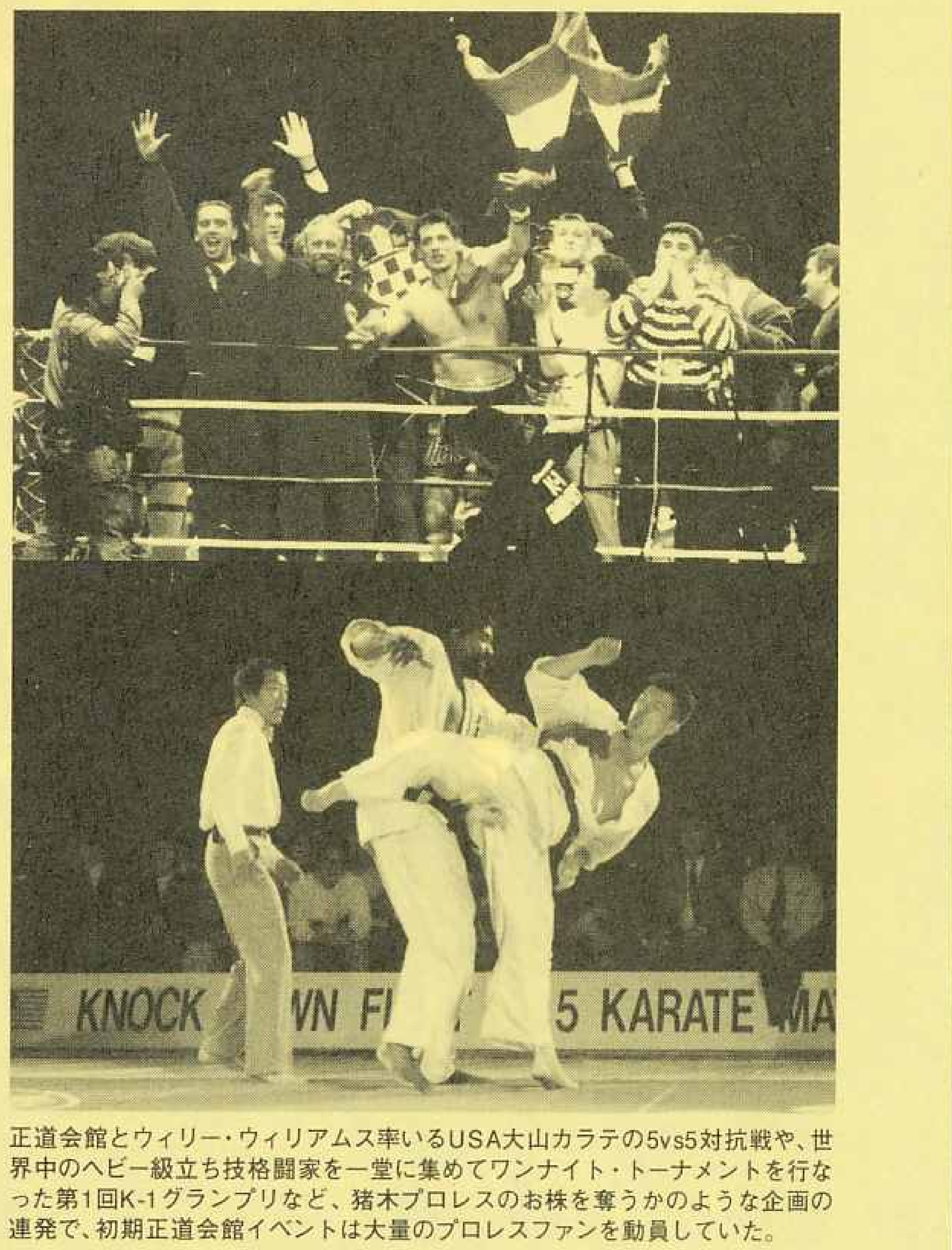
ターザン　その会社はいまどうなったかわからないし、登記したあともちろん館長に1000万は返したらしいけどね。

――山本さんはその1000万を元に何をしようとしてたんですか？

ターザン　俺？　1000万円持って競馬場行って、1億円にしてやろうと思ってたの。

――ダメだこりゃ（笑）。でも、ポンッと1000万円のゲンナマで持ってくるところが館長の凄いところですね。

ターザン　これが館長の凄さだよ。僕はね、いま思ってることがあるわけ。人と付き合うなら、お金がある



正道会館とウィリー・ウィリアムス率いるUSA大山カラテの5vs5対抗戦や、世界中のヘビー級立ち技格闘家を一堂に集めてワンナイト・トーナメントを行なった第1回K-1グランプリなど、猪木プロレスのお株を奪うかのような企画の連発で、初期正道会館イベントは大量のプロレスファンを動員していた。

人、おもしろい人、若くて見込みがある人、才能がある人、かわいげがある人としか付き合っちゃいけないって。もう僕はそういう人しか付き合わないことにした(キッパリ)。館長は金はあるし、おもしろいし、見込みも才能もあって、全部揃ってるわけですよ。ああいう人と付き合いたいねえ(しみじみと)。

―ちなみに最近、山本さんが付き合ってる人たちは、どういう人たちなんですか?

ターザン え〜と、金がない連中、見込みのない連中ばっかりだよ!(笑)。

―ダハハハ! 館長と正反対(笑)。

ターザン まあ、これは冗談だけど。みんな金がないのは確かだからね。一番大事な最初の条件がないんだもん。だからといって、かわいげがあったり、おもしろいかって言ったら、そういうのもとりたててない。見込みがあるヤツもあまりいないもんね。

―ちゃぶ台をひっくり返したくなる人ばかりですか(笑)。

ターザン やっぱり館長みたいな人と付き合いたいよお……。お金がある人。僕は相談されれば答える言葉を持ってるじゃない。アイデア、発想、企画、さらに観客論とかエンターテインメント論とか、そういう理論を全部持ってるわけですよ。相談されたら、それらを全部提供できるのに、誰も来ないもんなあ……。もうみんな僕のことを「終わった」とか「おじいちゃん」と思ってるんだよね(しみじみと)。

―「おじいちゃん」ですか。

ターザン ネット上では(呼び名が)「おじいちゃん」だもんね……。

やっぱり石井館長みたいなお金と才能がある人と付き合いたいよ……

―ところで、山本さんは館長とはいつ以来、会ってないんですか?

ターザン もう思い出せないほど長いこと会ってないよ。あ、今年の2月20日、猪木さんの誕生日会で猪木酒場で会った。

―へえ、猪木さんの誕生生会に館長



02年の『Dynamite!!』国立競技場大会で、ターザンはエリオ・グレイシーを表彰するプレゼンを担当し、リング上でグレイシー柔術の父にターザンバッヂをプレゼント。あ〜あ。

が来てたんですか。そのときちょっと話したりもしたんですか?

ターザン チョコッと話しただけ。

―挨拶程度。

ターザン うん。

―まあ、あらためて振り返ると、山本さんも館長もここ10年でいろんなことがありましたね。

ターザン 1996年7月に『週プロ』を辞めた時点で、僕の運命は変わったんだよ。あの時点で僕はプロレス界から完璧に葬られたわけですよ。あれ以来、島流しに遭って、幽閉生活を送ってるわけ。そうこうしてるうちに、プロレス界はダメになったわけでしょ? 俺からしたらざまあみろだよ!

―でも、山本さんは『SRS・DX』に深く関わってたじゃないですか。



ターザンが雇われ編集長を務めていた雑誌『SRS・DX』。K−1系を中心に扱う雑誌だったが、その末期には暴走、迷走が目立ち、このようなK-1とまるで関係のない表紙にもなっていた 。あ〜あ。

か。あの頃は館長との交流はそんなになかったんですか?

ターザン あのときはもう谷川(貞治)と柳沢(忠之)が石井館長のブレーンというか、あの二人が〝チーム石井〟みたいなかたちでやってたじゃない。だから僕は結局のところ何もできないわけですよ。

―それで、谷川さんや柳沢さんは「雑誌やってる暇ないから、山本さん雑誌お願いね」って感じだったわけですか?

ターザン そうそうそう。でも、僕は雑誌を作るにしても他人に言われたとおりにやったらダメなわけですよ。あれはK−1を応援するという か、そういう雑誌じゃない? だから書きたいこと、やりたいことができないじゃない。だから人から言われたとおりにやるっていうことは、僕にとって一番ダメなことなんだよね。見事に飼い殺しにされたから。

―それがわかっていながら引き受けたわけですか?

ターザン うん。そのとき谷川が月50万円くれたから、50万円に目がくらんでやったわけよ。

―また、すぐ金になびきますね(笑)。まあ、50万円は大金ですけど。

ターザン 月50万円は目がくらみますよ! それでまた俺が浮かれてさ、『アリとキリギリス』のキリギリスになって、ホワーッとなってさ、またしてもお金と貴重な時間を失なってしまったわけです。

―その繰り返しですね(笑)。

ターザン でも谷川があのとき、僕を〝チーム石井〟に入れていればK−1もここまで苦しんでませんよ。全部、谷川のせいだ〜!

―また、恨みがましく(笑)。

ターザン まあ、あの頃は谷川もラスベガスに連れてってくれたり、パリにも連れてってくれたから感謝してるけどね。でも、ホントは僕も〝チーム石井〟の一員として力を発揮したかったんですよ! 興行は谷川たちが現場を仕切るけども、重要なポイントというか、マクロな視点で僕が石井館長のアドバイザーになればよかったんだけど、そういう価値観が石井館長はわからなかったんだよ。絶対に僕を置いておいたほうがいいのにぃ。ハッキリ言ってK−1が落ちていったのは、俺を一生面倒見なかったからだよ。

―そ、そうなんですか?(笑)。

ターザン そうですよぉ! 俺のことをちゃんと面倒見てれば、K−1だって落ちてないし、俺だってここまで落ちぶれてないわけですよ。だからね、いまの格闘技界やK−1がこうなったのも、俺からしたら自業自得だよ! いい気味だよ! 天罰だよ。バチ当たりだよ。書いていいよ、これ! いまプロレス界、格闘技界がここまで落ちたのは、すべてターザン山本!を葬ったことが原因なんだよぉぉぉ……………。

―おじいちゃんのいつもの結論ということで、お疲れさまでした。

ターザン なんだか負け犬の遠吠えだね……(しみじみと)。

【09年4月20日/都内・葛飾区立石『安達太良』にて収録】



たーざん・やまもと!■本名・山本隆。通称・おじいちゃん。1946年4月26日、山口県岩国市出身。元『週刊プロレス』編集長。その後、いろいろなことがあったが、詳しくはウィキペディア参照……と思いきや、現在はほどんどの項目が削除申請されている模様。近著に女流作家(?)古関夢香との共著『62歳のボクに28歳年下の彼女ができたのだ!』(ロコモーションパブリッシング刊)がある。



格闘技がエンターテインメントになったとき――!!

K-1の夜明け前

文／橋本宗洋

最強を決めるというマンガの世界のような大会が現実に行なわれた

今号の編集作業が最終盤を迎えたある日、編集長のジャン斉藤はある事実に気づいた。

「この特集、K―1の歴史を扱った正統な記事がないじゃん！」

ターザン山本！にまで取材してるのに、さすがにそれはマズイだろ……というわけで、急きょ設けられたのがこのページなわけである。短い原稿ではあるが、K―1前夜および創成期のことを振り返ってみたいと思う。

時は1980年代後半。格闘技界の中心ジャンルはUWF系、キックボクシング、それに空手だった。それぞれの団体、選手は局地的に交流しつつ、まだ大きな流れを生み出すには至っていなかった。

そういう中で台頭してきたのが、大阪の空手団体・正道会館である。石井和義（現・教義）館長に率いられた正道会館の選手たちは極真会館や佐藤塾といった他流派の大会に積極的に参戦。好成績を残して〝常勝軍団〟と呼ばれていく。やがて正道会館は空手のみならず他ジャンルにも乗り込む。90年6月、エースである佐竹雅昭が全日本キックのリングでドン・中矢・ニールセンをKO。反則である頭突きまで繰り出してのノックアウトは物議を醸すと同時に、佐竹は他流試合で生き残るための壮絶な覚悟を見せつけた。

多くの空手団体では顔面パンチが禁止されていたが、正道会館はこの一戦をきっかけに〝グローブ〟〝顔面あり〟の世界へと大きく踏み込んでいく。92年には顔面ありルールでさまざまな流派が参戦した賞金トーナメント『トーワ杯』で佐竹が優勝（翌年も連覇）。時を同じくして佐竹、角田信朗はリングスにも参戦する。

93年に入ると、正道会館はプロ興行『格闘技オリンピック』を開催。前田日明がエキシビションに登場し、大道塾、シュートボクシングからも選手が出場したこの大会は、プロレスではなく、といって〝やる側〟主体の競技でもない、観客論のある〝プロ格闘技〟の先駆けといえるものだった。この大会の模様を伝える『格闘技通信』増刊号の表紙コピーは〝俺たちのUWF〟。日の当たらない世界にいた格闘家たちはこの大会をきっかけに認知され、ガチンコがエンターテインメントに、言い換えればビジネスになることを証明してみせたのである。

当時、最大のスターだったのはやはり佐竹である。佐竹は『格闘技オリンピックⅠ』で〝8年間無敗〟のキックボクサーにしてプロレスラーとの異種格闘技戦でも名を馳せたモーリス・スミスと対戦。『格闘技オリンピックⅢ』では、そのスミスを破ったことで脚光を浴びたピーター・アーツを迎え撃つなど試合ごとにその名を高めていく。特撮・マンガオタクにして破天荒なまでに明るい、従来の格闘家のイメージを覆すキャラクターは一般マスコミ注目の注目も集めた。

そして93年、プロ格闘技ムーブメントが高まる中で、正道会館はフジテレビと組んでエポックメイキングな大会を開催する。それが第1回K―1 GPである。

出場メンバーは佐竹をはじめモーリス・スミス、ピーター・アーツ、さらにムエタイの強豪チャンプア・ゲッソンリットなど多彩にしてハイレベル。これらのメンバーがワンデー・トーナメントで優勝を競うというコンセプトは、あまりにも破格だった。

当時の常識では、異種格闘技戦はあくまで単発にして特例。トーナメントという形式もアマチュアのものとされていた。それゆえ、多ジャンルの強豪が一夜で頂点を競うK―1には〝邪道〟という見方も強かった。だが、ファンはK―1を熱狂的に支持し、会場は超満員に。観客にとって従来の常識など関係なく、見たいものは見たかったのである。なにしろ世界中からチャンピオンが参戦し、最強を決めるというマンガの世界のような大会が現実に行なわれるのだ。

しかも、この大会で決勝の舞台に上がったのは佐竹でもアーツでもなく、無名のファイターだった。チャンプア、佐竹を倒したブランコ・シカティックとアーツ、スミスを連破したアーネスト・ホースト。両者の決勝は劇的なワンパンチKOでシカティックが勝利。この予想外の結末は、観客に格闘技の難しさとともに〝誰が勝ってもおかしくない〟という醍醐味を植えつけたと言っていい。

翌94年の第2回K―1 GPには、極真空手のスターだったアンディ・フグも登場。しかし1回戦で無残なKO負けを喫してしまう。またしても観客は勝負の残酷さを見せつけられ、そのことでガチンコだけが持つ麻薬性のとりこにもなった。このとき、アンディを倒したのはUFCにおける残虐ファイトで注目の的になっていたパトリック・スミス。K―1はその時々の話題性を取り込むことに、どの団体よりも長けていた。

この年の12月にはワンマッチでキモvsパトリック・スミスの金網バーリ・トゥード戦も敢行。さらに新日本プロレスとの対抗戦に背を向けたUWFインターナショナルの田村潔司も登場させるなど、K―1はマット界の話題をすべて吸収する勢いでファンのニーズに応えていった。

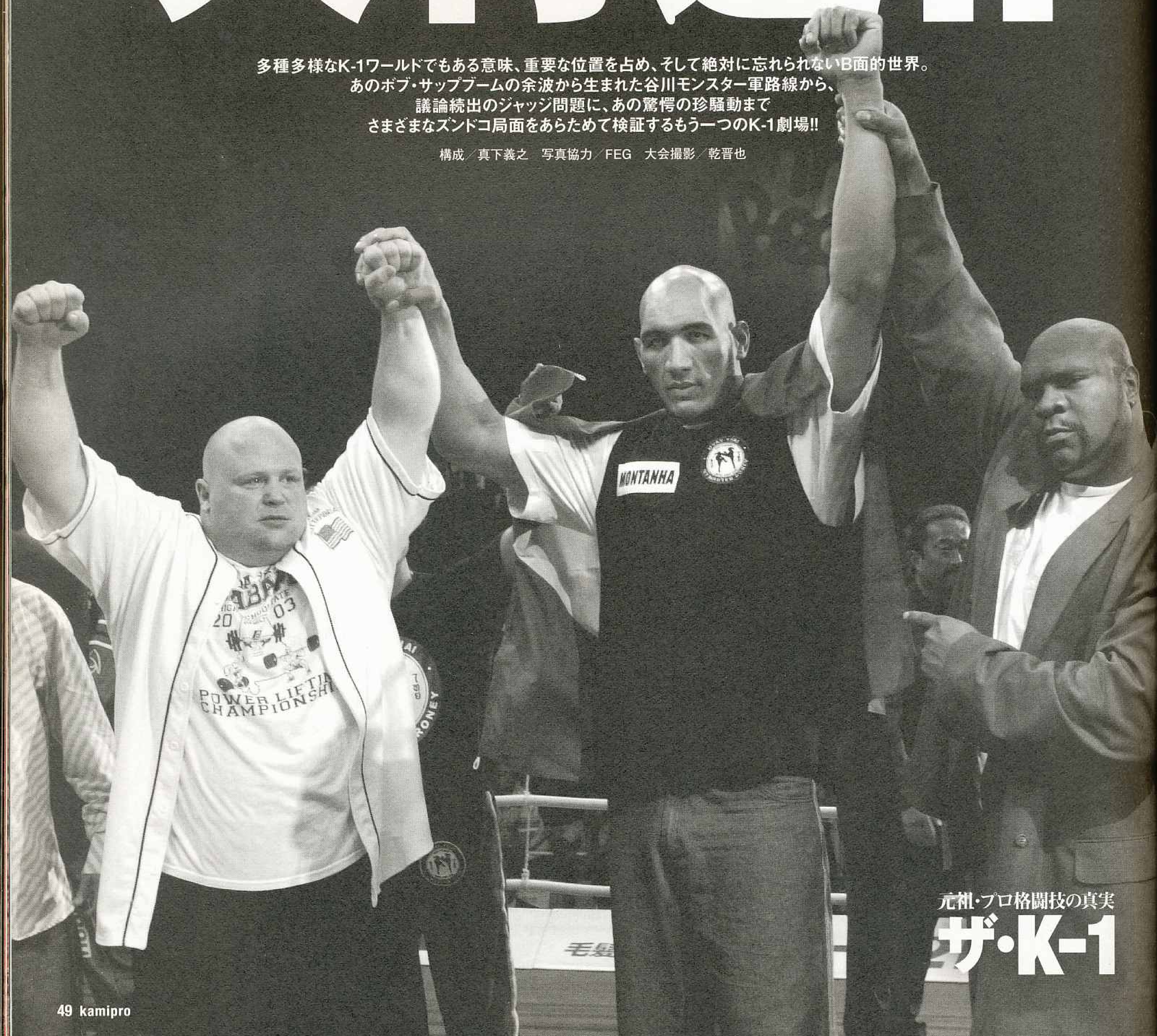
すなわちK―1の魅力とは、ジャンルごとに細分化されている格闘技の選手たちを一つのリングに集め、〝最強〟というロマンのもとに闘わせることにあった。常識よりも夢を追い、業界内で批判されてもファンが観たい試合を実現させる。その破格のダイナミズムが、初期K―1を支えていたのである。

もう一つのK−1ワールド!!

K-1ズンドコ大行進!!

多種多様なK-1ワールドでもある意味、重要な位置を占め、そして絶対に忘れられないB面的世界。あのボブ・サップブームの余波から生まれた谷川モンスター軍路線から、議論続出のジャッジ問題に、あの驚愕の珍騒動までさまざまなズンドコ局面をあらためて検証するもう一つのK-1劇場!!

構成／真下義之　写真協力／FEG　大会撮影／乾晋也



元祖・プロ格闘技の真実
ザ・K-1

技オリンピック』を開催。前田日明がエキシ

アマチュアのものとされていた。それゆえ、

が、初期K−1を支えていたのである。

K-1ズンドコ大行進!! ベストバウト編

K-1の歴史上において忘れたくても忘れられない数々のズンドコ試合。サップ率いるモンスター路線ド真ん中の『K-1 JAPAN』路線から、驚愕のマッチメイク、とんだ一杯食わせ者までズズンと振り返ります!

日本中が目撃! 曙さんのカエルダウンで視聴率43パーセント!!



▶03年12月31日『Dynamite!!』大阪ドーム

ボブ・サップ vs 曙

これぞダイナマイッ! K-1史上最も日本人が観たこの試合は、リングサイドに曙さんの元ライバル・貴乃花親方に、「父の闘っている姿を目に焼きつけてほしい」と曙一家も勢揃い! 国歌斉唱には小柳ゆきにスティービー・ワンダー（ハーモニカのみ）まで登場! 試合はワンダウンを喫するも立ち向かう曙さんに大「曙」コール発生! しかしサップの右フックが炸裂、前のめりに轟沈した曙さん。この瞬間、大晦日格闘技イベントの悲願だった視聴率“紅白超え”を突破! だが、それは曙さんの無惨なカエルダウンの姿だった。

“変態尻”野郎を完全討伐!! 角ちゃん劇場全開!



▶95年7月16日『K-1 LEGEND 翔』名古屋レインボール

角田信朗 vs ジョー・サン

キモの元マネージャーであり、謎の格闘技ジョーサンドーの創始者であり、このあと尻丸出しの変態野郎と化すジョー・サンを、当時引退していた角田が現役復帰して完全討伐! 試合は、角田がまさかのダウンを奪われたあと、一気にラッシュの猛反撃! 最後はホーガンばりの筋肉ポーズでアピール、愛と涙の角ちゃん劇場が全開。

©FEG Inc.

有刺鉄線バット持参! ミスターデンジャーがK―1参戦!

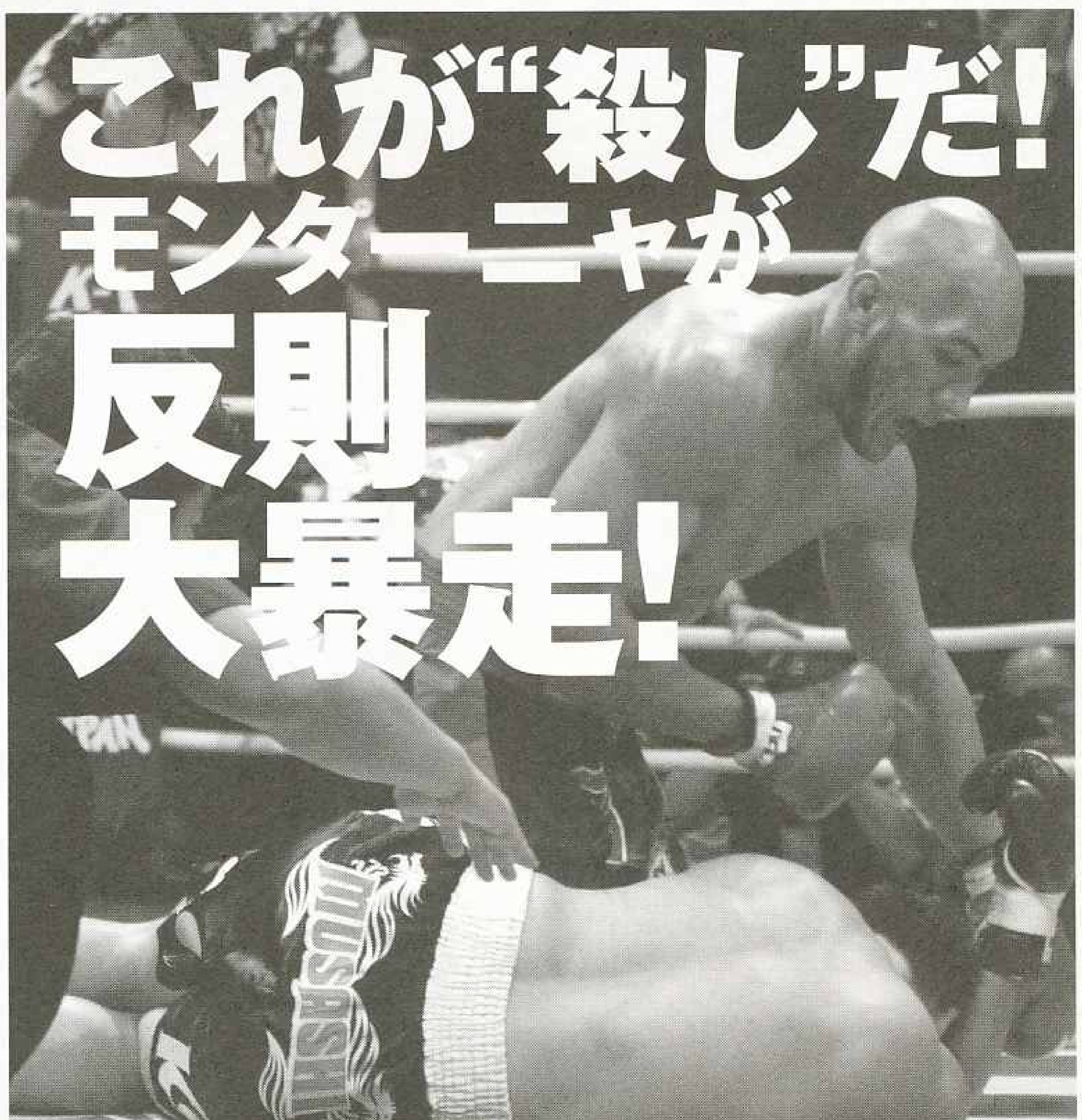


▶00年3月19日『K-1 BURNING 2000』横浜アリーナ

松永光弘 vs グレート草津

二代目グレート草津のK-1デビュー戦相手は、なぜか“ミスター・デンジャー”松永光弘! 有刺鉄線バンダナ&有刺鉄線バット姿で入場も、あっという間に秒殺負け! だが、懲りない松永はセコンドのグレート小鹿と仲間割れ、さらに退場時に火吹きパフォーマンスも披露と最後までやりたい放題なのだった。

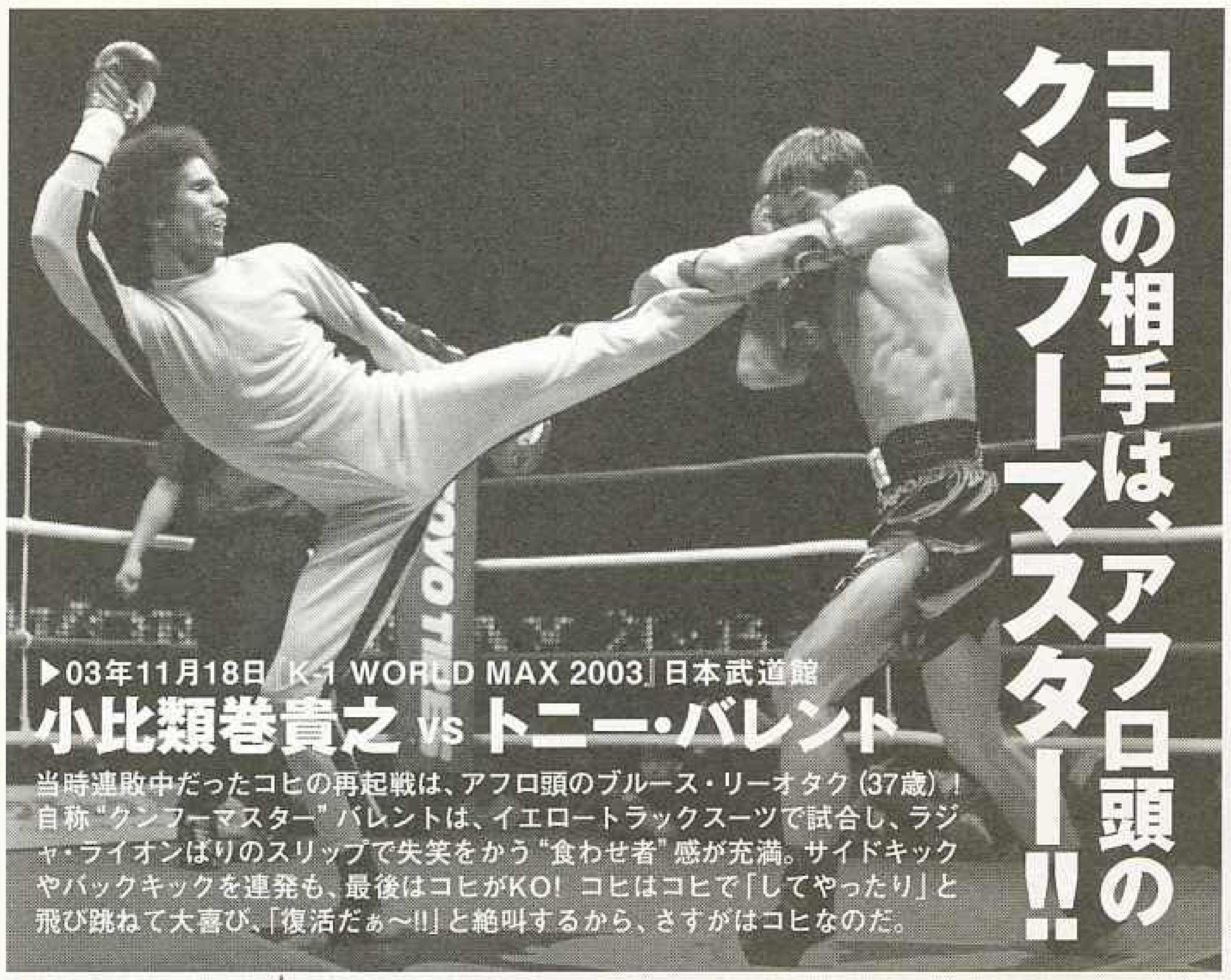
これが“殺し”だ! モンターニャが反則大暴走!



▶03年6月29日『K-1 BEAST II 2003』さいたまスーパーアリーナ

モンターニャ・シウバ vs 武蔵

「あの男はやるからねぇ～」と故I編集長もお気に入りだった“大巨人”モンターニャ・シウバはパンチを打つと「風が吹く」という前評判でK-1に初参戦。だが試合中にブチキレて武蔵にマウントパンチを爆発させる大暴走! “殺し”を持つ男として絶賛される一方、K-1は無期限出場停止処分、復帰後は去勢されたようにおとなしくなったが、現在は元気一杯にIGFで大暴れしているから最高だ。

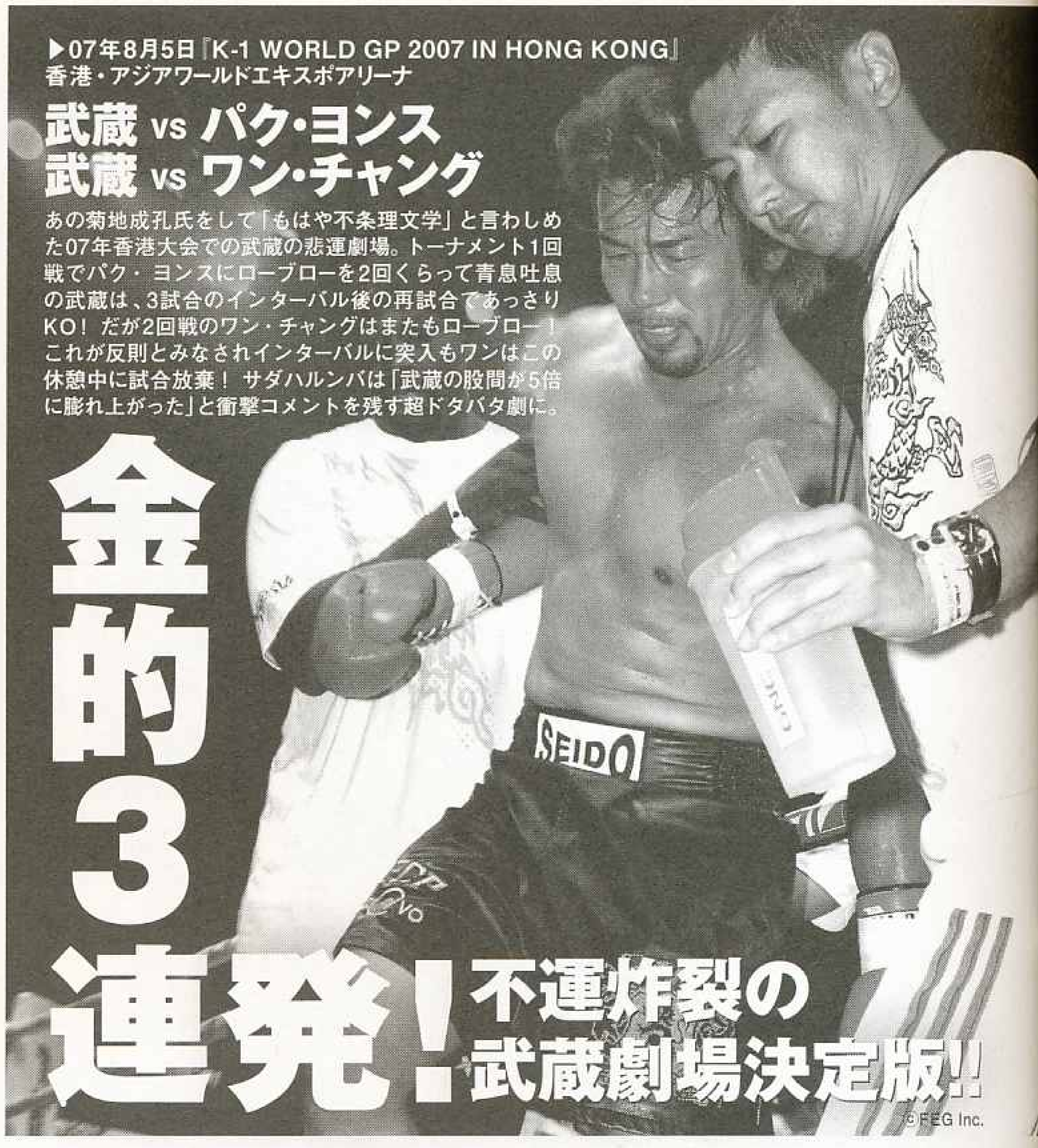


コヒの相手は、アフロ頭のクンフーマスター!!

▶03年11月18日『K-1 WORLD MAX 2003』日本武道館

小比類巻貴之 vs トニー・バレント

当時連敗中だったコヒの再起戦は、アフロ頭のブルース・リーオタク（37歳）！ 自称"クンフーマスター"バレントは、イエロートラックスーツで試合し、ラジャ・ライオンばりのスリップで失笑をかう"食わせ者"感が充満。サイドキックやバックキックを連発も、最後はコヒがKO! コヒはコヒで「してやったり」と飛び跳ねて大喜び、「復活だぁ〜!!」と絶叫するから、さすがはコヒなのだ。



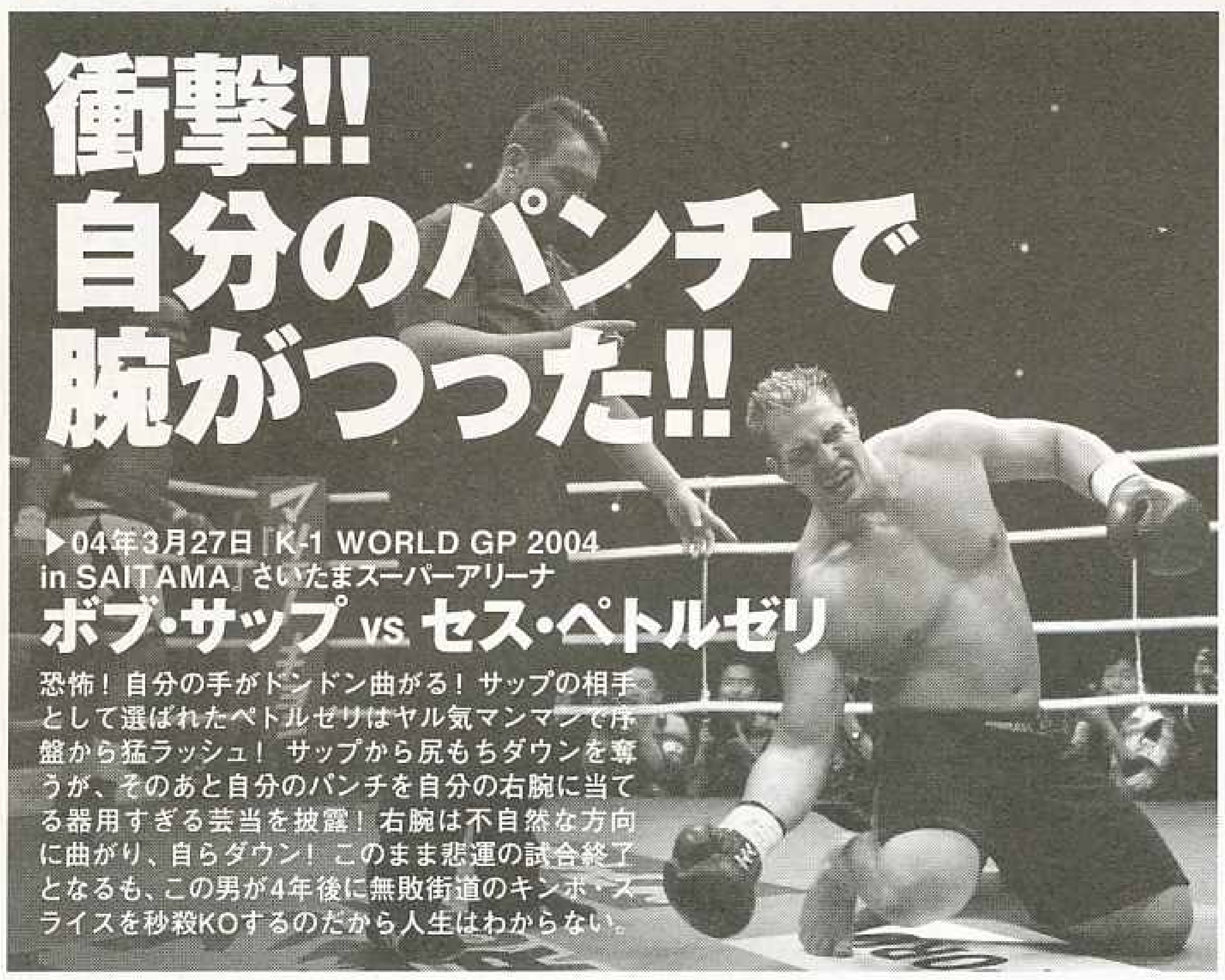
▶07年8月5日『K-1 WORLD GP 2007 IN HONG KONG』香港・アジアワールドエキスポアリーナ

武蔵 vs パク・ヨンス
武蔵 vs ワン・チャング

あの菊地成孔氏をして「もはや不条理文学」と言わしめた07年香港大会での武蔵の悲運劇場。トーナメント1回戦でパク・ヨンスにローブローを2回くらって青息吐息の武蔵は、3試合のインターバル後の再試合であっさりKO！ だが2回戦のワン・チャングはまたもローブロー！ これが反則とみなされインターバルに突入もワンはこの休憩中に試合放棄！ サダハルンバは「武蔵の股間が5倍に膨れ上がった」と衝撃コメントを残す超ドタバタ劇に。

金的3連発！不運炸裂の武蔵劇場決定版!!

©FEG Inc.



衝撃!! 自分のパンチで腕がつった!!

▶04年3月27日『K-1 WORLD GP 2004 in SAITAMA』さいたまスーパーアリーナ

ボブ・サップ vs セス・ペトルゼリ

恐怖！ 自分の手がドンドン曲がる！ サップの相手として選ばれたペトルゼリはヤル気マンマンで序盤から猛ラッシュ！ サップから尻もちダウンを奪うが、そのあと自分のパンチを自分の右腕に当てる器用すぎる芸当を披露！ 右腕は不自然な方向に曲がり、自らダウン！ このまま悲運の試合終了となるも、この男が4年後に無敗街道のキンボ・スライスを秒殺KOするのだから人生はわからない。

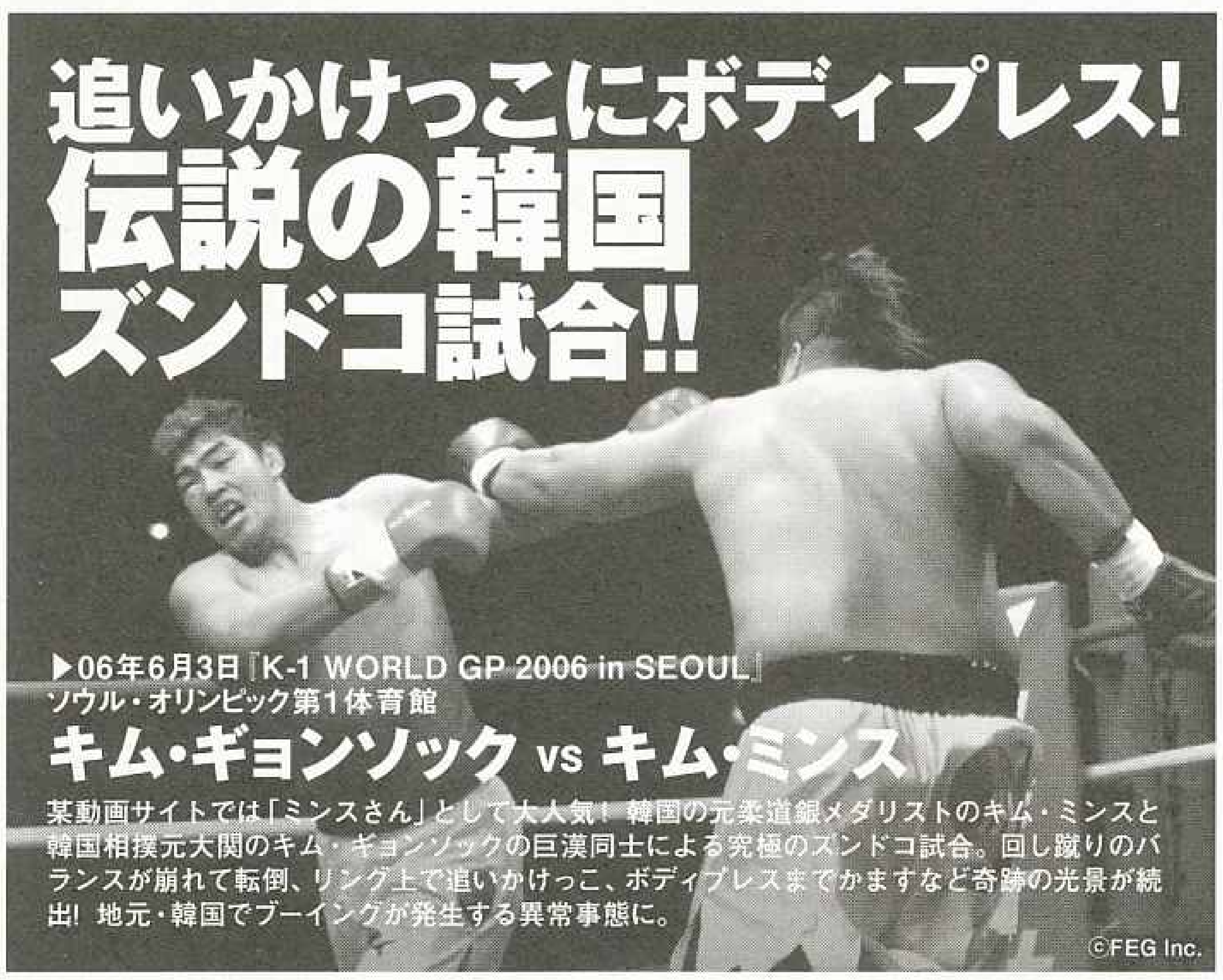


野人vsマオリ族！ 究極のド素人対決にミルコも激怒!!

▶03年6月29日『K-1 BEAST II』さいたまスーパーアリーナ

中西学 vs TOA

"野人"中西学と"マオリ族最強の戦士"TOA（ペイント力士）が激突！ アントンに「新日本はまかせた!」と期待をかけられた中西がK-1に初参戦。試合前にマオリ族がダンスを披露すれば、中西のセコンドは当時・魔界倶楽部の星野総裁、ドラゴン、蝶野正洋、永田さんがリングサイドに。試合は打撃のド素人同士が大味すぎるドツキ合い！ その内容に「とんだ茶番だ」とミルコも激怒！



追いかけっこにボディプレス！ 伝説の韓国ズンドコ試合!!

▶06年6月3日『K-1 WORLD GP 2006 in SEOUL』ソウル・オリンピック第1体育館

キム・ギョンソック vs キム・ミンス

某動画サイトでは「ミンスさん」として大人気！ 韓国の元柔道銀メダリストのキム・ミンスと韓国相撲元大関のキム・ギョンソックの巨漢同士による究極のズンドコ試合。回し蹴りのバランスが崩れて転倒、リング上で追いかけっこ、ボディプレスまでかますなど奇跡の光景が続出! 地元・韓国でブーイングが発生する異常事態に。

©FEG Inc.



ニセタイソンが電撃参戦！

▶04年3月14日『K-1 BEAST 2004』新潟コンベンションセンター

宮本正明 vs クリフ"ツインタイソン"コーザ

オレオレ詐欺ならぬ、来る来る詐欺的な問題児の本家タイソンを尻目にニセタイソン……いや、タイソンの異母兄弟、クリフ"ツインタイソン"コーザが初来日！ ケンカ500戦無敗、「相手の耳を噛みちぎる」という本家ばりの触れ込みだったが、じつにクリーンな試合を展開し宮本に判定負けし、期待どおりの一杯食わせ者ぶりを発揮。



©FEG Inc.

「ビーストコールですねぇ！」タイソンの前で究極のドタバタ試合!!

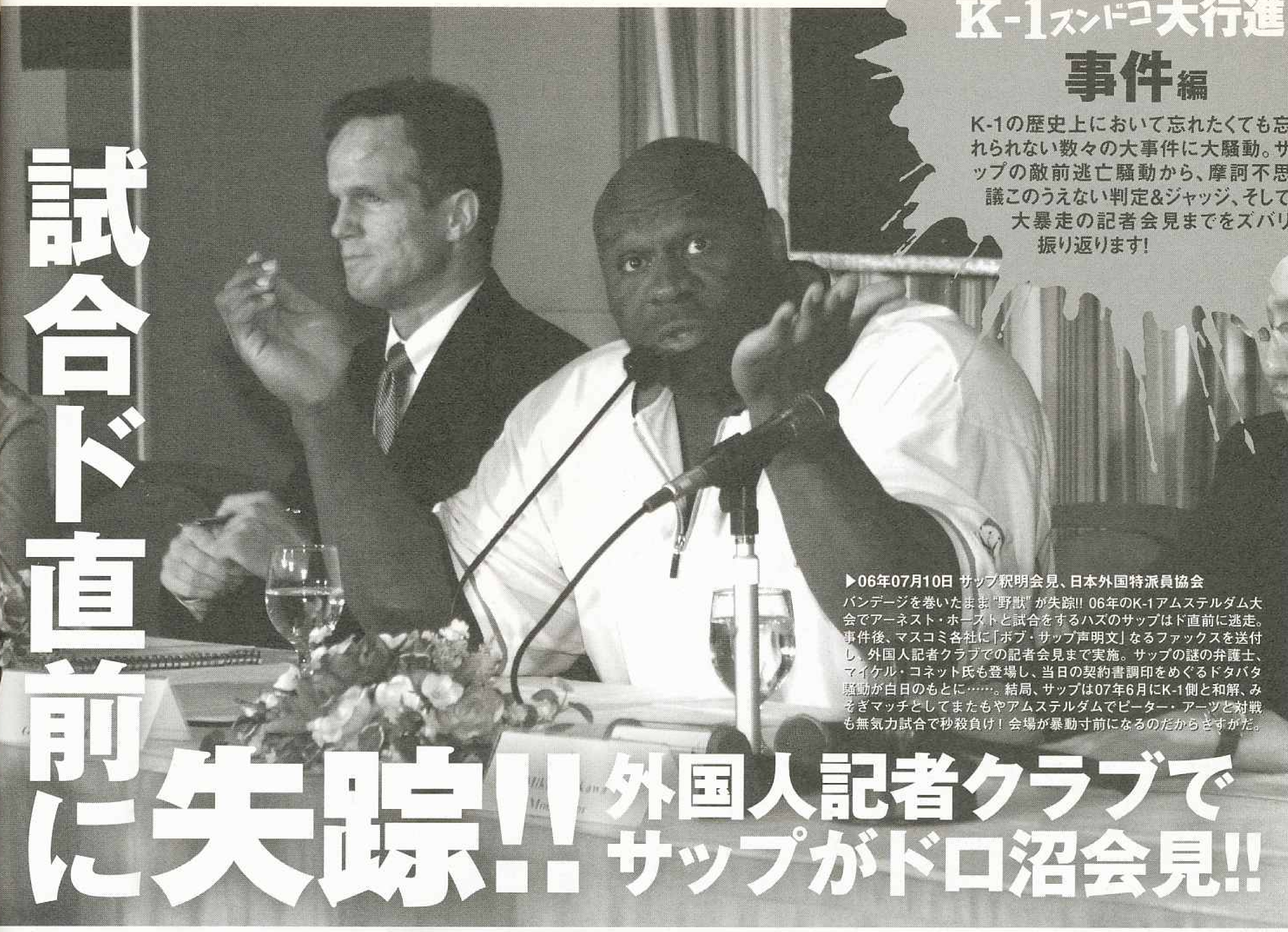
▶03年8月15日『K-1 WORLD GP 2003 in LAS VEGAS』ラスベガス・ホテルベラージオ

サップ vs キモ

「キーモ! キーモ!」というラスベガスの観客のコールを「ビーストコールですねぇ!」というのんきな勘違いを発揮したサダハルンバの解説で知られる試合。リングサイドのタイソンを前にコツンと当てたパンチでキモがダウンすれば、サップも千鳥足ムーブからダウンする大味展開が続くも、最後はサップがキモを大の字KO!

K-1ズンドコ大行進!!
事件編

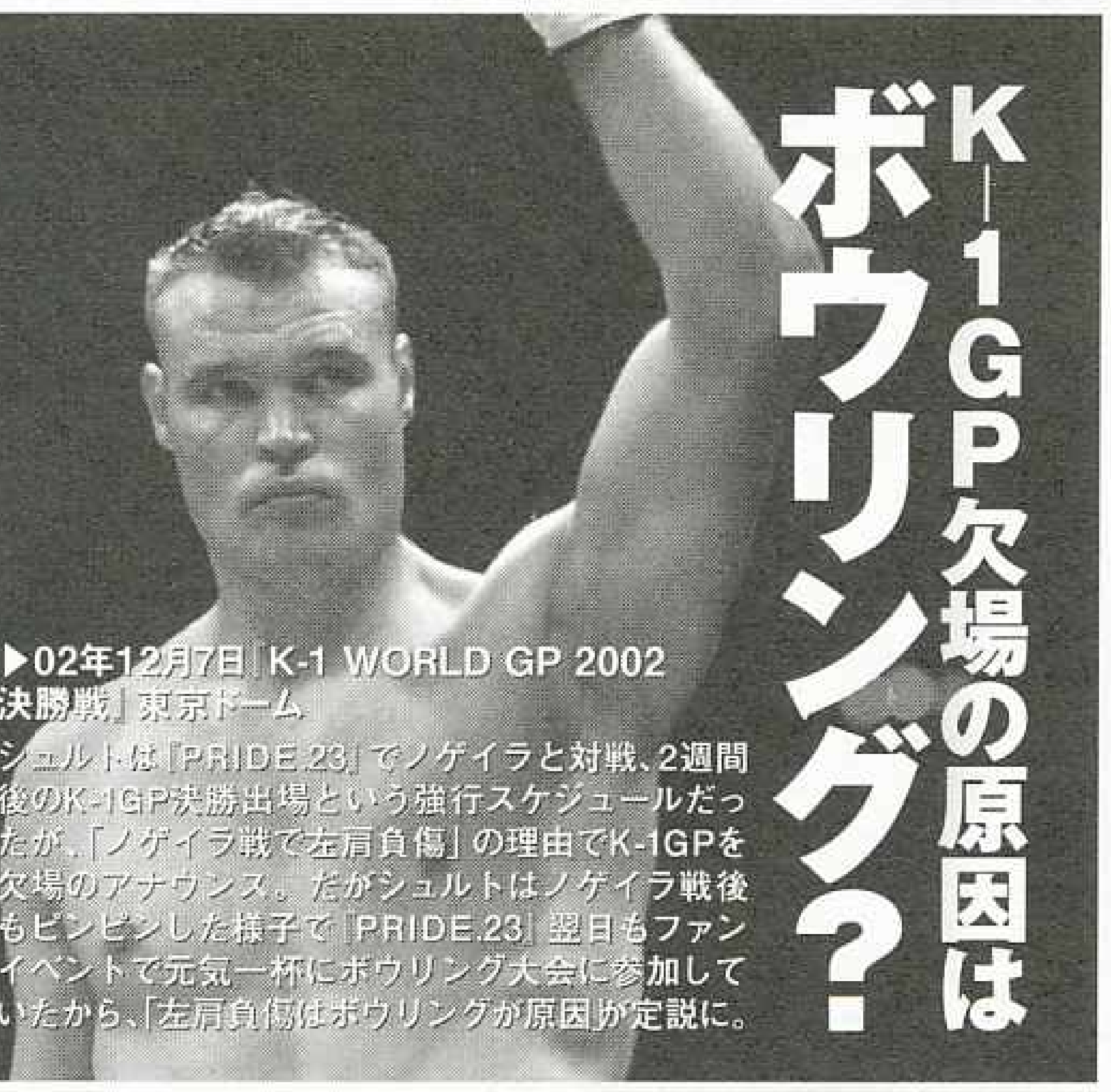
K-1の歴史上において忘れたくても忘れられない数々の大事件に大騒動。サップの敵前逃亡騒動から、摩訶不思議このうえない判定&ジャッジ、そして大暴走の記者会見までをズバリ振り返ります!



試合ド直前に失踪!! 外国人記者クラブでサップがドロ沼会見!!

▶06年07月10日 サップ釈明会見、日本外国特派員協会

バンデージを巻いたまま"野獣"が失踪!! 06年のK-1アムステルダム大会でアーネスト・ホーストと試合をするハズのサップはド直前に逃走。事件後、マスコミ各社に「ボブ・サップ声明文」なるファックスを送付し、外国人記者クラブでの記者会見まで実施。サップの謎の弁護士、マイケル・コネット氏も登場し、当日の契約書調印をめぐるドタバタ騒動が白日のもとに……。結局、サップは07年6月にK-1側と和解、みそぎマッチとしてまたもやアムステルダムでピーター・アーツと対戦も無気力試合で秒殺負け！会場が暴動寸前になるのだからさすがだ。



K-1GP欠場の原因はボウリング?

▶02年12月7日「K-1 WORLD GP 2002 決勝戦」東京ドーム

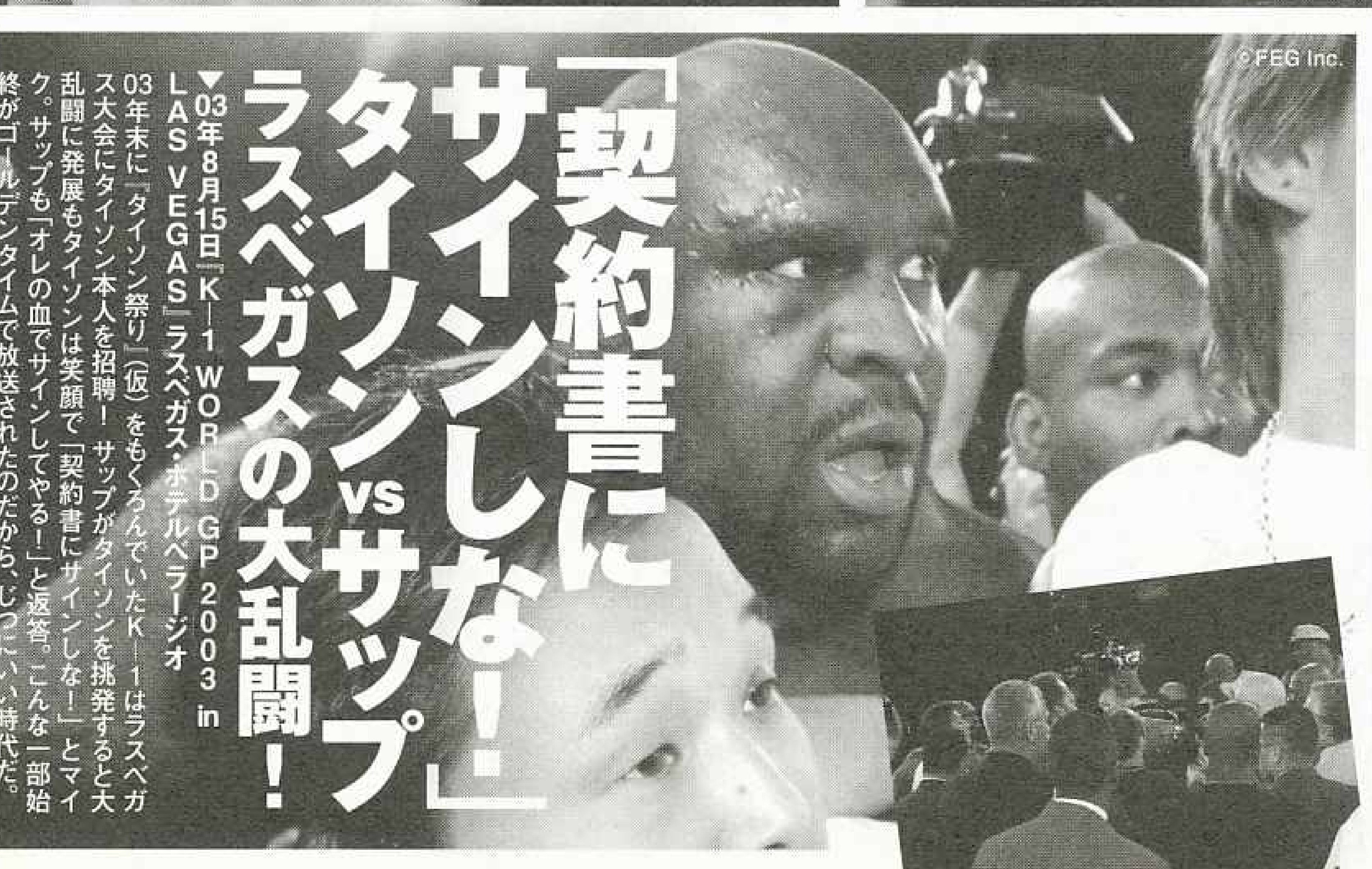
シュルトは「PRIDE.23」でノゲイラと対戦、2週間後のK-1GP決勝出場という強行スケジュールだったが、「ノゲイラ戦で左肩負傷」の理由でK-1GPを欠場のアナウンス。だがシュルトはノゲイラ戦後もピンピンした様子で「PRIDE.23」翌日もファンイベントで元気一杯にボウリング大会に参加していたから、「左肩負傷はボウリングが原因」が定説に。



これぞK-1 JAPAN!
サップが消化剤まみれに!

▶03年6月4日「K-1 BEAST II」前日会見、都内ホテル

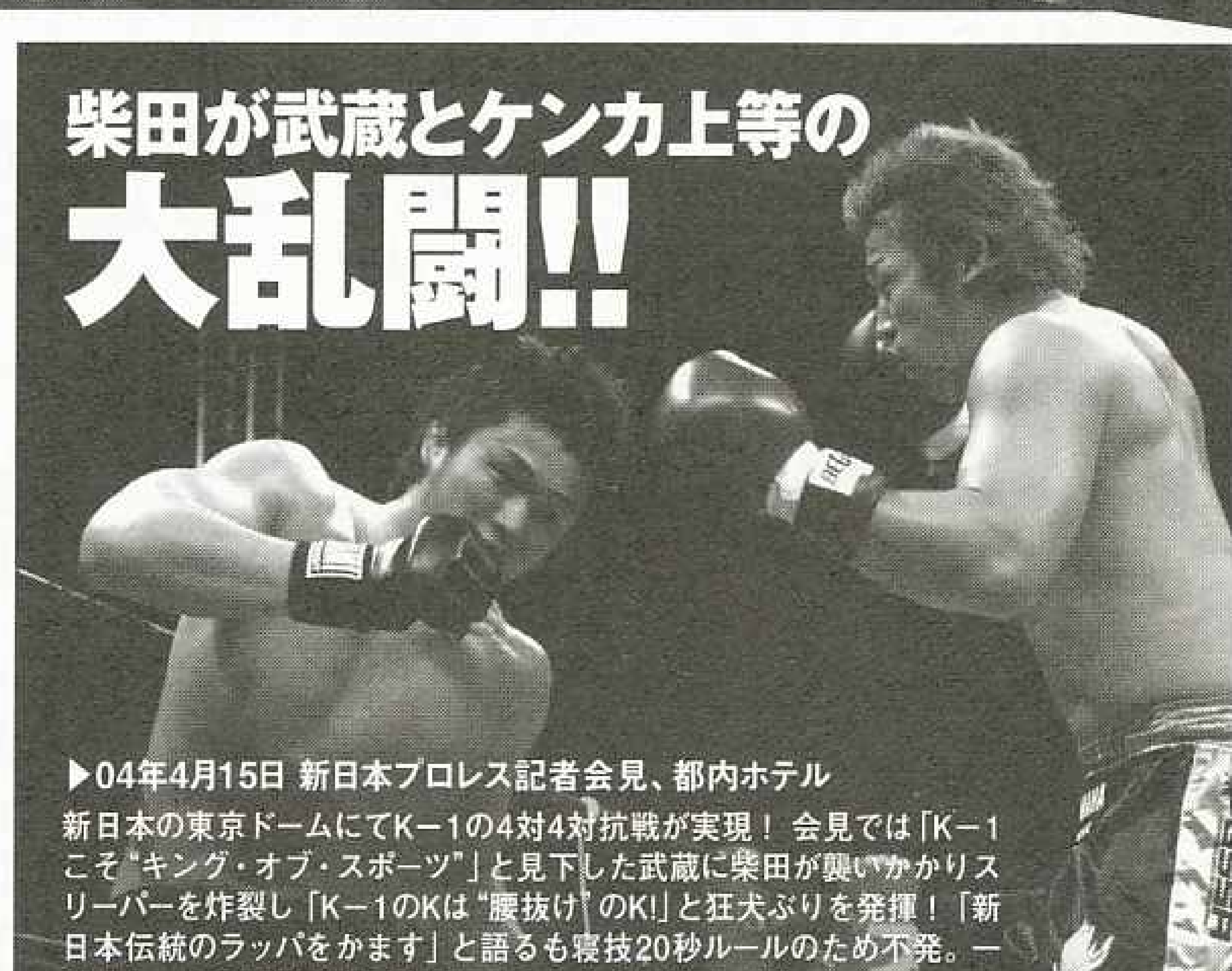
「俺はサップの手下じゃねぇ!」。03年に猛威を奮ったサップ率いるビースト軍の秘密兵器が"サモアン・ビースト軍の首領"TOA。サップがハシャぎながら紹介したTOAだったが、TOAはサップのふがいなさを罵倒し始め、会場の消化器を大噴射！サップは消化剤まみれとなって会場も大混乱。こんなドタバタ劇がK-1 JAPAN会見では毎度おなじみになるのだから、当時のK-1の暴走ぶりがわかるだろう。



「契約書にサインしな!」タイソンvsサップ ラスベガスの大乱闘!

▼03年8月15日『K—1 WORLD GP 2003 in LAS VEGAS』ラスベガス・ホテルベラージオ

03年末に『タイソン祭り』(仮)をもくろんでいたK—1はラスベガス大会にタイソン本人を招聘！サップがタイソンを挑発すると大乱闘に発展もタイソンは笑顔で「契約書にサインしな!」とマイク。サップも「オレの血でサインしてやる!」と返答。こんな一部始終がゴールデンタイムで放送されたのだから、じつにいい時代だ。



柴田が武蔵とケンカ上等の
大乱闘!!

▶04年4月15日 新日本プロレス記者会見、都内ホテル

新日本の東京ドームにてK−1の4対4対抗戦が実現！会見では「K−1こそ"キング・オブ・スポーツ"」と見下した武蔵に柴田が襲いかかりスリーパーを炸裂し「K−1のKは"腰抜け"のK!」と狂犬ぶりを発揮！「新日本伝統のラッパをかます」と語るも寝技20秒ルールのため不発。一番熱かったのは解説席で吠えまくる上井(文彦)さんだった。



前代未聞!! 挑戦者決定戦中に 両者失格?

▶07年3月4日『K-1 WORLD GP 2007 in YOKOHAMA』横浜アリーナ

新設された「ヘビー級タイトル挑戦者決定戦」として、武蔵vs藤本祐介が激突! だが試合は膠着三昧となりズルズル延長戦へ。ここで奮起したのが角田レフェリー。「両者消極的なままなら、失格!」とキッパリ! あわや「挑戦者決定戦中に失格」という異常事態に! 結局、藤本が武蔵をKOしたが、武蔵はこの警告を「セコンドの指示に集中してたので、あまり聞いてませんでした」と流す不遜ぶり!

©FEG Inc.



魔裟斗vsブアカーオ 悪夢の延長地獄!!

▶04年7月7日『K-1 WORLD MAX 2004』日本武道館

03年のK-1MAX王者・魔裟斗が連覇を懸けた一戦は、初参戦のブアカーオと大熱戦を展開も1、2回戦でダメージが深い魔裟斗に対し、完全なブアカーオペース。3R終了時点でブアカーオはコーナーに登りガッツポーズ! ファンや当事者もブアカーオ圧勝を確信したが判定はブアカーオ1にドロー2……と、悪夢の延長劇! ブアカーオは茫然とした表情を浮かべつつ延長ラウンドを闘い、けなげな判定勝利。

©FEG Inc.



「ヤツはホモだ!」ヒーリングが試合前に中尾をKO!

▶04年12月31日『Dynamite!!』大阪ドーム

大晦日の珍事件! 試合前、額を近づけてのヒリヒリした睨み合い最中に、何を思ったか中尾は"テキサスの暴れ馬"にやさしくキッス! この行為に瞬間的に激怒したヒーリングは強烈な右フックを炸裂! 失神した中尾を尻目に「ヤツはホモだ!」「俺はゲイじゃねぇ!」と怒り心頭。タンカで運ばれた中尾さんだったが、これを機に中尾"Kiss"芳広(命名はターザン山本!)として生まれ変わるのだから人生はわからない。

©FEG Inc.

©FEG Inc.



議論噴出のポイント問題勃発!!

▶08年10月1日『K-1 WORLD MAX 2008』日本武道館

オープンスコアの初大会。K-1は「優勢選手に10ポイントをつける」ルールだったが、魔裟斗vs佐藤嘉洋戦で3Rに魔裟斗からダウンを奪った佐藤についたのは「9ポイント」で、このあと延長Rで魔裟斗が逆転勝利! 試合後、報道陣の質問に角田レフェリーは「必ず優勢の選手を10にするということは、すぐ訂正したい」となんとその場でルールを電撃変更!



伝説の不祥事!! 秋山成勲ヌルヌル騒動!

▶07年1月11日 秋山成勲謝罪会見、都内ホテル

「多汗症で乾燥肌」という複雑すぎる身体を持つ秋山が全身にスキンクリームを塗って桜庭戦に挑むも、試合はノーコンテスト裁定、ファイトマネー全額没収、そして無期限出場停止処分に。スポンサーが離れたり、ネットが誹謗中傷で大炎上する大騒動に発展も、著書「ふたつの魂」の帯に、清原和博の「あの反則は故意では決して無い」という言葉が並び、懲りた様子がないのはさすが魔王。

——谷川さん！　いまだにK－1WGPの年間スケジュールが発表されてないですけど、K－1は大丈夫なんですか？
谷川　なんだよ、普段はK－1のことなんか気にしてないくせに。
——すいません。確かにマッハの言葉を借りれば、ウチは普段から「K－1をナメくさりやがって！」るんですが、海外では谷川さんがいなくなるなんていう未確認情報も流れてるんですよ！
谷川　いなくなれるんなら、いなくなりたいよお。でも世間がボクを必要としてるからねえ。まあ、いまはK－1の大改革に向けて水面下で動いているので、年間発表はボチボチやっていきます。
——で、五味隆典が修斗王者の中蔵隆志に勝ちました。谷川さんは先月のインタビューで魔裟斗の対戦相手の候補に挙げてましたよね。
谷川　よかったねえ、五味くん。でも、魔裟斗くんの相手はとにかく川尻vsカルバン戦次第だね。それを観てから決めます！
——なるほど。では、さっそく本題のスーパーハルクトーナメント（以下、ハルク）に移りたいと思いま～す。
谷川　んあ～！　今回はK－1特集じゃないのかよ！　ナメくさりやがって!!（怒）。
——いやいや、ハルクを通して、現代K－1の興行論を考えようという奥の深い試みがあるんですよ。
谷川　でもあれ、べつにボクのアイデアでやるわけじゃないよ。
——記者会見でも笹原（圭一）さんが「これは谷川さんの趣味じゃありません！」って声高に言ってましたけど。正直、誰も信じてませんよ！
谷川　いやいや、ホントだって！　でもさ、そのハルクを含め、今度のDREAMはメッチャおもしろそうだよね。マッチメイクがバラエティに富んでいるし、『Dynamite!!』がかすむようなお祭り的なおもしろさなんじゃない？
——でも、ハルクに関しては、あたりまえのように否定的な意見が噴出してますね。
谷川　そうなんだ？　ボクの場合はDREAMをなんとかして爆発させたいというスタッフの意気込みに感心したんだけどなあ。現状のやり方では世間には届かないということを凄く理解したうえでの決断でしょ？
——視聴率を獲らなきゃならないのはよくわかるんですけど、それでもド素人ホセ・カンセコの起用はどうかと思うし、ファンから「格闘技を冒涜している！」と怒られても不思議じゃないですね。
谷川　ああ、斉藤くんもカンセコはダメなんだ。
——ダメというか、格闘家としてはまったく期待できないですよね。ただ、自伝を読むかぎり、〝人間ホセ・カンセコ〟はホントに最高なんですけど。
谷川　そんなにおもしろい人なの？
——ちょっと凄いですねえ。ひさしぶりにリアルでハルクなトンパチを見ました（笑）。
谷川　まあ、結果を含めて最終的にハルクが理解されないんだったら違う方法を考えないといけないと思うけど、格闘技を冒涜してるだなんて、



格闘技界はどこへ向かうのか？

スーパーハルクトーナメントは 是か否か？ 問題外か？

谷川貞治

視聴率獲得のための"秘策"として堂々行なわれるスーパーハルクトーナメント。だが、一部では"モンスター系"への否定的な意見も噴出している。はたして、このトーナメントはどう考えるべきなのか。モンスター路線の産みの親(?)であるサダハルンバに直撃した！

聞き手／ジャン斉藤　写真／乾晋也、平工幸雄

元祖・プロ格闘技の真実
ザ・K-1

そんな大げさな話じゃないと思うけどなあ。まあ、ボクからしても、PRIDE無差別級GPやK-1WGPがハルクの理想だと思ってるんだけどね。

――ハルクのリアルなかたちはそれ？

谷川 うん。要はキャラがあって強い選手が競い合う。つまり競技性とエンターテインメント性がもの凄く合致したイベントだったじゃない。でもいまの時代は、とくにMMAはその力が選手にも団体にもないもんね。だから、そこに到達する過程でまずテレビや観客動員で結果を残さなくちゃいけない中で、DREAMとしてハルクをやろうということになったんだと思いますよ。

――テレビソフトとして生き残れるかどうかの勝負だと？

谷川 去年一ケタだった平均視聴率を、今年は絶対に15パーセントぐらい獲るんだというスタッフの意気込みの表われですよお。

――ぶっちゃけ、フェザー級GP単体では、ことテレビに関しては勝負できないってことですか？

谷川 まだ難しいねぇ。だってフェザー級にはKIDくんしかいないもん。ほかの選手は存在感でカンセコに負けてるよ！

――ダハハハハ！　またホームラン級に物議を醸す発言だなあ。

谷川 いい興行が続けていければ、いずれフェザー級も存在感を増すとは思うけど。その点、ライト級なんかはPRIDEでも『HERO'S』でも焚いてきた階級だったからわかりやすいし、凄く楽しかったけど。フェザー級は本当にKIDくんしかその魅力は世間にわからないもん。前回の大会だけでいえば、今成（正和）選手や前田（吉朗）選手のよさは、まったく伝わってないと思うんだよね。

モンスター路線復活？

――ハルクのほうが伝わりやすいんですか？

谷川 単純にハルクは興味深いけどなあ。たとえばミドル級の（ゲガール・）ムサシがあの超ヘビー級の中でどこまでやれるのか、ボブ・サップやホンマンが真剣に練習すれば強いんじゃないかとか、いろいろ興味深いポイントはあるじゃない。だから、こういうカードを組むとき、たとえばボクがご批判を受けたボビーvsアビディ、ボビーvs曙というカードに関して言うと、一番気をつけなくちゃいけなかったのは、"勝負論"があるかないかということだよね。

――モンスターに"勝負論"？　え～っと、ちょっとだけ難しい話になってきました（笑）。

谷川 いくら馬鹿馬鹿しいと思われようが、どっちが勝つかが本当にわからないことが凄く大切で。たとえば猪木vsモハメド・アリだってルールの中での勝負論があったしさ、セコンドも含めて猪木vsウィリー戦でも勝負論があるわけだから。

――多くのファンは視聴率を獲らないといけないことは理解してるんですよ。でも、どうしても納得できない現状があるのはなぜでしょう？

谷川 単純にモンスター系への批判でしょう。「競技か、競技じゃないか」という批判があるんじゃない？　それは昔からあったと思うけどさ、どんなにつまらない試合でも実力が拮抗している無名の選手同士を闘わせて「いやぁ、深い試合だった」と思ったりどんなに一生懸命頑張ってもモンスターだということで切り捨てる場合はあるからね。でも、今回のようなトーナメントでもやらないかぎり、結果はもっと悲惨だと思いますよ。それにハルクがあるからこそ、もう一方でJZ vs川尻とかメイヘムvsジャカレイが光ると思うんだけどなあ。



サダハルンバいわく究極のハルクトーナメントは06年に開催されたPRIDE無差別級GPだという。ここまで"進化"したハルクもぜひ観たい！

――いま全世界的に格闘技の競技化が進んでる中で、ハルクの実施は格闘技の本質がゆがめられるんじゃないかというような意見に対してはどう思いますか？

谷川 いやいや、ボクは絶対に格闘技の可能性は広がると思ってますね、結果論として。それは『Dynamite!!』の中でタレントが格闘技の試合をやったことでもそうだし、アメリカでもキンボ（・スライス）やジーナ（・カラーノ）が出ることで地上波がついたりするわけでしょ。だから結果的にはゆがめられるよりも広められるほうが大きい。だから、かつてミッキー・ロークがボクシングの試合をしたじゃない。ボクはああいう試合こそが格闘技を冒涜してると思うんだよね。

――ミッキー・ロークのどこが格闘技を冒涜したと思いますか？

谷川 ミッキー・ロークを出せばいいと思ってること自体、格闘技を甘く考えてる。要は使い方を間違ってるんですよ。

――じゃあ、たとえば金子賢とミッキー・ロークはどう違いますか？

谷川 金子賢とミッキー・ロークは……。そんなに変わらないなあ。

――ダハハハハハハハハハハ！　そこであきらめないでくださいよ！

谷川 え～っとね、そんなには変わらないんだけど、PRIDEも『HERO'S』も金子賢に対してちゃんと試練を与えたよね。それが金子賢自体を冒涜してないということだし、格闘技を冒涜してないことにつながったじゃない。

――つまり、格闘技の厳しさが金子賢を通して伝わったということです

ハルクで一番気をつけなくちゃいけないのは勝負論があるかないか

か？　先ほどのお話でいうと、金子賢なりの勝負論があった。

谷川　そうそう。PRIDEも『HERO'S』も金子賢に関してはギリギリのところで勝負論があるようなカードを組んだからね。でもミッキー・ロークの場合はボクシングの試合をさせて、それでネコパンチで勝ったわけでしょ。あれは冒涜だよ。もしああいうことをDREAMのスタッフがやり始めたらさすがのボクも怒るぞ～！

――それこそ、ハンドボーラーでフットボーラーの谷川さんがカンセコの代わりに出てくださいよ！

谷川　んあ～！　バカなことを言わないでよ～。

――だって、日本においては谷川さんのほうがカンセコより有名じゃないですか。絶対に数字は持ってると思いますよ。

谷川　でも、カンセコよりロマンはないよね。

――冗談なんですから、マジメに反論しないでください（笑）。

谷川　やっぱりそこのさじ加減がプロモーターの腕だからね。そういう意味じゃ『ハッスル』ってプロレスを冒涜してるんじゃない？

――まあ、もともと「プロレスを根こそぎブチ壊す!!」って宣言してますから。

谷川　あ、そっか。ボクがプロレスを観てた頃って、たけし軍団とベイダーが出てきたときはホントに頭にきたもんだよ。本気で「マジメにやれ！（怒）」って思ったからね。

――そうなんですか。当時の谷川さんは、いわゆるプロレスの仕組みはご存知だったんですか？

谷川　うん。当時はまだベースボール・マガジン社にいた頃だったし。

――では、たけし軍団も本質的には新日本プロレスと同じだということは理解したうえで観てたわけですよね。

谷川　そうだね。でも、プロレスをこういう路線で走らせたら絶対にマズいなって真剣に思ってましたよ。

――じゃあ、当時の大勢のファンを含めて、ストロングスタイルこそが絶対的な〝宗教〟だったというわけですね。

谷川　そういうことなんだろうね。いまのプロレス界で全部が全部、若手同士のガチガチの試合を見せるのはいいとは思わないけど、プロレスに対してはいまでも「ベイダー、ふざけんな！」の感覚はある。

――いまはプロレスも格闘技も熱狂できる宗教が少ないですよね。たとえばハルクで視聴率を獲るって言われても、いまいち身を委ねられない不安があるじゃないですか。

谷川　そこまで確信したものはないよね。ただ、やらないよりはやったほうがいいと思ってるよ。たとえば、ボクの〝嗜好＝世間〟だと思ってるんだけど、ボクの感覚からすると、今回のカードの中でいま一番観たいのは川尻vsカルバンみたいな試合だよね。

――世間は川尻vsカルバンを求めていると？

谷川　うん。でも、いまの世間は娯楽にあふれていて、川尻vsカルバンがあることを知らないから、川尻vsカルバンを観ようと思ってテレビをつけないと思うんだよね。

――仮にチャンネルが合ったとしても、見入る前に変えられてしまう可能性はありますね。

谷川　うん。それどころか川尻vsカルバンをテレビ局が放送するかどうかもわからない。それはテレビ局はテレビ局で自分たちの〝世間〟の感覚があるから。

――すると、川尻vsカルバンより、とっかかりがないジャカレイvsメイヘムの地上波放映も厳しいですか？

谷川　いやぁ、ボクは難しいと思うけどねぇ。二人ともおもしろい試合をするけど、まだまだ知られてないから。売り出すために流せばいいじゃんと思う人もいるだろうけど、ちょっとテレビで流れたくらいで人気者になるほどテレビは甘くないし。そこにはたとえば所くんみたいに奇跡的なきっかけがあれば別だけど。

――まあ、他ジャンルに置き換えればわかるんですけどね。世界卓球の男子シングル決勝戦、王皓vs王励勤の中国人同士の試合をゴールデンタイムで流すかといえば無理だろうなって。

谷川　まあ、レベルは高いんだろうけど、それは観ないだろうね。

――でも、〝谷川＝世間〟が川尻vsカルバンであるならば、K−1はどうして一時期のモンスター路線をやっていたんですか？

谷川　それは仕方ないから。単純に好きじゃないんだけどね。

――あ、そうなんですか？

谷川　ボク、あんまり好きじゃないんだよ、本当は。でも、当時は選手がいなかったんですよ。ジェロムもいない、ホーストもケガしてる、ミルコがPRIDEに行っちゃった。ボブ・サップもどんどん弱くなっていく。そんな中で、それでもプロ格闘技を成立させないといけない。地方でお客さんを集めるためにはサップも必要だし。そういう感じだよね。

金子賢に関してはギリギリのところで勝負論があるカードを組んだからね

――てっきり谷川さんの嗜好だと思ってましたよ。

谷川　いやいや、違うって！　あのね、地方なんか行くとよくわかるんだけど、やっぱりボブ・サップが求められるんだよ。キャラクターが浸透しているから、入り口として凄くわかりやすいみたい。おそらくね、いまDREAMが地方大会をやったとすると、フェザー級の選手よりゲーリー・グッドリッジとかドン・フライを連れていったほうがウケると思うんだよね。日本人だと船木（誠勝）さんとかね。そういう時間差が凄く大切なんだよね。

――仮にDREAM高知大会があったとして「ビビアーノ・フェルナンデスが四国に来ます！」というプロモーションはキツそうですね（笑）。

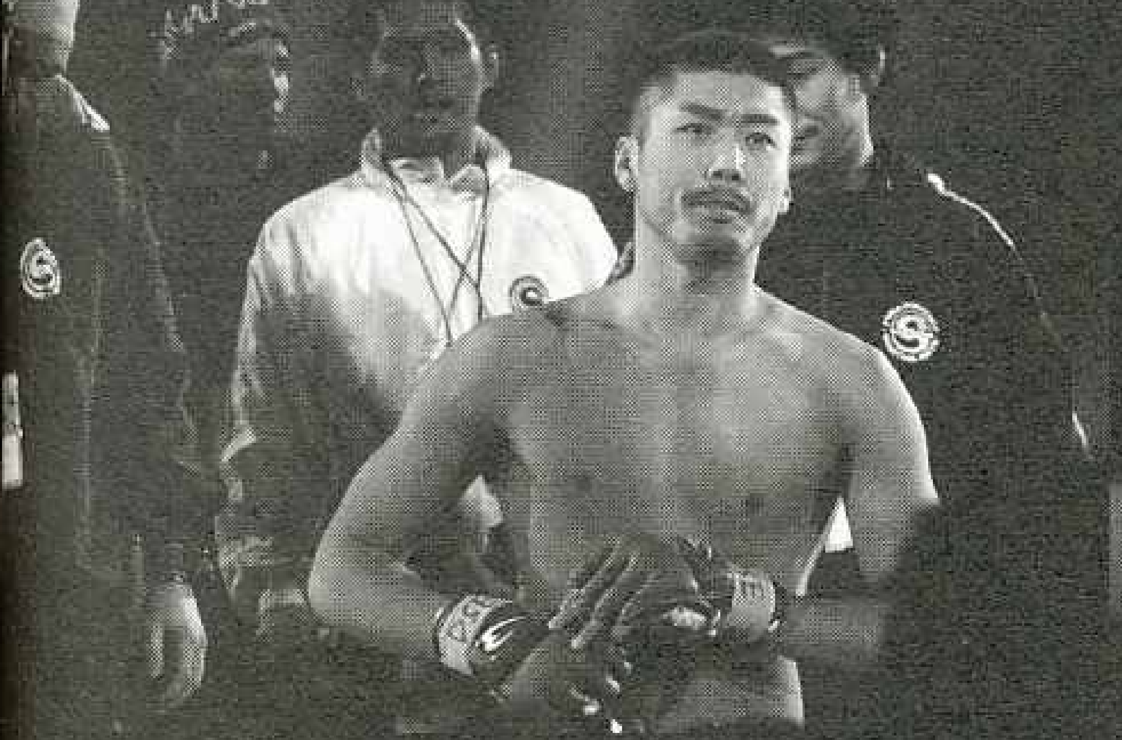
谷川　ビビアーノは強いのはわかるけど、これからの選手だからね。そういう意味ではさ、ハルクもまだまだ話題になってないし、物議を醸してないね。そんなに目くじら立ててないと思う。目くじら立ててるほど、総合は盛り上がってないでしょ。だって、もっと物議を醸していたときって、ボク自身、ファンの殺意的な何かを皮膚感覚で感じてたからね……（遠い目で）。

――ファンの殺意を感じてましたか！（笑）。ハルクが思ったよりも物議を醸していないのは、谷川さんが前面に出てないからじゃないかなって思うんですよね。

谷川　……あっ！　それはそうだね。そこはボクが記者会見に出て胸を張って宣言すればよかったなあ。「DREAMには『HERO'S』が足りない！」って。

――それは『HERO'S』を冒涜しているような気がします（笑）。

谷川　確かにハルクは笹原くんのカラーに合わないのかもしれないね。でもさ、笹原くんって、じつはボクよりそういうことをやるのが似合ってるんだよ。ここだけの話、感性的には笹原くんのほうがぜんぜんハル



金子賢の総合参戦は多大な物議を醸したが、過酷な練習の様子などから、逆に格闘技の厳しさを感じさせることとなった。

いまの時代は格闘家がユニクロ化したところが天下を獲ると思います

クだもん。

——そもそもハッスルの初代GMですし(笑)。

谷川 ボクなんかよりよっぽどおもしろいことを考える人だし。でも、笹原くんって本当に真面目に見えちゃうんだよなあ〜。というか、ボクのほうが格闘技に対して真面目だと思うけどなあ。

——…………(心の声=やれやれ)。

谷川 だって、沖縄でボブ・サップとステファン・ガムリンがボクの隣でウコンの掛け合いをしてるときに本当に気がめいったもんね。「いったい何をやってるんだろう……」って。

——ククククク。

谷川 だから、〝ボク=モンスター路線〟は大きな誤解だよっ。

——では、ハルクとモンスターの違いってなんですか?

谷川 ハルク単体だけの評価じゃなくて、『DREAM・9』はパッケージとしてすばらしいと思う。テレビ向けの企画があって、ライブやPPV向けのカードも揃ってる。本当に今回のDREAMはひさびさに好きなイベントなんだなあ。今回の大会は、今後のモデルケースになると思うよ。

——PPV向け、ライブ向け、地上波向け。3つの生命線をどう維持していくかという試みになるわけですか。

谷川 うん。それとさ、いま余裕がないから選手同士の潰し合いやってるじゃない。いきなりマッハvs青木をやったり。だから川尻くんもホントは魔裟斗とやるんだったらJZ戦は今回やる必要がないとは思うんだけど、今回対戦するわけでしょ?

——ギャンブルですよね。だからおもしろい。

谷川 先のドラマをちょっとだけ見せつつも、この場でそれが壊れるかもしれない勝負をやってしまう。それって凄くおもしろいと思うよ。まだDREAMが世間に届いてないから爆発はしてないんだけど、この路線で世間に届くようになって選手が充実してきたら、凄いことになるんじゃない。それでハルクがいつの間にかPRIDE無差別級GPみたいになってくるだろうし、ワンマッチも充実してくるだろうし。

——ただ、視聴率という点で気になってるのは、去年のK−1って昨今のテレビ事情からすればそんなに悪い数字じゃなかったじゃないですか。でも視聴率が落ちてるように見えがちだし、衰退ムードを感じてしまいますよね。

谷川 そうなんだよね。K−1WGPの決勝にしても、あのメンツで15パーセントを超えたからね。

——魔裟斗vs佐藤戦があったMAXより数字はいいんですけどね。

谷川 だから数字だけ見るとそう低くはないんだけど、やっぱりつい数年前があまりにもよかったからね。それと比べると落ちたという感じだろうね。でもさ、そもそも最近みんなテレビを観てないですよ。

——観てないですよねぇ。「我こそが世間」を自称する谷川さんはテレビを観てます?

谷川 朝のニュースは観るけど、夜はまったく観ないなあ。ほとんどDVDだもん。韓流ドラマ。

——あ、まだ韓流ドラマにハマってるんですか!?(笑)。

谷川 いやいや、韓流ドラマって世間にちゃんと定着してるよ。だって、どんどんいい作品が出てくるんだもん(うっとり)。

——谷川さんはテレビやDVDで格闘技は……。

谷川 もちろん自分たちが手がけているものは観るけど、プロレスも含めて他団体は一切観てないなあ。

——ダハハハハ! 観ましょうよ!

谷川 う〜ん。だから危機感があるんだよなあ。

——「ボクが観ない格闘技はおもしろいのかなあ」って?

谷川 たぶんね、関係者やファンが思ってる以上に世間は格闘技に興味がないんじゃないかなあ。それは格闘技にかぎらず、昔は与えられたものを観る時代だったけど、いまは自分から観たいものを取りにいく時代でしょ。その中で作り手たちが見せたいものを見せるのはホントに大変な作業なんだよ。もちろん、いい試合を見せていくというのは問われるし、もしくはブチ壊しちゃうかだよね。一番わかりやすい例でいうと、プロ野球がある一方で、WBCのような上位概念を作るみたいな感じ。

——上位概念を作って仕切り直す、と。

谷川 そこはどっかでやらないとダメでしょう。でも、それには凄く体力がいるし、実験するような余裕もないからね。だからいまはなんとか持ちこたえないとなって。あとはさ、仕切り直しという意味でいうと、いまの時代ってなんかユニクロって感じじゃない。安くて品質がいいものが求められる。ボクさ、じつはジーパンとかジャケットは最近全部ユニクロなんですよ。昔はもうちょっと高いのを着てたんだよね。でも、着てみるといいもんじゃんって思うんだよね。だって、このジーパンなんか、2000円ぐらいだよ! かっこいいでしょ?(身を乗り出して)。

——ユニクロンバ谷川ですか(笑)。

谷川 だから格闘技のイメージをユニクロ的にしないとダメだよね。格闘技は悪い意味でプライド高くやってる感じがする。格闘技は出費が多いから集めないといけないお金も多いんだけど。スポンサーやチケットの値段はこっちで決めるもんじゃない。そのときに、僕らがまだ00年前後のバブル期の感覚だとマズいなって。

——あの当時はあのセンスでよかったんでしょうけど。

谷川 だからDREAMはユニクロにならないと。もうちょっと気軽で、でもかっこいいなあっていう。そういうムードが必要だと思うんだよね。だって、最近はコンビニの弁当とかもうまいもんねぇ〜(しみじみと)。

——そんな眉間にしわを寄せて言うことじゃないですよ(笑)。

谷川 昔はコンビニ弁当なんて食えたもんじゃなかったけど、いまは凄く工夫されてる。安くておいしい。だからボクらもそういうことをやっていかないと。いまの時代は格闘家がユニクロ化したところが天下を獲ると思いますね。

——いまや格闘技を高級ブランドとして見せる時代じゃない、と。

谷川 そう。1万円が10万円になる時代はもうヒョードルvsミルコ戦で終わってる。見栄を張ったものにお金を出す人が少ないんだからさ。

——なるほど。石井館長には『kamipro』もエルメスの広告を取るようになってと言われたんですけど。

谷川 いまは絶対にユニクロだよ! 世間は胸を張ってユニクロだよ!

——ああ、FEGはエルメスの広告はいらない、と。

谷川 『kamipro』にはとても似合わないって言ってるの!


【09年5月8日/都内・ウラク青山にて収録】

——今回は、アメリカ在住の町山さんに

(貞治)さんと長嶋(茂雄)さんの"ON砲"

労者でもあった、と。

——「俺が注射を打った」というのは、ど



元大リーガーがDREAMに仰天登板!!

“ステロイド超人”の破天荒人生に迫る!!

カンセコとは何者か?

アメリカ在住の映画評論家&コラムニスト

町山智浩

いま、最も影響力のある映画評論家であり、アメリカ在住の町山智浩氏が、今回は『DREAM.9』に緊急参戦する元大リーグの“ステロイド超人”こと、ホセ・カンセコの破天荒すぎるトンパチ人生を激白! いったいカンセコとは何者なんだ?

聞き手/真下義之　写真協力/DREAM

かつての王・長嶋級のスーパースターが暴露本出版で球界の裏切り者ですよ

——今回は、アメリカ在住の町山さんにDREAM参戦が決定した元大リーガーのホセ・カンセコについてうかがいたいんです。

町山　その試合に出ることからもわかりますけど、いまカンセコってお金が全然ないんですよ！

——やっぱりそうでしたか⁉

町山　まず、カンセコって離婚を2回経験して、どっちも8億円くらい払ってるんですね。でも、大リーグ時代の契約金なんて破格の金額だったし、奥さんに慰謝料を払っても資産は半分残ってるはずでしょ？

——普通はそうですね。

町山　しかも二人目の奥さんと離婚したときは、慰謝料に充てるために『JUICED』（"クスリ漬け"の意味、邦題は『禁断の肉体改造』ベースボール・マガジン社刊）という大リーグのステロイド使用に関する暴露本を出したんです。その『JUICED』も大変なベストセラーになったし、印税で数億円はもらってるはずだから、お金がないわけはないんだけど……。

——元スーパースターだけに浪費グセが抜けませんか（笑）。

町山　最近も「カンセコが自宅を銀行に差し押さえられました！」ってニュースが流れてましたから（笑）。

——そんなカンセコは、80年代のスーパースター時代は、日本でたとえると、どのぐらい偉大な選手だったんでしょう？

町山　この人とマーク・マグワイアは王（貞治）さんと長嶋（茂雄）さんの"ON砲"でしたね！

——王・長嶋級のスーパースター‼

町山　オークランド・アスレチックス時代、カンセコはマグワイアとの"バッシュ・ブラザーズ"という名コンビで、打順が続いていたんです。この2連砲でホームランをバカスカ打ちまくりましたから、完全に王・長嶋状態でしたね。

——国民的スーパースターというか。

町山　88年にはMVPも獲ってますし、40ホームラン＆40盗塁なんていう前人未到の記録も作っている正真正銘のウルトラスーパースターです。カンセコたちは80年代にアメリカの野球ブームを再燃させたんです。当時、プロ野球が落ち目でフットボールのほうが人気あったのを、もう一度野球に引きずり戻したんですよ。

——野球というジャンルを復興させた功労者でもあった、と。

町山　だってカンセコとマグワイア、さらにサミー・ソーサというスターまで登場するわけでしょ。この3人は揃って怪物で、3人とも年間40本近くホームランを打ちまくったから、毎日ホームランだらけですよ（笑）。投手戦みたいなシビアな野球とは違うから、野球を知らない人や、頭の悪いアメリカ人が見ても単純明快でおもしろいわけですよ。

——そんなカンセコが、先ほども話に出たように後年はステロイド使用を告白した暴露本を書いて一大センセーションを巻き起こしたわけですが……。

町山　その『JUICED』は、彼と一時代を作ったマグワイアをはじめ、ジェイソン・ジアンビ、ラファエル・パルメイロ、イバン・ロドリゲス、ファン・ゴンザレスといったMVP経験のある選手を「みんなステロイドをやってたよ！」と告発して、さらに「マグワイアには俺が注射を打った」と書いてるんです。暴露本にありがちな伝聞じゃなく、本人が「俺もやってた」と言ってるんだから凄いよね（笑）。

——「俺が注射を打った」というのは、どういうことなんでしょう？

町山　「マグワイアとは互いのお尻にステロイド注射を打ち合った」と書いてるんです。野球場のロッカールームや便所で、何度もやったらしくて。

——スーパースター二人がお尻を見せ合ってましたか（笑）。

町山　ちょっとホモっぽいよね。筋肉モリモリの二人だから、ホモ用語でいう"ガチムチ系"ですよ（笑）。

——ダハハハ！　「ステロイドを打ち合って、プロ野球革命を成しとげた」という種明かしをしてしまった、と。

町山　まさに種明かしです。でも、そこからは大変ですよ。大リーグのコミッショナーから連邦議会まで含めた国政レベルの大問題になっちゃって。

——連邦議会まで⁉

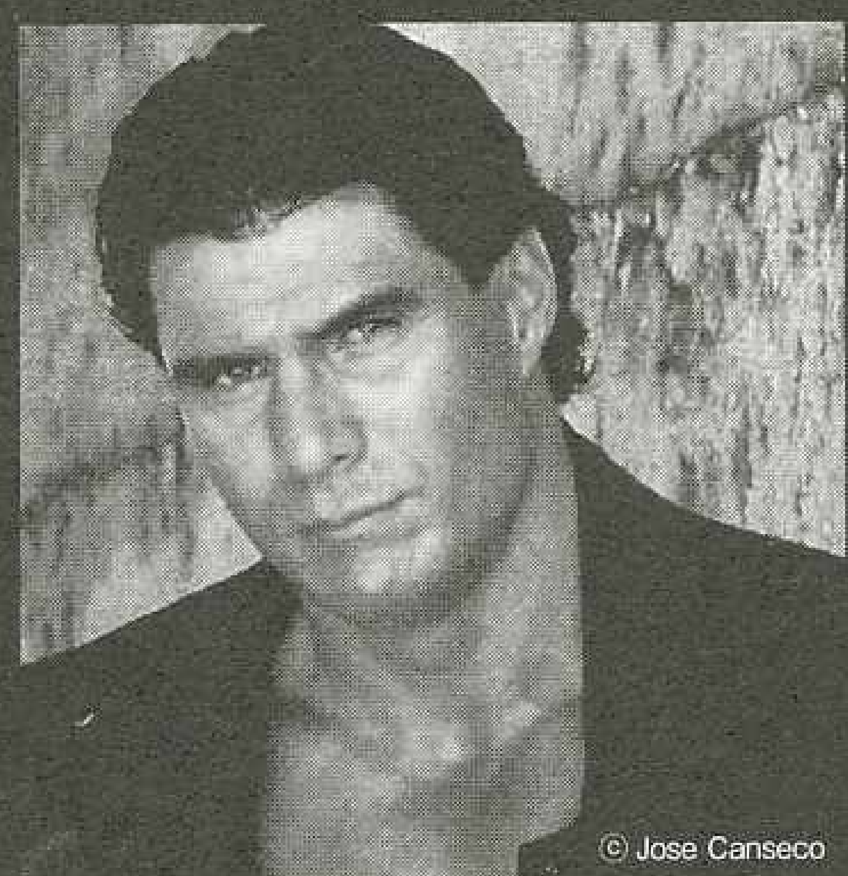
町山　アメリカのコミッショナー制度は、国家がうしろ盾なので最終的に議会に選手を呼ぶ公聴会まで開かれましたから。

——じゃあ、ファンはさぞや大ショックを受けたでしょうね。

町山　最初は、「ウソだろ？」とか「友だちを売りやがって！」とか「売名行為じゃねえか？」とヒステリックにカンセコが叩かれたんです。でも、ホントの話だったから、だんだん深刻になってきて。名指しされた選手たちは揃って否定はしましたけど。

——でも、カンセコはその本で大金を手に入れてますから、球界からは鼻つまみ者ですか？

町山　完全に裏切り者です。そこはカンセコが「生活に困って出版した」という部分も絡んできますし。そもそもカンセコって選手生活の後半は全然ダメだったんです。故障ばかりで試合には出ないけど、



"驚愕"のカンセコヒストリー‼

1964年　キューバのハバナ郊外で双子の弟として誕生。その後、親戚とアメリカへ亡命。

1982年　ドラフトでオークランド・アスレチックスから指名され、入団。

1985年　年頭にステロイド注射を初体験する。この年にメジャーリーグへ昇格。

1987年　49ホームランを記録。同じチームのマーク・マグワイアとのコンビ"バッシュ・ブラザーズ"で一気にスター街道へ。

1988年　史上初の40ホームラン＆40盗塁を記録。アメリカンリーグMVPを獲得。最初の結婚、のちにDV騒動を巻き起こす。

1991年　「マドンナと不倫関係」に。44ホームランでホームラン王に。前妻と離婚。

1992年　試合中にテキサス・レンジャーズへトレード宣告。以降、低迷時代が続く。

1996年　巨乳ウェイトレスばかりのレストラン『フーターズ』でナンパしたジェシカと再婚。

2001年　現役引退。10月にナイトクラブで兄と一緒に旅行客と喧嘩騒動を起こす。

2005年　「ステロイド使用」を告白した暴露本『JUICED』を出版。アメリカ球界は大激震‼

この人がおもしろいのはステロイドを「やってよかった！」と主張しているとこ

契約金だけはバンバンとっていく。後年の清原（和博）状態というか。

――なるほど（笑）。

町山　しかも、去年は暴露本の第2弾『Vindicated』（「汚名を返上した」という意味）って本も出したんですよ。その本は前回の本の騒動を踏まえて、「俺が言ったとおりだろ？」みたいな内容に加えて、いまヤンキースでバリバリの〝Ａ・ロッド〟（アレックス・ロドリゲス）もステロイドをやってるよ」と暴露したんです。

――今度は現役のスーパースターまで告発しちゃいましたか。

町山　ちなみに、Ａ・ロッドを叩いたのはカンセコの二人目の奥さん（ジェシカ・カンセコ）がロッドと寝たから、って理由らしいですけど（笑）。

――ダハハハハ！　暴露本を積み重ねる方法論は日本のプロレスでいうミスター高橋さんも連想させますね。

町山　ああ、似てるかもしれない。ただ、カンセコがおもしろいのはステロイド自体は「やってよかった！」って主張をしてるんですね。

――ステロイド礼賛型というか。

町山　「使い方さえちゃんとすれば、問題ないよ！」というポジティブな姿勢なんです。でも、ステロイドはパーセンテージは低いけど精神的な副作用が出る場合もある。二人目の奥さんのジェシカによれば、カンセコも副作用が出てたみたいだし。

――そのジェシカさんのほうもカンセコに対する暴露本を書いたみたいですね。

町山　『ＪＵＩＣＥＤ』をもじって『ＪＵＩＣＹ』って本なんですけど（笑）。これは『ＪＵＩＣＥＤ』に書かれてたことを奥さんの立場から、「どの程度、ホントなのか？」と対応させた本なんです。

――本の答え合わせみたいな感じで。

町山　カンセコって何が人気の秘密だったかというと〝顔〟だったんです。とにかくハンサムで「ハリウッドスターの顔をした野球選手」とまで言われてて。それが一番の売りだったんだけど、奥さんの暴露本には「中身はカラッポで、どうしようもないバカ」ってことが徹底的に書かれてる。

――ダハハハハ！　あと性生活にまで踏み込んで書かれてるみたいで。

町山　「セックスのテクニックが全然なくて、一人よがり」とかね（笑）。しかもカンセコはベッドルームに大きな鏡を置いて、女性をバックからヤリながらボディビルのポージングをするんだって！

――セックスしながらポージング！（笑）。

町山　女性をバックから攻めてる筋肉モリモリの自分を鏡で見てウットリするらしいです。これはクリスチャン・ベール主演の『アメリカン・サイコ』（00年）って映画にまったく同じシーンが出てきますけど、ホントにやってるヤツがいるとは思わなかった！（笑）。

――ダハハハハ！

町山　ただ、これは誰でもそうですけどステロイドを打つと精子が全部死んじゃうんです。だから金玉がもの凄く小さくなっちゃう。反対にバットは巨大になるみたいですけど（笑）。

――ボールは小さくなるぶん、バットは巨大になりますか（笑）。

町山　しかも避妊の必要がないから、カンセコは３００人以上の女と生でヤリまくって、何度も家に病気持って帰ってたそうです（笑）。そんなカンセコもジェシカと子どもを作ったときは、何ヵ月か精子が普通量に戻るまでステロイドを抜いたらしいけど、禁断症状でうつ病みたいになっちゃった。もともとカンセコは精神的に不安定みたいですけど。

――クスリに頼るぐらいですからね。

町山　あと、とにかく嫉妬深くて大変だったみたいですね。一人目の奥さんもＤＶが原因で離婚して裁判になって損害賠償してるんです。カンセコは奥さんを車で追っかけて、フリーウェイで追突して殺しかけたんだから！

――ホントにムチャクチャですね（笑）。

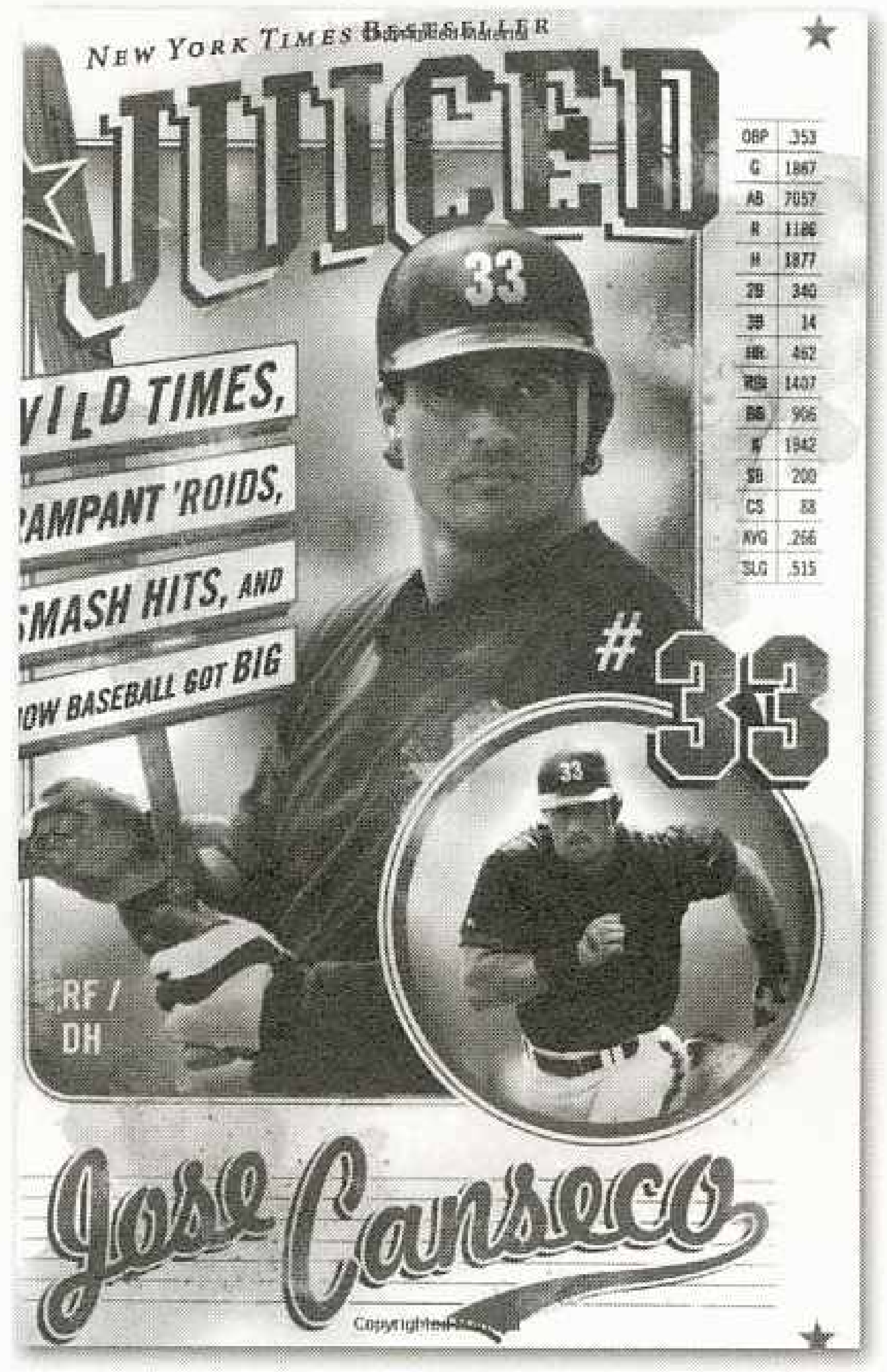
町山　ただ、カンセコはお父さんが野球バカで息子に野球のことしか教えなかったみたいで。ジェシカの暴露本によると「ホントになんにも知らない」って。会話も全然なくて、ただヤルだけ。でも、ジェシカはジェシカでカンセコに「その鼻大きすぎるな」とか言われたら、気に入られようとしてバンバン整形手術しちゃってね（笑）。

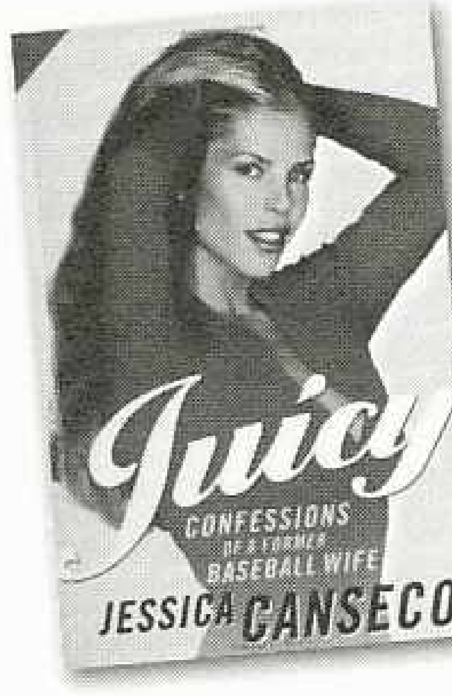
――ジェシカもおかしいですね（笑）。

町山　でも、カンセコはカンセコでメチャクチャ浮気をしてますから。結局、ジェシカも愛想がつきてトニー・ゴンザレスっていうフットボール選手（ＮＦＬカンザスシティ・チーフス）と一度浮気をするんですよ。それを知ったカンセコは頭にきて……このとき彼はサメ狩りに凝ってたんですけど、サメを狩るためにストリートスイーパーってショットガンを持ってた。12連発の回転弾倉がついてて、これ一丁あれば街中の人間を皆殺しにできる。つまりストリート（街）をスイープ（掃除）できるという。

――ダハハハハ！

町山　それを持ち出して、奥さんを撃ちに行くのかと思いきや、自殺しようとしたらしいんです。でも、自殺するならスト



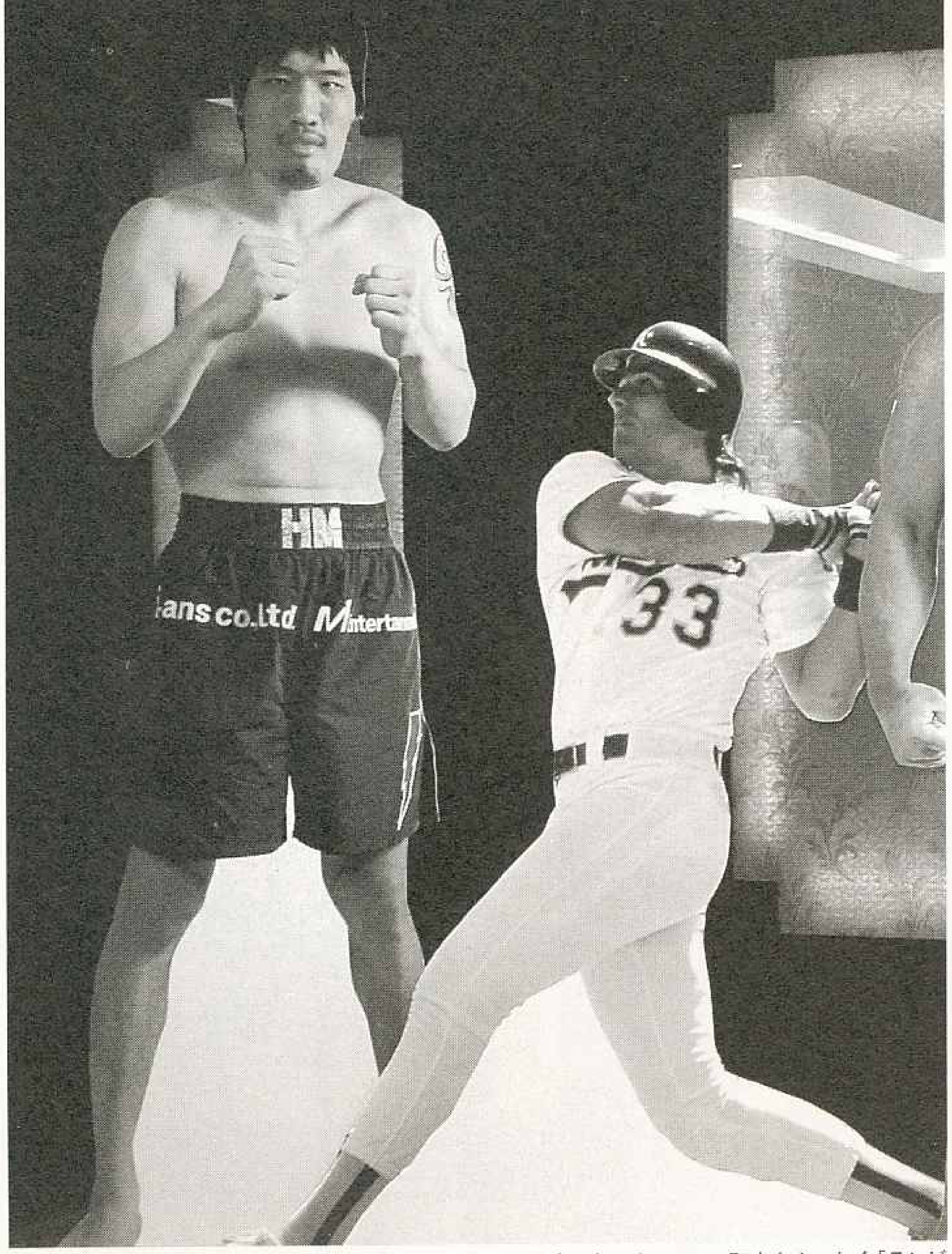




全米を震撼させたカンセコの暴露本『JUICED』（写真上）は破格のベストセラーに！　序章から「痛いのは最初だけ」とステロイドを肯定しまくる凄まじい内容だ。さらに元妻ジェシカがカンセコを告発した下半身ネタ満載の『JUICY』（写真左下）まで出版！　だが、じつは一番凄いのは『JUICED』の日本版（『禁断の肉体改造』、写真右下）がベースボール・マガジン社から出ていることだって！

リートスイーパーいらないじゃん！
ヤな人だと思われてますから。だから、い
天荒なトンパチ野郎、カンセコの試合が、
――う～ん。うっかり慢心しちゃった、と

リートスイーパーいらないじゃん！
——普通の拳銃で充分ですね（笑）。
町山　あとおかしかったのは、もの凄く高級なコールガール派遣会社からカンセコの携帯に電話があったとき、たまたまジェシカが出たらしいんだけど「どうせウチのダンナがお得意様なんでしょ！」って怒鳴ったら、「いや、アンタのダンナは最低のクズだ」と。「ウチのコールガールを呼んでおいて、セックスのあと『こんなハンサムなスーパースターとヤレたんだから、金よこせ』って逆に金を要求してる。いったいどういう神経なんだ？」という抗議の電話だったらしいです（笑）。
——ダハハハハ！　いや〜。最初に考えていたカンセコ像とはだいぶイメージが変わりました。
町山　アメリカではそういうムチャクチャな人だと思われてますから。だから、いまのカンセコは……日本でいう羽賀研二みたいなもんかなぁ。
——いまのカンセコは羽賀研二!?
町山　顔はいいけど、ロクでもないことばかりやってて。口を開くと薄っぺらい話しか出ないから（笑）。
——アメリカ版〝誠意大将軍〟ですか（笑）。
町山　カンセコは『シュールリアル・ライフ』ってテレビ番組にも出てるんですけど、これは売れなくなった芸能人を集めて集団生活をさせるリアリティショーなんです。元エマニエル坊だったオジサンとか売れなくなったラッパーとか。そのときもカンセコは「俺はモテモテだぜ！」「俺とヤラないか？」みたいなことしか言わないし。
——懲りない人ですねぇ（笑）。そんな破



とにもかくにもゴールデンタイムの起爆剤であることは間違いないカンセコ。町山さんいわく「テレビに出るのにいきなり迷彩服を着たり、乳首スケスケのシースルーシャツを着たり」する突き抜けたファッションセンスにも大注目だ！

カンセコとは何者か?

顔はいいが、ロクでもないことだらけ。いまのカンセコは羽賀研二状態です

天荒なトンパチ野郎、カンセコの試合が、日本のゴールデンタイムで放送されるんですけど。
町山　ま、ダメになった人が格闘家やプロレスラーになるってのは日本もアメリカも典型的なパターンですけど。一応、その話はアメリカでも報道されましたよ。
——アメリカでも話題になってますか？
町山　いや……、じつはこういうことを過去に何回もやってる人なんで、冷めた対応がほとんどですね。「またやるの？」って感じで（笑）。
——確かに、カンセコは最近もボクシングの試合に出たみたいですが。
町山　エキシビションマッチみたいな試合に2回出てますね。最初は、去年の5月にヴァイ・シカヘマという人とカジノの街アトランティックシティでボクシングの試合をやったんです。賞金が300万円くらいかかってたんで、八百長じゃないとは思いますけど。
——ガチンコなことは間違いない、と。
町山　相手は格闘技のプロじゃなくて元アメフト選手。でも、そんな相手とやって1ラウンドでノックアウト負けですよ！
——元アメフト選手に完敗!?
町山　でも、カンセコって凄い巨人（身長188センチ、体重109キロ）でしょ。身長だってカンセコのほうがデカいし、体重だって違うのに、下からパンチを打たれてアッサリ負けてるんだもん！　これは『YouTube』でも観れると思います。
——う〜ん。うっかり慢心しちゃった、と信じたいですけど（笑）。
町山　カンセコは、「俺はクンフーもやってるし、ムエタイやテコンドーの経験もある。黒帯だって持っているんだ！」みたいな威勢のいいことも言ってて、そのスパーリング映像も『YouTube』にあるんですが……スパーリングでさえ負けてるの（笑）。
——ダハハハハ！　そんな映像を公開しているのは精神が図太いのか、なんなのか（笑）。
町山　さらに、今年の1月には『セレブリティ・ボクシング』というテレビ番組に出たんです。これは昔、アイススケートでライバル選手の脚を折ろうとした事件（ナンシー・ケリガン襲撃事件）で知られるトーニャ・ハーディングとかが出てくるんですね。
——キワモノ系の有名人が出てくる、と。
町山　その番組でもカンセコはボクシングをしたんですが、相手は日本では知られてないけど、ダニー・ボナデュースという元子役スターだったんです。70年代の『パートリッジ・ファミリー』というドラマでバンドをやりながら移動する大家族の話で子ども役をやった人。でも、いまは50歳くらいのアルコール中毒で何度も精神病院に入ってるダメダメな人なんです。そのアル中と闘って、やっと引き分けですよ！
——ダハハハハ！　手加減しすぎた……と信じたいところですけど（笑）。

町山　体重差で100ポンド（約50キロ）もカンセコが重くて、映像を観ると巨人と子どもが闘ってるみたいなんですよ。それでも引き分けてるんだから（笑）。

――いや～。チェ・ホンマンとの試合はいろんな意味で見逃せない試合になりそうですねぇ。

町山　絶対負けますよ！　エキシビションとはいえ、その二つの試合もお金がかかってたから真剣にやってたはずですけど。……でもね、カンセコは一度、ケンカに勝ったことありますよ！

――おっ！　希望が生まれそうな話ですね。

町山　日本のプロ野球界に行ったこともある双子の兄（オジー・カンセコ）と一緒に01年に観光客とケンカしてるんですけど、これは勝ってます！

――観光客には勝ってますか。

町山　2対2でケンカしたみたいですけど、観光客の一人は鼻の骨を折って、もう一人は唇を引き裂かれて20針も縫ってます（笑）。

――ぜひ、そういう暴れっぷりを見せてほしいですね（笑）。ちなみに、今回の『スーパーハルクトーナメント』には当初、イベントの象徴としてあのハルク・ホーガンを呼ぶアイデアもあったみたいなんです。

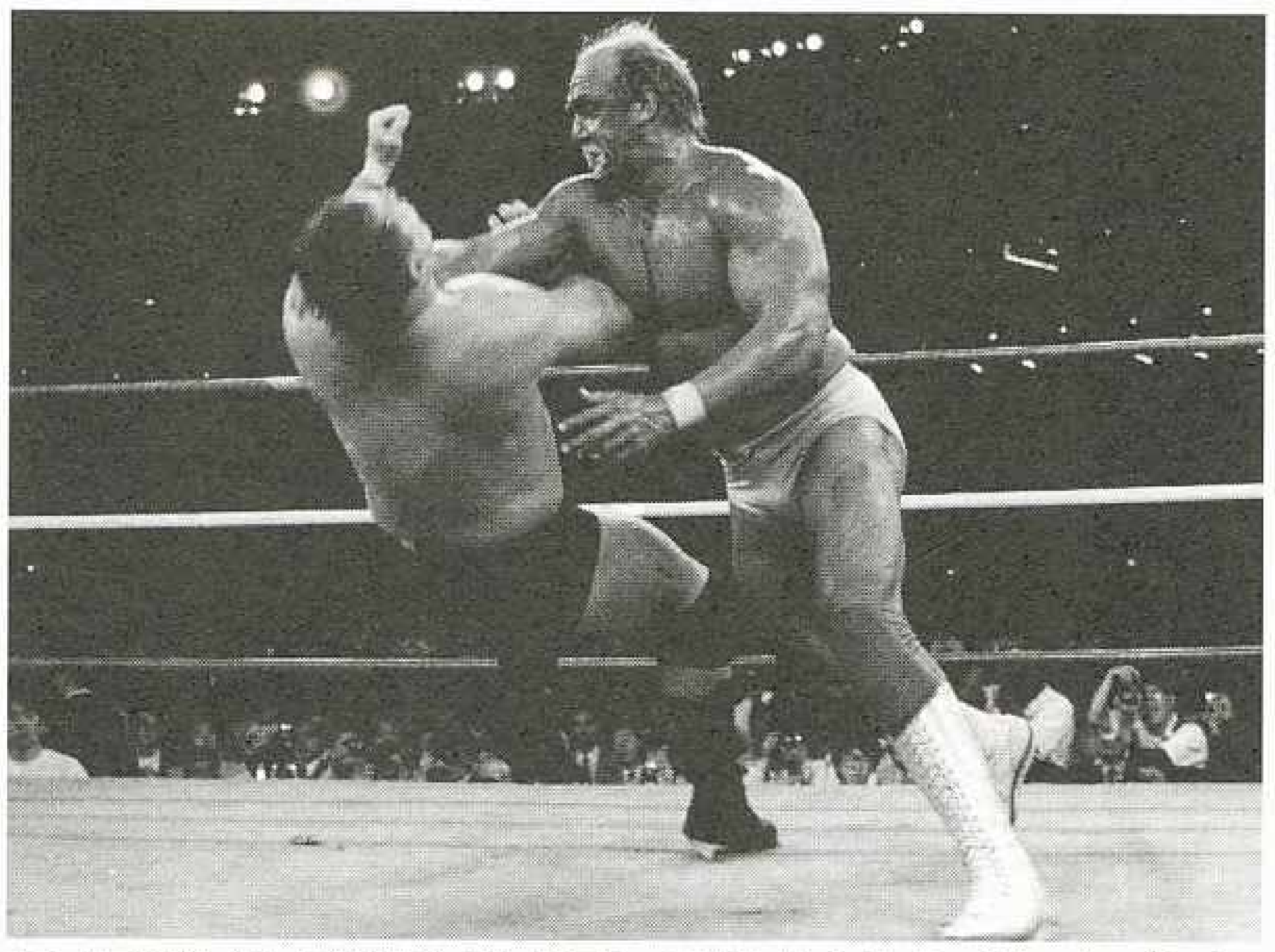
町山　あ、ホーガンはアメリカで一番大変なことになっている人ですよ！

――ホーガンはもっと大変ですか（笑）。

町山　ホーガンはこの前、テレビで「俺はO・J・シンプソンの気持ちがよくわかる」と失言して大問題になってるんです。「女房をブッ殺してやりてぇ」って意味だから（笑）。じつは、ホーガンの奥さんって息子の友だちと付き合ってるんですよ。

――女房が息子の友だちと浮気を⁉

町山　ホーガンは怒り狂ってるんだけど、ホーガンのほうも若い女性とデキてるからしょうがない（笑）。さらに奥さんは凄い額の資産分与を要求しててドロ沼になってますね。しかも娘のブルック・ホーガンを主体にしたドキュメンタリー番組もやってて、ドロ沼裁判をやってる夫婦のあいだを行き来してる様子が毎週放送されたりして。


カンセコ同様、押しも押されもせぬ"リアル・アメリカン"だったハルク・ホーガンもいまやスキャンダルまみれの"汚れた英雄"状態！『スーパーハルク』には間に合わなくとも、日本の各プロレス団体にとっては超人招聘のチャンス到来かもしれない。

――はぁ～。じゃあ、アメリカ人にとってホーガンもカンセコばりに「しょうがない人」って感じですか？

町山　……いや、そのレベルを超えちゃってます。じつは07年にホーガンの息子が酔っぱらって交通事故を起こしたときに一緒に乗ってた友人が、頭の前頭葉の部分が丸ごとなくなっちゃったんです。おでこがゴッソリえぐられちゃってる感じなんですけど。

カンセコとは何者か？

アメリカでのホーガンの評判は最悪。トーナメントにも出たいんじゃない？

――そんな大変な事態に……。

町山　前頭葉がないというのは、もう意思がない、植物人間に近い感じで。その状態でテレビにも出た。それでも非難ごうごうだったんですが、大問題になったのはホーガンがプライベートの電話で息子に「アイツ（被害者）はそんなにいいヤツじゃなかったから、自業自得だな」みたいに言ったテープがテレビで流れちゃったんです。

――うわ～。それはマズいですね。

町山　交通事故で警察に捕まってた息子が警察からホーガンに電話したんですけど、それを警察が傍受してた。そこまでは法律的にはいいんですけど、その音声が警察からマスコミに流されちゃって。

――まさか流されるはずはないと思ったんでしょうけど。

町山　とにかくこの一件でホーガンは「最低の野郎だ！」とメチャクチャ印象悪くなった。しかも、廃人同様になったその友人をホーガンの息子は「一生面倒を見なくてはならない」という判決まで出てる。ただ、ホーガンの息子っていい歳ですけど、仕事なんかないですよ。だからホーガンはこの一件で重い十字架を背負ってしまった。……まぁ、奥さんがホーガンと離婚しようとしてるはわかるんですよ。結婚してたら、この事件に巻き込まれちゃいますから。

――ある意味、自分を守るための手段というか。

町山　奥さんはすでに息子と縁を切ってますが、そんな状態で息子の友人と付き合ってるのも凄いですけど。

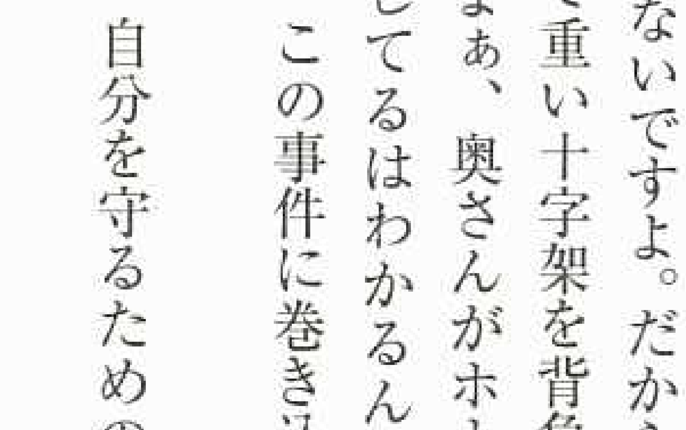
――ホントに異常な家族ですねぇ。

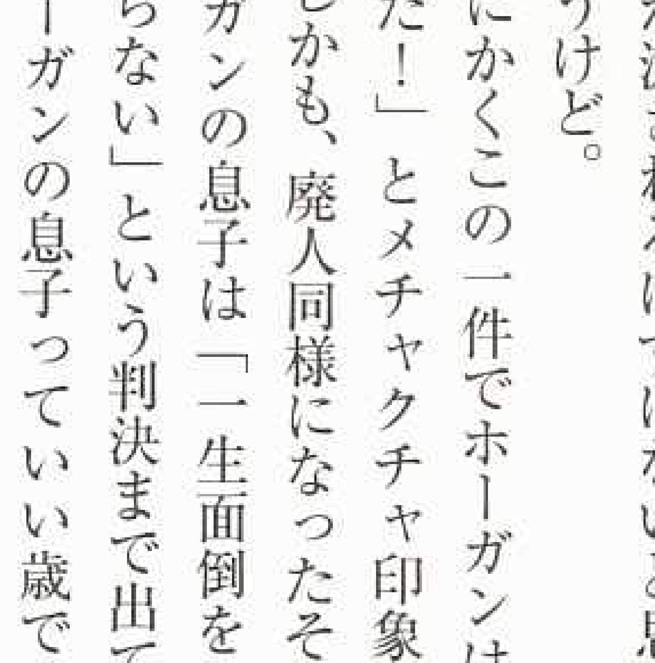
町山　ホーガンがインタビューで「こんな状況はウソみたいですけど、ホントなんですか？」と質問されて、「こんなメチャクチャな状況がヤラセなわけねぇだろ！」とブチキレてましたけど（笑）。……だから、むしろホーガンのほうが、そのトーナメントに出たいんじゃないですか？

――そこまでお金に困ってますか。じゃあ、DREAMはホーガンに試合オファーを出してもよかったかもしれない。

町山　きっとヤル気マンマンで引き受けると思いますよ！（笑）。

【09年5月6日／国際電話にて収録】


まちやま・ともひろ■1962年7月4日、東京生まれ。映画評論家、コラムニスト。95年に『映画秘宝』を創刊。97年に渡米し、現在はカリフォルニア州バークレー在住。映画のみならずアメリカ文化全般を日本に発信し続ける。カンセコ話をはじめ、驚愕するしかないアメリカのステロイド事情を描いた最新著書『USAスポーツ狂騒曲　アメリカは今日もステロイドを打つ』（集英社、写真右）も絶賛発売中！





今頃になって携帯サイト『kamipro Move』開設記念

有料会員限定 公開イベント

シャキーン、シャキーン!!

kamiproの乱 2009

〜スーパーハルクシネマ選手権〜

日時 6月20日(土)/ 開始予定時刻 15:00

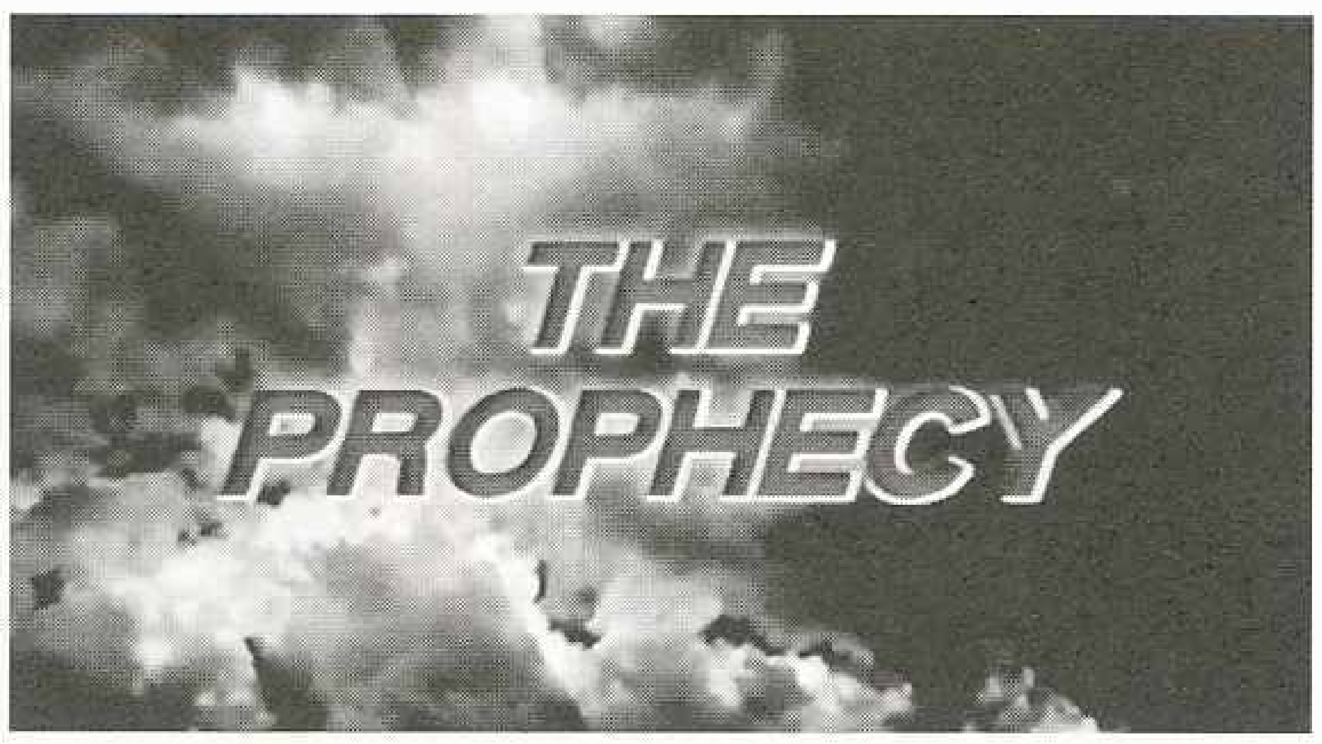
会場 WinPa(東京都千代田区三番町) ※(株)エンターブレイン 社屋内 イベントスペース

イベント内容

あくまでも予定です。 マーク・ハント vs ジェロム・レ・バンナのようにひっくり返るおそれもあります。



菊池成孔による映画『ザ・プロフェシー』とは何か?



話題騒然の船木誠勝監督作品『ザ・プロフェシー』の紹介を交えながら、音楽家にして文筆家の菊池成孔氏がその作品像に迫る!!

高橋ターヤンの格闘馬鹿シネマ講座

映画ライター・高橋氏が収集した格闘技系バカ映画を文化系某レスラーがメッタ切り!

その他、スーパーハルクな企画を用意!!

参加要項 詳しくは携帯サイト『kamipro Move』をご覧ください。
アクセス方法は119ページを参照。シャキーン、シャキーン!!

なお、当イベントは『kamipro Move』有料会員の中で、参加のご応募をいただいた方の中から抽選にて150名様をご招待いたします。

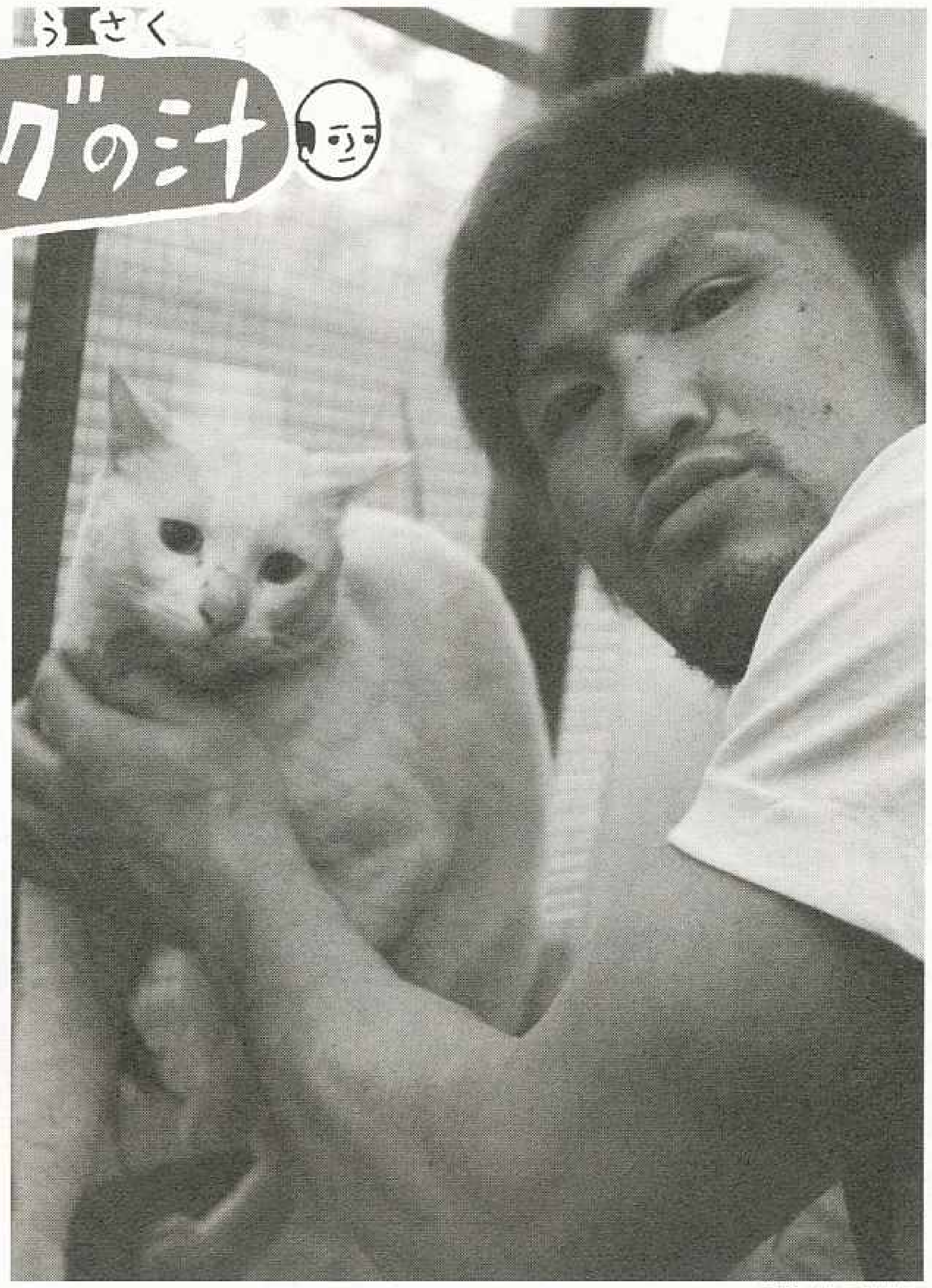
いつまで夢を見てるんだ? リアルなイベントにご期待ください!!

第42回

締め切り後の5.10修斗がとても気になります

花くまゆうさく

豆リングの汁



撮影／山口比佐夫

今年は、アブダビコンバットある年ですが（日本人はK太郎選手に期待）、そのアブダビでは学校の正式な教科に柔術を導入したらしい。理想は9歳から13歳の子ども全員に柔術やらすことだそうで、王子は本気だ。やっぱり最高だよ、王子！

最近観たのは、DEEPと『戦極』。パーフェクト勝利の菊野選手凄かったね。UFCであんな勝利したらセンセーシナルだなぁと夢見てしまう（話はズレるが、UFCはいまの日本でなんか大会しなくていいと思う。それより放送面を強化してほしい）。

青木vsシャオリンやらす気がないなら、青木vs菊野戦観たい。

『戦極』はコリアンゾンビ（ジョン・チャンソン）がとてもいい！　思ったより全然寝技うまいし、ハートも強くて好印象。

ノリノリの小見川選手は、度を超えたネコ好きを公言してから一皮剥けた気がする。機敏な動きがネコのようだし、ネオ柔道ではなくネコ柔道でいいんじゃないかな、キャッチフレーズ。

サントスvs横田戦、上になったらマウントやバックまでキッチリたどりつき一本狙うのと、上になっても相手のガードの中でコツコツパウンドのみ。後者はホントにつまらない。



Hanakuma Yusaku
◎清志郎のことで、気が動転してます。

4・16DEEP後楽園大会で、長井憲治選手に2ラウンド、TKOで勝つことができました。応援ありがとうございました！

ひさしぶりの勝利だったんで、勝った喜びよりも、ホッとしたよね。長井選手も俺のこと凄く研究してたし、俺は20年近く現役やってるだけあって、研究材料の試合ビデオだけはたくさんあるからね（苦笑）。スタンドではカウンターを狙ってきたし、テイクダウンしようとしても、コーナーに逃げて倒しにくくするし、倒すのに苦労したよ。

あと、1ラウンドはスタンドでいいの一発もらっちゃったし、5分2ラウンドだから、そういう一つのミスが命取りになるから、ホントに気が抜けないよ。

最後は初めてパウンドで勝ったんだけど、猪木ーアリ状態とかガードポジションからのパウンドは、あれ打撃のフェイントを使ってるんだよ。最近UFCのDVDとかたくさん観てるからさ、いろいろ取り入れてるんだよね。やっぱり俺も生き残っていくためには、モデルチェンジしていかなきゃいけないからね。

モデルチェンジといえば、今回、初めてDEEPに上がるのを機に、俺を応援してくれる人たちがさ、「いまは個性の時代だから、金ちゃんもイメチェンしなきゃダメだ」って言うから、ちょっとイメチェンしてみたんだよね。

いま、プロでやってる選手はみんな強いけど、その中で生き残るのは個性が強い選手だからって。「自演乙を見ろ！」とか言うんだよ（笑）。でも、俺がいまさらコスプレするわけにいかないからさ、結局、日焼けして、フードつきのガウンを着て、ショートタイツをトランクスにして、髪もラインを入れて短く切ってね。周りからは「若返った」っていう声が多くて、まあ、良かったかなと思うんだけど、最初はね「坊主の金髪にしろ」って言われてたんだよ（笑）。

俺が金髪なんて絶対に似合わないじゃん。何人か知り合いの美容師さんに聞いても「黒のほうがいいです」って言うしさ。でも、その人は「金髪にしろ、金髪にしろ」って言うから、どうせ金髪にするなら口ひげ生やして上田馬之助さんみたいになってやろうかと思ったんだけどね（笑）。

あと、その人と寿司屋に行ったとき、偶然、明石家さんまさんに会ったんだよ。さんまさんとは全然面識なかったんだけど、けっこう格闘技観てるらしくて、俺のこと知っていてくれてね。いろいろ話をさせてもらったんだけど「クートゥアーっていくつなん？」とか聞いてくるから、相当詳しいよね。

で、さんまさんと話してるとき、一緒に行った人が「金原さんはいまイメチェンを考えてるんですよ」とか言ってさ。そしたらさんまさんが「インパクトを与えるなら、パーデンネンの格好でやったらええやん」って言うんだよ（笑）。

「ホントにいいんですか？」って聞いたら「ええよ、ええよ」っていうからさ、今回はやらなかったけど、今後、さんまさん公認のパーデンネンスタイルで俺が登場することがあるかもしれないよね（笑）。


まあ、俺は応援してくれる人がいっぱいいるんで、そういう人たちの期待に応えられるように頑張りたいよね。38歳だけど、まだまだ身体は動くからさ。

次は6月30日にまたDEEPが後楽園ホールであるんで、そこに出たいね。次はDEEPのトップクラスの選手が相手になりそうだし、なんとかベルトを巻きたいんで、また応援よろしくお願いします！

金ちゃんのどこまでやるの？

第35回 パーデンネンに変身の巻

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中!
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/



非"空手バカ一代"世代を考える

"K-1ファイターになるために"

初代RISE70キロ級王者

日菜太

今年の日本人トーナメントでK-1初出場をはたした日菜太。
必殺のミドルキックで前年王者の城戸康裕を下し、
早くも注目ファイターとなった。魔裟斗引退後の来年以降、
残された日本人ファイターはいかにしてK-1で熱を生み出して
いけばいいのか。日菜太の言葉から探ってみたい。

聞き手／ジャン斉藤　撮影／丸山剛史　試合写真／乾晋也

K-1ファイターになるために

「サダハルンバ変態座談会をやるのがいいじゃないか、と」

「谷川さんの半生を聞くのは」

『kamipro』を刊行するにあたり毎月のように編集会議を実施するわけだが、今回の会議でも各編集部員がK—1企画をそれぞれ持ち寄って話し合いが行なわれた。ところが、どういうわけか最終的には「黒魔術系企画」にたどり着いてしまうのだ。んあ〜。そんなにサダハルンバのカラーが好きか、みんな。

確かに谷川さんはおもしろい。個人的にも凄く興味がある。だけど、谷川さん個人は、もういいんじゃないかなあ。その理由を書くと長くなるから省く。マット界の現状を探るためのフィルターとして、サダハルンバにご登場願うのは凄くよくわかるんですけどね。

という話を本誌次長の松林に振ったら「同感。サダハルンバ個人はもういい。それよりやっぱり館長なんだよなあ」と、石井教義氏の〝カズヨシ・イチバン〟（＝K—1）なエピソードを延々と語ってくれるのだった。ちなみに松林は空手バカ一代直撃世代。〝空手フェーズ6〟という感じで近代格闘技文化を考えるなら隔離したほうがいい部類の人間だ。

要するに、『kamipro』およびその周辺は、90年代K—1に熱狂した人間は〝K—1＝石井教義〟であり、02年以降は〝K—1＝谷川貞治〟だということになる。つまりに魔裟斗を表紙にし、巻頭ロングインタビューをしているけど、正直言って〝K—1＝魔裟斗〟としてしっかり語れる人間なんて誰一人としていないということなのだろう。それはもしかしたら『kamipro』に限った話じゃないかもしれない。キックボクシングからの延長での〝魔裟斗論〟を読んだり耳にしたりするけども。

しかし、世の中は、あたりまえのように〝K—1＝魔裟斗〟で見ている（はずだ）。〝空手バカ一代〟の延長ではなく〝黒魔術〟のフィルターなんて通していない。そこにはたとえば活字プロレス的な価値観は存在しない。ごくありふれた一つのスポーツとしてK—1を観ている。今回インタビューした日菜太もそうやってK—1に触れてきた。そんな彼はどのようにしてK—1を観て、そしてK—1のリングに足を踏み入れたのか。



MAX期待の星、日菜太。笑うと本誌・変態座談会メンバーの原タコヤキ君に似ている。湘南のタコ兄さんやで〜！

ひなた。本名、渡辺日菜太。神奈川県平塚市出身。身長181センチ。湘南格闘クラブ所属。1986年8月26日生まれの22歳。93年にK—1がスタートしたときはわずか7歳だった。んあ〜。

日菜太は今年の3月まで神奈川大学理学部化学科に在籍しながら、キックボクシングに熱中する。RISEのトーナメントを勝ち上がり、今年2月に行なわれたK—1MAX日本代表決定トーナメントでK—1初出場。1回戦で昨年の日本王者、城戸康裕と対戦。絶えることない左ミドルの連打で勝利を収めるも、鼻骨骨折のため準決勝はドクターストップ。いまは7月大会出場を目指してトレーニング中だ。

HINATA

デビュー当時は2〜3万ぐらい。試合することがいいお小遣い稼ぎだった

日菜太が練習に励んでいる湘南格闘クラブを訪れると、ジムの窓には、彼のインタビュー記事のキリヌキが誇らしげに張られていた。それは、まだ取材されることがまれである証なのかもしれない。今回のK—1特集に登場する選手、関係者と比べるとコクがなければ、K—1MAXファイターとして磨かれ始まったばかりの青年なのである。

——取材されることは慣れてきたんですか？

日菜太　い、いやあ……、取材は得意じゃないんですよね。しゃべるのが苦手ということもあるし、写真もあんまり撮られ慣れてないんで、ちょっと緊張しています。

——でも、1年後くらいには慣れてる気もしますけど。

日菜太　どうなんですかね？　変わってないように思います（苦笑）。

——そうですか（笑）。それで我々は『kamipro』という雑誌の人間なんですが、日菜太さんは『kamipro』のことはご存知ですか？

日菜太　ああ、なんとなく知ってます。プロレス雑誌……ですよね？　じつはボク、中学のときにプロレスのイス並べのバイトをしたことがあるんですよ。日給4000円の安いバイトだったんですけど、試合を問近で観れるから、プロレス好きの先輩と一緒にやりました。

——問近で観るプロレスはどうでした？

日菜太　スゲエおもしろいなとは思いました（ニッコリ）。ただ、そこから熱心に追いかけようとは思わなかったんですけど。当時はサッカーをやってましたし。中学生や高校生のときにやる部活って、だいたい野球かサッカーじゃないですか。で、ボクの周りはみんなサッカーに流れていったんですよ。あの頃はちょうどJリーグが発足したぐらいだったこともあって。

——平塚といえば、ベルマーレ平塚もありますもんね。

日菜太　そうなんです。ボクが小学校1年生ぐらいのときのベルマーレ平塚には日本代表が5人ぐらいいて、あれは中田英寿がいた時代だったし。だから平塚の子どもはみんなサッカーをやってましたね。学年で30人ぐらいいましたよ。

——それがどうしてキックボクシングをやることになったんですか？

日菜太　ちっちゃいときにサッカーやりながら週1〜2回、近所の空手道場に通ってたんです。ボクというより母親が凄い空手を好きだったんで、一緒に通わされてたというか、母親も空手の試合に出てたんですよ。メットを被っておもいきり殴ってましたし。

——それはそれはモーレッツなお母さんですね（笑）。

日菜太　ええ（笑）。だから格闘技をやる

こと自体に抵抗はなかったんですよ。ボクは高校3年の8月にサッカー部を引退したんですけど、大学に入ってもサッカーをやろうと思ってたんで、その空白の期間に身体がなまらないようにジムに通うことになりました。

――じゃあ、別段K―1に憧れたというわけじゃないんですね。

日菜太　もちろんK―1MAXはテレビで観てましたけど。ボクからすると、K―1はサッカーの日本代表の試合と同じような感じですよね。野球でいうとWBCみたいな、スポーツ番組を観る感じ。

――非日常的空間ではなく、ごくありふれたスポーツとして。

日菜太　はい。いち視聴者として「今日、魔裟斗勝ったじゃん」とか「KIDすげえなあ」とか、よく友だちと話してたので。でも、ジムに通うことになっても、まさか試合に出ることも、ましてやK―1に出ることはないと思ってました。ウチの姉なんかは「なんで知らない人と殴り合わないといけないの？」って感じでしたし。でも、ボクの中ではサッカーも格闘技も同じ〝スポーツ〟だと思ってるんですけどね。

――そこはテレビの影響が大きいんですねぇ。しかし、大学生なのによくここまでキックに熱中できましたね。

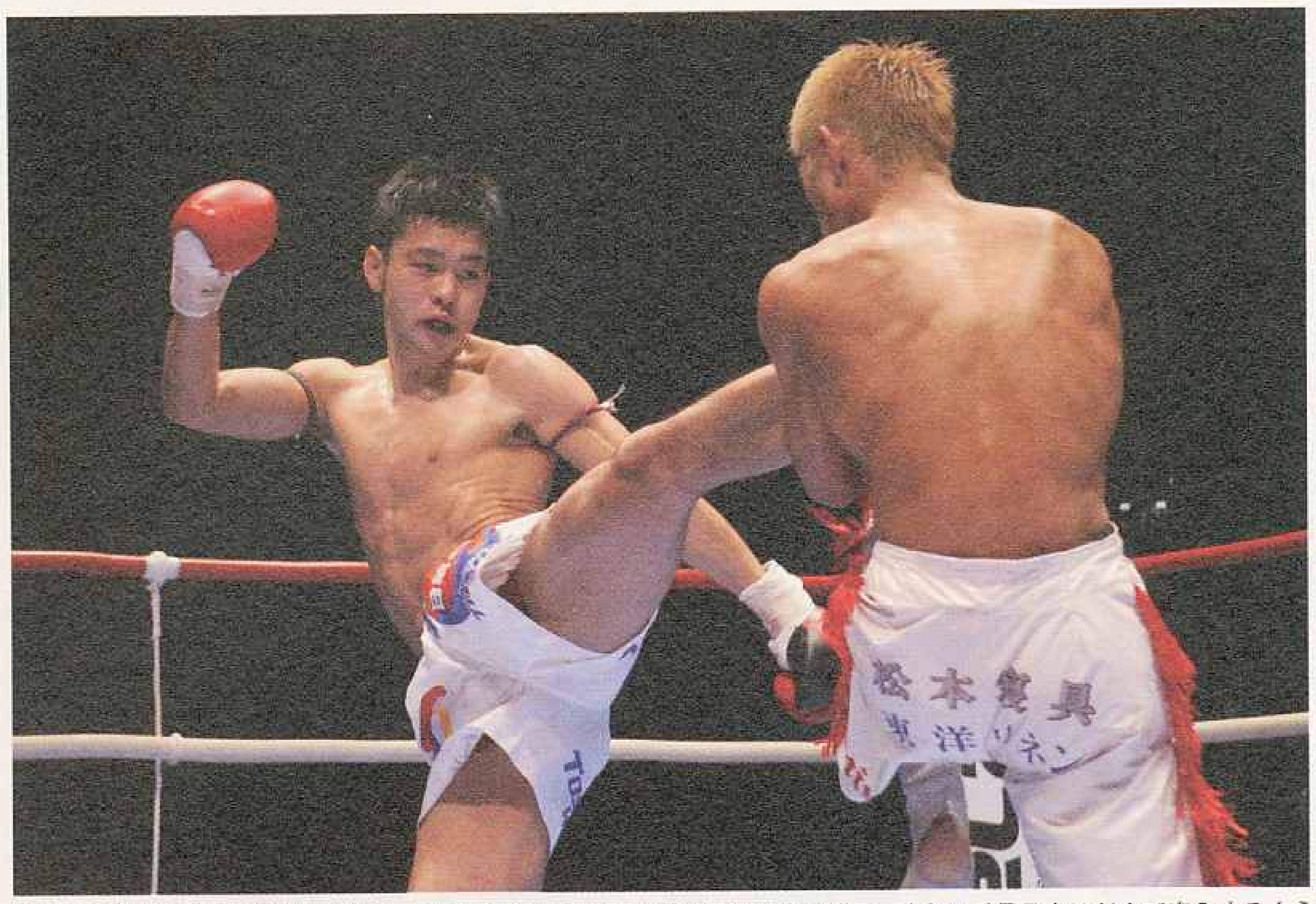
日菜太　大学生ってすっごいヒマなんですよ（ニッコリ）。ただ、そこで普通に友だちと遊んで飲み歩いているよりは、ジムにきて練習をするほうが自分にとってはいい時間のすごし方だなあと思って。友だちとかに「おまえ付き合い悪いじゃん」とか言われたりしましたけど。だから大学でそこまで仲がいい友だちはできなかったですよね。

――日菜太さんのキックデビューは大学1年生のときですが、もちろん最初から食べていけるだけのファイトマネーはもらえないですよね。

日菜太　そうですね。デビューしたての頃は2～3万円ぐらい。大学時代はバイトをしてませんでしたけど、多いときは3ヵ月連続で試合に出たときもあったし、勝てばファイトマネーは上がっていくから、試合に出ることがいいお小遣い稼ぎだったというか。

――そんな〝バイト感覚〟でやっていったのに、〝プロ〟としての大舞台が見えてくるわけですね。

日菜太　はい。一昨年の12月にあったRISEのトーナメントで優勝すればK―1MAXに出られることになったんです。そのときは大学3年でもう就職活動もしていた時期だったんで「トーナメントで優勝したらキックを続ける」と決めたんです。でも、そこで負けてしまったんですよね、ボク。ただ、いざやめようかなと思ったときに、なんかこのまま負けてやめたらカッコ悪いなって。



K-1MAX初の試合は、08年日本人トーナメント王者である城戸康裕との対戦に。試合は延長ラウンドまで突入するような白熱した試合となったが、日菜太が最後まで執念のミドルキックで攻め続け、城戸から勝利を勝ち取ったのだった。

――日菜太さんの前の世代だと、K―1MAXという大きな舞台はなかったわけじゃないですか。

日菜太　そう……みたいですね。でも、ボクからすると、テレビでやってるK―1しか知らないから〝キックボクシング＝K―1〟だったんです。それ以外にキックボクシングの大会があるなんてことは知らなかった。ジムに入ってから後楽園ホールやディファ有明とかで、いろんな大会があることを知りました。でも、50キロや60キロはともかく、70キロではK―1MAXが世界一だと思っているので、（キックを）やるからにはK―1MAXに上がりたいと思ってました。

――初めてのK―1MAXの舞台はどうでした？

日菜太　会場に入ったときに代々木第一のデカさに緊張しましたねぇ……。武道館には行ったことはあるんですけど、それよりデケエなって。あと会場に入るときに、TBSのカメラに「今日、調子はどうですか？」みたいなことを聞かれたけど、「ボク、芸能人じゃないのにな……」って戸惑いました。

――そんな感じだと、事前のテレビ取材もたいへんだったんじゃないですか？

日菜太　ああ、けっこうたいへんでした……（しみじみと）。試合の時期がちょうど大学の論文と重なったこともあってぜんぜん眠れない日もあったし、それでテレビの取材も重なったんで。ボク、練習の質は落とせないですし。だからといってあんまり強い口調で「倒してやる！」とかって言わないんですよ。だけど、誘導尋問みたいにいやらしく質問をしてくるんでそれが一番困りましたね……。「向こうはこう思ってるみたいだけど、どう？」って。

――いやらしい質問って（笑）。煽りVだけを観ると強気なイメージがありましたけど、あれもだいぶ取材された末に引き出された言葉だったんですかね。

日菜太　そうですね。一日中、撮りっ放し

キックをよく知らないkamiproが送る

おおざっぱな団体紹介

全日本キックボクシング連盟
小林聡をGMとする老舗のキック団体。過去に魔裟斗、佐藤嘉洋らも所属しており、K-1で活躍する日本人キックボクサーの多くがキャリアを積んでいる（主な選手=山本優弥、大月晴明、石川直生）。

新日本キックボクシング協会
66年に「日本キックボクシング協会」として設立された老舗団体で、現在は上記の団体名にあらためた。03年からはK-1とも交流している（主な選手=武田幸三、石井宏樹、内田ノボル）。

ニュージャパン キックボクシング連盟
通称「N.J.K.F.」。96年に旗揚げしたキックボクシング団体で、最近では長島☆自演乙☆雄一郎が参戦したことが話題に（主な選手=国崇、桜井洋平）。

J-NETWORK
全日本キックボクシング連盟に所属していたジムである「アクティブJ」が、「J-NETWORK」として設立したキック団体。早くから女子王者を認定（主な選手=黒田アキヒロ、ウエンツ☆修一、田島はる）。

R.I.S.E.
03年に旗揚げ。ヒジ打ちなし、組んだ状態でのヒザ攻撃の完全廃止が特徴的なルール。K-1との交流も深くK-1MAX日本人トーナメントのRISE枠も設置されている（主な選手=日菜太、龍二、TATSUJI）。

日本シュートボクシング協会
85年、シーザー武志によって創立。キックボクシングに加え、スタンド状態での関節技が認められている立ち技総合格闘技。UWFとリンクした独特なスタイルとなった（主な選手=アンディ・サワー、緒形健一、宍戸大樹）。

〝K-1ファイター〟になるために

ですからね。朝9時に大学に集合して、そこから密着されて。夜の9時半ぐらいにやっと解放されました。取材は苦手というか、気を遣いますよね。でも、これからはそういうのもやっていかないといけないな、という心構えはできています（ニッコリ）。

——これからは強気なリップサービスもやっていく、と？

日菜太　ええっと、それはいろんな人にアドバイスをもらいながら。だって、格闘技歴でいってもボクが一番短いぐらいですから。みんなやっぱり先輩だし敬意を持っていないとダメだなって。

——じゃあ、「一昔前のスタイルなんだよなあ」とかなんてとても言えないですよね。そんな暴言を吐く若手が一部にはいるんですけど（笑）。

日菜太　（戸惑いながら）絶対に無理ですねぇ。そこはキャラじゃないんでってことでダメですかねぇ……。

——OKです（笑）。でも、K—1で食っていくんだというプロ意識があるわけですよね。

日菜太　そうですね、ちょっと稼いでやろうと思います！　メラメラ燃えてる部分もあるんで、そこは強気でやっていきたいと。

——ただ、食っていくためのプロって勝ち続けるだけじゃない部分が求められると思うんですよ。よく言われるのは「プロは魅せなきゃダメだ」と。日菜太さんはどんなプロ像を持ってますか？

日菜太　もちろん魅せたいなって。でも、いままでボクが闘ってきた試合はホントに一生懸命なんですよ。一生懸命、頑張って試合した結果、みんなが「凄いね！」ってほめてくれたんですよね。だから、勝つために努力してきた結果を評価されたいですよね。ボクの中である程度できてきてるスタイルというのは、「ほかの選手よりもミドルをたくさん蹴る」ということ。それが評価されてるのは自覚してるんです。

——あ、日菜太さんのミドルキック連打はホントに凄いですね。あれは銭が取れますよ！

日菜太　あ、ありがとうございます（照れながら）。だから蹴るというスタイルは変えたくないんですけど、「それはポイントを取る試合をしてるんじゃないの？」って言われるんだったら、もっと倒せる蹴りを蹴らないといけないかなって。でもボク、蹴りは1ラウンド60回蹴ることを目標にしてるんですよ（ちょっと自慢げに）。

——60回も!!

日菜太　1ラウンド60回蹴ったら3ラウンドで180回なんですよ。3秒に1回蹴りを入れて、それにパンチを入れればもっと手数は増えるじゃないですか。

——ちなみにこれまでの最高記録はどのくらいですか？

日菜太　1ラウンドに60数回、2ラウンド



でもボク、蹴りは1ラウンド60回蹴ることを目標にしてるんですよ

に50代後半、3ラウンドに50回ぐらいですかね。ミドル、ロー、全部入れて。ほとんどがミドルですけども。

——試合中のカウント表示をTBSさんにお願いしたいところです（笑）。ところで魔裟斗さんが抜けてしまうMAXにはどんなイメージがありますか？

日菜太　〝外国人選手のK—1MAX〟って感じです。ホントだったら魔裟斗さんが頑張ってるあいだに魔裟斗さんを脅かすような日本人選手が出てこないのがおかしいってボクは思うんですよ。だって、サッカーにしても中田がいると思うと（中村）俊介が出てきて、俊介が終わったらまた新しい若い世代が出てくるわけじゃないですか。でもMAXはなんでいないんだろう？　って。

——世代交代はあまりうまくいってないですよね。そういうこともあってなのか、魔裟斗さんの7月の相手が総合格闘家になるという話も挙がってますね。

日菜太　正直、ボクとやってくれないかなって。K—1のサイトでやってるアンケートで自分で自分に投票しましたから（照れながら）。

——ダハハハハ。総合にニーズがあることは理解できます？

日菜太　理解というか、『格通』とか『ゴン格』でも総合の選手が主役みたいな流れになってるじゃないですか。でもいまはそういう時期というか、そのうち立ち技が主役になる日が来るんじゃないですか？　だって、視聴率とかはDREAMより上だし、素人目から見たらMAXのほうがわかりやすいと思うんですよ。腕が極まってるとか、ポジション取りでもどっちが有利なのかわからないというか……。

——そこは求心力や遠心力とか、面倒な話になっちゃうんですけどね。ジャンル自体には対抗意識というのはないですか。大晦日は総合勢にK—1ファイターが3連敗しましたが。

日菜太　う〜ん、あれはカードが悪いんじゃないですか？

——要するに谷川さんが悪い、と。

日菜太　いやいや、違います！（笑）。

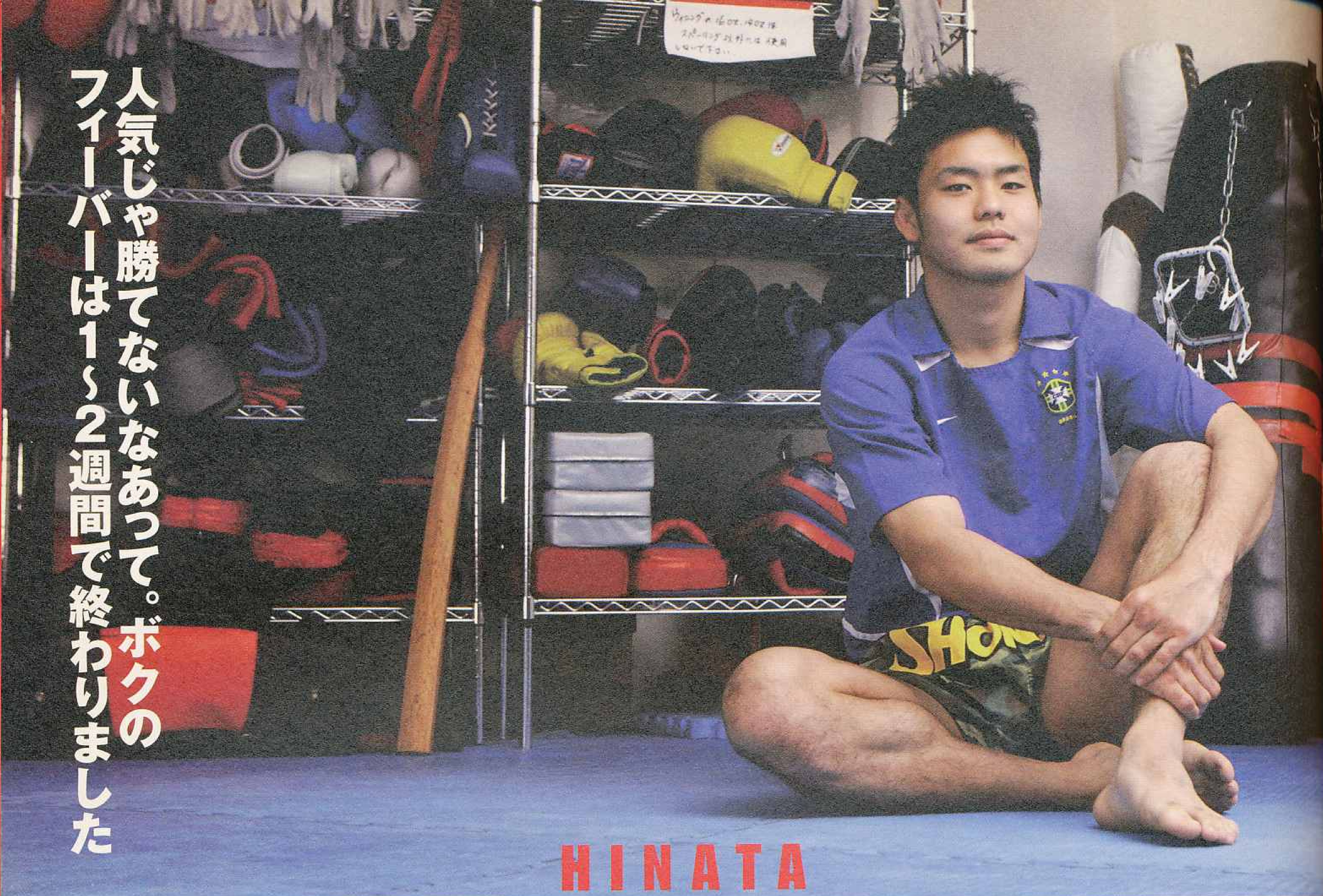
——いやらしい質問でしたね（笑）。

日菜太　なんて言うんですかね……。言い方が難しいですが、武田（幸三）選手が負けたことに関しては、階級が同じなだけに悔しいというよりボクだったらこう闘うなあと思いながら観てました。

——なるほど。では、今後この道一本で食べていくことに関して、どういうふうに思ってますか？

日菜太　まあ、財政状況含めてぜんぜんぜんですよね。ぜんぜんヤバイんじゃないですか？　本当にここから成功しないとって思ってます。ボクはキックはキック、パンチはパンチ、フィジカルはフィジカルの先生にそれぞれ教えてもらって、凄くいい環境にいると思ってるんですよ。これでチャンピオンになれなかったらボクのせいだと思ってます。これで結果を出せなかったらボクが悪い。

——そういえば、MAX開幕戦の推薦枠を



人気じゃ勝てないなあって。ボクのフィーバーは1~2週間で終わりました

HINATA

ひなた■1986年8月26日、神奈川県出身。高校のサッカー部を引退後、湘南格闘クラブに入門し、04年にプロデビュー。その後、08年7月にはRISE70キロ級王者決定戦では龍二を判定勝ちで下し、見事王座に君臨。さらに同年11月にはHAYATOを判定で破り、K-1MAX日本人トーナメント出場権を手に入れた。その日本人トーナメントでは昨年の覇者である城戸康裕を破るも、鼻骨骨折のため準決勝はドクターストップに。だが、自身でも一番の持ち味と語るミドルキックでファンをおおいに魅了したK-1デビューとなった。181cm、73kg。

決めるファン投票では見事2位になったんですよね。

日菜太　みたいですね（嬉しそうに）。じつはそれ福岡の会場で知ったんですよ。一度K－1のサイトを見たときに自演乙さんがダントツだったんで、「人気じゃ勝てねえなあ……」と思ったんですよね。

——そのときも日菜太さんは自分で自分に投票したんですが？

日菜太　いや、しないですよ！（笑）。ホントに人気じゃ勝てないなあって。まあ、確かに1~2週間ぐらいは近所のおばちゃんとかから電話がかかってきたり、街を歩いてて「あれ？」って言われたりしましたけど（照れながら）。でも、そんなもんですよ。ボクのフィーバーはその1~2週間で終わりました。はい。

——このままMAXに出続ければ、そのうち追っかけも出てきそうですけどね。

日菜太　そうですかねぇ……。ずっとモテないですよ、大学時代から。練習がメインだったんで。だから唯一ショックなことは大学生ってよく合コンするじゃないですか。正直言うと、一回も行けなかったのがショックですよね。

——誘われなかったんですか？

日菜太　まあ、そういうチャラチャラした友だちも少なかったというか。行きたかったなって。

——でも、これからは大丈夫ですよ。安生洋二さんが「夜の街ではK－1ファイター」を名乗るほどですから。

日菜太　どういうことですか？

——そのくらいK－1ファイターといっただけでみんなキャーキャー言ってくれるという。

日菜太　へえ～。そういうもんですか？

——だって華やかな世界じゃないですか。

日菜太　そうですねぇ。……記者会見とかチョー恥ずかしかったですね。いままでの記者会見って、知ってるライターさんが集まるだけでしたけど、MAXの会見はテレビやスポーツ記者とか、もう規模が違うなって。フラッシュの数も凄かったし。そういう世界だってことは予想はしてたんですけど、ちょっと緊張しますよね……。

——自分の魅せ方を考えたりもします？

日菜太　こう魅せたいというか、インタビューとかどう応えたらいいんだろうっていうのは思いますけど。なんかいやらしいことばっかり聞いてくるので。なんかちょっと……。

——それが仕事ですから（笑）。

日菜太　ボクは凄く困りますね……。

——たとえばK－1MAXに出る選手って、イメージがどんどん洗練されて、ファッションなんかも気にしてるじゃないですか。城戸選手なんかは、いつのまにかコシノ・ジュンコにガウンをデザインしてもらったり（笑）。

日菜太　あ～、あのガウンは凄かったですねぇ。ボクもいままでガウンとか着たことなかったんで、今度は作ってもらえたらいいなって思います。だってボク、記者会見のときに一人だけリクルートスーツでしたから。でも……ボク、ぜんぜんオシャレじゃないわけじゃないですよ！（ちょっとムキになって）。

——なんですか、急に。

日菜太　今日だって、取材だから髪の毛も切ってこようと思ったんですよ。でも、このへんの床屋さんって火曜日休みなんですよねぇ……。

——え～っと、まずはそこから頑張りましょうか（笑）。

【09年4月28日／神奈川・湘南格闘クラブ】



巨大帝国に背を向けた男の愛と憎しみのK–1論

"ふざけんなK–1"

全日本キックGM

小林聡

K-1を目指すキックボクサーを横目で見ながら、自身がプライドを持つ"キックボクシング"にこだわり、引退までK-1に上がらなかった男・小林聡。現在、全日本キックGMにして『kamipro』立ち技委員会委員長という肩書も持つ"野良犬"による「ふざけんなK-1」論!

聞き手／阿修羅チョロ　試合撮影／乾晋也

いまだから言いますけど、何度もK-1に心動かされましたよ

――今回は、〝小林聡とK-1〟というテーマで話を聞かせてもらえればと思ってます。

小林　K-1に対して、いまはそんなに言うこともないんですけどね。

――K-1の〝K〟は空手やキック、ケンカとかいろいろありますが、〝小林聡〟のKでもあると思うので（笑）。

小林　ちょっと無理やりですけどね（笑）。自分は現役のときは露出してナンボだと思ってたんで、なんでも来る仕事は受けてたんですよ。だけど、現役を引退して俯瞰して見るようになって、やっぱり作品が残るモノに対して、コイツに自分のことを書いてほしくないなって雑誌とかには、なるべく載りたくないんですよ。

――引退されてからは、出る媒体を選んでいると。

小林　そうですね。今回もK-1特集がどうたらこうたらより、『kamipro』なら出たいなって思って受けたんですよ。買う雑誌って『kamipro』ぐらいなんで。

――あ、ありがとうございます！

小林　格闘技者を応援してるフリして、メジャーなモノしか取り上げないとか、そういった格闘技雑誌の姿勢が気に入らなくて。いまの格闘技雑誌で唯一おもしろいのは前田（日明）さんの手記ぐらいじゃないですか。

――前田さんは『格闘技通信』でコラムを連載してますよね。

小林　あれぐらいですよ、読めるのは。あとは「誰に気を使ってんの？」って話ばっかで。……全然K-1の話から脱線しちゃいましたけど（笑）。

――それこそ、現役時代の小林さんのインタビューなんかもどこかに気を使って内容がソフトにされてしまったこともあったんじゃないですか。

小林　あ～、そんなこともあったような気がしますね（笑）。

――というわけで、今回は現役時代、K-1という巨大帝国に背を向けたというか、一人で立ち向かっていた小林さんの生き様を……。

小林　（さえぎって）いや、背を向けたっていうか、単純にあのリングで試合してる連中とは一緒にやりたくないっていうか、あの輪に入りたくないっていうだけだったんで。



今年の大晦日での引退を表明した魔裟斗がデビューから約2年半、主戦場としていたのは小林と同様、全日本キック。小林はファイナルマッチの相手として愛弟子の前田と拳を交えたが、魔裟斗もその才能を高く評価するHIROYAとエキシビションで激突。HIROYAは魔裟斗2世になれんのか!?

――具体的に何が小林さんをそういう感情にさせてしまったのかな、と。非公式ながら何度かK-1側からオファーはあったと聞きますけど。

小林　一つ挙げるとすれば、知り合いから年賀状が来て、「今年はいよいよK-1だね」とか書かれたりね。「何言ってんだ、コイツ！」と思って。

――総合の選手でも「K-1の選手なんですか」とかよく言われるみたいですからね（笑）。

小林　そうそう（笑）。そこが上のステージだと思われるのが自分のプライド的に許さないというか。俺は15（歳）で東京に出てきて、格闘技はジャッキー・チェンに憧れて始めたんですけど、ホントに高校に進学するとき、殴る蹴るで食っていこうと思ったらキックボクシングしかなかったですからね。まだ、総合格闘技もなかったし。シューティングがあったかないかぐらいで。シュートボクシングが旗揚げしたばっかのときは、当時の彼女にそれが載った雑誌を見せたら、「何これ、ラッシャー木村みたいじゃん」って言われて（笑）。

――ロングスパッツがラッシャー木村だと思われた（笑）。

小林　じゃあ、キックだなって思って始めて。それからずっとキックに人生かけてたんで。当時は「キックで食っていくって何言ってんの？」って感じでしたけど、「絶対キックで食ってやろう」って思ってたんで。だから、K-1に対してよく思ってなかったのは、単純にキックでメシ食ってるって意地ですよね。K-1でメシ食わせてもらいたくないっていうか。

――イメージ的にはキックよりもK-1はギャラもいいし、地上波中継もあるから出たいっていう選手も多かったわけですよね。

小林　そりゃあそうッスよ！　俺も出たいですもん（笑）。

――小林さんも出たかった？

小林　いまだにそれはありますよ（笑）。ありましたけど、やっぱり自分はダメでしたね。ぶっちゃけ、何度か出たいっていうか、出ようと思ったこともあるんですよ。

――実際にK-1出ようと思ったときもあったんですか？

小林　『侍ジャイアンツ』を観て、あえて嫌いなとこ行ってやろうかなって思ったときもあって。番場蛮だっけ？　あれになってやろうかなって思ったこともありますよ。

――たしか、主人公の番場蛮は「打倒ジャイアンツ」を目指しながら最終的にはジャイアンツのエースになりましたけど、メジャー団体への反発という部分では小林さんと重なるところもあるかもしれませんね。

小林　まあ、いまだから言いますけど、何度も心動かされましたよ。

――そうだったんですか。でも、小林さんと同じようにキックへのプライドを持ってる選手もたくさんいたと思うんですけど、最終的にK-1に上がった選手は多かったですよね。

小林　そうですね。キックのプライドっていう意味では小野寺（力・現R1KIX代表）くんとかもあったと思うけど、俺が先導切って言わなきゃなっていうのがあったから。たとえば、ウチの中村（高明・藤原ジム）は70キロまで落ちないし、60キロまで上げて無理やりやるヤツもいるけど、65キロでしかできないヤツもいる。そういうヤツには「俺を見てろ！」って思ってましたね。

――K-1MAXは70キロが主流でしたけど、それ以外の階級の選手にとっての目標や憧れの対象になるような存在になろうと？

小林　そうですね。昔、K-1の関係者でもいましたよ。パーティとかで会うと「なんで、小林さんはK-1に上がらないの？」って。「K-1はキックボクシングじゃないじゃないですか？　体重も違うし」とか鬱陶しいから言ってたんですけど、それでも「大晦日には（山本）KIDも上がったし、30何パーセント視聴率も獲ってるし、上がらない理由はない」とかずっと言ってて。で、しばらくしてK-1をクビになったか知らないけど、K-1から離れた途端、専門誌で「K-1はホントの立ち技じゃない。ホントの立ち技はキックボクシング」とか言ってて（笑）。

――わかりやすいですね(笑)。
小林　立場変わりゃあ、手のひらも返すのかって。そういうこともいっぱいあったんで、よけいに「あそこには上がらない」って意地になってたところもありますね。でも、「小林聡はK―1嫌い」ってイメージがあるかもしれないけど、初期の頃は好きで会場とか行ってましたよ。
――あ、そうなんですか。
小林　アンディ・フグvsパトリック・スミスとかキモvs佐竹雅昭とか、普通にプロレスを観る感覚で楽しんでましたからね。でも、最初はヘビー級中心でやってたのが、だんだん自分らのほうに侵略してきたじゃないですか。とくにいまなんかねえ。
――全日本キックの興行でK―1ルールの大会(「Krush」)も行なわれるようになりましたからね。
小林　昔は立嶋(篤史)くんとかもよくK―1のこと言ってたけど、あの時代はそんな身近なモノじゃなかったですから。
――それまでも軽量級の試合も何回か組まれてはいましたけど、本格的に侵略し始めたのは02年にK―1 MAXができてからですよね。
小林　MAXができて、へんに競技化していって、谷川(貞治)さんがキックボクサーの名前をバンバン出すようになってからですね。「ふざけんな」って思うようになったのは。
――MAXはルールは違うとはいえ、知ってる選手もたくさん出るようになってきて他人事ではなくなってきたという感じですか?
小林　そうですね。まあでもK―1に出てるから「ふざけんな」って思ってたんじゃなくて評価してる選手はいっぱいいましたよ。魔裟斗なんか凄いと思うし。彼は自分にはできなかったことをやったわけですから。
――と言いますと?
小林　自分は軽量級の立ち技であそこまでの国民的ヒーローにはなれなかったわけですから。単純に自分がやれなかったことをやったヤツは凄いと思ってるんで。
――理想を言えば、全日本キックという舞台で、国民的ヒーローになることを目指していたわけですね。
小林　もちろん!　そういう気持ちがなかったらプロじゃないですよ。
――小林さんの引退後は、K―1もガンガン侵略してきて、ここ最近では全日本キックでK―1ルールの大会も行なわれたりもしてますよね。
小林　まあ、そのへんは時代の流れだとも思うし、選手のときは見えなかったモノが、いま全日本キックのGMとして興行に関わるようになって見えてきたところもあるんで。
――立場が変わってK―1に対する見方も変わってきたところもある?
小林　それはありますね。やっぱ、興行は人が入んなきゃしょうがないんだってあらためて思うようになったし。そういった意味で、いまはGMとして、選手とか関係者を燃えさせるだけじゃなく、観客を燃えさせる企画をやっていかなきゃいけないんだなっていうことをよく考えますね。俺がいまでも現役だったら「全日本キックでK―1ルールの試合?　ふざけんな!」って間違いなく思ってただろうけど(笑)。
――興行として考えたら、K―1ルールの試合を全日本キックでやるのも、ある意味しょうがないと?
小林　しょうがないっていうか、何回か「Krush」をやってきて、結局K―1ルールでやったとしても、いい試合をするのはキックボクサーだなって証明はできてると思うんで。その部分では飲み込まれてるわけじゃないし。俺から言わせれば、K―1ファイターっていうのはボクシングキックなんですよ。


魔裟斗引退後のエースとして期待のかかる佐藤嘉洋は4・21福岡大会のメインに登場するもドラゴ相手に大苦戦。なんとか延長まで持ち込むも結果は3-0の判定負け。戦前は強気な発言を連発していた佐藤だったが試合後は「生きてて一番悔しいです。手と足が鉛みたいになって」と肩を落とした。

――キックボクシングではなくて、ボクシングキックだ、と。
小林　キックのためのパンチじゃないし、パンチのためのキックじゃないんですよ。だから、凄いつまんない試合になる。「K―1ルールってつまんねえじゃん」とか思うときって、そういう試合じゃないですか。
――具体的には、どの選手の試合でそれを感じることが多いんですか?
小林　あんまり名前は出したくないけど、某TATSUJIとか、某HAYATOとか(笑)。
――全然出ちゃってますよ!(笑)。
小林　キックボクサーという意識でやってるヤツとは全然違いますね。でもね、俺がK―1を嫌いな理由が「ヒジがないから」とかルールが理由だと思ってるヤツも多いみたいなんだけど、そうじゃないですから。俺は、K―1という舞台に上がりたくなかっただけで。仮にK―1がヒジ打ちありのルールでも、あの舞台には上がらなかったと思うんで。
――ルールは重要ではなかったと?
小林　まあ、意地張ってルールのことも言ったことありましたけど、べつにヒジなしルールなんていくらでもやってるし、ムエタイほどクリンチが長いわけでもないしね。
――ルールとか小さいことではなく、キックボクサーのプライドだったり意地の部分が大きかった、と。逆に魔裟斗さんなんかはK―1というかMAXに対するプライドや意地があったと思うんですけど。
小林　彼なんかは凄くあったと思い

小林GMも太鼓判!　K―1でもブレイク確実なキックボクサー


山本真弘
09・4・21福岡大会でK―1に初参戦、谷川EPから「今日のベストバウト」と評された藤原ジム所属の山本真弘。07年に行なわれた60キロ級トーナメントではK―1でも活躍している大月晴明に勝利し、優勝した60キロ最強の男。
©全日本キック


山本元気
08年11月の桜井洋平戦、09年3月の梶原龍児戦と、すでに全日本キック主催のK―1ルールの大会「Krush」で2連勝しているDTSGYM所属の山本元気。今年6月の小林GMプロデュース興行への参戦も決定している。
©全日本キック


石川直生
昨年末には青木真也と合同公開練習を行ない、「『Dynamite!!』に出たい」とアピールしていたのが青春塾所属の石川直生。発売日にはすでに終わっているが5月17日にはK―1でも活躍する上松大輔と対戦。その結果は!?
©全日本キック


前田尚紀
07年3月の小林聡ファイナルマッチの相手に選ばれたのが藤原ジム所属の"闘う修行僧"こと前田尚紀。「60キロで最高の試合をする男」と小林GMからの評価も高い前田は6・21小林GMプロデュース興行への参戦が決定済みだ。
©全日本キック

K-1のファンにも俺がこだわってるキックを一度観に来てもらいたい

ますよ。

―そんな魔裟斗選手が年内で引退するわけですが、いまのところその穴を埋める選手として期待されているのは日本人ナンバー2で、小林さんもよくご存知の佐藤嘉洋選手……。

小林 無理に決まってるでしょ（あきれるように）。

―あ、決まってましたか（笑）。

小林 このあいだのドラゴ戦は、観るつもりもなかったんですけど飲みに行ってた店でやってたから見えたんですよ（笑）。やっぱり、嫌いなヤツって気になるじゃないですか？

―なんとなくわかります。試合をご覧になっていかがでした？

小林 いや〜、あそこまでひどい試合をしたら、「ざまあみろ！」って言うより、逆に同情しちゃいましたね。

―それは佐藤選手に？

小林 いや、谷川さんとかに。しかも、彼は試合前、魔裟斗が大晦日に今年の世界チャンピオンとやることに対して、「ふざけんな！」とか言ってたじゃないですか。

―けっこう批判的なことを言ってましたね。

小林 ですよね。嫌いなんですけど、彼のことをいろいろと考えたんですよ（笑）。で、わかったのが「コイツ、言わされてんだな」って。

―本心ではなく、誰かに言わされていると？

小林 ホントにそう思ってたら、あんな試合しないし、そこまでの覚悟があの試合からは一切見えなかった。

―MAXを背負うという覚悟があったらああいう試合にはならない？

小林 そういう覚悟があったら、ああいう試合はしないです。まあ、エースになるために周りからこう言えって言わされたんでしょ。でも自分ではそこまでの覚悟がなかったから、あんなくだらねえ試合したんですよ。

―そういうことでしたか。佐藤選手といえば、格闘技ライターや、関根勤さんとかマニアと言われる人からの評価が高かった

り……。

小林 （さえぎって）いや、前も言いましたけど、マニアの評価は高くないですよ。俺だって一応玄人だと思ってますけど、彼の試合を観てレベル高いとか思ったことないですから。逆に関根さんに彼の魅力を教えてもらいたいぐらいですよ（笑）。

―それはぜひお聞きしたいですね。

小林 ハッキリ言って覚悟なんてかたちのあるものじゃないですけど、伝わるモノは伝わりますから。そういう意味では、彼なんかは名前は甘いけど、しょっぱいですよね（笑）。

―た、確かに名前は甘いですけど。



こばやし・さとし■1972年3月16日、長野県長野市出身。ジャッキー・チェンに憧れ格闘技を始め、91年10月26日、全日本キック後楽園大会で公式プロデビュー。07年3月9日、後楽園での引退興行で愛弟子の前田尚紀と3分1Rの「ファイナルマッチ」を行ない現役生活にピリオド。現在は全日本キックGMとしてハッスル中。愛称は野良犬。

小林 まあでも、リザーブファイトとかで出てくるんじゃないですか？

―可能性はありますよね。

小林 そこから勝ち上がって優勝でもしたらドラマチックでカッコいいんですけど……、そんなドラマは彼には起こせないでしょうけどね。まあでも、あんな試合を見せられたら「ざまあみろ」を通り越して同情しましたよ。「大丈夫か、MAX⁉」って。K―1がどうなろうと知ったこっちゃないですけど、格闘技自体の熱は下がってほしくないですから。

―大きなくくりで言えばK―1もキックもジャンルは一緒ですからね。

小林 そうですよ。そういえば、五味（隆典）ってどうするんですか？　なんか魔裟斗とやるとか『kamipro』で見ましたけど。

―修斗での中蔵（隆志）戦に勝ったら魔裟斗戦という機運も高まってくるでしょうね。川尻vs魔裟斗戦という可能性もあるみたいですけど。

小林 川尻vs魔裟斗なんかより全然、五味vs魔裟斗ですよ。川尻戦はべつに観たくない。

―あ、そうですか。

小林 だって、川尻は武田幸三に勝ったっていいますけど、俺は川尻は強いともうまいとも思わないし、いまの武田幸三なんて……ねえ。

―「ねえ」と言われても（笑）。でも、五味さんの打撃は評価してると？

小林 総合格闘家の中では彼の打撃は凄いなぁと思いますよ。話を聞いても6回戦あたりともいいスパーリングするらしいんで。キックボクサーでもなかなかいないですからね。

―へえ〜、そうなんですか。ほかに小林さんから見て総合格闘家で打撃がうまいと思う選手っています？

小林 （山本）KIDなんかもけっこうパンチはうまいですね。独特の間を持ってるっていうか。「この距離から来るか」ってところからパンチが飛んでくるから、普通のボクサーはやりづらいと思いますよ。まあでも、魔裟斗が総合格闘家とやるんだったら五味戦が観たいですね。

―では、最後にK―1について何かメッセージでもあれば。

小林 いや、べつにメッセージはないですけど、『kamipro』読者へのメッセージっていうんだったら、K―1は観なくてもいいんで、全日本キックを観ろ、と（笑）。

―まあ、そうなりますよね（笑）。GMとしては、6月に二度目のプロデュース興行があるみたいで。

小林 そうですね。いまはスポンサー集めに奔走してる最中です。普段の大会より豪華なモノにしたいんで。

―通常の全日本キックの興行よりもお金をかけた大会になると？

小林 プロレスファンにわかりやすく言うなら、新日本とプレミアムの関係みたい感じで（笑）。

―プ、プレミアム。ここ最近は音沙汰ないですけども（笑）。

小林 プレミアムはスクリーンを二つ使ったり豪華な感じだったじゃないですか。ウチでは二大スクリーンは難しいかもしれないですけど、試合以外の部分でも楽しんでもらえるようにしたいなって。

―演出面でもいろいろと仕掛けを考えている、と。

小林 そうですね。プレミアムのテーマは〝レジェンド〟でしたけど、俺のプロデュース興行のテーマは〝キックボクシング〟なんで。『kamipro』読者や、それこそK―1のファンにも一度、俺がずっとこだわってるキックボクシングを観に来てもらいたいですね。

【09年4月30日、都内・AJジムにて収録】



K―1特集をビシッと締めるスペシャルインタビュー

競技統括の立場から見たK―1

K―1競技統括プロデューサー
角田信朗

K-1特集のトリを飾るのはK-1競技統括プロデューサーの角田信朗氏が登場だ!! プロ格闘技の先駆者として道なき道を切り開いてきた正道会館時代から、石井教義前館長の懐刀としてK-1の発展に尽力してきた角田氏。プロ興行として、またイベントとして成熟していく中で、ときには谷川貞治イベントプロデューサーと対立する競技統括プロデューサーとしての立場で締めるべきところをビシッと締めてきた。興行と競技の対立はK-1の永遠のテーマでもある。角田氏自身はどのように現状のK-1を見ているのだろうか?

聞き手／橋本宗洋　撮影／平工幸雄　写真協力／K-1

角田　『kamipro』さんが僕にインタビューだなんて、今日はまたどういう風の吹き回しですか?・(笑)。

―ククク！　いや、じつは今回、K―1特集をやることになりまして。角田さんには競技統括という立場から見たK―1を語っていただきたいな、と。K―1はスタートして16年、いってみればプロ格闘技の先駆者ですよね。だからこそ、いい部分も問題点も、ほかのプロ格闘技団体より色濃く出てるんじゃないかと思うんですよ。

角田　そうでしょうね。どんなことにもメリット、デメリットはあるし、何かを最初にやるときには、産みの苦しみが当然あるし、でき上がったものを見てああだこうだいうのは、一番簡単だから(笑)。僕は、この16年っていうのは奇跡に近いなと思ってるんですよ。

―K―1の歴史は奇跡的なことだと。

角田　やっぱり、最初は多くの人が一過性のブームで終わると思ってたんじゃないですか?　昔のキックボクシングじゃないですけど。「2、3年、もって5年じゃないか」みたいによく言われましたから。そういう中で、K―1は16年続いて、格闘技を一過性のブームから、ちゃんとした文化として定着させてこれたんじゃないかなと思うんですよね、客観的に見ると。しかも民放3局がK―1を中継する。そんな格闘技、いままでどこにありました?

―プロ格闘技がここまでメジャーなものとして定着するなんて考えられなかったですからね。

角田　昔は、格闘技っていう概念自体がなかったでしょ?　あったのはプロレス。それ以外は、武道というくくりだった。僕はプロレスも格闘技だとは思うんですけど、少なくとも〝格闘競技〟ではないです



石井宗師の秘蔵写真の中から発掘した若かりし日の角田。極真会館の第7回オープントーナメント全日本ウェイト制空手道選手権に正道会館として初出場。重量級で他流派として初の4位入賞をはたした。

田信朗

K―1は特殊な競技。ファン、テレビ局、スポンサーとも向き合わなきゃいけない

よね？　ボクシングはボクシングであって、格闘技という言い方はしなかったでしょ？

――キックボクシングは続いてましたけど、決してメジャーではなかったですし。

角田　ビジネスモデルとして確立されたものではなかったですよね。

――そういう部分は、まさにK―1が先駆者ですよね。

角田　最初の頃は大変でしたけどね。僕が契約書を作ったり、選手のファイトマネーの交渉したりとか（苦笑）。

――そこまでやられてましたか（笑）。

角田　いまだから話せますけど、書面でファイトマネーを提示するときにカンマを打つ場所を間違えて、トラブルになったこともありましたしね。選手のビザが取れなくて、おまえ行け！って言われてタイに一人で飛んだりとか（笑）。興行ビザを取るには在留資格証明が必要だって初めて聞いて「それってどうやって取るんだ？」とかね（苦笑）

――そういうところから始まって、格闘技に新しいビジネスモデルを作り上げたわけですよね。

角田　だから、K―1以降にできた格闘技団体って、結局「ライバルはK―1」であって、K―1がやったことを模倣して、最終的には「K―1を打ち負かせ」と。

――お手本であれ敵視するんであれ、影響は大きいですよね。

角田　でもK―1のライバルは格闘技じゃないんですよね。K―1のライバルはプロ野球やJリーグ、いや、メジャーリーグやワールドカップだって、そういう気持ち。その基本概念で、どこそこを打ち負かすという小欲じゃなくて、格闘技界の底上げ、いわゆる〝格闘技インフラ〟、つまり格闘技の生活基盤を作ってきたでしょ？

――そういう歴史の中で、K―1自体の意味合いも変わってきたと思うんですよ。初期のK―1って異種格闘技戦的だったじゃないですか。いろんなジャンルのチャンピオンを集めて、トーナメントで一番を決めようっていう。でも、いまはK―1という一つの競技ジャンルとして確立されつつある。そのへんで競技とイベントの矛盾というか軋轢も出てきますし。

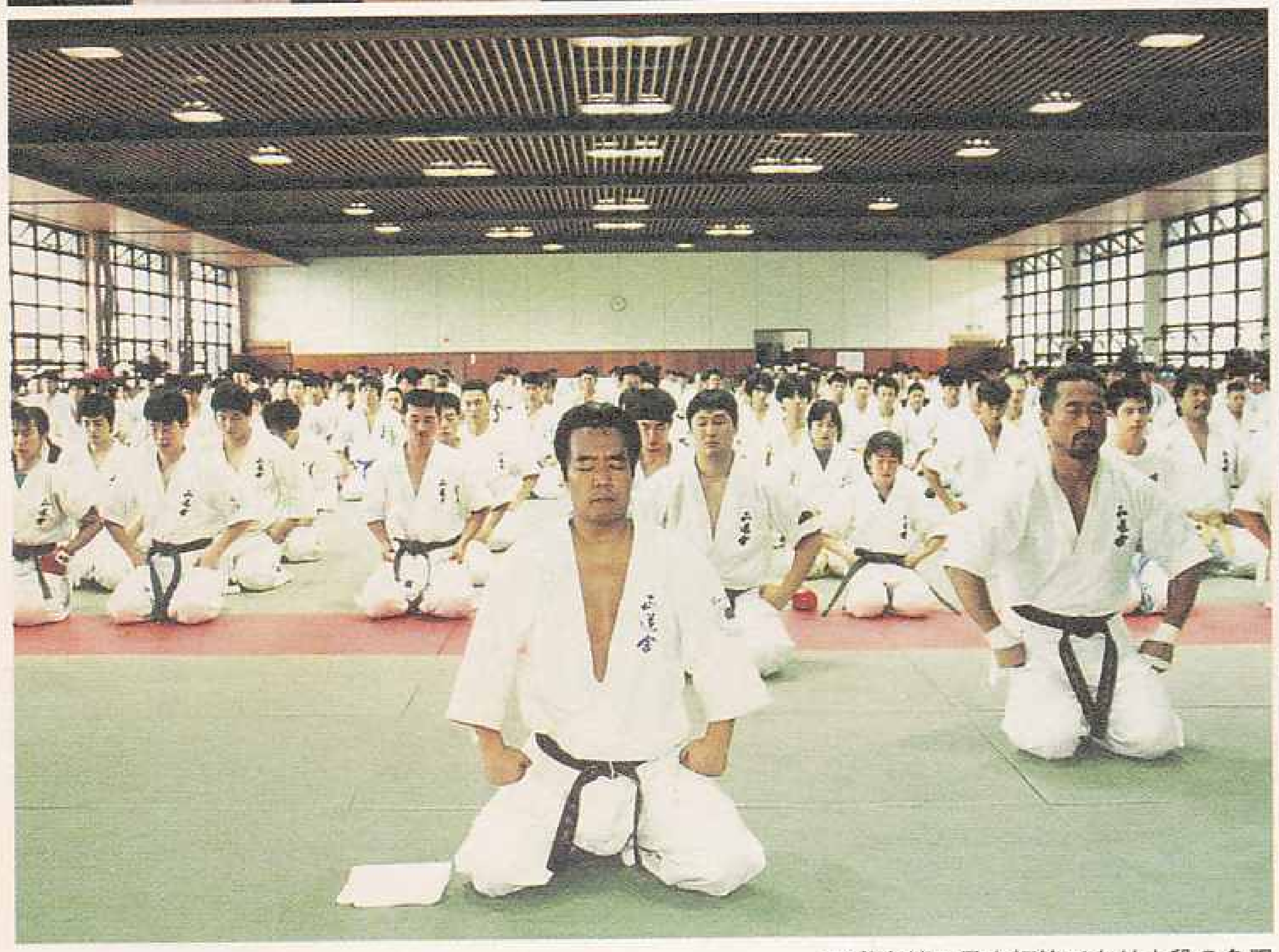
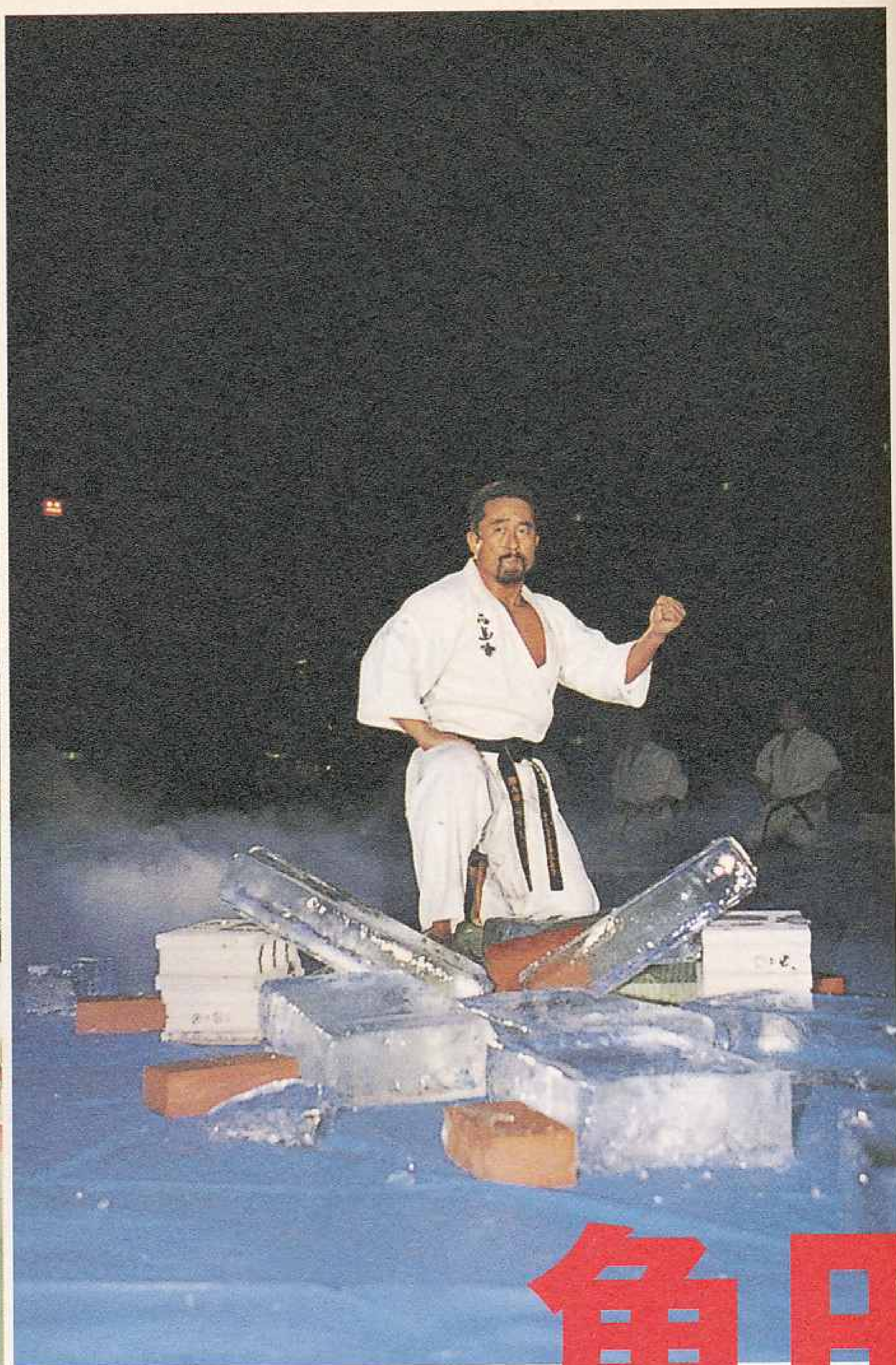
角田　競技っていう観点で考えると、その究極にあるのはオリンピックですよね。

――K―1がいま目指そうとしているのも、まさにそこでしょうね。

角田　K―1がはたしてオリンピックを目指しているのかどうかはわからないんだけれども、ただ、少なくとも競技スポーツとしての権威を築くためには、選手とイベント運営、競技運営っていうのを完全に分けなきゃいけないですよね。ただ、あくまでもそれは理想であって、それをやるには時間もかかるし、政治的な動きも必要になると思いますしね。

――たとえば格闘技にもコミッションが必要だっていうのは多くの人が言いますけど、簡単にできるものじゃないですよね。

角田　コミッションってオフィシャル、つ


正道会館の最高師範であり六段の角田。セレモニーなどでは氷柱割りも披露する。また、ギネスブック認定バット折り世界記録保持者でもある。

角田信

昔は、格闘技という概念自体がなかった。あったのは武道かプロレスだけですよ

まり社会的公共性のあるものじゃなきゃいけないですからね。公共のものってどういうことかというと、簡単にいえば文部科学省が認可するとかね。でも、文科省が認可する競技になったとしたら、はたして「イレズミした選手が出てくるのはどうなのか」っていうふうに、K－1というイベントの根幹部分を考え直さなければいけなくなる。

―イメージの問題も含めて、いろんなことが制限されるというか。

角田　それこそ、「コスプレで入場してくるのはいかがなものか」って話になるかもしれない。公共スポーツになるって、そういうことですからね。

―となると、エンターテインメント性とかダイナミズムは失なわれていきますよね。

角田　そういう面では、だから……、ちょっとここは言葉を選ばないといけないなあ。昔だったらペラペラしゃべってたんですけど、僕も大人になったんで（笑）。

―要は公共性とダイナミズムのさじ加減ですよね。

角田　K－1って、特殊な競技ではあると思うんですよね。ファンと向き合わなきゃいけないし、テレビ局とも向き合わなきゃいけない。スポンサーとも向き合わなきゃいけないし、谷川さんの最大の苦労がそこにある。

―競技としての正しさを追求するだけでは成り立たないですよね。

角田　僕がよく言うのは、「競技として測定するなら、みんなが同じ条件で公平にやるのが一番でしょ」と。例外を認めない。み～んな同じ条件。

―ただ、それだと選手の個性が削がれる場合もあるわけで。

角田　そうなんですよ。だから現状では、柔軟に解釈しなきゃいけない場合もあるんですよね。拡大解釈はしちゃいけないけど、柔軟な解釈は必要なんですよ。逆に言えば、絶対に越えちゃいけない、許しちゃいけない一線だけは死守するんですけど。

―角田さんにとっての、越えちゃいけない一線ってどんな部分なんですか？

角田　いろいろあるけど、たとえば、レフェリーの頭に小型カメラをつけるとかね。

―レフェリー目線の映像を撮るという。

角田　レフェリーはレフェリーであってカメラマンじゃない。競技運営の最高権威がなぜ映像製作に協力する必要があるのか？　そんな競技がどこにありますか？　あんなものをつけているレフェリーの姿、権威も何もあったものじゃない。リアルな画を撮るために努力するのは映像側がやるべきことで、レフェリーにそれをさせちゃいけないんですよ。だから僕はそれをK－1では絶対にやらせないんですね。

―そういうところで、競技と興行、テレビ番組をギリギリ区別していくという。

角田　ギリギリですよね、そこは。完全に競技として確立することが、はたしてファンの観たいものなのかっていう問題もありますし。

――現場でのギリギリのせめぎ合いですよね。そこのところのたがを外してしまうと、とんでもない方向に行っちゃう可能性もありますし。

角田　たとえばね、レッドカードで失格になったばかりの選手が、なんでその舌の根も乾かぬうちに試合してるんだって話じゃないですか。

――ありましたよね、去年の大晦日に。

角田　じゃあ、僕が出したレッドカードはいったいなんだったのか？　ってことになるじゃないですか。競技としての権威がなくなっちゃいますよ。

――興行としては出したいところなんだけど、という。

角田　競技としてはありえない話なんだけれども、ファンは観たいかもしれない、テレビの視聴率的には必要かもしれないっていうところですよね。だから僕は競技統括としての最低限の苦しい立場で、イベント側に「それはいかがなものか」という話はしましたけどもね。「これがK―1本戦であれば絶対に認めないけど、大晦日の『Dynamite!!』という特別な場である以上、黙認せざるをえない」と。そういうことも含めて、選手の資格とか罰則とか、競技としての確立をうたうのならば、そこのところはもっと厳格にしていかなきゃいけないんですけど、それは同時に谷川さんの苦悩でもあるんじゃないかな？

――認めざるをえないことも出てくるけど、主張はしっかりしていくってことですよね。

角田　たとえば、ルールなり大会運営の細かい部分をなんらかの事情で変えるにしても、大会の直前とか試合前日のルールレビューで伝えるようじゃダメですよ、と。それをイベント側がやっちゃったら、こちらとしてはなんのための競技統括かわからないし、そこで何か問題が起きたら責任は我々競技役員側に問われるんだから。

――去年はロングスパッツが禁止になりましたけど、決勝大会から規定が変わるのってへんですよね。変えるなら開幕戦の前、もっといえば前の年から「来年はこうします」と選手サイドに伝えるべきで。

角田　競技サイドからすれば、ルールの改定をアナウンスするのに一番難しいのは、そこにイベント側の事情が絡んでくること。なかなかマッチメイクが決まらないとか、出場選手が変更になったりとか、そういう中で、いろんなことが直前にしか発表できないっていう状況が出てきてしま



以前はずっとメインイベントだけを裁いていた角田だが、最近は石井宗師のアドバイスもあり第1試合とメインイベントを裁くようになったという。

信朗

違うベクトルで引っぱり合うバランスが成り立った地点にK―1の現状がある

うんですよね。

――そこで出てきた矛盾とか問題点を指摘するファンもいますし、色眼鏡でK―1を見る人も出てきちゃいますよね。

角田　決して悪意、他意があるわけじゃないんですけど、色眼鏡で見られるのも致し方ないという思いもありますね。そういうジレンマはありますよ。

――K―1には矛盾も問題点もあると思うんですけど、それは単純にいいかげんだからとか特定の選手をプロテクトするためじゃなくて、イベントと競技のせめぎ合いの中で生まれてしまうんですかね。

角田　手前味噌かもしれませんけど、審判団は大会の前と後に必ずミーティングをやっている。映像をチェックしながら判定基準やレフェリングを徹底して見解を統一する。ここまでやってる団体はないと思いますよ？　もちろん、問題になったことに関しては、その対処なりこちらの見解を、もっとストリクト（厳格）に発信していかなきゃなとは思ってるんですけど。

――単にK―1といっても、そこには興行側と競技側、谷川さん的な仕事と角田さん的な仕事が対立している部分も大きいわけですよね。

角田　言ってみればそれは水と油みたいなものですよね。でもケンカじゃなくて、ポジティブな対立なんですけど。僕と谷川さんは同い年なこともあって、お互い言うべきことを遠慮なく言えますしね。谷川さんは興行のことを第一に考えて、僕は競技として考えて、主張し合う中でK―1というのは、最大公約数というよりも現状、最小公倍数というか折衷点を見出すというね。違うベクトルで引っぱり合って、その力のバランスが成り立った時点にK―1の現状があるっていう。

――表面張力みたいなもんですかね。

角田　おっしゃるとおりですね。K―1っていうのは表面張力なんですよ。興行の論理だけで突き進んでるわけでもないし、競技としての正論ばかりを押しつけてるわけでもない。さっきも言ったようにファンと向き合い、テレビ局と向き合い、スポンサーと向き合って、ギリギリの表面張力で成立してるんです。

――そのバランスが崩れたら、コップに水が満杯になってなくてもの足りなかったり、逆に水がこぼれて大変なことになっちゃいますよね。

角田　僕は競技側としての立場で、興行をおもしろいものにするっていう考え方を全面的には否定しない。すべてバランスなんですよ。

――イベント論、観客論はあってしかるべきだと。

角田　一昨年の3月、横浜アリーナでひさびさにK―1に神が降りたイベントがあったじゃないですか。マイティ・モーがチェ・ホンマンをノックアウトして、澤屋敷（純一）がデビュー戦でジェロム・レ・バンナに勝ってっていう。

――ありましたね。あれはいいイベントでしたよ。

角田　そこでバダ・ハリとルスラン・カラ

角田信

エフが刀で斬り合うような素晴らしい試合をしてね。もう場内の盛り上がりが最高潮になったところで、武蔵と藤本（祐介）があんな試合をやっちゃった（苦笑）。

——これ以上ないってくらい膠着しちゃいましたよね（笑）。

角田　武蔵と藤本は気を悪くするかもしれないけど、君たちもプロを名乗るなら、この空気を読めよ、と（怒）。

——はいはい。

角田　「プロとしての嗅覚がないのか!?」って思いましたからね。せっかく盛り上がった大会が、この一試合で台無しになるぞと。

——それで延長戦に入るとき、角田さんがリングに上がって「このままだと両者失格！」と。

角田　あれ、言ってみれば無気力試合ですからね。ムエタイだったら無気力試合は永久追放ですよ？　「この空気を、現状を、競技統括としてどうにかしなきゃいけない」っていう思いから僕はあの判断というか、選手に対して警告をしたんだけども、結果としては試合は大きく動いて、延長で藤本がKOしましたよね？

——見事なハイキックで。

角田　なぜそれをもっと早くやらないのかなぁって話なんですけどね（苦笑）。でも、あのときは、長きにわたってK—1という大会で試合を取り仕切ってきた立場の人間として、初めてファインプレーといえる采配ができたなと自分では思ってたんですよ。

ルールに則って試合を裁くだけならこんな楽なことないですよ、正直

——試合を裁くだけじゃなく、観客論まで含めた仕切りができた、と。

角田　ところが翌日には「角田の独断専行」だとか「K—1がプロレスだと思われてしまう」って言われるわけですよ。あれにはさすがにムッとしたなぁ。あげくのはてにはプロレスマスコミだか格闘技マスコミだか知らないけども、「あれは角田が目立とうとしてとった行動」なんて言われてね（苦笑）。俺はべつにあそこで目立たなくても、ちゃんと格闘技界の外で自分の輝く舞台を持ってるんだから。



かくだ・のぶあき■1961年4月11日、大阪府出身。正道会館最高師範。高校二年生の頃に空手を始める。91年にはリングス参戦。92年の格闘技オリンピックでは“熊殺し”ウィリー・ウィリアムスと対戦して引き分けた。93年にスタートしたK-1GPではルールディレクターを務める。また、NHK大河ドラマ『天地人』にも出演。「花の慶次」テーマ曲『よっしゃあ漢唄』（キングレコード）も発売中。174cm、95kg。

——そこで競技とイベントの逆転現象が起こってましたよね。へんな言い方かもしれないですけど、角田さんはレフェリーとしては興行的センスが図抜けすぎてるというか。

角田　そこは自分ではわからないですけど、僕はレフェリーって3人目のファイターだと思ってるし、映画でいえば監督。監督のカチンコで始まり、「カット！」で止まる。試合がおもしろくなるのもつまらなくなるのも、レフェリーの腕次第っていう部分はあると思うんでね。もちろんそれがすべてではないですけど。

——普通のレフェリーであれば「興行の盛り上がりとか、試合がおもしろいかどうかは関知しない。レフェリーの仕事は目の前の試合をルールに則って裁くことだけだ」って考えるわけじゃないですか。

角田　ネバダ州のアスレチック・コミッションなんかは、レフェリングやジャッジングの技量にはおもいっきり「?・」マークがつくんだけども、考え方としてはそうなんですよね。僕はここ数年ラスベガス大会ではレフェリーやってないんですけど、なぜかというとネバダのアスレチック・コミッションが「角田のレフェリングは勝敗を操作するレフェリングだ」と（苦笑）。

——レフェリーはそこまでしちゃいけないんだって考えですよね。

角田　べつに勝敗を操作してるわけじゃないんだけどね（苦笑）。だから、先述の「独断専行」も含めて、俺のやることっていうのはどうしてもそういうふうに見られてしまう。でも、やらないと、イベントとしては非常にまずいものになるシーンがこれまでに少なからずあったことは事実なんですよね。難しい問題なんだけども（涙）。やらなかったらやらなかったで、「角田がいながら何やってんだ」ってことになるのよ。我々のポジションって、究極に後出しジャンケンされるポジションなの（笑）。ネバダの人たちがおっしゃるように、目の前の試合をルールに則って裁くだけならね、こんな楽なことないですよ、正直。もし競技と興行を完全に切り離せるんだったらね、僕がやってるような判断は必要なくなるんですけど。

——まだそういう状況にはなってないからこそ、角田さん的なレフェリングも必要だと。

角田　さっきも言ったように、K—1が文科省認定のようなスポーツになれば、おのずと体質は『角田裁き』みたいなものを必要とはしなくなっていくんでしょうけどね。

——時間はかかりますよね。

角田　K—1が生まれて16年ですけど、「たかだか16年」ですからね。もしK—1がオリンピックのような完全な競技化を目指すのだとしたら、それにはもっと時間がかかるし、そこを目指すのが正解なのかどうかだってわからないわけですから。K—1をどうしていくか、っていうより、どうなっていくのかってのは、おそらく今後も10年刻みのスパン、要は我々が死んじゃったあとの次の世代まで含めたスパンで考えていくことになるんでしょうね。

——考え方によっては、K—1はまだ「初期」の段階かもしれないですよね。

角田　そうですよ。カサブタみたいなもんです。

——カサブタですか（笑）。

角田　拳でいったらね。拳っていうのはカサブタから拳ダコになって、それでも叩いて叩いてやっと凶器になるわけですよ。いまのK—1はまだカサブタ程度なんじゃないですかね。だからこそ、これからもはてしなく叩き続ける必要があるんですよね。

【5月8日／都内・某ホテルにて収録】

椎名基樹のサムライ三昧

第37回

『タブーとスケベ心』



4.16 DEEP後楽園大会でU-FILE CAMPの長井憲治相手に約2年8ヵ月ぶりの勝利をつかんだ金原の次戦は6.30 DEEP後楽園大会での桜井隆多戦に決定。38歳にしておもいきったイメチェンに成功した金原と、37歳のマッチョマン隆多、ベテラン対決を制するのはどっちだ!?

あんぐりであった。

IBO世界スーパーライト級タイトルマッチ、マニー・パッキャオvsリッキー・ハットン。挑戦者のパックマンことパッキャオがヒットマン・ハットンを軽く一呑みにしてしまった。

軽量級のパッキャオがデ・ラ・ホーヤに続いて、中量級のビッグ・ネームをまたしても一方的に倒した。パワフルなハットンであるので、いくらなんでも勝てないと思ったが、結果は2ラウンドTKO。倒されたハットンはピクリとも動かなかった。パッキャオはもともとフライ級の選手である。階級の壁は崩壊してしまった。それをフィリピン人のパッキャオがやってのけたことが痛快だ。

パッキャオとハットンが並ぶと、あきらかにハットンが大きかったが、しかし、自分の記憶の映像をたどってみると、K-1 MAXの中では小さいブアカーオとクラウスもこのくらいの体格差の中で闘っているように感じるし、魔裟斗と山本KIDの体格差はもっとあったように感じる。

KIDも魔裟斗からダウンを奪っており、その能力に驚くとともに、格闘技において体重差は最も大きなハンディの一つではあるものの、時としてそれを飛び越してしまうこともあるのだと思い知らされる。また、パッキャオの中量級狩りを目のあたりにして、闘いのテーマに「タブー」が含まれると興奮が増すというあたりまえのことをあらためて実感。去年の年末、川尻が武田を、アリスターがバダ・ハリを破ったときも、観てはいけないものを観た気がして興奮した。

魔裟斗も引退前に総合の選手とやるらしい。これまた、まさかいくらなんでも勝てないだろうとは思うものの、その「いくらなんでも」がスケベ心を刺激する。魔裟斗本人は絶対の自信があって総合の選手と闘うだろうが、当然のごとくリスクは大きい。ただ勝つだけではなく、完勝しなければならないはずだ。

パッキャオの話に戻るが、今回のパッキャオのセコンドに、WWEのバティスタが付いていて驚いた。バティスタは、ちょっと前にCSの番組で、蝶野と対談をしているのを観たばかりだ。新日からボクシングの世界戦のビッグイベントと、なんと神出鬼没な男だろう。

なんでもバティスタは前妻が日本人の血が流れるハーフであることから日本通であるそうで、そのことから蝶野との対談に至り、父親がフィリピン人であることが、パッキャオ戦のセコンドにつながったと思われる。だからどーしたと言われると困るが、ひょんなことからバティスタに興味をうっすらと持ったのであった。

また、ずっと前にこのコラムでパッキャオと馳浩が似ていると書いたが、パッキャオをずっと見ているうちに、それが北朝鮮に拉致された蓮池さんのお兄さんだと気がついた。これもまた、だからどーしたと言われると困るが、気になる人は見比べてほしい。

話は急に変わるが、サムライTVの『キックの星』が『キックの惑星』となって復活したのが嬉しい。スカパーからe2 byスカパー！に変えたことで、放送形態が変わったのと、チャンネルが合わせにくい「番組表の僻地」になったことで、気づくのが遅れて、初めて観たのは2回目の放送だった。その中で司会の大江慎が、『キックの星』時代からおなじみとなった、他のチャンネルでは考えられないズルむけタイレポートをやっていたのだが、それが非常に衝撃的な内容だった。

偶然出会ったタイの庶民的なお祭りのレポート。日本だと射的にあたる出店は、檻の中に張られた水の上にベンチがあり、その上にタンクトップ&ホットパンツの少女が座っていて、ボールを投げて檻の脇の的に当たると、ベンチが割れて、少女が水の中に落ちるという仕掛け。水浸しになった少女を楽しもうという嗜好。まさに大江慎言うところの「アメージング・タイランド」な商売。『なるほど・ザ・ワールド』では決してありえないレポートに、有料放送の価値を見いだし、満足。大江さん偉い！

さらに大江慎は、数人いる少女の中で丸々と太った子、大江いわく「ジュゴンのような子」の的に何度もボールを当て、何度も水に落とすナイスセンスぶり。やっぱ生き死にが関わるリングの中を経験している人は、ギャグレベルが高いなと実感。

あと、1ヵ月遅れの話題ではあるが、金原弘光選手、DEEP初参戦初勝利おめでとう！ しばらく、金原が勝った姿を観ていなかったので、テレビの画面に向かって、声を出して応援してしまった。フィニッシュは横四方から相手の腕を足で固めパウンド。テレビ解説を務めた青木真也いわく「マット・ヒューズ・ポジション」。「UWFと最新技術の融合」っつー青木の解説はなんかちょっと洒落臭かったが、まあそんなことどーでもいい。

に、しても髪の毛を短く刈って、黒の今風&水着風のトランクスに身を包んでイメチェンの金原であったが、歴戦の跡が残る、腫れぼったい顔面は迫力あったなあ。ブッチャーの額の傷を思い出したよ。

佐伯社長は次戦に桜井隆多を考えているとか。いいねえ。それに勝ったら、また日本の中重量級戦線に名乗りを挙げることになるだろう。頑張ってほしい。

5月5日は『THE OUTSIDER』を観に行った。マッハ道場の17歳ヒカル選手がまさに活きがよくて素晴らしかった。修斗で先日デビュー戦を勝利で飾った矢地祐介選手も19歳だというし、なんつー時代だろう。締め切りの都合で原稿が書けなくて残念だが、5月10日はひさびさに修斗に行く予定。五味vs中蔵、楽しみだ。JCBホールも行ったことがないので楽しみである。



女房を質に入れてでも読みたくなるエピソード満載！

祝『キン肉マニア2009』開催記念

『キン肉マン』原作者が語るマット界交友録



漫画家　ゆでたまご

嶋田隆司

プロレス漫画の金字塔『キン肉マン』の産みの親が『kamipro』初登場！
不朽の名作の生誕30周年を祝した究極のファンイベント、
『キン肉マニア2009』開催を記念して、マット界とも縁深い嶋田先生が
その友情パワー炸裂な交友録を激語りだ！　GO! GO! マッスル!!

聞き手／井上崇宏（The Pehlwans）　構成／鈴木佑



小鉄さんの思わぬ一言から生まれた“キン肉マン＝マスクマン”という設定。ここから着想が広がり、「黄金のマスク編」、そして「キン肉星王位争奪編」など数々の壮大なストーリーが生まれたのだ！

©ゆでたまご／集英社

——今年、『キン肉マン』が記念すべき生誕30周年ということ、そして5月29日に『キン肉マニア2009』というプロレスイベントが開催されるということで、今日はよろしくお願いいたします。

嶋田　はい。こちらこそ、よろしくお願いします。

——まず、正確には『キン肉マン』の生誕が30年じゃなくて、ゆでたまご先生のプロ漫画家生活が30年ということですよね。

嶋田　そうですね。厳密に言えば『キン肉マン』は小学生のときから描いてるわけですから。

——いかがですか、ずっと現役で30年間やってこられている漫画家というご職業は。

嶋田　やっぱり自分のちっちゃい頃からの夢であり、小学5年生のときから確信を持って絶対にプロになるぞと思ってやってきた仕事ですから。やってて楽しいですし、「天職やな」っていうのはありますよね。

——今回は『kamipro』のインタビューなんですけど、先生は普段プロレスとか格闘技系の専門誌やネットのほうはチェックされてるんですか？

嶋田　ネットはあんまりチェックしてないですけど、雑誌は読んでます。やっぱり写真を見てると技を作るときのイマジネーションがけっこう浮かんできたりしますから。

——ネットはそんなにということですが、『ターザンカフェ』はマメにチェックされているそうですね（笑）。

嶋田　ああ。夢香さんとの交際あたりから見るようになったんですけど、あんなに凄い編集長だった人がいまこうなってるっていうのがホントおもしろいですよね（笑）。でも朝方、あれをチェックすると本気で落ち込むことありますよ。「いつか自分もこうなるんじゃないか……」とか。

——そんなバカな。くしくも同じ〝隆司〟だとはいえ（笑）。

おととしの暮れに結婚してから自宅に帰ったのは2回だけです

嶋田　だって僕も結婚してるのにほとんど家には帰ってないですからねぇ。おととしの暮れに結婚して、自宅に帰ったの2回ですからね。

——2年半でたったの2回！　どうして帰らないんですか？

嶋田　なんかダメなんですよ。ほら、会社勤めじゃないから何時までに出勤せんとあかんとかないでしょ？　だから家にいちゃうと、ずっとゴロゴロして仕事しなくなったりするんじゃないかって恐怖心があるんですよ。

——じゃあ、ずっと仕事場のほうで寝泊まりされてるんですか。

嶋田　はい。でも嫁とは週末に外で会ってますよ。完全に仕事のスイッチを入れたら、家庭のこととかあんまり耳に入れたくないんですよ。

——平日は締め切りの金曜まで仕事場にこもりきりなんですよね？

嶋田　そうです。どこにも出かけないですね。嫁には悪いことしてるなあっていう気持ちはいつも持ってますけどね。洗濯物なんかも仕事場の表に出しておいていっさい顔は合わせないですから。

——編集長時代のターザンと似たような生活ですね。

嶋田　ハハハハハ！　不吉なことを言いますねえ……。

——たいへん失礼しました（笑）。それで、嶋田先生といえばプロレスラーや格闘家との交友関係が非常に幅広いわけですけど、初めて交流を持たれたのは天龍（源一郎）さんになるんですか？

嶋田　いや、一番最初は新日ですね。コンタロウさんが『藤波辰巳物語』っていうのを描くから新日の道場に取材に行くってことで、僕らの初代担当編集の中野和雄さん——アデランスの中野さんから「君たちも来ない？」って誘われてついていったのが最初ですね。

——その頃の道場にいた選手っていうのは？

嶋田　そのときの若手は凄かったですよ。前田日明、髙田伸彦（現・延彦）、高野俊二（現・拳磁）とか。あと、山本小鉄さんもいらっしゃって。前田選手は「ちょっとリングに上がってみますか？」とか言ってくれて、好青年でしたね。「いつもラーメン屋で『キン肉マン』読んでますよ」って言ってくれたり。

——そこで小鉄さんに決定的な一言を言われるわけですよね。

嶋田　はい、ホントに。まだ『キン肉マン』が連載1〜2年目ぐらいで、そんなに知られてる存在じゃなかった頃だったんですけど、小鉄さんがパラパラっと『ジャンプ』を読んで、キン肉マンを指差して「これって顔はマスクでしょ？」って。

——先生たちは素顔のつもりで描いてたのに。

嶋田　ええ。でも、これはイケるか

「テリーのファンなんだろ!?」って鶴田に怒られたこともありました

もしれないぞ、と思って。それでウォーズマンとの決戦直前に急きょマスクという設定にしたんです。

ーー2回目の超人オリンピック決勝ですね。いきなり覆面剥ぎデスマッチということになりましたよね。

嶋田　ええ。だから小鉄さんには感謝してますよ。キン肉マンはマスクマンなんだっていうアイデアが増えたことが『キン肉マン』がヒットした要因の一つやと思ってますからね。ふろくでキン肉マンのマスク剥ぎのポスターがついた『ジャンプ』は午前中で売り切れたそうですから。発売日の午前中に完売したっていうのはいまでも『ジャンプ』の伝説です。それからも新日の道場には何回かおじゃまさせてもらいましたね。

ーーどうしてもゆでたまご先生というと、全日系の選手との絡みが記憶にありますけどね。

嶋田　次にテリーマンという超人を登場させた関係で、テリー・ファンクの取材で全日の会場に行きましたね。

ーー覚えてますよ、先生たちとテリーの3ショット写真。『フレッシュジャンプ』でふろくのポスターになってましたよね。

嶋田　あれ、たしか会場の控室でテリーと一緒に撮ったんですよ。恥ずかしかったですよ、テンガロンハット被って裸の上にチョッキ着てね(笑)。それを全日本の選手が傍らで見てるっていう。あと僕らがデビューして3年目の昭和57年に品川プリンスホテルのゴールドホールというところを借りきって『ジャンプ大博覧会』っていうイベントをやったんですよ。要するに『ジャンプフェスタ』の前身ですね。『こち亀』や『キャプテン翼』とか各作品のブースが設けられてて。で、その年『キン肉マン』のブースはリングを置いて学生プロレスの人たちがキン肉マンやバッファローマン、ラーメンマンのマスクを着けてプロレスをやるっていう催しをやったんですよ。

ーーそれ、『キン肉マニア』の原形じゃないですか(笑)。

嶋田　そうそう(笑)。それで、そのときにゲストで来てくれたのがジャンボ鶴田とリッキー・スティムボートで、ジャンボはノリノリでバッファローマンとかにジャンピングニーなんかを放って「オー!」とかやってくれたわけですよ。

ーーそれ、凄いですね。そんなドリームカードがすでに実現してましたかあ(笑)。

嶋田　で、僕が控室に戻ってリッキーとジャンボにサインをもらおうとしたら、リッキーのほうは喜んでサインしてくれたんですけど、ジャンボのほうはそれまでのノリノリぶりが一転してキラーフェイスになって「おまえら、テリー・ファンクのファンなんだろ!」って色紙をフリスビーみたく放り投げられましたね。

ーーえーっ、ジャンボにですか?

嶋田　ええ。お客さんの前と態度が全然違うんですよ。まあ、馬場元子



©ゆでたまご／集英社

マット界とさまざまなかたちでコラボをはたしている『キン肉マン』。1983年のテリー・ファンク引退時には、テリーマンが"元祖テキサスの荒馬"の労をねぎらうという夢のようなシーンも実現!

マット界で活躍する『キン肉マン』チルドレン

80年代前半に少年たちの圧倒的な支持を集め、いまなお絶大な人気を誇る『キン肉マン』。現在活躍する格闘家、プロレスラーの中にも多くの『キン肉マン』チルドレンが存在する!

あの"神の子"山本KIDも漫画やテレビアニメはもちろん、授業中にはノートにウォーズマンの落書きを描いてたクチだとか。それ以外にも魔裟斗、宇野薫、所英男、須藤元気、永田裕志、中邑真輔など、『キン肉マン』好きの名を挙げれば枚挙に暇がない。『キン肉マン』連載時は『週刊少年ジャンプ』の黄金期。当時小中学生で現在30〜40歳前後のファイターのほとんどは、その影響を受けたといってもいいのではないだろうか。

さて、いま最も『キン肉マン』フリークのレスラーといえば、『キン肉マニア2009』の構成を担当するマッスル坂井だろう。『マッスル』でも過去にハリケーンミキサーでレフェリーがバラバラになるシーンや、シーンチェンジャーでリングを火の海に変えるミスターVHSが登場するなど、『キン肉マン』へのオマージュがたびたび見られた。そんな坂井に『キン肉マン』への思いを直撃!

「もう、一言で言い表わせば『キング・オブ・コミック』ですよ! 嶋田先生とは去年の『キン肉マン』生誕29(ニク)周年記念イベントで初めてお会いしたんですけど、僕とハリウッドザコシショウさんを見るなり「あ、バッファローマンとアシュラマンだ!」って言ってくださったんです。ネタにするのを笑顔で黙認してくれたと勝手に解釈しました。そもそも『マッスル』自体が、壮大な『リアルキン肉マンごっこ』ですから。子供の頃は他会場からの中継とかつないだりするのは不可能でしたからね。リングに稲妻走り、炎の戦士を照らし、勝利に向かってキン肉ビームが飛び散るかぎり、僕は『キン肉マン』を後世に伝えていきますよ!」

言葉の意味はよくわからんがとにかく凄い自信だ! そう、『キン肉マン』とは闘う男たちにとって永久不滅のバイブルなのだ!

楽太郎師匠のお誘いで天龍さんの飲み会に参加するようになったんです

さんからは「ジャンボはヤキモチ焼きなんだからちゃんとしてね」みたいなことを言われましたけど。

――そこはおまえがちゃんとしろって話ですよね（笑）。先生は馬場派で有名ですけど、猪木さんと馬場さんの二人ともお会いになったことがありますよね。

嶋田　はい。猪木さんは一人で道場の居間でテレビ観てて、僕らに「入っておいでよ」って上げてくれたり、いろいろと話をしてくれたりしましたね。

――どんな会話をしたんですか？

嶋田　「なんかいいアイデアない？」って聞かれたんで、とっさに「全日からブロディを引き抜いたらどうですか？」って言いましたね。馬場派やのに（笑）。猪木さんは「ムフフフ」って笑ってましたけどね。

――なんちゅう話をしてるんですか、道場で（笑）。

嶋田　そしたらあとでホントにブロディが引き抜かれて、めちゃショックでしたけどね（笑）。さすがに僕の一言が原因じゃないと思うんですけど。馬場さんとは『フレッシュジャンプ』で対談をやったんですけど、あれは暑い夏の大宮スケートセンターでした。取材時間が予定よりだいぶオーバーしちゃったんで、広報の人が「決められた時間内でやってもらわないと困ります」って言ったら、（馬場ボイスで）「いいんだよ！　凄い楽しいんだから！」って言ってくれて。馬場さんがこんなに楽しそうなのはひさびさやってことを聞いて、嬉しかったですね。

――馬場さんは何がそんなに楽しかったんですかね。

嶋田　あんまり喜ばすようなことは言ってなかったんですけどね。「ブレーンバスターってホントはバーディカルスープレックスって言うんですよね？」って言ったら、（馬場ボイスで）「違うよ！　ブレーンバスターはブレーンバスターだよ！」って、凄い怒られた覚えしかないんですけどね（笑）。

――それと後楽園ホールで全日を観戦してるときに、ファンの人とケンカになったっていうエピソードも聞きました。

嶋田　そうです。ちょっとマナーの悪い5～6人のグループに観戦中にうしろからモノをぶつけられて。で、試合が終わったあとにそいつらのところに行って文句を言ったら、逆に「やんのか？」みたいなことを言ってきたんで、僕が先に殴ったんですよ。それで小競り合いになったところで近くにいた（三遊亭）楽太郎師匠が、「おまえら、何やってんだよ！」って止めにきて。そしたら相手が、「こいつに殴られた」って言うから「先にきたのおまえやろ！」って言い返したら、楽太郎さんが僕に「あんちゃん、一発殴らせてやりな。そしたらこいつも得心するんだから」って。それで一発殴らせたんですけど。

――楽太郎オフィシャルルールに則ったわけですね（笑）。

嶋田　完全に楽太郎裁定ですよ。それでもう僕も怒りが収まらないじゃないですか。そしたら楽太郎さんが「あんちゃん、これから天龍と飲みに行くんだけど一緒に来ない？」って言ってきて。で、「仕事は何やってるの？」って聞くから、「漫画家です。『キン肉マン』のゆでたまごです」「えーっ!?」みたいな（笑）。それで水道橋の駅前にある焼肉屋に行ったんですよ。そしたら天龍さん、三沢、小橋、川田、渕、百田光雄、ミスター林……錚々たるメンバーがいて。「ああ、天龍さんってホントに慕われてんだな」って感じましたね。ジャンボはいなかったんで、ホントに仲悪いんだなとか（笑）。そこからですね、後楽園大会のあとは必ず天龍さんの飲み会に行くようになって。

――その天龍飲み会でのちに親友となる甲本ヒロトさんや春一番さんとも出会ったんですよね。

嶋田　そうですね。天龍さんが人の輪を広げてくれましたね。僕はそれまであんまり友だちがいなかったんですけど、天龍さんの飲み会に行ってから凄く輪が広がりましたね。

――ヒロトさんの家で春さんとプロレスごっこをしてテーブルを破壊したんですよね？（笑）。

嶋田　ええ。僕が当時太ってたんで、ディック・マードックvs猪木という設定で。飲んでるうちに春ちゃんと言い合いになって「プロレスで決着だ！」みたいな（笑）。で、ドロップキックとかやったら、ヒロトくんが「あっ、ドロップキックじゃ！」みたいにいちいちいいリアクションしてくれるんで、こっちも調子に乗って（笑）。そしたら、最後に大事にしてたんやろうな、あれ……ガラスのテーブルが真っ二つに割れてね。

――のちにSWS時代の天龍飲み会では北尾光司が急性アル中で救急車で運ばれたことがありましたけど、あのときも嶋田先生は現場にいたんですよね？

嶋田　ええ。群馬の温泉ですね。あれは大会の打ち上げとかじゃなくて、忘年会をやろうって目的で温泉に行ったんですよ。で、そのとき北尾がおもいっきり遅刻してきたんですよ。それで、天龍さんが「遅れてきやがって！」みたいな感じで酒をガンガン注いで飲ませたんでしょう



Go! Go! Muscle!!

ダメな30代に大好評！　変態座談会シリーズ特別編！

ミノワマン参戦!!

生誕29(ニク)周年記念
僕たちが大好きな
キン肉マン
変態座談会

『週刊少年ジャンプ』で連載されていたプロレス格闘漫画の金字塔「キン肉マン」が、今年記念すべき29（ニク）周年を迎えた。それを祝してマット界に生息する『キン肉マン』フリーク4名が一堂に会し、おおいにその変態的な愛情をブチまける！　♪あぁ心に～愛がな～ければ～、変態～座談会じゃ～ないのさ～♪ってことで、30代の大きなお友だちは、女房を質に入れてでも読まんとあきまへんで！(アデランスの中野さん調)

撮影／乾晋也

本誌No.121では『キン肉マン』生誕29（ニク）周年を記念して、ミノワマンをゲストにキン肉マン変態座談会を敢行！『キン肉マン』は“大きなお友だち”である変態たちの永遠のヒーローなのだ。そして『キン肉マニア2009』にミノワマンの緊急参戦が決定！　vsキン肉マンは実現するのか？

ね。

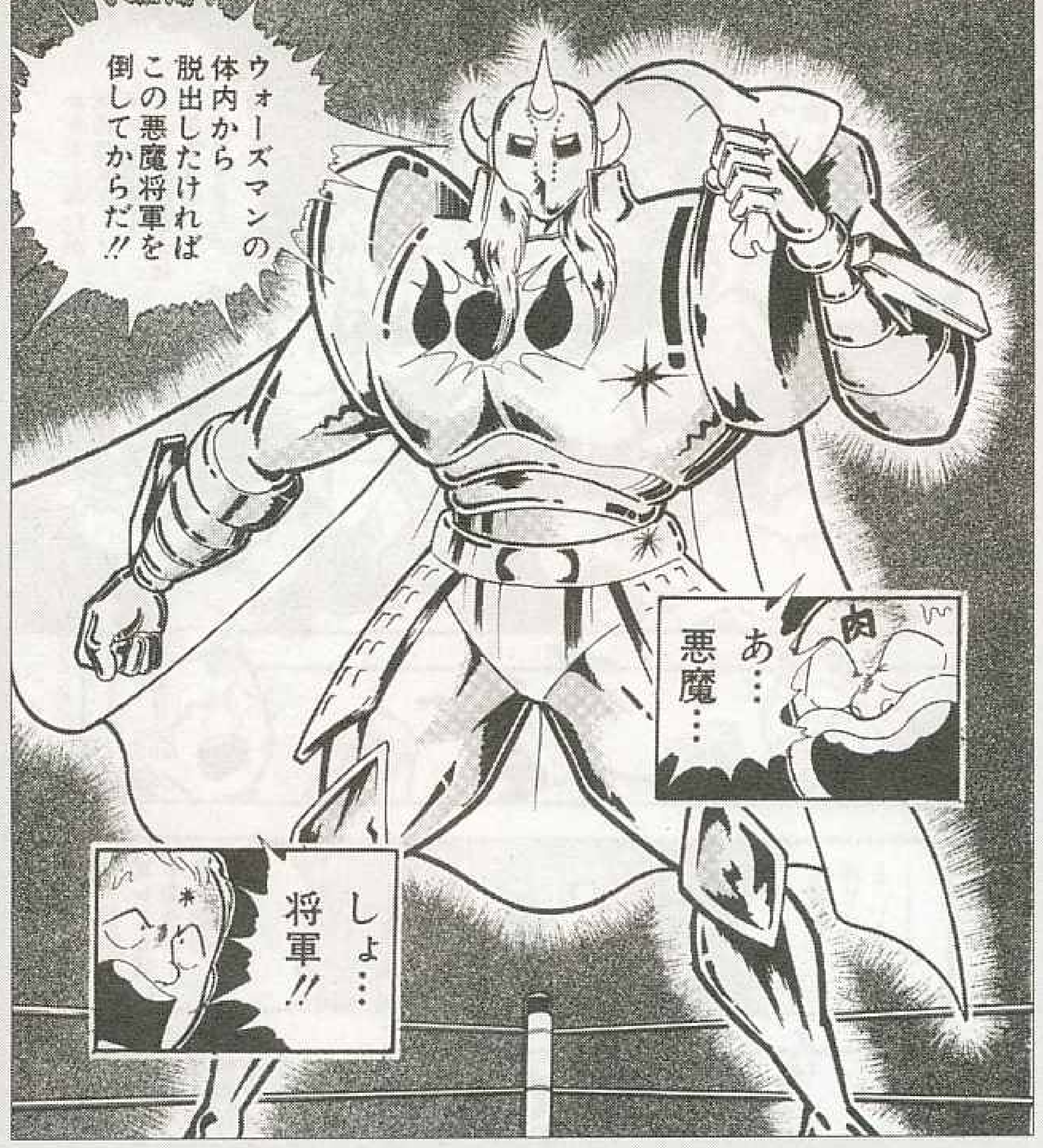
り〃（笑）。

――じゃあ、もともとお気に入りの

した。今度ごはん食べに行きましょ

ハ選手のお父さんから「こいつ、『キ

ね。
——元横綱だろうが容赦ないんですね。
嶋田　僕から見たらそんなに量を飲んでるようには見えなかったんですけど。そうしたら北尾がトイレから帰ってこなくなっちゃって。それで様子を見に行ったら廊下で「苦しいよぉ〜、苦しいよぉ〜」ってだだっ子みたいなことを言いながら七転八倒してるんですよ。もうゲロまみれだったんで、あわてて僕らが介抱して。で、その日はプロレス記者の人たちも来てたんですけど、みんな介抱もせずにバンバン写真を撮ってるんですよ（笑）。
——鼻つまみ者の悲しい末路ですね（笑）。
嶋田　で、そのあくる日の『東スポ』一面が〝北尾、急性アル中で病院送り〟（笑）。
——その一面に浴衣姿の先生が北尾を介抱してる写真も掲載されてて。
嶋田　うん、浴衣がまくれてブリーフも見えててね。「やった、とにかく『東スポ』一面を飾ったぞ」みたいな（笑）。
——あと最近だと、やっぱりミノワマンとの交流が有名ですね。
嶋田　昔、菊田早苗選手が「パンクラスに凄い『キン肉マン』好きな選手がいるんですよ」って言ってて。それが美濃輪選手だったんです。僕もパンクラスをずっと観てて、美濃輪選手のファイトが大好きだったんですよ。それで、一回会いたいなと思って同じく美濃輪ファンだった相棒の中井（義則）くんが美濃輪選手の絵を描いて、パンクラスの横浜道場に自分たちから会いに行ったんです。



『キン肉マン』の悪役キャラの中でも随一の人気を誇るのが、7人の悪魔超人、悪魔騎士たちを束ねる悪魔将軍！　地獄の断頭台でキン肉マンをおおいに苦しめた。しかしフェイバリットレスラーが悪魔超人の首領だなんて、さすがは魔王秋山である。

——じゃあ、もともとお気に入りの選手だったんですね。
嶋田　そうです。僕、アマチュア修斗時代の佐々木有生戦とかも観てますしね。二人とも凄い動きをしてたなあ。
——最初に会ったときの印象はどうでした？
嶋田　まあ、あんな感じですよ（笑）。「僕、小学生のとき、キン肉マンの素顔が知りたくてキン消しのマスクの部分をカッターで削ってました」とか。「え、なんやそれ！」って思って。これは筋金入りやな、と（笑）。『キン肉マン』を好きだって言ってくれる選手っていっぱいいるじゃないですか。でもこの人はちょっと違うぞ、と。
——ちょっとマジでアレだなっていう（笑）。
嶋田　ええ。「超人になりたいんですよね」とか言われて。それから一緒に食事とか行くようになったんですけど、いまだにずっと『キン肉マン』の話を二人でしてます。毎回質問攻めに遭ってますよ（笑）。
——ミノワマンは最高ですよね。あと聞くところによると、秋山成勲選手ともメル友だっていう話を聞きましたが。
嶋田　そうなんですよ。それはたまたまある雑誌で『キン肉マン』の好きなキャラクターについて格闘家が語るという企画があって、企画に参加していただいた格闘家の人たちに色紙をプレゼントしたんですね。そうしたらいきなり秋山選手からメールがあって「色紙ありがとうございました。今度ごはん食べに行きましょう」って。そこからですよ。まだ一回も会ったことないんですけどね。
——じゃあリアルにメル友じゃないですか（笑）。
嶋田　はい。で、「『パチスロキン肉マン』というのが出たよ」ってメールしたらすぐホールに行って打ってくれたりとかね。
——あのー、僕の内偵調査によると、秋山選手が無条件で従順になる人間は清原和博とみのもんた、そして嶋田先生の3人だけだという結果が出てるんですけど（笑）。
嶋田　ハハハハハ！　どうなんですかね（笑）。彼は好きな超人がね、悪魔将軍なんですよね。
——完璧ですよね（笑）。
嶋田　一回、たけし軍団のお宮の松さんがDREAMのレポーターとして選手控室に秋山選手のインタビューをしに行ったら、なんかちょっと難しそうな空気だったんですって。そこでお宮さんが「僕、ゆでたまごの嶋田さん知ってるんですよ」って言ったら、秋山選手が「ん？」ってなって急に好意的になったみたいで。
——さすがですね（笑）。それと今度、宇野薫選手とのコラボで宇野選手のキン消しとかTシャツが発売されますよね。あれも好企画ですよね。
嶋田　宇野くんとはアブダビコンバットを観に行ったときに仲良くなりましたね。マッハ選手もそう。マッハ選手のお父さんから「こいつ、『キン肉マン』ばっかり読んでてこんなになっちゃったんですよ」って言われましたけど（笑）。
——親御さんから直接苦情が（笑）。それで今回の『キン肉マニア2009』にもマッハ選手みたいになっちゃった大人たちの大集結が予想されるわけですけど。このイベントの構想はけっこう前からあったんですか？
嶋田　うーん、キン肉マンをリングに上げたいっていうのはずっとありましたね。昔、新日が勝手にキン肉マンを出そうとしたあの未遂事件ありから。それからもけっこういろんな団体からキン肉マンを上げたいっていう話はあったんですけどね。
——FMWを旗揚げする頃の大仁田大仁田もそうでしたし。
嶋田　そうなんです。大仁田から「キン肉マンをやりたいんです」っていう電話が編集部にかかってきて。「誰がキン肉マンをやるんですか？」って聞いたら「僕です」ってことで、即決でダメって言いましたけど（笑）。
——「おまえなのか！」っていう（笑）。
嶋田　大仁田即NGなのは納得ですけど、大仁田のそのセンスは凄いですよね。ただキャスティングがデタラメなだけで（笑）。
嶋田　そうなんですよ。全日のときはそんなにセンスがある選手だとは

ミノワマンは筋金入りのファンで毎回質問攻めに遭ってます（笑）

思わなかったじゃないですか。天龍さんが言うてましたもん、「あいつは前からいろんなアイデア持ってるヤツだったよ」って。でも全日のときはそれが押さえられてたんだって。

——だから当時の白いタンクトップ姿はキン肉マン構想のなごりだっていう。

嶋田 はい。で、リー・ガク・スーがラーメンマンをやってみたいな。巨漢のヒゲむくじゃらの選手にバッファローマンみたいな角つけさせたり……そうそう、テリーマンみたいなのもいたんですよ。やたら拳を振り回す熱血ファイトのショボいテリーマンが……思い出した。ジミー・バックランドって見たこともないただのアメリカ人のおっさん（笑）。

——ああ、なんかいましたね、そういう人。まあ、これまではなかなか首を縦に振らせるプレゼンがなかったということですね。

嶋田 そういうことですね。やっぱり佐山聡みたいな天才的な人はそうはいないですからね。これは永久に無理なんだろうなと思ってました。で、だんだん総合（格闘技）のほうが盛り上がってきて、じゃあ総合のリングでどうかなと思ったりもしてたんですよ。そう思ってたときにね、去年の大晦日に……。

——FEGから万太郎のオファーがあった。

嶋田 やっぱり総合は凄くリスクが高いよなと思ったんですけどね。でも29周年っていうタイミングで話が来たっていうのは、やれってことなんやろうな、と。それで万太郎を出したんです。結果は残念でしたけどね。

UFCのダナとロレンゾも『キン肉マン』が大好きみたいです

——でも今年に入ってUFCの『TUF』のトライアウトにマスクを被ったヤツが参加して、ファイターのポテンシャルとしては合格点だったのに、最終的に本名を名乗ることとマスクを取るのを拒否して失格になったっていう話がありますよね。それを聞いて、これはまさしく万太郎効果が北米に波及したなと思ってほくそえんでたんですけど（笑）。



しまだ・たかし■1960年10月28日、大阪府出身。78年に『キン肉マン』が赤塚賞準入選となり、翌79年から『週刊少年ジャンプ』で同作を連載開始。83年にはテレビアニメ化されて大ブームを巻き起こし、85年には小学館漫画賞を受賞。現在は『週刊プレイボーイ』にて『キン肉マンII世』を好評連載中。

嶋田 それ、聞きました。出身地・火星でしたっけ？（笑）。UFCといえば今回WOWOWの放送でタイトルバックにキン肉マンを出したいという話をいただきまして。

——ああ、そうですよね。

嶋田 ああいうのもちゃんとダナ・ホワイトとロレンゾ・フェティータの許可を受けないとダメらしいんですよ。キン肉マンはシューズを履いてるし、テリーマンはニーパッドを着けてるじゃないですか。だからシューズもニーパッドも取ってくれという指示が入って。

——ダナとロレンゾのチェックが入ったんですか。

嶋田 ええ。でもあとはOKでした。あの二人は『キン肉マン』をよく知ってて大好きやったんですって。とくにロレンゾのほうが凄い好きやったみたいですね（笑）。

——えー、あの二人もキン肉マニアでしたか（笑）。そういえば、今回構成を担当するマッスル坂井さんが「『キン肉マン』っていうのは日本で一番のメジャー団体で、全試合がテレビ中継されてマーチャンダイジングでも成功して、それはWWEにもひけをとらない」って言ってたんですね。

嶋田 そうなんですかね（笑）。僕もそれをどっかで聞いたとき、たしかにそうかもなって。

——たとえば僕なんかも、普段プロレスとか観てて「よくできてるんだろうけど、なんでいまいちおもしろくないんだろう？」って思うときがあるんですね。そこでふと、「これ、闘ってる人が全員『キン肉マン』の超人キャラだったらメチャメチャおもしろいんじゃないか」みたいなことを思ったことがあるんですよ。

嶋田 ああ、なるほど。

——プロレスって昔と比べてレベルは上がってるはずなんだろうし、試合内容もわりと考えられてると思うんですよ。で、何が足りないのかなっていったら、「ああ、人の魅力か」というシンプルな結論で。

嶋田 そうですね。こないだ『読売新聞』で小中学生の子ども記者にインタビューされたんですけど、みんな『キン肉マン』を知ってるんですよ。で、ゲームを持ってきてたり、取材終わったあとに「サインください」とか言ってくれたり。で、「君たち、プロレス観たことあるの？」って聞いたら「ない」と。『キン肉マン』は知ってるけどプロレスは知らないんです。それはちょっと「えぇ～」ってところがあって。やっぱり『キン肉マン』はプロレス・格闘技モノでここまでやってきたわけですから、これはいい機会やなと思って。当日はプロレスファンも『キン肉マン』ファンも両方が来てくれるでしょうからね。

——はい。本当に今回のイベントはとても楽しみにしています。そして本業の漫画のほうでもますますのご活躍を期待しております。今日はありがとうございました。

嶋田 ありがとうございます。『キン肉マニア2009』、ぜひ皆さんも期待してください。

【09年4月27日／都内某所にて収録】



イラスト◎ゴローちゃん

今回のゲストは引退して11年、現在は都内の病院でナースのお仕事真っ最中の長嶋美智子さん！　掟ポルシェがもっとも喉をからして応援コールした美形ヒールの登場です！　シー・イズ・ハードコア!!

掟　大ファンだったのでお会いできて超光栄です！　長嶋さんは子どもの頃からプロレスラーになりたかったんですか？

長嶋　最初は歌手か女優になりたかったんですよ。

掟　おお〜っ、アイドル志望！

長嶋　そうです（笑）。松田聖子ちゃんに憧れて。ヒラヒラの衣装を着たかった。

掟　もしかしてオーディションも受けたりしました？

長嶋　あ〜、いっぱい受けましたよ。じつは小学校のときに劇団いろはに合格して（笑）。でも入らなかったんです。親は合格すると思ってなかったんで。

掟　あ〜、どうせ落ちるだろうから、記念に受けに行ってこい、と。

長嶋　そんな感じだったんですけど、合格してビックリしちゃって。で、そのチャンスを逃して、中学2年のときにクラッシュギャルズブームで、そっからプロレスラーを目指すようになって。

掟　いやいや、俺にとってはアイドルでしたよ！　長嶋さんといえば、LLPW時代に紅夜叉さんとのヤンキータッグで活躍した印象が強いと思うんですけど、LL入団当初の正統派ベビーフェイスから一転して、特攻服を着てヒールになるっていうのは誰の発案だったんですか？

長嶋　もともと悪役はやってみたかったんですよ。昔、全女のときに「悪役になりたい」って言ったら、（松永高司）会長にもの凄く怒られて。「おまえはどう見てもベビーだろ」って。私はたまたま獄門党のセコンドによく付いていたんですけど、そしたら観ててておもしろくなっちゃって。それで「獄門党に入りたい」って言ったら、（ブル）中野さんは、「真知子（コンドル斉藤）ちゃんみたいになればいいじゃな〜い」とか言ってくださって。

掟　中にはアジャ様みたいに「ヒールなんか嫌だ！」って泣いた人もいるっていうのに（笑）。

長嶋　でもLLに入ったら、今度は立野（記代）さんと組んで、JBエンジェルスみたいにやりたかったんですよ。なのに、うまく組ませてもらなくて、ベビーでやっても負けてばっかりで。こう見えても、私、凄い負けず嫌いなんですよ。

掟　そんな感じには見えませんよね。



ながしま・みちこ■1970年9月26日、群馬県渋川市出身。幼少時からアイドルに憧れるも中学時代に女子プロレスを観て全女入りを決意。89年12月6日、鈴木敦子戦でデビュー。ケガのため一度引退するもLLPWで再デビュー。特攻服に身を包み紅夜叉とヤンキータッグを結成し一躍ブレイクをはたし、他団体でも活躍。98年6月の現役引退後はトリマーを経験したのち、看護婦に転身。現在は世田谷区の田崎胃腸科内科にてナース姿で勤務中。164cm、56kg。

長嶋　ですよね。ハッキリ言って、やってもつまらないなって思うことが多くて。そんな頃にたまたま社長の風間（ルミ）さんから「ヒールでいけ」と。社長に嫌われてたのかなぁ（笑）。はじめは特攻服はホントにイヤでしたからね。だから、ヒールになってからも絶対どこかにヒラヒラの女の子ちゃん部分を入れて（笑）。

掟　ちゃんと特攻服の片袖だけレースでしたよね。

長嶋　それが私のこだわりなんです。聖子ちゃんに憧れてたぐらいですから。

掟　悪田聖子って感じで（笑）。

長嶋　不良でもなかったんで、イメージとまるっきり違うじゃないですか？　誰が観ても「え〜っ？」っていう。

掟　不良じゃないのはすぐわかりましたよ！　ヤンキーギミックを始めて間もない頃に出待ちして、「『長嶋美智子ヨロシク』ってヤンキー調で書いてください」ってサインを頼んだんですよ。でも、漢字がわからなかったみたいで〝世露死苦〟の〝露〟ぐらいで迷ってて（笑）。

長嶋　ハハハハハ！　だって、書いたことないんですもん。

掟　で、書いてるときに言ってたんですよ。「すいません、私、ヤンキーじゃないんで……」って。悪くなったと見せかけて、いきなりギミックをばらしてるのにも感動して（笑）。リングを降りたら素が出てた部分が魅力だったと思うんですよ。

長嶋　そう言っていただけるとありがたいです（笑）。でも、ダメですねぇ、なりきってないっていうか……。

掟　あと、長嶋さんといえば、LLの前は平成元年組として全女に丸2年ぐらいいたわけですけど、松永会長のいい話とかあれば聞かせてもらえますか？

長嶋　会長はねぇ……（しみじみと）。私、よく〝山〟に行かされてたんですよ。

掟　山といえば、全女の保養施設だった秩父のリングスターフィールドのことですね。

長嶋　そうです。あそこにはプールがあったんですけど、よく落とされたりとかしてましたね。Tシャツと短パンで、水かけられるとスケスケになるじゃないですか？　それが見たいがために会長はホースで水かけたりするんですよ（笑）。

掟　エロ目的で（笑）。

長嶋　そう（笑）。しかも、そういうときに限って、白い短パンとかはいてて、濡れたらパンツが丸見えになって。「いや〜、パンツが透けとるわ！」とか言いながら笑ってて（笑）。

掟　おもいっきりエロジジイですね（笑）。

長嶋　はい（笑）。でも、会長には凄いかわいがっていただいて。私、全女を辞めて、すぐに『しじゅうから（※全女経営のカラオケボックス）』の店長をやれって言われて、しばらく全女の社員をやってたんです。

掟　本来なら25歳定年引退後の受け皿みたいな店を、2年で辞めた選手が任されるのは珍しいパターンですよね？

長嶋　はい。「辞めさせてください」って言ったときに「じゃあ、おまえはウチの社員になれ」って言われて。


こちらが掟さんが長嶋さんのヒール転向直後に出待ちしてゲットしたサイン入りポラ&紅とのヤンキータッグTシャツ。ポラにはたどたどしい書体で「無我死魔魅血弧 世露死苦」と書かれている。掟&長嶋タッグの動画は『kami-pro Move』で公開中です！

掟　それはかなり特別待遇ですね。

長嶋　たぶん、私がクソ真面目なのを見抜いてたんでしょうね。働いてからも、しじゅうからの私のタイムカードを見て、「おまえのタイムカードはなんだ？　毎日同じ時間だ。笑ってしまう。こんなヤツ、いまどきいるんだ」みたいな。

掟　まあ、全女にはいないタイプでしょうね（笑）。最後に、将来の夢は？

長嶋　じつは何年か前からスピリチュアルとかハマってまして。神社めぐりをしたり、あと自分でもタロットとか、いろいろ占いもやったりしてて。

掟　ゆくゆくは占い師に？

長嶋　行列ができる、なんとかの母みたいな（笑）。

掟　LLPWでは大向美智子さんもスピリチュアル系の仕事をされてましたよね。

長嶋　同じ美智子つながりで、そういう話もよくしてました（笑）。一緒にやれたりしたらおもしろいですよね。

掟　それはいいですね。W美智子としての活動も期待してます！

Okite Porsche◎掟ポルシェ■ロマンポルシェ。のライブ予定は5・30（土）渋谷LUSH（03−5467−3071）、w／バイナリキッド、7・3（金）渋谷club asia（03−5458−2551）、w／アーバンギャルド。その他の情報は掟ポルシェブログを死ぬ気でチェック！【http://blog.excite.co.jp/porsche/】

船木誠勝“監督”が語った



映画『THE PROPHECY』より

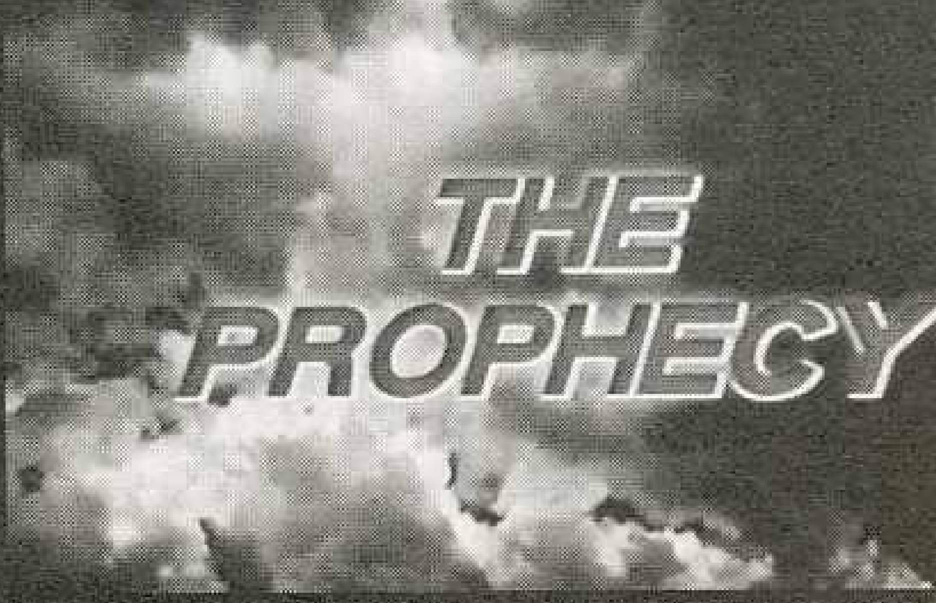
“幻”の自主映画制作の全真相!! 船木誠勝



あの菊地成孔氏が語った「船木の自主映画、観たことありますよ」という一言から始まった衝撃の映画『THE PROPHECY』をめぐる旅……。
今回は、謎に満ちたこの幻の怪作について、なんと船木本人のインタビューが実現!
インタビュアーに映画ライターでもある高橋ターヤン氏を迎え、全真相を徹底追及!!

聞き手／高橋ターヤン　構成／真下義之

衝撃の誌上レビュー！
これが『THE PROPHECY』だ！



倒産寸前の中小企業を経営する主人公が同窓会の手紙を送るシーンのあと、荘厳な音楽と大空のカットに乗せて、『THE PROPHECY』のタイトルロールが出現。船木の本気感がヒシヒシ伝わってくるオープニングだ。ちなみに船木の監督名は「MASA FUNAKI」と表示される。



自動車ディーラー、プロレスラー、ヤクザ、芸能人……同窓会に続々と集結するメンバー。下ネタの連発で強烈な印象を残す寿司職人（写真右）を演じるのは、映画俳優の金城明男氏。登場人物が雑談するこのシークエンスでそれぞれのキャラが紹介されていく。



そんな中で突如、主人公が「明日、地球が滅亡する！」と予言し、「銀行強盗を行なう」ことを宣言。その場で協力者をつのるが、誰もとりあわない。しかし、本気を感じ取ったヤクザの男だけは、手持ちのマシンガンを貸し出すのだった。そんなとき、突発的な悲劇が……。



奮起した主人公が祈りを捧げたあと、銀行強盗に向けてマシンガンを持って道路を疾走！　また同窓会のメンバーたちも主人公を見届けるべく、それぞれが個人行動で目的地の銀行の前に集結していたのだった。ついに銀行へ突入する主人公！　そこで待っていた運命は？



銀行強盗を決行した夜。「地球滅亡」のタイミングまであと数分……。とある公園に集まってきた同窓会のメンバーたちは、それぞれが携帯電話を出して、時報を確認して、その瞬間を待つのだった。はたして地球はホントに滅んでしまうのか？　そして主人公は？

――今回は〝映画監督〟船木誠勝としてインタビューをお願いします。

船木　ハハハハハ！　ちょっと恥ずかしいですね。

――船木さんの自主映画ってウワサには聞くけど誰も観たことがない〝幻〟の存在だったんですが、最近、菊地成孔さんという音楽家の方経由で『THE PROPHECY』という作品を観させてもらったら、「これは凄い！」となりまして。

船木　そうですか（笑）。あれは03年に撮影したんですが、企画や脚本を書いたのは98年くらいなんです。その頃は遊びで一年に一回映画を撮ってまして、99年のノストラダムスの大予言の年を翌年に控えてたので、それをネタに脚本を考えたんです。

――劇中に「恐怖の大王」というキーワードが出てきますね。

船木　でも、99年になるとリング上の活動が忙しくなって映画どころじゃなくなって、お蔵入りになってしまったんですが、00年に引退して俳優活動を始めて、比較的空いた時間ができるようになったので、また撮り始めたんです。

――世紀末をまたいじゃった、と（笑）。この映画を撮り始めるまでに『五条霊戦記』のような大作映画や『シャドー・フューリー』のような主演映画も経験されましたね。

船木　ええ。プロとして俳優をやってる中で、映画の作り方がわかってきた頃ですね。スケジューリングとかプロデューサー的な役割の大事さもわかりましたし、そういう部分は反映させているというか。

――やっぱりそうでしたか。

船木　この映画はカメラマンも本職の方を使ってますし、音楽も本職、編集もプロの使う編集室を使ってやりましたから。自分の映画ができていく過程は嬉しくてしょうがなかったですね。「どこに出す」とかは考えなかったんですけど、みんなが自分のために動いてくれてホントの映画監督になった気分で。

――贅沢な監督ごっこというか。

船木　ホントそうですね（笑）。でも、とにかくお金をかけないで作ったので素人っぽいところもけっこうあるんです。たとえば映画の中盤の銀行強盗のシーンなんかは完全にゲリラ（撮影）で……。

――ロケはゲリラでしたか（笑）。

船木　自分が反対車線に車を停めて車内から隠し撮りして（笑）。逆に前半の事務所のシーンは前日に丸々通しでリハーサルをしてます。当日は朝イチから夕方までズーッと撮りっぱなしで、１００カットくらい撮ると決めてまして。

――一日１００カット⁉　映画の撮り方としてはかなりムチャですね。

船木　そうかもしれません（笑）。でも前日のリハーサルが功を奏して、予想よりも3時間くらい早く撮り終わったんですよ。

――当時、俳優としてもバリバリだったと思うんですが、ご自身が出演しなかったのは？

船木　自分は監督をやるなら常に全体を見ていたいから、監督しながら出るのは難しいと思いましたし、自分はどちらかというと作りたいほうなんです。……じつは俳優を始めたのも知人に「監督をやりたいんですけど」って相談したら「じゃあ俳優をやらなきゃね」と言われたのがきっかけですし。

――えっ！　じゃあ俳優活動は監督になるステップだったんですか？

船木　じつはそうなんです（キッパリ）。でも、俳優のキャリアを積めば積むほど「映画作りは中途半端ではできないな」って気持ちが大きくなって。ホントは自主映画だからもっと自由に作るのが正しいんですが、プロの現場を知るとどうしても欲が出てきますし。

――この映画は密室劇的な作品ですけど、船木さんが好きなブルース・リー作品のようなアクション映画にしなかったのはなぜですか？

船木　いや、撮り始めの頃は毎回アクションばかりですよ（笑）。でも当時はアクションの撮り方もよくわからないから、単純に闘わせてそれを撮ってるだけで。当然ですけど、あとで観てもホントにつまらない（笑）。それで趣向を変えて「練習生とレフェリーをガチンコで闘わせてどっちが強いんだろう」という実験映画を作ったんですよ。

――それまたムチャですね（笑）。

船木　レフェリーを一週間鍛え上げて、当時入門したばかりの練習生と闘わせたことがあったんです（笑）。当時は藤原組に所属してましたから

藤原組ルールで、さらに掌底で顔面ありの三本勝負をやらせたんです。

──ガチンコの三本勝負を（笑）。

船木　最初はみんな「レフェリーが負けるだろう」と思ってたんですよ。だけど一本目は首を取って、二本目は時間切れ判定まで粘って、レフェリーが勝っちゃって。全然狙ってなかったんですけど、逆に感動モノになっちゃって。最後はみんな感動して泣いてるんですよ（笑）。

──ダハハハハ！　そこまで撮っても「外に出そう」とは思わなかった？

船木　作ってみんなで観て、それだけで満足してましたね。作ること自体が楽しいというか。

──そもそも「映画を作りたい」っていう衝動はいつ頃から？

船木　22歳のときに8ミリビデオを買ってからですね。最初はトレーニングを撮影して研究するためだったんですよ。でも、あるときに「映画っぽく撮ってみたらどうかな？」と思ったのがきっかけで。

──この『THE PROPHECY』に至るまでには何本くらい作られていたんですか？

船木　6本くらい撮ってますね。

──6本も！　それって全部発表してないんですよね。

船木　そうですね。しかも全部どこにあるかわかりません（笑）。

──それはもったいない！

船木　自分の中では作っちゃうとそれで終わりになって、もう次の作品のことを考え始めているんですね。「次はこういうところをレベルアップして……」みたいな感じで。

──なるほど。この映画は約40分の短編ですが、先ほども指摘したとおり映画の半分くらい密室で進むんですけど、僕はクエンティン・タランティーノ監督の映画を思い出したんです。登場人物がムダ話をする中で、少しずつ人物の個性が見えてくるというあたりが90年代後半に出てきた映画オタクの監督の作品との共通性に思えたんですが。

船木　自分のイメージとしては『12人の怒れる男』だったんです。

──あ、密室劇の名作ですね。

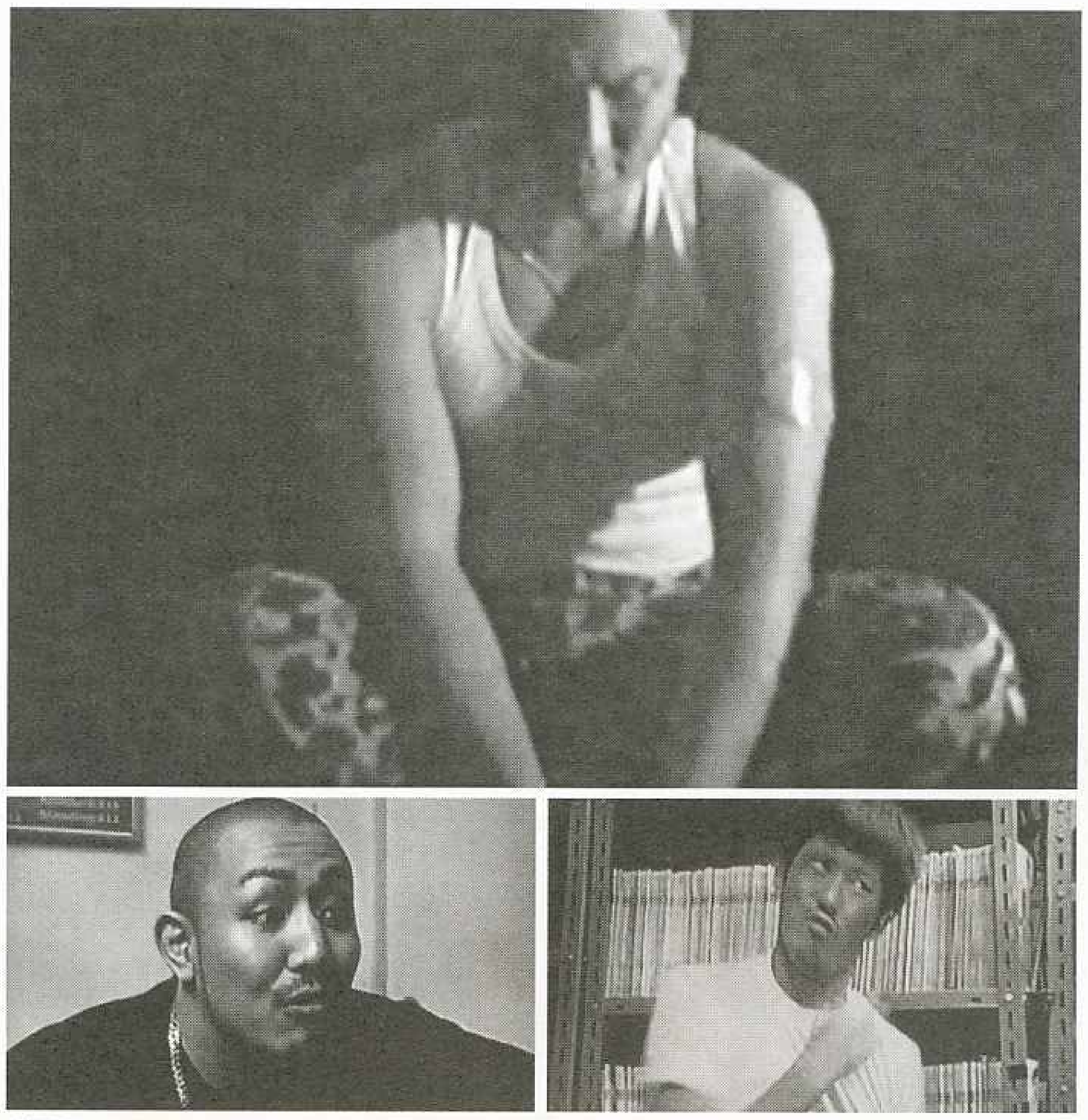
船木　ただ、観たことはないんです（笑）。人づてに聞いた内容がイメージで入っていると思います。

──想像上の『12人の怒れる男』がベースですか（笑）。あと密室劇で語られる内容も船木さんのイメージからほど遠い、オナニー話とか下ネタが多くて驚いたんですが。

船木　いや、僕もそういう話をするときはありますよ（笑）。ただ、一人一人の職業とキャラクターを作って「この職業の人だったらこんな話をするんじゃないかな」というイメージで書きました。

──寿司屋に自動車ブローカー、プロモーターにヤクザに芸能人……映画に出てくるいろんな職業の人って「船木さんのなりたかった職業なんじゃないか？」と想像したんですが。

船木　どうですかね。プロレスラーは別ですが、自分では想像できないような職業の方を入れたつもりです。……言われてみれば職業への憧れも少しはあるかもしれませんね。



映画『THE PROPHECY』より。映画の終盤、正体不明の主人公が独白する場面、そこで語られている内容はまさしく船木の実人生と連動した魂のメッセージである。また、この映画は、傲慢な態度のプロレスラー（謙吾が熱演！）やパンチドランカー状態のプロボクサーの描写など、船木の格闘技やプロレスへのクールすぎる視線にも驚かされることうけあいだ。

これは凄く自分らしい映画だし 胸を張って人前に出せる映画

──それからプロレスや格闘技の話題に対する距離感にも驚きました。「プロレスを○○どおりやって、金稼いで」みたいなぶっちゃけたセリフを言わせていますし。

船木　謙吾に言わせましたね（笑）。そのへんは完全にプロレス界と距離を置いていた、当時の自分の本音でもあったでしょうけど、そもそも「この映画は人に見せないだろう」という前提で作ったものですから。

──でも僕は自主映画もそれなりに観てるんですが、きちんと起承転結があって構成が非常に考えられてると思うんです。ただ「起」の部分がもの凄く長いじゃないですか（笑）。これは意図されてたんですか？

船木　全然考えなかったですね（笑）。脚本を書くときはノンストップで書くほうで、この脚本もオフの日に丸一日かけて書いたものです。もともと「起」の部分はもっと長くて、あれでも削ったんですよ。

──最初、2時間映画のオープニングかと思いました（笑）。ただ、お客さんを意識しないという意味で前衛的にも見えましたね。

船木　計算とかは全然なかったですけど、主人公が焦れるくらい伸ばしたいというのはありました。

──編集も船木さんが担当されたんですか？

船木　立ち会ってやりました。本当はカメラマンも含めて全部自分でやりたかったんです。事務所のシーン以外は自分で撮ったんですが、できれば全部自分で撮りたかったですね。

──あと、中盤で主人公が神に祈るシーンが突然挿入されますね。

船木　あれは格闘技の試合で言えば、試合前の控室での様子を表現したんです。「普通の人間が異常になっていく過程」を見せているんです。

──ってことはもしかして、そのあとの疾走シーンは花道を歩くイメージで？

船木　まさにそれですね。主人公は衝動的に犯罪を行なうわけじゃなくて、覚悟を決めてやるわけです。それを表現しています。

──そして映画の最後には主人公のシリアスな独白（「人生は一度きりだ。それが定説なんだ」）があるんですが、何を意図しているのかわかりづらいセリフだと思うんです。

船木　自分の考えたセリフなんですけど……。なんだったかなぁ（笑）。

──ダハハハハ！　船木さんがプロレスラーになることをお母さんに反対されたときに語った「人生が二度あればお母さんの言うとおりにしますが、人生は一度しかないので自分の思うようにさせてください」という有名な話があるじゃないですか。船木さんはずっとそのテーマが……。

船木　（さえぎって）ありますね。それはあります。それがこのセリフにも含まれていると思います。物心つ

いたときから突然出てきた孤独感、無常感のような感覚というか。

――そういう船木さんの気持ちが自然と表われていると思います。

船木 ええ。だから、この映画は胸を張って人前に出せます（キッパリ）。作り方がチャチいとかはありますが、題材やテーマとしては凄く自分らしい、いいものだと思ってますから。

――この映画は試写会もやられたと聞いていますが。

船木 やりました。知り合いに場所をとってもらって、自分のホームページの中だけで告知して。

――鈴木みのる選手や尾崎社長もいらっしゃっていたんですよね。

船木 ええ。全部で50人くらい来たかなぁ。2回上映したと記憶しています。試写会のあとでファンの集いをやったんで、ファンクラブの人も観ている人はいるはずですよ。でも周囲は「また船木がへんなことやってるな」という冷やかしの感じに受け止めていましたから。誰もマジメに映画を観てくれてなかったんです。だから終わったあとは「やらなきゃよかった」と思いましたよ（笑）。

――自信作を外に出したら、後悔する結果になってしまった、と。

船木 人に見せるとどうしても評判というのが出てくるので作ってるときの楽しかった感覚と違ってきてしまうんです。それに人に見せるために作ってたわけじゃないですから。

菊田選手を殺人犯役に、近藤をオカマにさせた映画もあります

――でも、このまま幻の作品にしておくのはもったいないのでぜひ『kamipro』のイベントとかで流したいんですけど……。

船木 まったくかまいません。でもこの映画をわかる人とわからない人は出てくると思います。すべての映画に通じますけど、作り手の感覚がわからないと「おもしろくないな」と拒絶する人も出てくる。でもそれはそれで作品の宿命ですから。

――その反面、この映画は純粋培養された100パーセントの船木誠勝を表現してる映画だと思いますし。

船木 そうですね。個人的にもこの映画や『タクシードライバー』みたいな一人の人間の心情に集中していく映画が好きなんです。

――この映画に出演した菊田（早苗）選手から、このあとも船木さんの映画に出てると聞いたんですが……。

船木 ありますね。次の映画は一般人の主人公と殺人犯の心の交流を描く作品です。菊田選手には殺人犯役をやってもらいました（笑）。

――ダハハハハ！ それも観たいですね。

船木 そのあとドラマ『Dr.コトー診療所』で与那国島に行ったときも、空き時間で俳優さんたちに集まってもらって撮りました。有名俳優ばかり出ていますよ（笑）。

――凄いなぁ。ほかにも近藤（有己）選手の主演映画があるらしくて。

船木 あれはGAORAのパンクラスの番組企画で撮ったんです。近藤演じる売れっ子レスラーが、「八百長で引き分けてくれ」と持ちかけられて一度は断るんですが、結局八百長をやってしまって、そこに負い目を感じて妻子を捨てて蒸発してしまうんですけど、定職に就けず自暴自棄になって街でケンカをしてるところをなぜかオカマバーの人に助けられて、オカマバーで働くことになるんですけど……。

――ってことは近藤選手がオカマの格好を!?

船木 させました（笑）。そしたら自分の息子が偶然にもそのオカマバーに来るんです。

――ダハハハハ！

船木 そのあと「こんなことをしていてはいけない」と地下格闘技の大会に出るんですね。そこで何回か勝って賞金を獲得するんですが……最後は死んじゃうんです。

――死んじゃいますか。

船木 内容は映画『レスラー』みたいな感じで、凄くシリアスな話を考えていたんですけど、近藤のオカマの演技は笑える感じで（笑）。……でも、この映画には自分の父親への願望も混じってます。父親もギャンブルで身を持ち崩したんですが、どこかで「こんな父親でいてほしかった」という願望が入ってますね。

――船木さんって、転落していくものに惹かれる感じがするんですが。

船木 転落するんですけど、最後に救いがあって「救いと引き換えに死ぬ」というのが好きですね（笑）。

――船木さんは熱烈な映画ファンでもありますが、自分の作品は客観的にご覧になれるんですか？

船木 自分の映画はいろいろ後悔もありますけど、かわいい子どもみたいなもんです。すべてのシーン、すべてのカットに思い入れがありますし。自分が出演している映画は監督さんの作品ですけど、自分で作った映画は「自分で産んだ」という感覚なんです。

――あらためて監督にチャレンジしてみたい気持ちは？

船木 やってみたいのはありますが、「当分映画を撮ることはないだろうな」と思っていました。……まさか自分の映画がこんなふうに受け止められるとは思ってもいなかったですし。

――じゃあ、このインタビューを読んで「船木さんに監督を任せよう」って話が来たらやりますか？

船木 やります（キッパリ）。というか、じつはすでに自分の原作をもとに本職の脚本家の方に脚本化してもらってあるんですよ。

――ええっ、そうなんですか！

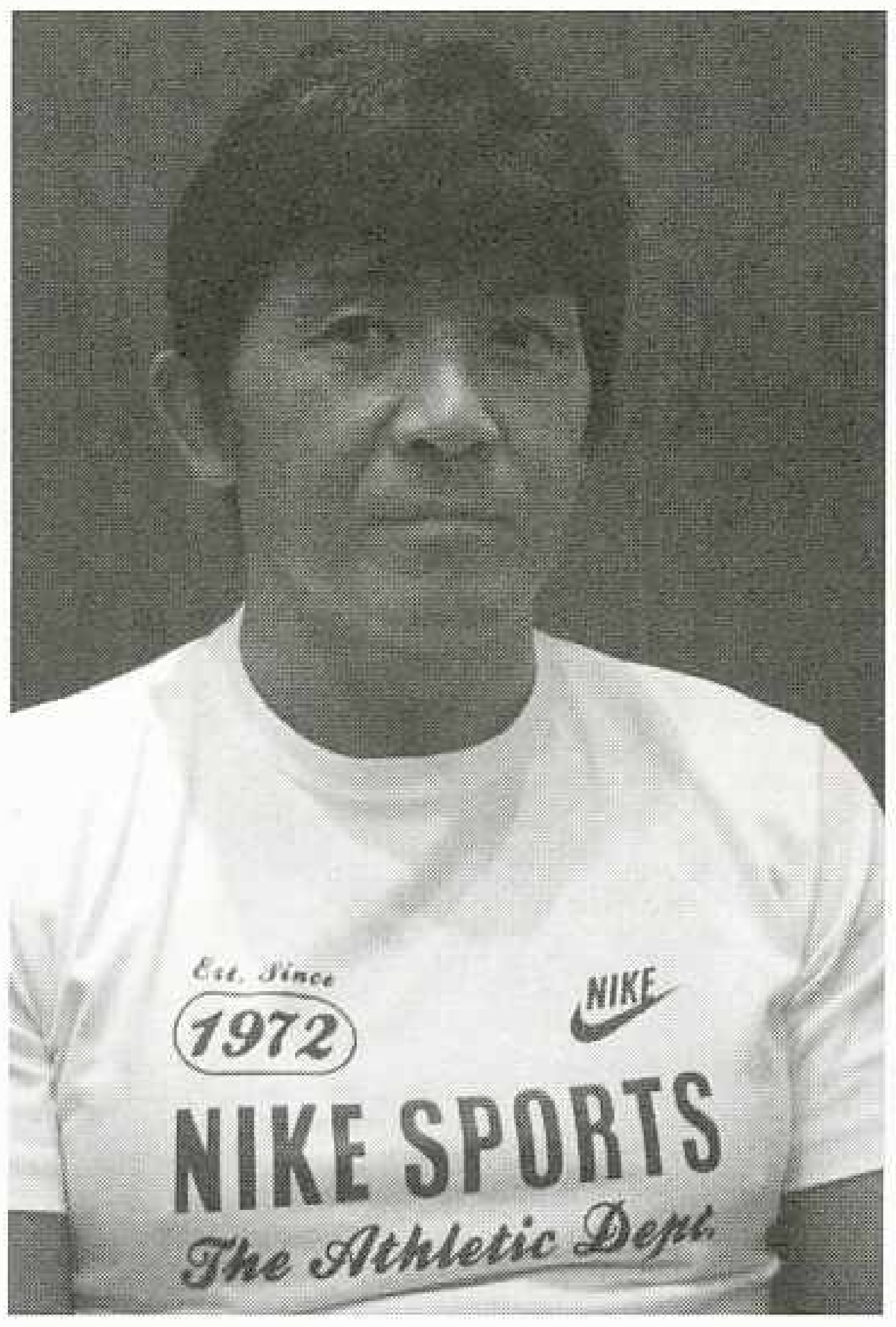
船木 フフフ。ボクシング映画と、漁師の息子を主人公にした映画の脚本があるんですよ（自信ありそうな笑顔で）。

――漁師モノまで！ もしかして、それも転落人生モノですか？

船木 ええ。ボクシング映画のほうは一人死にますね。

――やっぱり死んじゃいますか（笑）。今回はありがとうございました。

［09年4月16日／都内・某喫茶店にて収録］




“幻”の自主映画制作の全真相!!



ふなき・まさかつ■本名・優治（まさはる）。1969年3月13日、青森県出身。84年に新日本プロレス入門。15歳でプロデビュー。第二次UWF、藤原組を経て、93年にパンクラスを旗揚げ。00年5月にヒクソン・グレイシーに敗れて引退するも、07年大晦日の桜庭和志戦で現役復帰。地道に自主映画を制作し続けるマット界一の“映画監督”としても知られてる。182cm、90kg。

緊急告知!!
なんと6月に『kamipro』のイベント開催決定！
ホントに船木の映画『THE PROPHECY』が紹介される!!
イベントの詳細は63ページをチェック！

ある選手と関係者の、PRIDE復活をめぐる物語――!!



PRIDE 死と再生

「死と再生」といえば、前号No.134の特集テーマ。
さあ、読者の皆さん、もうおわかりですよね。うっかり掲載し忘れた企画をお読みください!
PRIDE終幕と『やれんのか!』の舞台ウラ!!

構成/ジャン斉藤　試合写真/乾晋也

現在、都内の広告代理店に勤務するAは、06年4月から07年の10月のあいだ、つまり新生PRIDE日本事務所閉鎖の最後まで、PRIDEの広報業務を行なっていた。わずか1年と4ヵ月にすぎないけれど、フジテレビショックや、ロレンゾ・フェティータへの権利譲渡など、PRIDE末期の激動の中に身を置いていたというわけだ。

AはPRIDEを運営するドリームステージエンターテインメント（以下DSE）に入社する以前は、輸入建材の営業をしており、その会社には2年ほど在籍していたが、悶々としながら仕事をこなしていたという。

「その会社には2年ほどしかいませんでした。仕事がつまらなかったというか、刺激がなかったというか。転職のきっかけは、06年の6月に子どもが生まれたことでした。ちょっと個人的な話になりますが、子どもを迎えるにあたって、悶々としたままの自分ではなく、子どもにとって、好きな仕事を一生懸命している父親でありたかったのです。

そこで『自分の好きなこととはなんだろう？』と考えたとき、スポーツに携わる仕事がしたいと強く思いました。じつはボク、18歳でボクシングを始めて19歳でプロになり、25歳くらいまでプロボクサーだったんですよ。

スポーツ関係の就職先を探した結果、DSEに入社することができました。正直、DSEでなくてはならないということではなかったのですが、とにかくスポーツに携わる仕事がしたかったんです。当初ボクは営業局の配属だったんですが、人員の都合で広報局に異動することになりました。あれは入社してから1週間か、10日くらい経ったときのことですね」

Aの入社後、PRIDEには悪夢のような出来事が立て続けに起こった。『週刊現代』のバッシング報道、桜庭和志の『HERO'S』転出、そしてフジテレビ中継突然の打ち切り。しかし、格闘技業界に入ってまもなかったAは、そんな危機的状況そのものをそれほど深刻には捉えてなかった。



PRIDEの権利譲渡が発表された六本木アリーナ会見。いまや高田延彦は格闘技界から距離を置き、藤田和之は『戦極』へ。ジェフ・モンソンは『戦極』を経てDREAMに参戦している。ロレンゾとダナはUFCの世界制覇計画を推進中だ。

「入社前、『週刊現代』に叩かれていたこと自体を知りませんでした。自分の会社がそういう記事になっていることを知ったときは、なんとも形容しがたいものがありましたが、ああいう雑誌の書くことなので気にもしてなかったですし。フジテレビの中継が打ち切りになったときも、とりあえず目の前の仕事を片づけることに必死でした。『いったいどうなっちゃうんだろう……？』って暗くなるようなことはなかったです。

たとえば『他局から声がかかったりするんじゃないか』とか、けっこう軽く考えていたところはありましたね。この業界のことも何も知らなかった。上層部の方々は違うと思いますが、ボクはそこまで深くは考えてなかったんです。

それに、地上波が離れはしたものの、無差別級GPが凄く盛り上がっていて、試合内容も素晴らしかったし、会場の熱も凄かったし、こういう大会を続けていけば、大丈夫なんだろうなという気持ちはありました。危ないとは思ってたかもしれませんでしたけど、ある日突然会社がなくなるという心配はなかったと思います。なんとかなる。最後の最後までそう思ってたかもしれないです」

07年4月8日『PRIDE・34』――、誰も望んでなかった"最後"が訪れてしまった。残酷だったのは、あの時点ではこれが最後だとは誰も知らなかったことだ。PRIDEは生まれ変わるはずだった。UFCのオーナーでもあるロレンゾ・フェティータを新オーナーとして迎えて、六本木ヒルズで記者会見が大々的に行なわれ、その場でUFCとのオールスター戦実現が喧伝された。

「通常、記者会見の会場を押さえるのはボクらの仕事でしたが、そのときだけは笹原（圭一）さんがやったんです。場所は六本木ヒルズアリーナ。どのタイミングで社内にアナウンスされたかは憶えてないですが、何か大きな発表があるんだろうとは感じていましたね。

あの当時は、まさかあんな結末が待っているなんて思いもよらなかったですから、安心したところはあります。佐藤（大輔）さんが六本木アリーナで今後はこうなるみたいな映像を流したじゃないですか。ボクもあの場で初めて観たわけですよ。『あ、そうなんだ。大丈夫じゃん。楽しみじゃん』みたいな。あのときはおもいっきり煽られてましたよね（笑）。UFCとの対決が本当に実現したら格闘技ファンの方々は喜ぶだろうなと思ってましたよね。純粋に。

会見の翌日、ロレンゾ・フェティータとダナ・ホワイトが事務所に来ました。ダナはボクシングをやっているということで『今度、一緒に練習しよう！』くらいのことを言われた記憶があります。それっきり、会うことはなかったんですけどね」

新生PRIDEの第1弾イベントは、5月20日に行なわれる予定だった。ところがロレンゾは「準備不足」を理由にイベントの延期を発表する。それはチケット先行発売直後の4月14日のことだった。

「あのときボクはお休みで、家族を連れ

て千葉の稲毛の浜で遊んでいました。車に戻ると、B選手から携帯に着信があったんです。電話すると、いきなり『Aさん、開催延期するんですよね？　なんで教えてくれなかったんですか？』と言われました。

本当に驚きました。ビックリしました。延期のことはまったく聞いてませんでしたから、『そんなはずはないよ』と言いました。すぐに状況を確認したら、ボクらの知らないところでマスコミに向けて開催延期のリリースが流れていることを知りました。でも、その場だけの延期で、永遠に中止になるとは思いもよりませんでした。

だってお金を出して買ったPRIDEを運営しないなんて、普通に考えればありえないじゃないですか。新たな日程を組むことになんの疑いもなかったんです。でも、それから6ヵ月、選手たちも何も知らされないまま時間はすぎていったんです。6ヵ月のあいだ、何も。新社長のジェイミー（・ポラック）も最初の頃は『みんなとコミュニケーションをとることを第一優先にする』みたいなことを言ってたんですが、すぐにアメリカに戻ってしまったので、何をどうしたいのかまったくわからなかったですし。いま、ある程度格闘技業界というものが理解できて、PRIDEを再開しないことでUFCがここまで巨大になった状況を見てみると、最初からこういうことも考えていたのかなという気もします。

電話をくれたB選手とも『いつ再開するんだろうね？』なんて話はよくしてました。この頃はだいぶ打ち解けていたんですけど、もともとボクは彼の存在を知りませんでした。DSEに入るまで、PRIDEやK−1はともかく、修斗やDEEPとかのことはまったく知りませんでしたから。正直、佐伯（繁）さんもどういう人なのかよくわかりませんでした。佐伯さんは『PRIDE武士道』の会見には出席しているけれど、DSEの事務所には常勤していないじゃないですか。『いったいこの方は誰なんだろう？』。本当に不思議でしたね（笑）。

B選手と初めて会ったのは、彼がリュックを背負って事務所にやってきたときです。B選手は自分の住む部屋を探していました。いま思い返してみると、あのときB選手はどこかに居候生活をしていて、練習環境を整えるために部屋を探していたのでした。

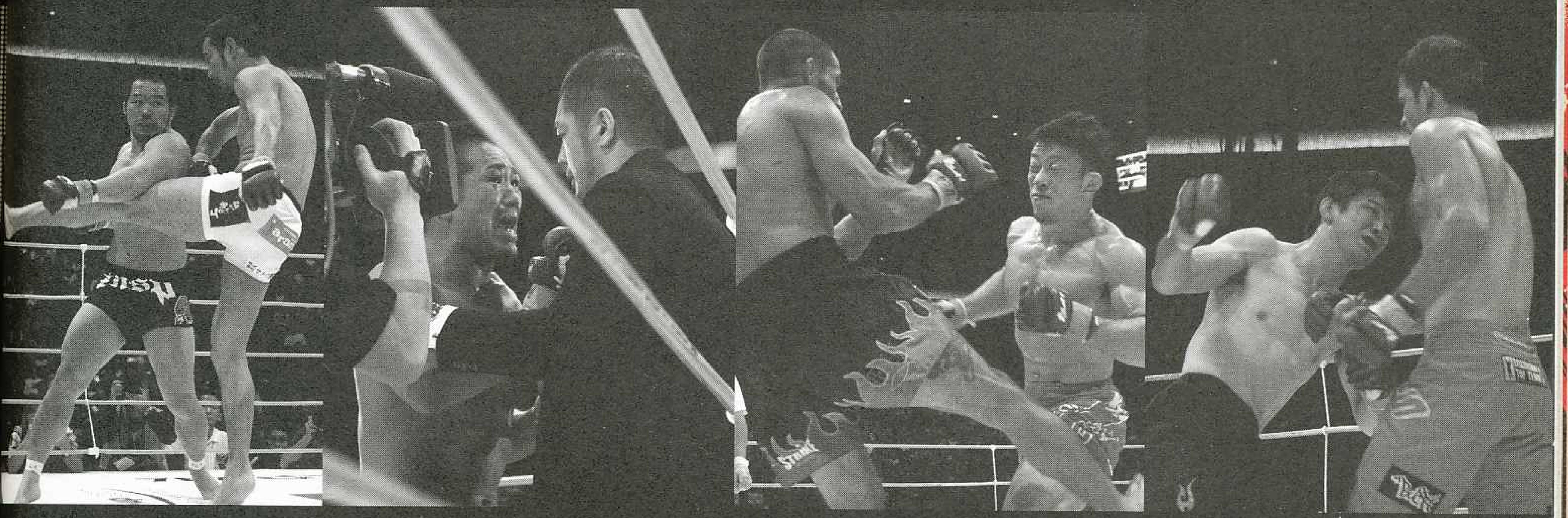
広報活動を通じて、インタビューの立ち会いをいくつかこなしていくにつれ、B選手の人となりがわかってきました。そのうち個人的な会話もするようになりましたが、ただPRIDEの再開について、なんていう言葉が正しいんだろうなあ。もちろん不安はあったと思いますよ。だって『格闘技で食っていこう』と思って、格闘技に人生を懸けてるわけですから。でも、試合がやりたくてもできない。いろいろ思うところはあって当然ですよ。

B選手には、PRIDE以外にもいくつかの選択肢があったと思います。彼はそういうことを包み隠さず話してくれましたから。でも、彼には心の底からPRIDE以外の選択肢はなかったと思います。そこは絆というか、最後まで筋を通したんじゃないですかね。

ボクとしては、PRIDE再開を信じて、待っている選手のために何かしてあげたいと思うようになりました。広報という立場で少しでも選手を有名にさせる手はないかと考え、一般誌に売り込もうとしました。

たとえば、B選手と一緒にコンビニに行って、載りたい雑誌を選ぶんです。『TARZAN』とか『ヤングジャンプ』とかいいねって話をしながら。で、すぐに出版社に電話を入れて、担当者をつかまえて、売り込みたい選手がいるんだってお願いして。それでB選手は『TARZAN』とか『ヤングジャンプ』に載ることができました。冗談みたいな話ですけど（笑）。

どこまでそういうことが有効だったのかはわかりませんが、少しでもB選手のために何かを残してあげられたらと思ってやっていました。精神的に落ち込むこともあったでしょうし。だって、アメリカの関係者が『もうPRIDEはやらない』とか言ったり、ネガティブな情報ばかりが出ているわけじゃないですか。試合が決まらず、いつ再開するのかもわからず、ヤケになりたい気持ちもあったでしょう。先が見えない、試合の日程もないなかでずっと練習してたんです」



A氏は週に2～3度、Bと顔を合わせる機会があった。それは広報としてBのインタビュー取材の立ち会いを務めるために。または練習終わりのBがAのもとへ訪れることもあった。試合を待ち望む選手と、何も知らされずにその行方がわからない広報が会って言葉を交わす。二人はおそらくどこかでPRIDEの再開をあきらめていたはずだ。それでも待つしかないという不条理を確認するだけのために、半年近く、二人は会い続けた。

そして、選手、スタッフ、ファンの願いはむなしく、07年10月6日、新生PRIDEの日本事務所が閉鎖され、事実上の活動停止が告げられた。それは『やれんの

か！』という〝散開イベント〟への幕開けでもあった。

「事務所の閉鎖を聞かされたときは『やっぱり……』という気持ちだったと思います。選手からすれば、何かしら一つの結論を出してほしいという気持ちもあったと思います。

『やれんのか！』の開催を発表したのは11月20日でした。本当によく間に合ったな、よくできたなって。

開催会見の前日、リリースを送る際、実行委員会のFAXには、マスコミの送信先の登録がされていないから、300件に近い数を1枚1枚、送信したんですよ。だから遅めの送信になってしまったり、送信エラーがあったり、リリースを送るだけで何時間もかかったことを憶えています。

会見直前にB選手のインタビューの立ち会いをしたんですが、ボクは同時にヒョードルのインタビューもとり仕切ってて、かなりドタバタだった記憶があります。B選手はノリノリでインタビューを受けてましたよね（笑）。開催発表が11月末にずれ込んだときは、『このタイミングまでいっちゃったら、もうないんじゃないのか？』みたいな不安を口にしたこともありましたが、『やっと試合ができる！』っていうワクワク感を抑えきれなかったんでしょうね。

大晦日、大会当日の早朝、B選手からメールが届きました。内容は『いままでありがとうございました。Aさんがいたからいまがある。今日は必ずやってみせます』と。ボクは『最高の舞台を用意して待っています』と返信しました。

自宅を出たボクは、選手宿泊先のホテ



PRIDE

ルに向かいました。選手たちを会場行きのバスに乗せる業務があったからです。だから自宅から会場入りするB選手とは、試合前に会うことはできませんでしたし、試合中は、インタビュースペースの担当だったんです。試合を終えた選手の控室に行き、選手をピックアップしてインタビュールームに先導する。インタビューが終わったら控室に連れて帰ります。そのため試合を観ることは難しい。観れたのは、オープニングと、数試合くらい。オープニングは佐伯さんと一緒に観ました。PRIDE再開を信じて待ち続けた選手たちが登場したときは、涙が出そうになったことを凄く憶えています。選手のためにこの舞台を整えるまでやろうと決めて、やったことに間違いはなかったんだ、と。そこでふと佐伯さんを見ると、もうボロボロ泣いていましたね（笑）。

B選手と顔を合わせたのは試合後でした。彼には最高の舞台で、最高の相手に勝って締めくくってほしかったんですけどね……。

試合を終えたB選手をインタビュールームへと先導するその途中、『今年、いろいろあったけど、インタビューが終わったら最後にマスコミの方々に、〝一年間、ありがとうございました〟ってお礼を言ったほうがいいよ』って伝えました。B選手が最後にマスコミの方にお礼を言うと、拍手をもって会見は終わりました。

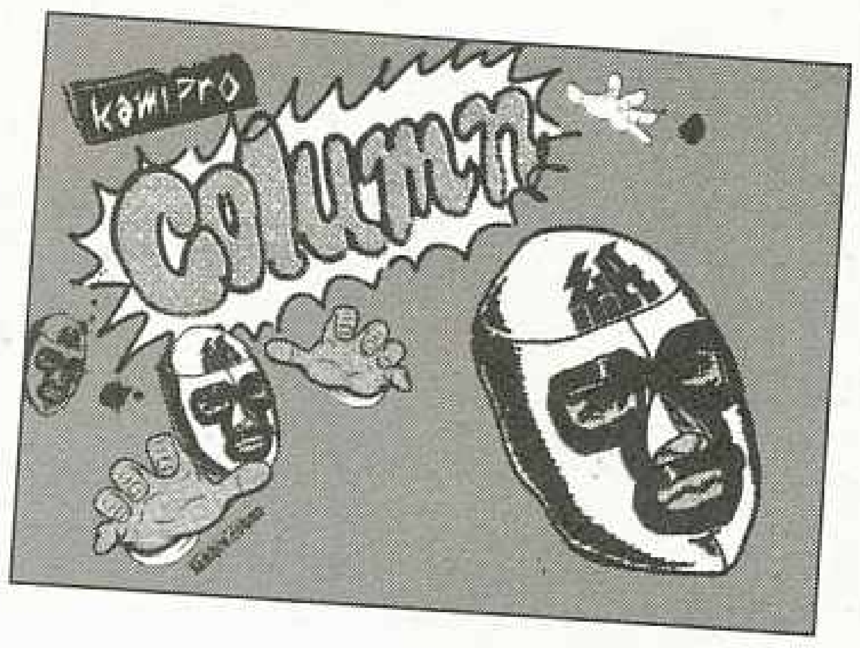
4月の『PRIDE・34』から、大晦日の『やれんのか！』まで。本当に貴重な8ヵ月だったと思います。B選手は、いろんなことを考え、人間的にも成長したのではないかと思います。ヤケにならずに自分を見つめて考えることは決して無駄ではなくて。みんな人間ですから、大丈夫かなと思う日もあれば、ヤバイんじゃないかって思う日もあったと思います。そこを乗り越えたのなら、ちょっと生意気な言い方ですけど、人間的にも大きくなったのではないかと思います。空白の8ヵ月を無駄にするか無駄にしないかは本人次第ですけど、少なくともボクが見ているかぎり、B選手が無駄にすごしてるようには見えなかったです。それがいまの強さにつながっているのだと思います。

B選手の根底には、PRIDEに拾ってもらったというか、救ってもらったという恩義があったのだと思います。大会自体も世界最高峰と言われるイベントだったし、スタッフも信頼できる。PRIDEは、すべてにおいて彼の心を満たしたというか。だから、再開することが絶望に近い可能性だったとしても、それが心のどこかでわかっていても、最後まで待つことができた。

だからこそ――、（対戦相手だった）JZカルバンの欠場はショックでしたね。B選手も内心、本当にガッカリしていたと思います。でも、みんなの前で一切暗いところは見せませんでした。やるしかなかったんです」

Bこと青木真也は、カルバンの代役チヨン・ブギョン相手に辛勝を収めた。試合後の控室で「6月7月、いてもたってもいられなくて、誰にも言えなくて。俺どうしたらいいんだろうって。なのに、これしかできなくて……」と涙を流し、空白の8ヵ月の思いと、己の不甲斐なさをないまぜにした感情をさらけ出した。

PRIDEの元広報、Aこと中西均は、新しい夢へ向かって旅立つ青年の姿を見届け、格闘技界から離れた。



あのコラム扉絵は"続いて"いた!?

約3年半の軌跡をプレイバック!!

イラスト／師岡とおる　構成／真下義之



最近は、『スーパーハルクトーナメント』の煽りVの仕事でも知られるイラストレーター・師岡とおる氏によるコラム扉絵。コラム形式の変更で一旦終了となったが、じつはこの扉絵が〝続いて〟いたことをご存知だろうか？　師岡氏に3年半の軌跡を振り返ってもらった。

この扉絵は紙マスクで描くことは決まってたんですけど、最初はアートっぽく描いていたのを、だんだんストーリー的な展開にしていったんです。

デザイナーの金井（ヒサ）さんとも話して、「『タイガーマスク』みたくやろう」といろんな要素を入れていった。自分が『紙のプロレス』読者だったこともあって、メタ構造的に「『紙プロ』の歴史っぽくしよう」と。わざと吉田豪さんの単行本で使ったキャラを入れ込んだりしたんです。誰も気づかなかったけど（笑）。

紙マスクの正体は「山口（日昇）さんしかいないな」と思ってて。途中、ベビーフェイスの紙マスクが〝紙の穴〟から帰ってきたら、身体が大きくなってヒールになる。これは『RADICAL』になって判型が大きくなるメタファーなんです。で、「小さいほうがよかった」と言ってる口うるさい観客がいたり（笑）。

最後はもう一回いい人に戻って、そのときに額が「k」になって、『kamipro』になるところまで考えたんだけど、ノンビリ描いてたら、たどりつかなかった（笑）。でも、楽しんで描きましたね。

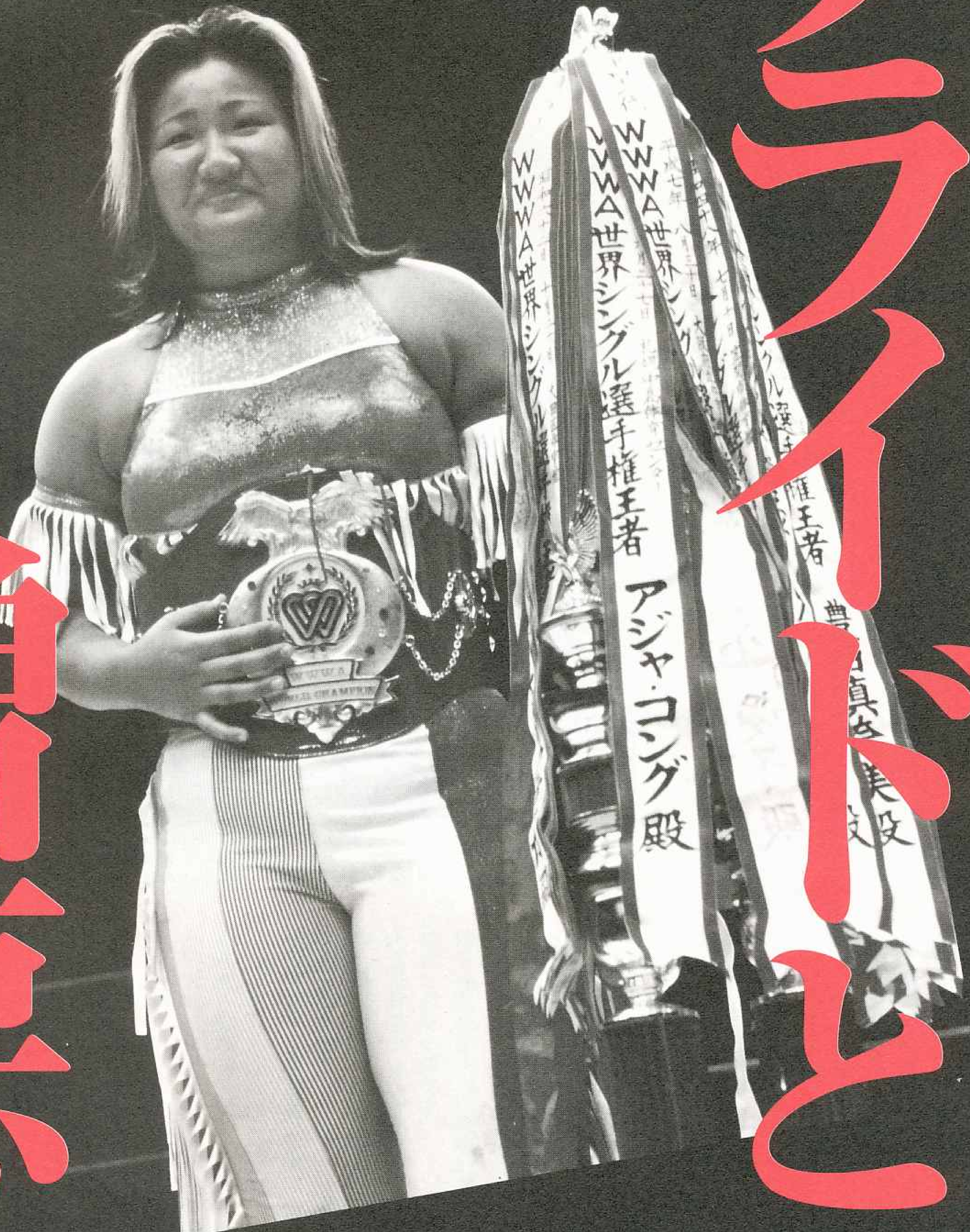
この連載で仕事が広がったとかはないですが、自己紹介するときに「『kamipro』でやってる」と言うと「ああ、あの！」と異常に喜ぶ読者に会うことも多かったです。そういうときは、親しみを込めて「バーカ」と言ってやりますけど（笑）。



師岡とおる（談）

1993年の女子プロレス

“最狂団体”全女のプライドと憎悪



井上京子

『1976年のアントニオ猪木』著者の柳澤健氏による好評連載『1993年の女子プロレス』。
アジャ・コング、ライオネス飛鳥に続いて今回登場するのは“天才レスラー”井上京子。
全女のトップの象徴WWWA世界王座に君臨するも、会社の経営不振等もあり、97年に全女を離脱。
その後はNEO女子プロレスの顔として大暴れする京子が語る、全女のプライドと憎悪！

聞き手／柳澤健　構成／阿修羅チョロ　試合写真／平工幸雄

憎悪と京子

　いま現在、女子プロレス最後のブームとされる団体対抗戦に沸いた93年前後を再検証する企画『1993年の女子プロレス』。聞き手を務めるのは女子プロ愛にあふれる男として、すっかりおなじみになった柳澤健氏。
　今回登場するのは「いつでもどこでも誰とでも、最高の試合ができる天才」と柳澤氏も高く評価する井上京子。女の情念と嫉妬が渦巻く全女の中では異質とも言える底抜けの明るさと人のよさを持った珍しいタイプで、周囲からは"天才"と呼ばれることが多かった。しかし本人はその評価を嫌っていたという。なぜなら「入団後3年目ぐらいまでは世界一練習してたと思う」と言いきるほどの練習量に裏打ちされた技術と体力にプライドがあったからです。
　そんな京子が「不満だらけだった」という後発団体との対抗戦時代から全女を経営する松永兄弟との意外な確執まで"最狂団体"全女時代の驚愕エピソードをあっけらかんと告白！

──全日本女子プロレスの中には、大きく分けて二つのグループがあったと思うんです。長与千種さんやブル中野さんやアジャ・コングさんは団体のことを凄く考えた人たち。その一方で「私が！」っていう人たちの系譜っていうのもある。たとえばライオネス飛鳥さんとか北斗晶さんだとか、豊田真奈美（現・魔波）さんもそうでしょう。

京子　あ〜、確かにそんな感じですよね（笑）。

──そう考えると、京子さんっていうのはどこにいるのかサッパリわからない人で、とても不思議な人だと私は思っているんですけど（笑）。以前、私がここ（武蔵小山『あかゆ』）にお邪魔して北斗さんのことを聞きに来たとき、京子さんは「北斗さんはホントに自分が輝くことばっかり考えてる人」っておっしゃったんです。初対面の人にこんなに正直に言うんだなって、凄い感心したことがあったんですよ。

京子　ハハハハハハハ！　私、思ったこと素直に答えちゃうタイプなんで（笑）。

──今日もそんな感じでお願いします！

京子　なんか危ないこと言ったらカットしておいてください（笑）。

──わかりました（笑）。普通のプロレスファンとかからすると、女子プロレスが最も輝いていたのは団体対抗戦の時代であって、その前段階としてブル中野vsアジャ・コングがあって、対抗戦が終わってからも、井上京子さんや豊田さんとかアジャ様は頑張ってたけれども、頑張っても、ときの流れに抗しきれず、女子プロレスブームは去ってしまいましたというのが、ごくごく一般的な歴史観だと思うんですよ。

京子　まあ、そうかもしれないですね。

──その団体対抗戦を引っぱったのは北斗晶であり、「やっぱり北斗さんは凄いね」っていうのがごく一般のプロレスファンの認識だと思うんですが。

京子　へぇ〜っ、そうなんだ。

──ええ。

京子　でも対抗戦のとき盛り上がってましたよね。あれ、対抗戦のときはもうブル様いないんですか？

──対抗戦が始まるか始まらないかのあたりでアジャ様に赤いベルトを渡したブル様は、ある種、天上人というか、神棚に行っちゃったような気がします。

京子　あ〜、そんな感じでしたよね。

──このあいだ、アジャ様にお目にかかったのですが、対抗戦時代に赤いベルトの王者でもあったアジャ様は「なぜV☆TOPウーマンなんてやるの？」とか「なぜわざわざ赤いベルトの価値を下げるようなことをするの？」とおっしゃってました。



今回の取材場所は女子プロタウンとしても有名な都内・武蔵小山にある京子が経営する飲み屋『あかゆ』で行なった。京子以外のNEOの選手も頻繁に顔を出し、客以上に酒を飲むことでおなじみ（？）の『あかゆ』は女子プロ好きなら行かなきゃウソ！ http://www.kyoko-akayu.com/

「なんでコイツらがメインなの？」とか対抗戦時代はもう不満だらけ！

京子　私も一緒。もう、あの頃は不満だらけですよ！

──そのへんのことを詳しく教えてください。

京子　対抗戦に関しては、最後の最後の最後まで反対で。私が対抗戦に出たのは、もう時代遅れのときなんで、あんまり印象に残ってないって言われるのはホントにそのとおりだと思うし。みんなの印象に残ってるのは神取（忍）戦ぐらいじゃないですか。まあ、チョコチョコはやってるんですけど。

──神取戦もいつもの京子さんとまったく同じでビックリしましたけど、おもしろかったです。

京子　その頃も「対抗戦は出ない」ってずっと言い続けていたので、会社に嫌われたんです。「もうアイツはいいや」と言われて、けっこう試合も前半にされたりとかしてましたね。（井上）貴子とかはキューティー（鈴木）とやったりイケイケでしたけど。

──そうでしたね。対抗戦がイヤだったのは、他団体の選手のクオリティが全女の選手に比べると落ちるからでしょうか？

京子　それは凄く思ってました。ぶっちゃけ、なんでコイツらがメインやってんだろうとか。腹立たしいので試合も観ない、みたいな感じでしたね。

──要するに、他団体の選手は全女のメインに上がれるようなレベルのレスラーじゃない、と。

京子　そうそう。大きい会場でやるのも違うし、メインも違うだろってずっと思ってて……って、なんか嫌なレスラー、私って（笑）。

──いやいや、当然だと思いますよ。

京子　その頃いつも私は前半にさせられてたので、自分の試合だけ一生懸命やればいいかなって。まあ、こういうときもあるだろう、みたいな。

──他の団体には、メインのクオリティがあると感じられたレスラーっていたんですか？　それとも皆無でしたか？

京子　あのときだけ観たんですよ。（ダイナマイト・）関西&尾崎（魔弓）がタッグのタイトルマッチをやったとき。間違ってたらごめんなさいだけど、たしか大阪で関西がベルトを獲ったんですよ。そのときは凄く会場が沸いてたし、関西選手はけっこういいな、みたいな。身体もデカいし。……それぐらいかな。

──あ、それぐらいなんだ（笑）。京子さんが考える全女のメインイベンターたる人っていうのは、ブル様、アジャ様……その頃もう豊田選手は視野に入ってました？

京子　もちろん、豊田さんは入ってますよ。でも、対抗戦でなんかやってましたっけ、豊田さん。

──だって横浜アリーナのメインイベントは豊田&山田敏代組vs工藤めぐみ&コンバット豊田ですから。

京子　それをメインに持ってくる会

社がいたっていうことでしょうね。松永会長は、62年組の山田（敏代）、豊田、三田（英津子）、下田（美馬）のことがかわいいんですよ。

—62年組は何がそんなによかったんですかね？

京子 きれいだからです、顔が（笑）。「豊作だ、豊作だ」って喜んでましたもん。要はビジュアルじゃないですか。ビジュアルがいいとやっぱり売れるじゃないですか、グッズが。

—ビジュアルの良し悪しでグッズの売り上げが変わってくる、と（笑）。そんな理由なんですか？

京子 だって、あれだけ金網マッチとかも反対して、「あんなのつまんねえよ。（ロッシー）小川、何やってんだよ！」とかさんざん言ってたけど、お客さんが入ってブル様が凄い人気出たらさ、「おう、やれやれ」って言うんだよ。……って、どんだけ私、松永嫌いなのよ（笑）。

—アハハハハハ！

京子 松永兄弟が嫌いだったのはよく覚えてるけど（笑）、正直、対抗戦時代は印象ないですね。私が出てなかったせいもあるし。

—興味なかったんですね？

京子 興味ないし、興味持たないようにしてたのかもしれませんね。腹立つんで。自分ではどうにもならない、みたいな。

—でも、その流れにうまく乗らないと、もっと上には行けない状態だったんですよね。

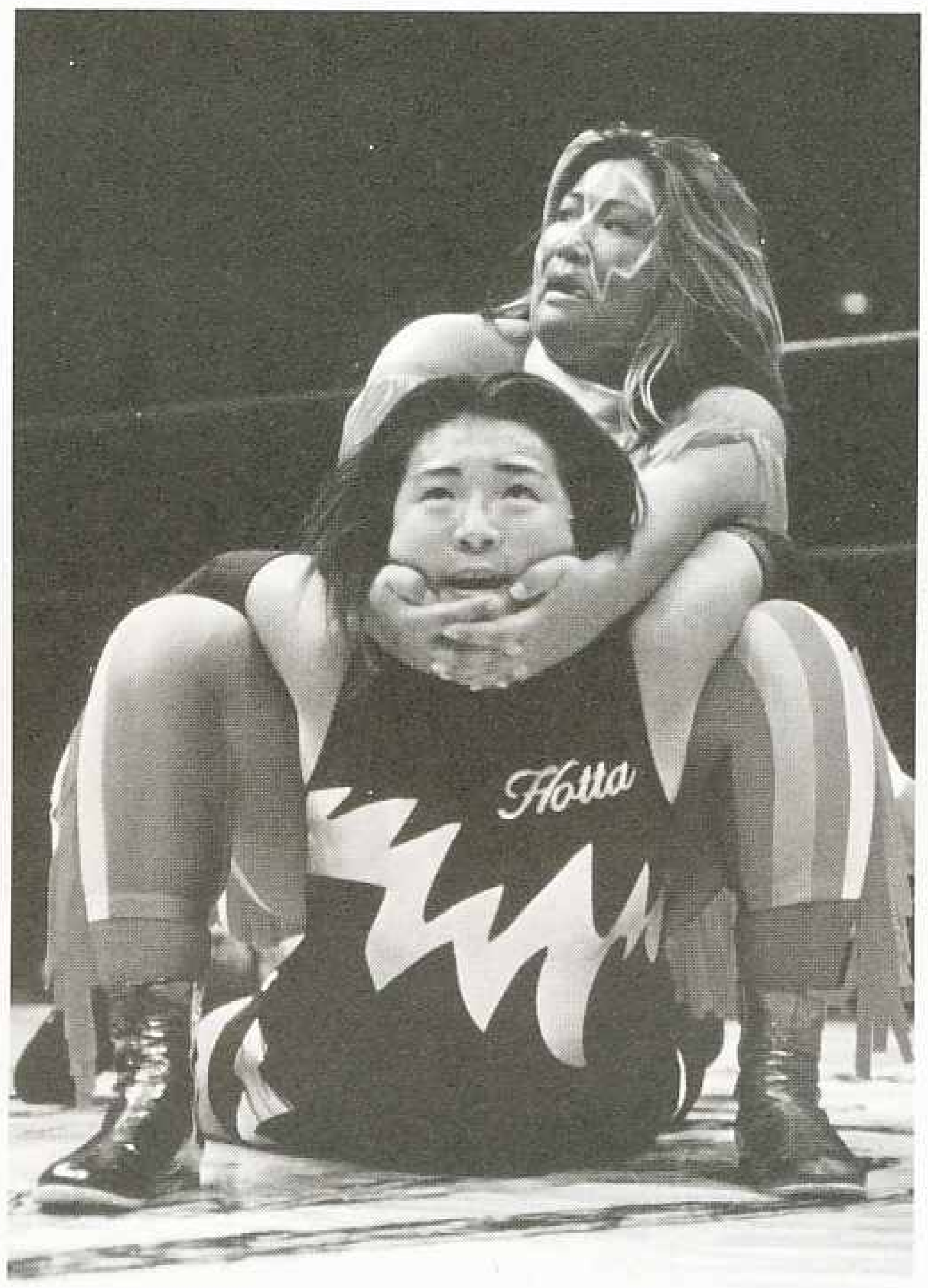
京子 そうですね。最後のほうでそこに気づいたんですけど、もう遅いっつうの！（笑）。

—じゃあ対抗戦の最大のヒロインである北斗さんについては、どういうふうに見てたんですか？

京子 いまそういうふうに言われて、「ヒロインだったんだ」って思うぐらいで。そのときはあんまり何も思わなかったです。そんなに注目されてたんですか？

—されてましたよ。

京子 そのとき宇野さん（北斗）って全女にいましたっけ？ もう半分辞めてたんじゃないですか？



97年8月20日に行なわれた日本武道館大会で堀田祐美子に敗れWWWA世界王座から転落した京子は突然のフリー宣言。このことで全女の経営不安が表面化し、翌9月12日には京子をはじめ所属選手11名が全女から離脱。その後、全女は二度目の手形不渡りを出し事実上の倒産となった。

—対抗戦時代の半分ぐらいはいましたけど、あとは「私はあと3試合だけやる」みたいな感じでした。

京子 そうですよね。全女の中ではもう終わってる人だったので、関心がなかったです。ただ、三田さんと下田さんは、「今日って宇野さん来る日？ どうするどうする？」なんてバタバタやってましたよ。それ見て「あ、今日来るんだ」みたいな感じで（笑）。

“最狂団体”全女の
プライドと井上

—なるほど（笑）。北斗晶というレスラーは対抗戦の前はどうでしたか？

京子 よく殴られましたねえ……って、そういうことじゃなく？（笑）。

—そんなによく殴られていたんですか？

京子 自分が一番殴られたんじゃないですか。私のこと一番殴ったレスラーだと思いますよ。

—何が気に入らなかったんですかね？

京子 宇野さんは口より手が先に出るんで。昔はそんなことがあったんですけど、何年か前に『週プロ』で対談があって、凄いひさびさに会ったんですよ。

—『週刊プロレス』で北斗さんがやっていた対談連載ですね。

京子 そうです。でも、なんか仕組まれたようにセッティングされた感じで（笑）。「えーっ、ホントにいいの？」って。だって、私いろんなところで、いまみたいなこと言ってるのに。

—「私出ていいの？」みたいな（笑）。

京子 そうそう（笑）。それで対談したときに、「アダモちゃ〜ん、ひさしぶり」なんて言って。で、私がちょいちょい言うわけですよ。「こうやってイジメたじゃないですか」とか（笑）。そしたら宇野さんは「え〜っ、そんなことやったっけ？」とか笑ってて、全然覚えてないの。

—ホントに忘れちゃってるんですかね。

京子 覚えてないのか、覚えてないフリなのか、どっちなんだろう？ みんなのことをそういうふうにしてたから、私一人のことはわかんないって感じなのか。凄いおもしろかったですけどね。

—プロレスラーとしての北斗晶についてはどう思われます？

京子 たしか、この試合で負けたら引退とかっていうのもあったと思うんですけど、それも控室にいて観なかったんですよ。みんなはワーッとなってたんですけど。すいません、興味なかったんで（笑）。

—当時の北斗晶にはそれほど興味がなかった？

京子 まったく興味なかったです。

—ぶっちゃけ、北斗さんは自分が一緒にやっていきたいと思うようなレスラーではなかった？

京子 …………は、はい（笑）。なんか知らないですけど、あの頃の全女の試合って必ず最後はタッグマッチで、セミはシングルなんですよ。全部で8試合か9試合しかなかったですけど。そのセミっていうのがもの凄い大事で。セミのシングルを任せられるヤツと任せられないヤツがいる、みたいな感じで、プロレスを凄く試されるところがあるんですよ。そのセミに自分が毎回入れられてるときがあって。そのとき、北斗さんと当たることが何度もあったんです。

—北斗vs京子戦がしょっちゅうあったんですね。

京子 北斗さんと30分ドローとか何回もやりました。北斗さんは死んだフリが凄くうまいので、ホントに大ケガさせちゃったなとか思ってたら、うずくまってたのがいきなり起きてきて、「なんだ、この人！」って（笑）。死んだフリうますぎるよって。それぐらいかな。

—北斗さんは死んだフリがうまかった、と（笑）。あと、京子さんの試合で印象に残ってるのは豊田さんとの試合であり、アジャ様との試合なんですけど、その二人って全然違うタイプじゃないですか。

京子 もう、まったく違いますね。

—京子さんは、誰とやっても井上京子であるところが凄いと思うんですよ。神取忍さんとやろうが、チャパリータASARIさんとやろうが、誰とやろうがいつも京子さんのプロ

会長は62年組がかわいいんですよ。みんなビジュアルがいいから（笑）

レスが崩れないのが凄い。

京子　外見だけですよ。中身はみんなに気ぃ使いっぱなしですよ（笑）。

——えっ、そうなんですか⁉

京子　いやいや、嘘ですけど（笑）。

——豊田さんとやるときとアジャ様とやるときの一番の違いは、どのあたりにあるんですか？

京子　う〜ん……アジャ様とやるときはワクワクしますね。話さなくてもプロレスで会話できるみたいなところがあるので。ずっと話してない時期があっても、プロレスでバーンと当たると、「あ、こんな間の取り方するんだ？」とか。試合しながらライブで会話ができるから、やってて凄いおもしろいですね。試合終わってからも凄いやった感があるっていうか。豊田さんが相手のときは、自分が試合を引っぱってかなきゃいけないっていうのがあるんで、もの凄く緊張します（笑）。

——どうして緊張するんですか？

京子　何をやってくるかわかんないから（笑）。

——なるほど。豊田さんのプロレスは、何をやってくるかわかんないものなんですか。

京子　はい、たぶん。豊田さんは計算してないと思います。私の中では〝わがままプロレス〟って言ってるんですけど、何人かいるんですよ。

——〝わがままプロレス〟ですか（笑）。具体的に言うとそれはどういうプロレスなんですか？

京子　たとえばコーナーの近くで私が受け身を取ったとするじゃないですか。次に相手がミサイルキックとかをするとき、普通は受け身を取った近くのコーナーに上がるんですけど、それとは逆のコーナーに登ったりするプロレスラーがいるんですよ。そういう選手を〝わがままプロレス〟って言ってるんですけど。「は？　こっちかよ⁉」みたいな（笑）。

——アハハハ。ここまで歩いてこいと。その代表的な選手が豊田さん？

京子　そうですね。私もプロレスラーだから受けるけど、この歩数はどうすんの、みたいな（笑）。そういうことを、まったく気にならない人は気にならないと思うんですけど、やってるほうにしたらもの凄く気になるんですよ。私なんかは「エ〜ッ⁉」って思いながらも、フラフラと相手に近づいて受けますけどね。受けるのもプロレスの醍醐味なんで。

——確かに豊田さんは自分がやりたいようにやるって感じですよね。

京子　はい。こっちはそれを追っかけていく、みたいな。飛ぶときも「ここだろう」と思う場所には絶対飛んでこない（笑）。

——予期せぬところから技を仕掛けてくるというのは、かなり危ないんじゃないですか。

京子　危ないですね。間違ったら大ケガします。

——そういう意味で緊張するんですね。

京子　緊張します。あと、豊田さんがホントに凄いのが、私がもの凄く腰を痛めてるときがあって、もう立てない、歯も磨けない、顔も洗えないぐらい腰が痛いとわかってるはずなのに腰を攻めてくるんですよ（笑）。もうガチで攻めてくるんですよ、ドンドンドンドン。

——ある意味、凄いですよね（笑）。

京子　逆に凄いなと思います。私だったらできないかもしれない。そういう意味では、まったく読めないし、まったく違うタイプですね。いまでもわかり合えないというか（笑）。

——先が読めない選手相手に、よく60分フルタイムとかやりましたね。

京子　やっちゃってんのね。おもしろいよね〜（笑）。

——笑ってますけど、60分ですよ！

京子　『サザエさん』2回ぶんですよ（笑）。でも私、60分フルタイムって一番やってるんじゃない？　伊藤薫と2回あるでしょ。飛鳥さん、豊田さん……4回か。

——一番やってるでしょうね。99年8月の川崎市体育館では当時30歳の京子さんが36歳の飛鳥さんを引っぱって60分フルタイム闘ってましたよね。

京子　ありましたねぇ……（しみじみと）。

——あの試合では36歳の飛鳥さんを引っぱって、試合後に「ホントにおもしろかった」って言わせているんですから凄いです。「京子との試合は私の中の財産です」と飛鳥さんはおっしゃっていました。

京子　嬉しいですねえ、そんなこと言ってもらえて。でもね、あの試合は初めて死ぬかと思ったんですよ。自分、あんまり技とかで怖いと思ったことがないんですけど、初めて「お願い、その技はやんないで！」って心の中で叫びましたから。

——実際、試合中に「怖い」って言っちゃったんですよね。

京子　はい。「怖い！」って言ったら

アジャ様との試合はワクワクした。プロレスで会話ができる感じなので



京子と同様、対抗戦反対派だったアジャと95年12月4日の両国大会で対戦した京子は満足いく内容で熱戦を制すると「私たちの闘いが始まりましたね」と試合内容には絶対の自信を持つ二人で対抗戦以降の全女を引っぱっていく決意を表明した。

殴られて2階から落とされたんです（笑）。

——足から降りられたんですか？

京子 降りられないですよ。2階から落とされて、背面でテーブルに向かって受け身取って。もう小さい頃からの記憶が走馬灯のようにバババーッて流れて、「もう私、死ぬんだ」って思ってたら、飛鳥さんが2階からフットスタンプで降りてきて（笑）。

——無茶しますよねぇ。ちゃんと受けられたんですか？

京子 もう頭の中ピヨピヨになってました（笑）。でも、あの試合は途中から凄く楽しくなったんです、40分越えたぐらいから。あのとき、会場が凄く暑くて、たぶん40度近くあったと思うんですけど、楽しいって思って……アホでしょ？（笑）。

——いやいやいや（笑）。そういうときって、どんな精神状態になるんですか？

京子 気持ちいいの、あそこまでいくと。ヘロヘロなんだけど、あのときは凄い気持ちよかった。でも、豊田さんと60分やったときは、腰が痛くて痛くて死にそうなぐらい痛かったんで、そのことしか考えられなくて。「絶対勝とう」とかじゃなくて、たぶん「早く終われ」って感じで。

——60分闘ったあとに「ケガが治ったら勝ちますから」ってマイクで言ったこともありましたね。

京子 へぇ〜、全然覚えてない。ずいぶん観られてますね（笑）。

——一応インタビ



名勝負製造機として評価の高い京子だが、全女時代から豊田真奈美との試合は常にベストバウト候補となるほどのハイクオリティな内容を連発。しかし、その裏には“わがままプロレス”と京子が表す豊田の変則スタイルに毎回悩まされていたという。

豊田さんは何をやってくるか全然わかんないので凄く緊張します

“最狂団体”全女のプライドと井上

ユーさせていただく側ですから。「何も知りません、全部教えて」なんて、そんな偉そうにできないじゃないですか（笑）。ブル様についても教えてほしいんです。僕の中のブル様は女子プロレス史上最大の偉人なんですが、実際に京子さんからご覧になったブル様という方はどんな人だったのかなと。

京子 そうですねぇ……ブル様はやっぱり神ですね。

——ブル様は神！

京子 はい、私にとっては神です。私もよく昭和のプロレスラーって言われるんですけど、ホントに「プロレスラーってこういう人」っていうお手本みたいなもんですね。

——プロレスラーのお手本ですか？

京子 あれだけの人ですけど、試合の前は凄く緊張して、「ウェ〜ッ！」とかも毎回だったし、それなのに試合をすると凄くカッコいいじゃないですか。横にいても「うわっ、カッコいいな！」って思いますもん。

——じゃあ獄門党の人たちはみんなブル様のことを愛していた？

京子 みんな大好きですね。素顔の中野恵子のちょっと天然なところもかわいかったりとか、おもしろかったりとか（笑）。

——愛すべき方なんですね。

京子 そうですね。赤いベルトは凄く重いベルトだってアジャ様がおっしゃってたって言いますけど、最後に中野さんがアジャ様にベルトを獲られて駆け寄ったとき、涙とか汗とかいろんなものがブワーッて流れて……いままで赤いベルトを巻いてたプレッシャーがあったと思うんですけど、「アダモちゃん、やっと終わったよ」ってポツリと言ったんですよ。その言葉がもう重くて……いま自分で言ってて鳥肌立ちましたけど、誰かに獲られたかったのか、早く持っていってもらいたかったのか……あの寝ぼすけな中野さんが毎回1時間早起きして会長と話しに行って、全女をどうにかしなきゃいけないとか、全体のことを考えてきたプレッシャーからやっと解放された「終わったよ」なのか、いろんな意味に取れるじゃないですか。

——重い言葉ですよね。

京子 それは「解放されたよ」って意味なのか、「獲られちゃったよ」とか、敵対してたけど、「アジャ、頑張れよ」って意味なのか、いまでも正解はわからない。

——そのあとのマイクも、もの凄い感動的でしたもんね。

京子 なんでしたっけ？ そんな大事なとこ忘れんなよ、みたいな（笑）。

——細かいことは覚えてないですけど、「これからはアジャ、おまえの時代だよ」みたいなニュアンスだったと思います。

京子 へぇ〜、アジャ様にエールを送ったんだ。ホント、中野さんは凄いレスラーだったなと思いますよ。

——そうですよね。マイクといえば、対抗戦が終わってからノンタイトル戦でアジャ様と京子さんが凄い試合をやって、「私たちの闘いが始まりますね」って京子さんが珍しくマイクアピールしたことがありましたね。

京子 その試合って、私がすぐあとに（全女を）辞めるぐらいのときですか？

中野さんはホントにプロレスラーなんで、ステロイドみたいのを……

——95年12月の両国でした。京子さんとアジャ様の一騎討ちが2年8カ月ぶりになるんです。つまり対抗戦の時代には絶対組まれなかった、要するに黄金カードだったわけですよ。会社が取っておいたんじゃないかと思うんですが。

京子 いやいやいや、そんなことない。そんなこと思ってる会社じゃないもん。「アイツら言うこと聞かねえから、前半でやらせとけ」ぐらいの話ですよ（笑）。

——たまたま組まれなかっただけ？

京子 そう思いますよ。

——でもね、そのときの京子さんの「私たちの闘いが始まりましたね」というマイクは、凄く重たい響きがしました。

京子 そのマイクは覚えてます。私にしては珍しく（笑）。

——95年12月で、全女の大量離脱、要するに京子さんたちが辞めたのが97年の8月。その間1年8ヵ月ぐらいあるわけですけど、そのあとの1年8ヵ月っていうのは京子さんにとってはどういう時期だったんですか？

京子 う～ん、ギャラがもらえなくてたいへんだった（笑）。

——それももちろんあるとは思うんですけど（笑）、対抗戦が終わって、まだ豊田さんが残ってて、京子さんもいて、アジャ様もいて、みんなまだバリバリだった。対抗戦の時代の華やかさみたいなものはないけど、クオリティはある、と。95年12月の両国のマイクは、対抗戦はもう終わり。ここから私たちのクオリティを見せるよ、というような決意表明だったと感じたんですが。



95年9月2日の日本武道館大会では師匠のブル中野と対戦した京子。ブルの場外へのギロチンドロップ2連発でリングアウト負け寸前まで追い込まれた京子だったが、最後はナイアガラ・ドライバー3連発で初のブル越えを達成。敗れたブルは「負けて悔いなし！ 京子は最高のレスラーだ」と感動のマイクアピール。

京子 そう。クオリティには自信があった。それなのにお客さんが減っていっちゃったんですよね。

——その頃は、井上京子がやりたいプロレスを一番できる時期だった。にもかかわらず、観客は対抗戦の終焉と共に去っていった。そんな状況に関しては苛立たしかったでしょう。

京子 そうですね。当時の状況だったり、リング上での試合ももちろんつらかったんですけど、いま振り返ると楽しかったような気もします。最後のラスカチョvsアジャ様、私の試合とか、給料出てないのに後楽園で消火器とか撒き散らして凄い試合しちゃったときがあったんですけど、「なんで、おまえたちそこまですんの？」みたいな。いろんな不満があってもゴングが鳴って試合が始まったら本気になっちゃう。やらずにはいられない、みたいな（笑）。

——会社に対する不満はあったけど、いざ試合が始まっちゃえばスイッチが入ってしまう、と。

京子 ホントそんな感じです。まあ、減ってきたとはいえ、お客さんがいたからできたんでしょうね。

——プロ意識なんですね。対抗戦の前ぐらいから、京子さんはウェートアップして100キロ近くまでいったと思うんですけど、あれは意図的なものなんですか？

京子 そうです。アジャ様と試合をして上に乗られたときに「お、重い」と思ったんですよ。そのときに、私があと20キロぐらい増やしてアジャ様と同じぐらいになったら絶対勝てるなと思って。なんか、動けるデブってカッコいいなと思ったんですよ（笑）。

——アジャ様と互角に闘うために、あえて体重を増やしたわけですね。

京子 プロレスラーでいるうちに3ケタになりたいなと思って。3ケタって女子でなかなかいないじゃないですか。実際、一回3ケタになったんです。たしか何年か前に同じことを中野さんが言ってたな、とそのとき思い出して。中野さんは100キロの壁を超えられなかったらしいですよ。

——あ、そうでしたっけ？

京子 いろんなことして頑張っても100キロにはなかなかいかないみたいで。90キロぐらいまではいくんですけど、「100キロにはいかないのよ～」って話をよくしてました。

——でも、ブル様のプロフィールでは100キロオーバーの時期もありましたよね？

京子 そうなんです。これって言っていいかわかんないですけど、中野さんはホントにプロレスラーなんで、ステロイドみたいのを打ったりしてた。絶対ダメじゃないですか、女の子なのに。でもそういうのを打ったりとかして体重を増やしてたんですよ。

——え～っ、それは凄い！ 男子のプロレスラーではよく聞く話ですけど、ブル様はどうしても身体を大きくしたくて、ステロイドを使ってたんですか⁉

京子 やってたみたいです。最高115キロって言ってました。そのとき凄かったですもん、脚とかも。

——当時のブル様はもの凄い太ももしてましたからね。

京子 「普通じゃ太れないよ、アダモちゃん」って言ってた。私にはできない、絶対そういうのは無理と思った。

——中野さんは凄い方なんですね。

京子 「こういう練習をやらないと」とか語るんじゃなく、「なかなか100キロなれなかったからね、ちょっと打ってきたんだよね……」とか、サラッと言うの。「してますよ！」っていうのを言わない。ホント、全身プロレスラーって感じでカッコよかった。

——ホントにカッコいいと思います。全女を退社した京子さんは、ネオレディースを立ち上げて、そのあとNEOになるわけですけど、離れてみて初めてわかった全女のよさというのもあったんじゃないですか？

京子 いやいや、そんなの全女はダメですよ。ダメなもんはダメ！ あんなもん、人間として通用しないですよ！（キッパリ）。

——どこらへんが通用しないんでしょうか？

京子 だって、ダメじゃないですか。借りたものは返すとか、お金はちゃんと払うとか、基本でしょ。それを笑って済ます、みたいな。そういうのは「人間としてどうなの？」って思いますよ。

——全女は、リング上の闘いにおいては凄かったけども、会社としてはまったくダメだった。松永兄弟がやっていたことは認められない、ということでしょうか。

京子 ハッキリ言って認めたくはないです。いまNEOでプロレスラーを育てるのと同じに人間を育てたい

1993年の女子プロレス

“最狂団体”全女のプライドと井上

と思ってて。たとえば途中で辞めちゃった選手がいても、「NEOにいたコはやっぱ違うね」って言われるような人間を育てたいと思うんですよ。この歳になると。

――体育会系のノリですよね。

京子 でも全女のときはまったくそんなこと考えてなかった。ホント使い捨てで、25歳になったら「はい、サヨナラ」みたいな感じで。会長がよく言ってたのは「性格悪いほうが売れるんだ」って。私も入ってすぐにそれを言われました。「おまえはブスだから絶対スターになれない」って。

――ひどいこと言いますねぇ。

京子 それでまず落ち込んで。そのあとも「ブスだ、ブスだ」って言われ続けて、あげくのはてには「おまえは性格が優しすぎるからダメだ」と。私は田舎から出てきて、周りに意地悪する人なんていなかったんですよ。

――山形には悪い人間はいなかった？

京子 いるわけないじゃん、そんなの。他人を蹴落としてなんて、そんなの山形県にはないよ。山形県は人がいい県ナンバーワンなんだから（笑）。

――そうなんですか（笑）。

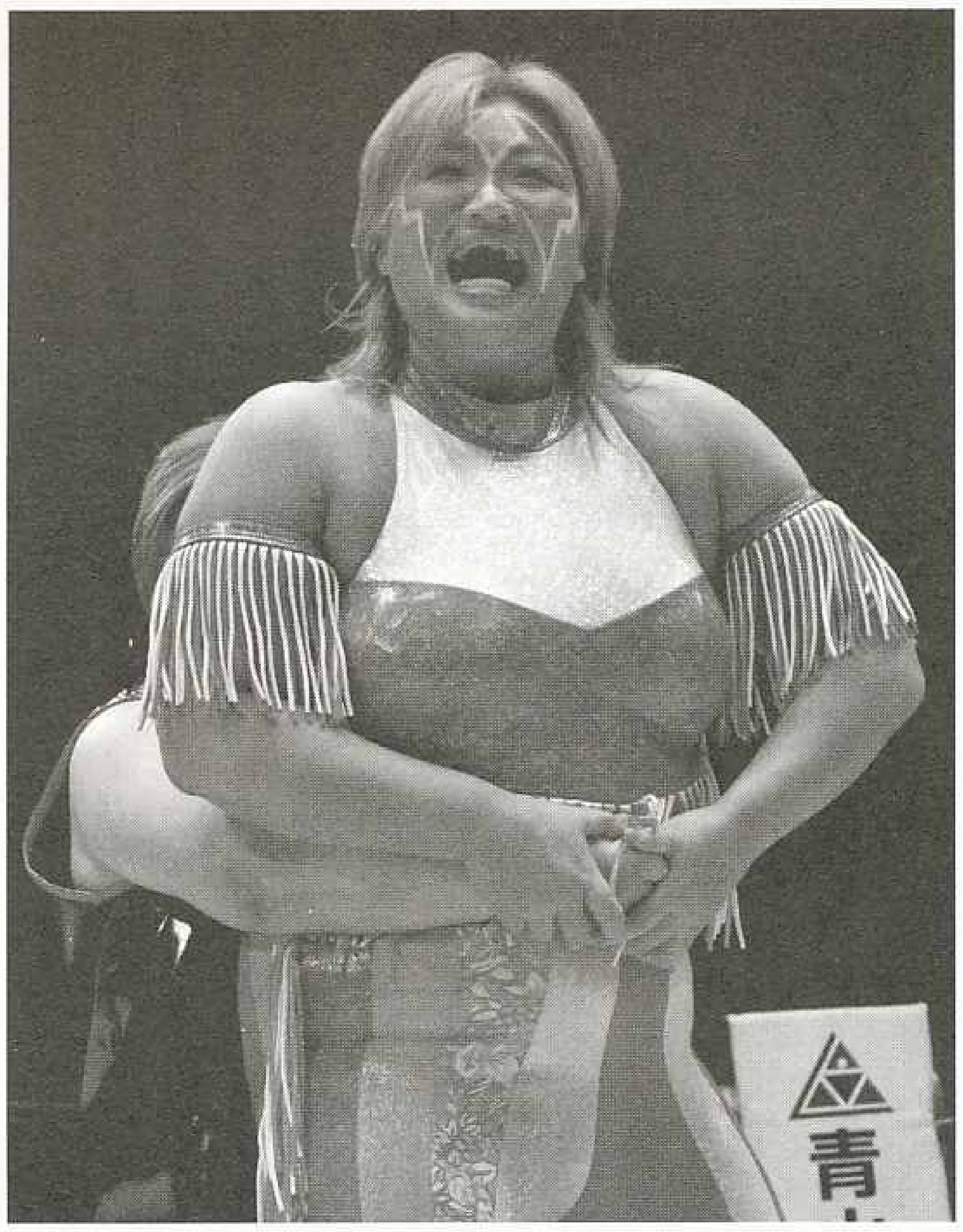
京子 でもね、「それじゃダメだ。見てみろ、北斗晶もそうだけど、性格が悪いヤツがああやって上に行くんだ」って。会長は北斗さんがまだ宇野さんのときから言ってましたから。「アイツは性格がもの凄く悪いから絶対売れる」って。それは覚えてます。

――人を見る目があるんですね。

京子 見る目はあるんですけど、金の使い方がわかってないんだよね（笑）。

――かわいくて性格が悪いから62年組は重宝されたってことなんですか？（笑）。

京子 いやいやいや（笑）。でもさ、「性格悪くなれ」って言われても無理なことだもんね。私、そのときにまた反発して、絶対このままでいようと思ったんですよ。自分で言うのもなんなんですけど（笑）、性格いいまま上に絶対行こうって思ったんです。「アイツは性格いいのに上に行った」って言われるようになりたかったの。



いのうえ・きょうこ■1969年4月22日、山形県出身。今年3月に亡くなった父親からのスポーツ英才教育を受け全女に入団。88年10月の井上貴子戦でデビュー。その後WWWA世界王者をはじめ数々のタイトルを獲得し、97年にネオレディース（現NEO）に移籍。07年11月に男児を出産。現在も最前線で闘うママさんレスラー。166cm、100kg。NEO女子プロレス情報は→ http://neopro.ne07.jp/

――そんな思いを抱きつつ、全女を抜けてトップとしてネオレディースをやり始めたときに、団体経営についてあらためて深く考えることになったと思うんですけど、ネオレディースはいかがでした？

京子 いやいやいやいやいや……ひどかった（苦笑）。ここまでひどいかって思ったのが、やっぱり初めはチケットは売れるわけですよ、旗揚げのときは後楽園も満員になって、次は駒沢のデカいほうでやっても満員になったりとかして。でもだんだんお客さんが減っていくわけですよ。「あれっ？」って気づいたときには凄くお客さんが減っていて。バカだから、お客さんが減ってるにもかかわらず、まだ大きいところでドカンドカンやろうとしてて。で、気づいたら半年ぐらいでアウトだったんじゃないかな。

――わりとすぐに体制が変わるんですよね。

京子 そう。そのときも、まだことの重大さに気づいてなくて。全女でずっと育ってプロレスは何千人っていう会場でやらなきゃいけないっていうのがあって。NEOになって初めて板橋とか北沢の300人とかの会場でやり始めたんですけど、いまだから言える話、正直恥ずかしいなっていうのがあったんですよ。

――プライドが許さなかったんだ？

京子 そうそう。でも、あるときにそんなことを気にするのはもうやめようって思って。いままで「はい、チケット50枚買ってよ」とか「100枚買ってよ」とかボーンと渡したりしてたんですけど、5000円のチケットを売る重みとか、1枚の重みとかそういうことを少しずつわかってきて。いままでもたぶん腰低かったと思うんですけど、それぐらいからさらに腰低くなって（笑）。

――そうなんですか（笑）。

京子 ネオレディースのときはもの凄い勉強しました、ホントに。あれがなかったら、いまのNEOはないと思うし、あのときの何年間はもの凄くつらくて、3回ぐらい自殺しようと思ったことがあったんですよ。

――えーーっ、井上京子にそんな時期があったんですか!?

京子 あったんです。もう飛び降りようと思って非常階段のとこまで行ったけど、「でもこのまま終わるのもな」って思いとどまったことが3回あった。でも、これで私が死んじゃったらついてきたみんなはどうなっちゃうんだろうって考えて。そのときに300人とかの会場からもう一回やり直そうって吹っきれたんですよ。

ネオレディース時代は凄くつらくて自殺しようと思ったこともあった

――そこまで苦しんでいたとはまったく知りませんでした。

京子 それぐらいつらかった時期があって、いまそのときに戻れって言われたらもう絶対嫌ですけど、あの時期がなかったらいまはないです。

――いまのNEOは現存する女子プロレス団体の中では好調みたいですけども、やっぱり世界中の男子も女子含めて、全女ほど危なくて、あれほどメチャクチャで、あれほどエネルギーがぶつかり合って、しかもマジな感情のぶつかり合いが観られる団体はもう出てこないんじゃないかと、僕は思ってるんですけども。

京子 よくも悪くも出てこないでしょうね。いろんな意味で何もかもがマジですから（笑）。だって、プロレスラーもだまされちゃうぐらい凄いんですもん。

――身近にいる人でもだまされていた、と。

京子 そんなのばっか。ホントに怖い世界（笑）。

【09年4月13日／都内・武蔵小山『あかゆ』にて収録】



7月に“消滅説”も急浮上!!

すばらしき“DSE”体制時代!!

初期 ハッスル 上流地帯 座談会!!

「ドゥ・ザ・ハッスル!」と04年1月4日に旗揚げした『ハッスル』もなんと通算100回大会を達成!! 7月末には“アルマゲドン”や『ハッスル』消滅もウワサされる『ハッスル』だが、ムチャな展開とハンパない予算をつぎ込んだDSE体制の初期『ハッスル』の魅力と裏側を語りつくす緊急座談会を開催ッ!

構成/真下義之 大会撮影/平工幸雄 写真協力/ハッスルエンターテインメント

座談会出席者

ジャン斉藤
本誌編集長。“雀鬼”こと桜井章一の内弟子を経て、『kamipro』編集部へ。永久電機などアントン事業の調査や破綻系興行観戦がライフワーク。初期『ハッスル』番でもある。

八木賢太郎
フリーライター。なぜか『ハッスル』の内幕にやたらと詳しい“ハッスル事情通”の肩書きを持ち、『kamipro』のポッドキャスト番組『mimipro』でも絶賛出演中。

ミスターX
八木賢太郎氏以上に、『ハッスル』の内幕にやたらと詳しい“ハッスル事情通”な男。名前を伏せられずにはいられないが、人一倍「『ハッスル』LOVE」も感じさせる謎の業界人。

【司会】真下義之
本誌編集部。業界入りのきっかけが幻の『ハッスルマガジン』(小社刊)編集という、意外と『ハッスル』には縁の深かった男。皆さん、いままでありがとうございました。

――さて、本日は先日100回大会を迎えた一方で、7月の『ハッスル・エイド』ではアルマゲドン……一部では消滅もウワサされる『ハッスル』についての座談会です！

八木 ……じゃあ、今回は「さよなら『ハッスル』」企画？

斉藤 まだ終わってないですよ！　100回を迎えたいまこそ、初期『ハッスル』を語り合いたいな、と。破綻系興行マニアだった自分からすれば、初期のムダに豪華なスケール感は、ホントにたまらなかったですよ。

――で、今回はポッドキャスト『mimipro』でおなじみ〝ハッスル事情通〟八木賢太郎さん。そして、謎の〝ハッスル事情通〟ことミスターXさんもお迎えしました！

X 都合により名前は伏せさせていただきますが……。

八木 俺より〝事情通〟だと思うけど（笑）。でも、初期ってムチャだったね。舞台セットもムダに豪華だし。

斉藤 旗揚げ戦（04年1月4日）なんか、さいたまスーパーアリーナのスタジアムバージョンですからね（笑）。

X 4万人以上収容できる巨大会場が超ガラガラでしたね。前年の大晦日の『PRIDE男祭り』の会場をそのまま借りたらしいですが、サイズを変えるのにけっこうなお金がかかるみたいで、結局そのままやることになったみたいですね。

斉藤 で、大晦日もシリアスな『男祭り』の空間に、『ハッスル』の宣伝で小川直也と橋本真也が出てきて、髙田統括本部長とゴーバー（ゴールドバーグ）と大乱闘してましたよね。

X あのパフォーマンスは、フジテレビが死ぬほど怒ったらしいですよ（笑）。当時はプロレスとの差別化を図るイメージ戦略を進めていたこともあって。

斉藤 当時、プロデューサーだったKさんが進行台本を叩きつけたっていう噂を聞きました（笑）。ただ、あのシーンの視聴率はよかったって聞いてますよ？

X よかった！　25～26パーセントくらい獲ったんじゃないかな？

斉藤 しかも、あのときの『男祭り』は試合内容がいまいちだったから、破壊王のテーマ曲（『爆勝宣言』）がかかった瞬間、会場はムチャクチャ盛り上がったんですよ。「お～～ぉ!!」って（笑）。

X 破壊王もヤル気マンマンでリングの髙田さんに指を差しながら入ってきましたからね（笑）。

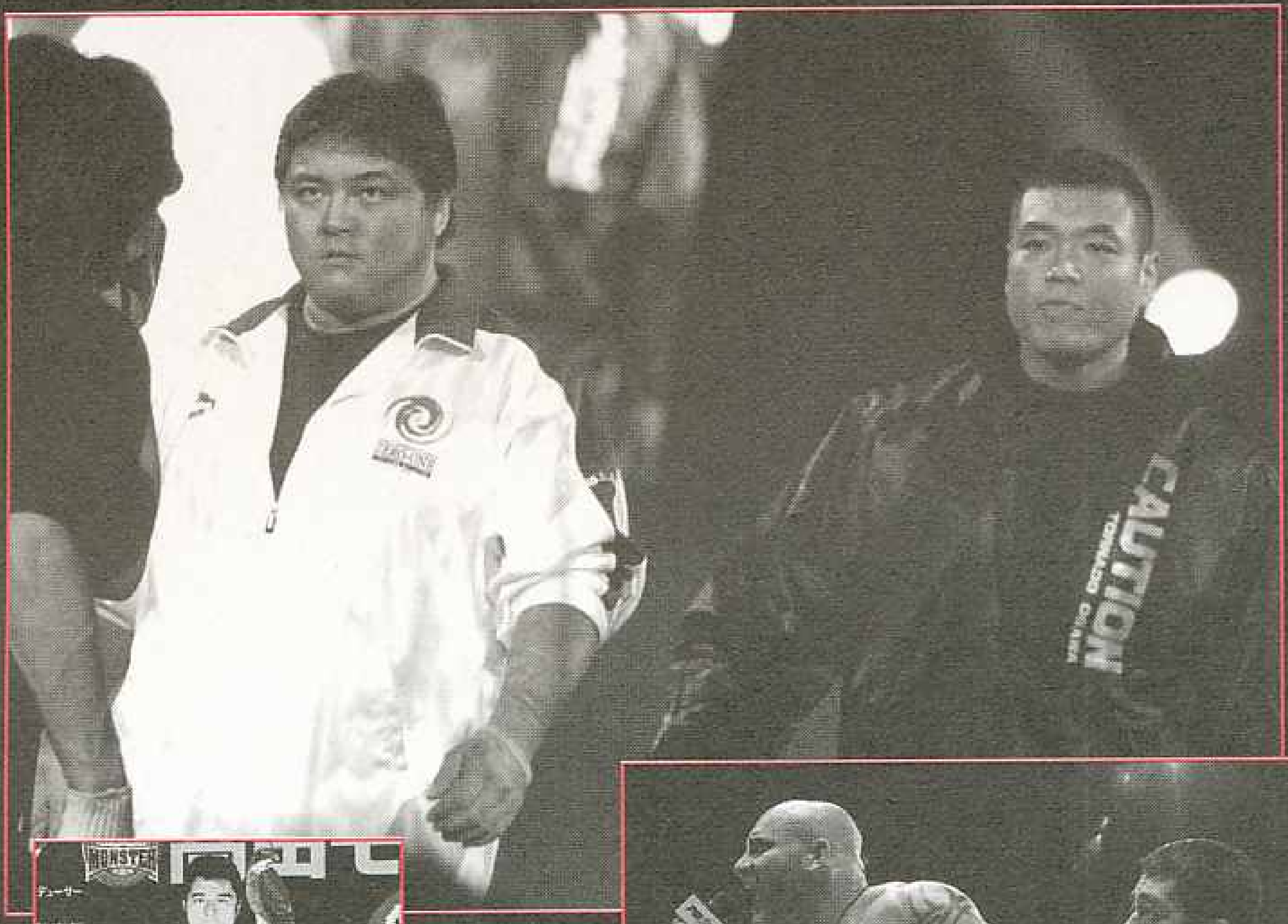
斉藤 大晦日の格闘技イベント中に何をやってるんだって話ですよ（笑）。

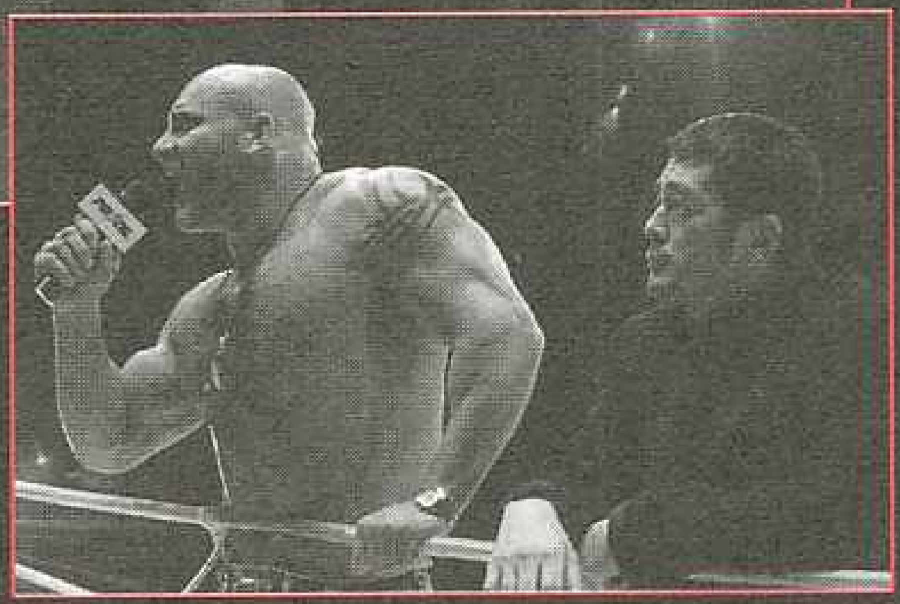
――そうして『ハッスル1』を迎えるわけですが、最初は髙田総統じゃなく〝髙田統括本部長〟でしたね。

八木 そうそう。意外と知られていないけど、『ハッスル1』は髙田モンスター軍vsハッスル軍じゃなく、ハッスル髙田軍vs小川&橋本の連合軍って構図だったんだよね。

斉藤 髙田総統が登場する『ハッスル2』が実質的なスタートでしたね。

八木 『ハッスル1』って結局、『WRESTLE 1』（FEGとDSEが協力したプロレスイベント）を受けた大会でしょ？







「チキン＆ポーク、出てこいや！」と髙田本部長のマイクで『男祭り』に登場したOH砲。ゴールドバーグの「フーズ・ネクスト？」に小川が「ユー・アー・ネクスト！」と凄み、破壊王も「時は来た！」とシャウト。非PRIDE的な大乱闘が堂々と全国中継されたのだから凄すぎる。写真左が、デスラー総統ふうの髙田総統初期イメージイラスト。『機動戦士ガンダム』のシャアもブレンドされてる!?

X もともと3回契約だったゴーバーの契約を「こなさなきゃいけない」のが始まりだったらしくて。

斉藤 それって、ゴーバーへの違約金が高かったんですか？

X まあ、一つのきっかけってことでしょうね。土台はあったから、これを機にもう一度やってみよう、と。

斉藤 もう一つ大きな伏線としては、髙田本部長のプロレス人生を金子達仁が赤裸々に描いた『泣き虫』が幻冬舎から出版されたじゃないですか。

――プロレスの内幕も書いた本ですね。旗揚げの数ヵ月前に発売されて。

斉藤 その内容を『週刊プロレス』やプロレス関係者から非難されて、髙田本部長のイメージは最悪だったんですよね。

X 聞くところによるとバッシング派はろくに『泣き虫』を読んでなかったそうですけどね（笑）。

斉藤 ふざけた話ですよね、まったく（笑）。だから、『ハッスル2』で髙田総統に変身したのは、『ハッスル』のイメージ改善のためで、本部長のヒール路線を強化するしかなかったんじゃないかって。

――総統のモデルは、『宇宙戦艦ヤマト』のデスラー総統らしいですが。

八木 山口（日昇）さんがうれしそうに言ってたよ。「髙田本部長にデスラーの衣装を着せるんだ！」って。

斉藤 ……それにはイヤな思い出があって、山口が髙田総統のデスラーふうのイラストを何を血迷ったか『紙プロ』の表紙にする！」と言い出したんですよね。

一同 ダハハハハハ！

斉藤 社員総出で止めましたけど。

八木 しかし、髙田総統の初登場は凄かったねぇ。横浜アリーナの上の客席から出てきたけどガラガラだから周りに客が誰もいなくてさ（笑）。

――髙田って最初から『ハッスル』や総統にノリ気だったんですか？

X 「『ハッスル』をやろう！」っていう最初の時点から、髙田さんも小川さんもノリ気だったみたいですね。初期のキメポーズの「ドゥ・ザ・ハッスル！」（お互いの腕を交錯させるポーズ）してたというか（笑）。最初の会議から髙田さんも小川さんも同席したみたいだし。橋本さんだけは連絡がつかなかったらしいけど。

斉藤 破壊王は、『ハッスル』の方向性自体にはじつはノリ気じゃなかったっぽいんですよね。プロレスからハミ出るのはいいけど、最初からハミ出たフォーマットでやるのは違和感があったんじゃないかなあ。

X むしろ、小川さんと髙田さんが「新しいことをやろう」「プロレスはカミングアウトしなくちゃダメだ」って思想で重なって。ただ、さすがの髙田さんも、髙田総統のデザインには絶句したらしいですけど（笑）。

八木 最初は、髙田さんの奥さん（向井亜紀）も反対したらしいね。（アドルフ・）ヒトラーを彷彿させるのがひっかかったらしくて。

『男祭り』の大乱闘劇でフジテレビが死ぬほど怒ったらしいですよ（X）

斉藤　ヒトラーといえば、PRIDEラスベガス大会のとき、現地で髙田総統の会見をする話があったらしいんですよ。でも、PRIDEのアメリカ進出をバックアップしたエド・フィッシュマンがユダヤ系だから「ヤバいんじゃないか?」って、いらぬ心配もしてましたよね（笑）。結局やらなかったんですけども。

――『ハッスル』の中心になる山口日昇はどんな夢を語ってたんですか?

八木　じつは、『ハッスル』の前年に山口さんと柳沢忠之（現K―1関係者・元『紙のプロレス』発行人）さんの対談本を出してるんです。僕はその聞き手をやったんだけど。

斉藤　ぴあから出た『紙でプロレスソリチュード』ですね。あれはいろんな意味でおもしろい本ですよね。対談の収録を始めたときは、山口と柳沢さんの関係は良好だったけど、終盤になると……。

八木　PRIDEとK―1が割れちゃって、二人の関係も凄く微妙になって（笑）。その本で山口さんが語っているプロレス観が『ハッスル』にそのまま注入されてるんだよね。そこが基本理念になったというか。

X　ハッスル国の憲法草案を作ったのは完全に山口さんでしょう。

八木　初期は、よく総統の台本を書いてる姿を見たよ。大会から会見まではほとんどの台本を書いてたんじゃない?　あの頃は社長というより、クリエイターというか。

X　きっと山口さんが得意なのは、社長業じゃないんですよ。根っからのクリエイターというか。

八木　自由な発想でものを書いたりしたら天才的だけど、会社の経営とか責任をとるのは一番苦手だから（笑）。

斉藤　……もっと早く言ってくださいよ!!

一同　ダハハハハハ!

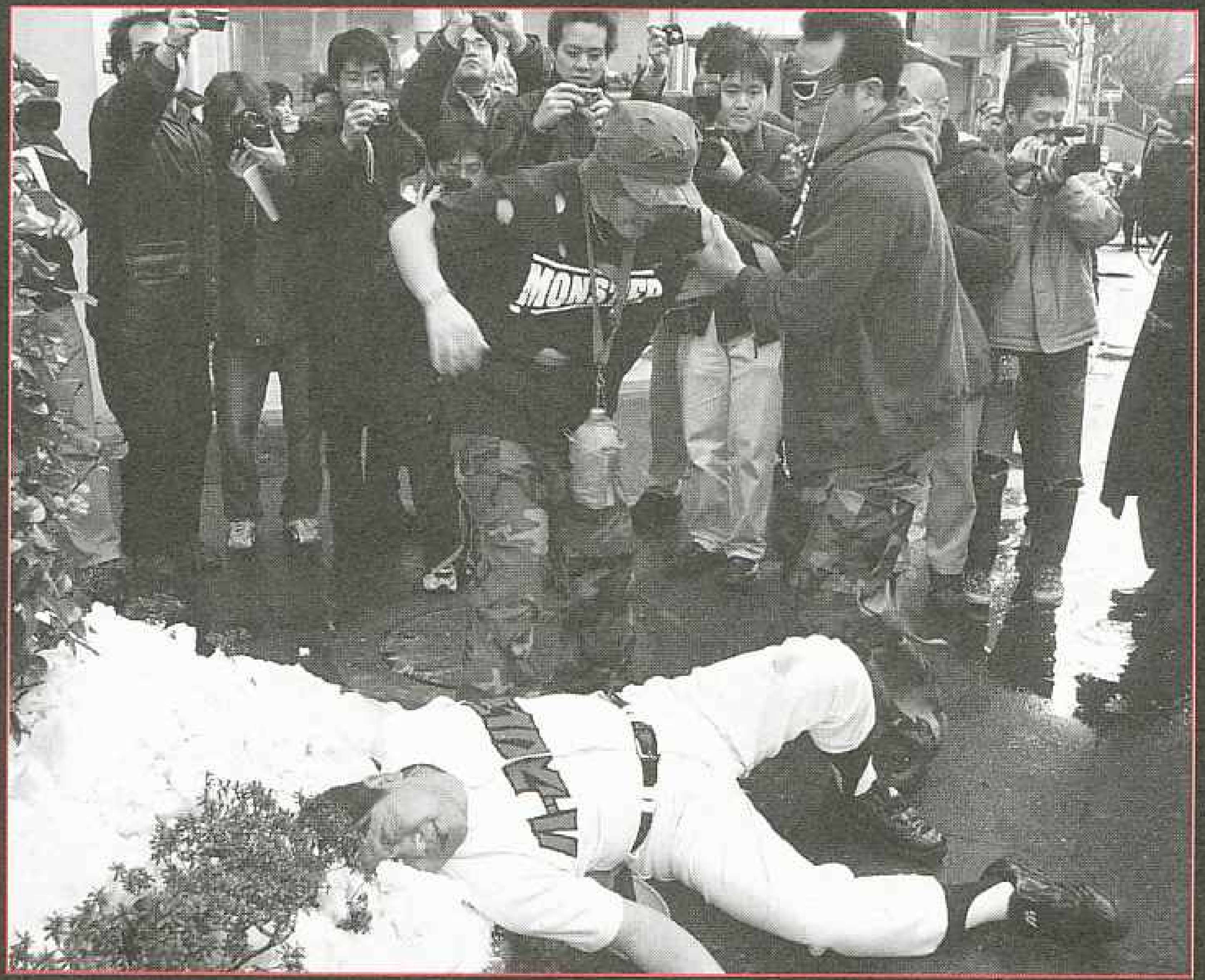
斉藤　でも、初期『ハッスル』は実験的なことばかりで、ムダにスケール感にあふれた企画が多かったんですよ。〝髙田総統の部屋〟会見とか。

X　あったなぁ～!

斉藤　超高級ホテルの部屋での会見リリースがきたのに当日に髙田が二日酔いかなんかで急遽中止になって。後日、部屋を取り直してやったんだけど、地上波もないマスコミ向けの会見で、なんでそこまで金をかけるんだって話じゃないですか（笑）。

X　初期はいい意味でくだらない会見が多いですよね。ボクが一番好きなのはDSE事務所でモンスター軍が会見をしてると対面の喫茶店でハッスル軍の中村カントクと女性がデートしてるのをアン・ジョー司令長官と島田二等兵（当時、現工作員）が偶然発見するヤツ。あれは、『ハッスル』屈指の名会見ですよ!

――僕なんて『kamipro』に入って最初の会見がそれですから（笑）。





写真上が、「『ハッスル』史上最もくだらない」05年3月4日、表参道路上の島田二等兵の中村カントク襲撃事件。喫茶店から出てきたカントクを島田が馬乗りで奇襲！　口を血で染めるカントク！　喫茶店店員に叱られる笹原GM！　デタラメな勢いにあふれた初期『ハッスル』の迷会見だ。写真左が04年4月29日、高級ホテルの一室を貸しきった超ハイコストパフォーマンスの"高田総統のお部屋"会見。ローソクの灯りの中、生総統劇場が展開!!

X　冬で路上に雪が残ってたんですけど、中村カントクが喫茶店から出てきたとこを島田二等兵が路上でボコボコにしちゃって。アン・ジョーたちが記者陣を連れて喫茶店前に向かおうとしたら、別件で警察のパトカーが徘徊してたから、パトカーが通りすぎるのを一緒に待ったり。で、乱闘騒ぎを聞きつけて駆けつけた警官が、あの格好のアン・ジョーに「怪しい人いませんでしたか?」と聞いたみたいで（笑）。

『ハッスル』が新日本に乗り込んだ試合 あれは〝1・4事変〟のコミカル版（斉藤）

八木　どう考えてもアン・ジョーが一番怪しいよ!（笑）。

斉藤　あの乱闘は喫茶店側に無許可だったから、DSEの広報でもあった笹原（圭一、現DREAMイベントプロデューサー）GMが小学生のように怒られたらしくて。

八木　でも、ファンには会見のおもしろさっていまいち伝わってないんだよ。そこはもったいなかったねぇ。

斉藤　紙媒体だけじゃちょっと伝わらないですよね。ただ、スキットに関しては、当時はもの珍しいことも手伝って「あの選手までスキットに出た!」って反響はありましたね。

八木　「川田（利明）までスキットに出ちゃうんだ!」とか。そういえば、当時、友人の全日本ファンは「川田がリングで歌を唄ってる」って言っても信じてくれなかった（笑）。

――あと「ハッスルポーズをする・しない」も一種の踏み絵になりました。

斉藤　長州（力）をめぐるハッスルポーズ騒動はくだらなかったですね。オーちゃんが長州に参加を呼びかけるけど、長州が帰っちゃって、それを橋本が鬼の形相でくい止めたり。大の大人が公衆の面前で何をやってるんだって話ですけど（笑）。

X　それくらい当時はみんな「ハッスルする・しない」で真剣だったんですよねぇ……。

斉藤　そのきわめつけの事件が、新日本プロレス大阪ドーム大会（04年11月13日）ですよ。小川直也&川田利明vs棚橋弘至&天山広吉。あの試合後の騒動は、プロレス界最後のシュートな事件だと思いますけど。

八木　あれってシュートなんだ?

斉藤　試合も緊張感ありましたけど、試合後の花道の「ハッスルをする・しない」で新日本勢が総出で揉めるのは完全ガチですから。

X　あのときの小川さんはホントに頼もしかったみたいです。ハッスル軍は小川さん、藤井軍鶏侍、川田さん、石狩太一に笹原GMというメンツで。それを屈強な新日本のレスラーが20人ぐらいで取り囲んでいて（笑）。

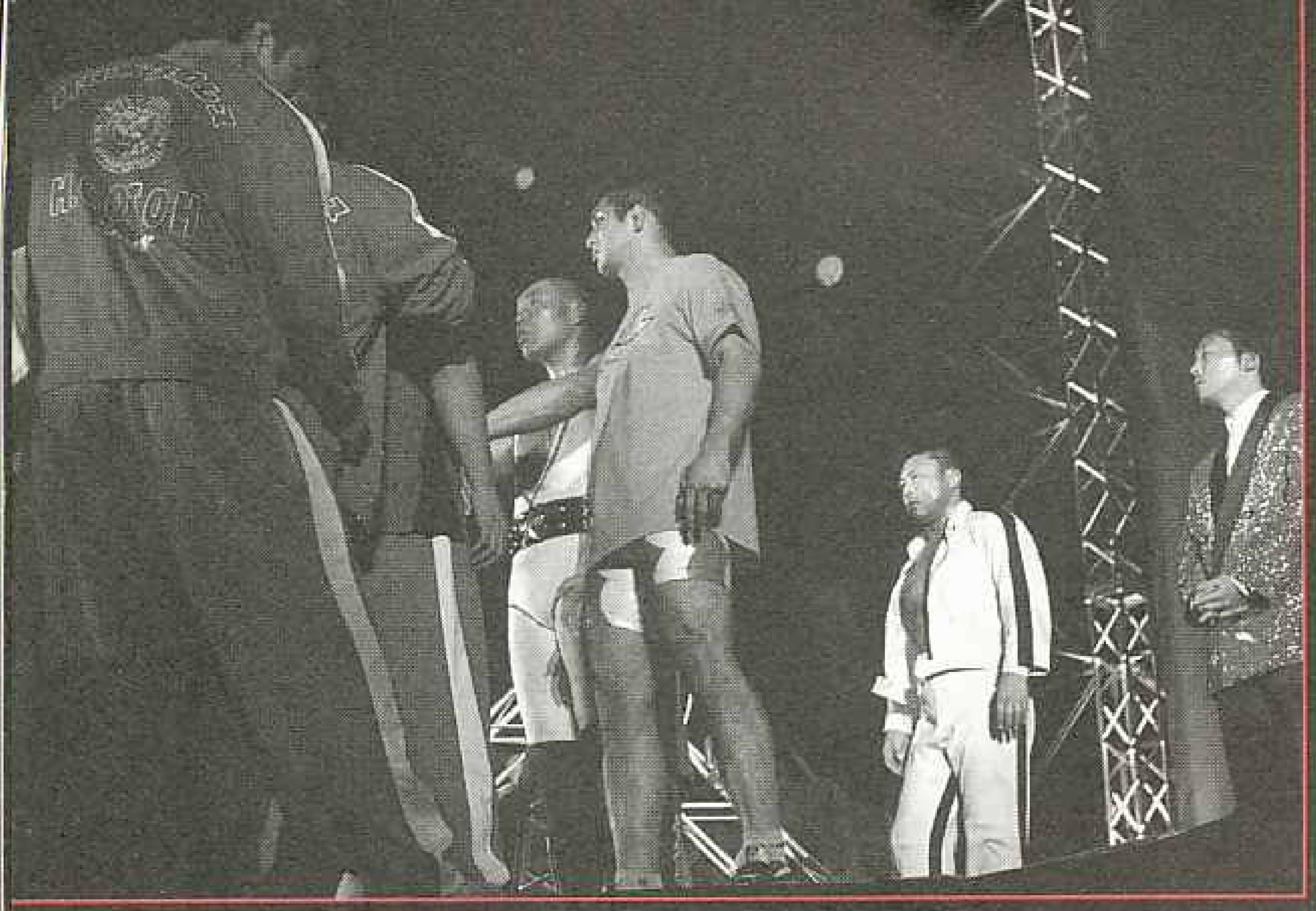
八木　新日本もどうかしてる（笑）。

X　そうなることを予測してた小川さんは、ハッスル軍に「不測の事態が起こるかもしれないから、絶対に自分の前には出るな」「俺が守ってやる」と言ってたみたいで。

――格好いいなぁ!

斉藤　だから、あれは〝1・4事変〟のコミカル版なんですよ（笑）。

X　もともと猪木さんが窓口になって、ハッスル軍参戦が決まったんです。猪木さんは「ハッスルポーズでもなんでもすりゃあいいじゃねぇか」って言うけど、裏では○○○さんから「絶対やらせるな」って厳命が出て、新日本の選手が必死で止めてたらしくて。



04年11月13日、新日本大阪ドーム大会にアントンの要請で急遽、参戦したハッスル軍。だが、試合後はなんと「ハッスルポーズする・しない」で一触即発の大乱闘！　成瀬が「ここはハッスルしていい場じゃない！」と身体を張って阻止すれば、永田さんも「命を懸けて闘ってる男たちに失礼！」とマジギレするシュートすぎる異常事態に！

――最後に蝶野（正洋）さんが「ハッスルポーズでもなんでもやれ！」ってマイクしたのは？

斉藤　蝶野は「新日本は器が小さい」と思われるのがイヤで機転をきかせたんじゃないかな。「やる・やらない」で揉めてるときに、島田二等兵が「ハッスルポーズをやれねぇのか！」とかマイクで煽ったのもアドリブらしくて、凄い度胸ですけど（笑）。

八木　やっぱりさ、小川はそういう状況でこそ活きる人なんだよね。タブーを含んだギリギリの状況でこそ光るというか。

X　話を戻すと、『ハッスル3』までミック・フォーリーとかスコット・ホールとか有名ガイジンをガンガン呼んでたら「採算合わないな」とやっと気づいたみたいですね。

八木　やっと気づいたんだ（笑）。

X　で、「小さなハコでしかできないことをやろう」と方向転換したのが後楽園の『ハッスル・ハウス』で、この大会で山口さんの才能がついに大爆発するんですけど。それまで「ハッスルファンなんていない」みたいなムードだったけど、客の顔が見えたし、超満員で凄い熱気になって、髙田総統人気にも火がつきましたしね。

八木　いまだに後楽園はその熱を引きずってるよね。あと、『ハッスル音頭』も忘れられないんだけど……。

斉藤　あれは、音頭なのに秋口に発売してるんですよ（笑）。

八木　そういえば、俺の結婚式で山口さんが『ハッスル音頭』を唄ったんだよ。お色直しの入場で（笑）。

――で、その年の暮れにいよいよインリン様が初登場します。

X　インリン様の登場は相当にデカかったですよねぇ。ここでもう一段、『ハッスル』のステージが上がったのは間違いない。興味深いのはその翌年（05年3月18日）の両国国技館の『ハッスル8』なんです。島田vsカントクのエニウェアマッチからして作り込みが凄かった。路上とかちゃんこ屋とか、あらゆる場所で闘ってて。その模様が映像で大会中に挿入されて。

八木　島田vsカントクは『ハッスル』史上に残る珍試合だよね。この試合のためだけにすべり台まで用意して、両国の2階からダーッとすべり降りてきて（笑）。『ハッスル8』はアイデアが詰まってたんだよなぁ。

斉藤　メインは、自分のここ数年のプロレスのベストバウトである小川vs川田の観客ジャッジメントマッチだし、あれは評価が低すぎますよ。あれも完全にシュートですから。

――またもやシュートですか（笑）。

斉藤　勝敗を決める3ポイントの、試合の勝ち負け（小川の勝ち）、ネット投票結果（川田の勝ち）は決まってたらしいけど、最後に観客がボードを掲げてジャッジをするのはガチですから。あのまな板に乗ることができるレスラーって、限られますよ。

八木　最後は凄い絵だったよね。数を数える野鳥の会みたいな人もいたけど、ほとんど川田に上げてたから、数えるまでもなくて（笑）。

斉藤　自分は、国民的写真週刊誌の次長（現編集長）と一緒に観てたんですけど、あまりに「川田」ばかりだから二人で「小川」を上げたんです。「かわいそうだからオーちゃんに上げようよ」と。

一同　ダハハハハ！

斉藤　笑いごとじゃないですよ！（笑）。だって、小川は「何があっても最後にファンは自分を支持してくれるハズ」と思ってたそうですから。

X　それはホントにそのとおりだと思いますよ。

斉藤　小川はPRIDEやCMに出たり、身を粉にしてハッスル布教活動をしてたから、「ファンは支持してくれるだろう」って読みがあったのに、最後は「川田」のボードで埋めつくされた。残酷ですよ。

X　小川さんはヒョードルに負けたときより、落ち込んだみたいですし。

斉藤　そのときのウチの小川インタビューも、それまでは原稿チェックがなかったのにメチャクチャ直しを入れてきたから、相当ショックだったんだなって。

八木　ただ、ここに至るまでに小川はジュードー・オーとかで相当に評価が下がってたんだよね。

X　そこで、「プロレスのうまい川田なら、小川のいい部分を引き出してくれる」って読みと「試合で負けても小川がジャッジで勝てばいい」って発想があったんじゃないか、と。

斉藤　でも、勝負でも内容でも支持率でも惨敗して……。

――でも凄いコンセプトですね。最近の『ハッスル』はエンタメの保守本流みたいに捉えられてるけど、初期は『マッスル』ばりにもの凄くエッジが立ってた。しかも両国みたいな大会場でやってるんですから。

斉藤　『ハッスル』といえば、「試合がしょっぱい」って言えばいいと思ってるアンチ『ハッスル』マスコミが多かったけど、「いい試合」をすればプロレスはおもしろいのか？　っていう疑問はありますよね。

八木　『ハッスル』は「いい試合」より「いいシーン」だよね。

X　そうですね。たとえば大阪（05年7月15日）でインリン様がムチを投げたのが引っかかった奇跡の場面にしても（川田にフォール負けしたインリン様だが「ムチは身体の一部」なのでロープエスケープとして判断され、無効試合に）。

八木　あれは凄い！　投げただけでロープに引っかかるはずないから、アン・ジョーがこっそりかける段取りだったらしいけど。リングサイドで観てた山口さんと笹原GMも興奮

初期ハッスル騒動史!!



『ハッスル音頭』（ビクターエンタテインメント）

2003年

12月4日　『ハッスル1』開催会見。榊原DSE代表の「プロレス、ということなんで」発言に小川&橋本が激怒。

12月31日　『PRIDE男祭り』のリングに小川&橋本が登場！

2004年

1月4日　『ハッスル1』（さいたまスーパーアリーナ）。2万3327人動員もスタジアムバージョンのため、記録的なガラガラ状態に。

3月7日　『ハッスル2』（横浜アリーナ）にて、髙田総統が初登場。

3月22日　『週刊アサヒ芸能』にて「『ハッスル』台本流出騒動」勃発。

6月28日　後楽園ホールに初進出した『ハッスル・ハウス1』開催。

9月16日　CD『ハッスル音頭』が緊急発売。作詞は小川直也。

9月20日　『ハッスル5』（横浜アリーナ）にて、出場停止中の小川に代わり、〝ジュードー・オー〟が出現。

11月13日　小川&川田が新日本プロレス大阪ドーム大会に緊急参戦。ハッスルポーズは不発に終わる。

12月15日　インリン・オブ・ジョイトイが『ハッスル』に初登場。翌年からインリン様としてレギュラーに。

2005年

2月11日　『ハッスル7』（愛知県体育館）で小川がインリン様にフォール負け。

3月18日　『ハッスル8』（両国国技館）で、小川vs川田の観客ジャッジメントマッチを決行。

7月11日　〝ハッスルキング〟こと橋本真也が急逝。

7月15日　『ハッスル11』（大阪府立体育会館）でインリン様が奇跡のムチロープエスケープに成功。

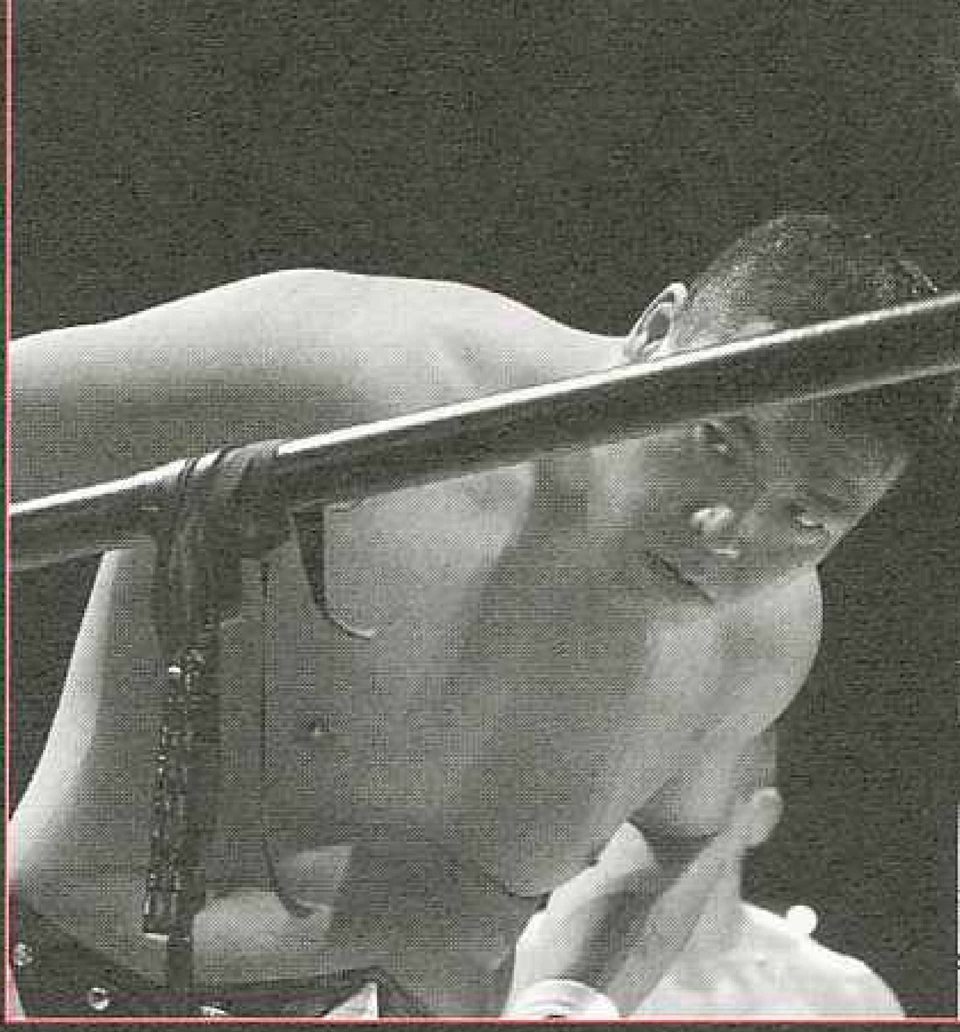
11月3日　『ハッスル・マニア2005』（横浜アリーナ）にて和泉元彌、HGがプロレスデビュー。

2006年

6月5日　フジテレビがDSEとの契約を一方的に解除。『ハッスル』の地上波放送予定も消滅。

6月17日　『ハッスル・エイド2006』（さいたまスーパーアリーナ）にて、ザ・エスペランサーが登場。

奇跡のムチ事件とか『ハッスル』はときたま出るガチな場面が凄い（八木）





これが伝説のムチロープエスケープ！　川田に回転エビ固めでフォールされたインリン様が、後方に投げた"身体の一部"なムチがロープにひっかかる大番狂わせ。スローで見てもちゃんとロープに着地してるから、凄すぎる！

しすぎて、思わず立ち上がって顔を見合わせたみたいだし（笑）。「当時の『ハッスル』がいかに神懸かってたか？」の象徴的シーンだね。

――自分は『kamipro』のインリン様特集で女子プロのリングを借りて、同じ状況で「何回ムチを投げたらひっかかるか？」って実験をやったんです（笑）。そしたら20回投げてひっかかったのは1回だけ。確立はたったの5パーセントですよ！

X　じつは、この大会を天龍（源一郎）さんが家で観てたらしいんです。で、『ハッスル』のスタッフが参戦を依頼しに行ったとき、「ちょっと教えてほしいんだけど……あのインリン様のムチはどうなってんの？」って。

八木　天龍でさえ気にしてた（笑）。

X　天龍源一郎にそこまで言わせたら本望でしょう！

八木　いやあ、『ハッスル』って、ときたま出るガチな場面が凄いね。

――で、当時の『ハッスル』のピークが、和泉元彌が出た『ハッスル・マニア2005』（05年11月5日）ですね。

八木　俺はいつも山口さんにチケットをとってもらってたんだけど、『ハッスル1』は最前列だったの。でも、この横浜アリーナは「3階席のうしろしかない」と言われたから、グッとくるものがあって。「最初は最前列だったのに、こんな遠くになったのか！」と。……そのあとまたドンドン近づいてったけど。

一同　ダハハハハハ！

――超満員発表ではなかったけど、ホントにギッシリでしたもんね。

八木　あのぐらい入ればさすがに採算がとれたんじゃない？

斉藤　いや、あれでも採算はとれなかったらしいです。その話を聞いたときに「地上波がつかないとダメか」って気持ちと、「発想や芸術性はともかく、興行としてのプロレスはもうダメなんじゃないか？」と思わされた分岐点でしたね。

――採算がとれないのは、要するにギャラの問題なんですか？

X　ギャラであり制作費でしょう。マメに地方巡業とかをしてる団体だったら違うんでしょうけど。『ハッスル』もミニシリーズを組んだり、試行錯誤はしてましたけどね。

――そこに至る『ハッスル』の絶好調は、破壊王が亡くなったあとに始まった気がするんです。破壊王を追悼した博多大会のラストでHGが初登場し、翌々日に奇跡のムチが成功したり、ムードが一気に変わった。

X　あと、同じタイミングで破壊王の社葬もやってましたね。横浜の葬儀じゃなく、2回目の青山葬儀場の合同葬です。

斉藤　1回目は橋本かずみさんのほうの遺族にお金が全然いかなかったらしいんですよ。で、奥さんに相談された榊原（信行・元DSE代表）さんが、「これだけ足跡を残した人にプロレス界としてお葬式をやらないのはおかしい」「俺がお金出すよ」と独断で決めたみたいで。たぶん予算は1000万くらいいってるんじゃないですか？

――そんなに！

X　で、新日本にもお金を出させたんですけど、その交渉をしたのは小川直也らしいんですよ！

八木　うわ～、今日は小川の男らしい話が出てくるなぁ！

X　そういうときは凄く頼りになるみたいですね。とくにお金の話をさせたら天下一品らしいです（笑）。

八木　金の話と乱闘にはメチャクチャ強い、と（笑）。

――で、さらに大きな区切りが翌年のフジテレビショック後の『ハッスル・エイド2006』（06年6月17日）。

X　地上波放送が直前で中止になったうえに、HGとかインリンとかがフジの圧力によって「芸能人が出られなくなる」ってウワサになって。

八木　芸能人からしたら、普通はテレビをとるもんね。

X　ホントに圧力がかかったかわからないですが、数日後の静岡大会にHGが会場入りしたら、「よくぞ来た！」とスタッフから万雷の拍手で迎えられたっていう話があって。

――いい話だなぁ。『ハッスル・エイド』は"タマアゴ"っていう大物ゲストが産まれる仕掛けが目玉だったけど、くりぃむしちゅ～の有田（哲平）の予定がフジショックの余波で一回消滅したんですね。で、ザ・エスペランサーの出番になるんですけど。

特選！　初期ハッスルベストバウト!!

八木賢太郎のベスト



2005年9月10日『ハッスル12』愛知県体育館

小川直也&川田利明vsFUJIN&RAIJIN&インリン様

僕はインリン様の奇跡のムチの試合のあと、インリン様と因縁のあった川田がモンスター軍に寝返った試合。試合中、川田が小川の顔面を蹴って裏切るんだけど、あの意外性にはシビれたし、いまでも川田を見ると「また裏切ってくれないかな」と期待しちゃうほどドラマチックだった。

ミスターXのベスト



2005年11月3日『ハッスル・マニア2005』横浜アリーナ

和泉元彌vs鈴木健想

ワイドショーなど世間を巻き込んだ一連の流れと、大会の盛り上がり、試合内容や結果を含めてベストですね。聞くところによると、当時のフジテレビの『めちゃイケ』のスタッフまでほめてたらしいですから。一回きりのライブで見せる方法論としては突出した完成度だと思います。

ジャン斉藤のベスト



2005年3月18日『ハッスル8』両国国技館

小川直也vs川田利明（観客ジャッジメントマッチ）

当時、「小川は試合がしょっぱいからダメ」と言われてたけど、プロレスが「うまいからおもしろい」ってのもおかしい話で、それがプロレス界の定規になってるのはどうかと思う。ただ、そんないいがかりがもとで、こんなムチャな試合を組む初期『ハッスル』は素晴らしかった。

X　髙田さんのリング復帰待望論は

八木　そんな大会なのに小川は前座

X　イベントが続くと、だんだん高

八木　必死で「なじもう、なじもう」

降、プロレスはかなり変わりました

X 高田さんのリング復帰待望論はずっとあったけど、「出るなら、『ハッスル』が一番盛り上がったときに」って言ってたみたいで。

――でも、『ハッスル』が存続の大ピンチを迎えたことで、最後はスタッフ一同で高田に土下座してお願いしたってウワサまでありますね。

斉藤 結局、有田も男気を発揮してオープニングに出るんだけど、「じゃあ、タマアゴの正体は誰？」って場面で、高田が『トレーニング・モンタージュ』で出てきたから猛烈に感動しましたよ！ というか、当日発表なんてもったいない（笑）。

八木 ホントに『ハッスル』最高の名場面だよねぇ。

X 高田さんの男気に、バックステージでは安生（洋二）さんをはじめほとんどのレスラー、スタッフが泣いたらしいし。

斉藤 そういえば、小池栄子も坂田（亘）にずっと「タマアゴの正体は誰なの？」って聞いてたけど教えてもらえなくて、大会終了後に「高田さんだよ」って電話で教えたら、感激して泣いちゃったみたいだし。

――元Uインターの鈴木（健）さんもその話を電話で聞いて、焼き鳥を焼きながら号泣したみたいで（笑）。

八木 なんか、今日は『ハッスル』いい話トーク、だね（笑）。

斉藤 エスペランサーは、じつはPRIDEも救ってるんですよ。フジショック後のDSE初のビッグマッチだったから、あのサプライズで「DSEは死なない！」っていうムードが高まって、ファンにも希望を与えたわけですから。

八木 そんな大会なのに小川は前座でカイヤと組んでるのが凄い（笑）。

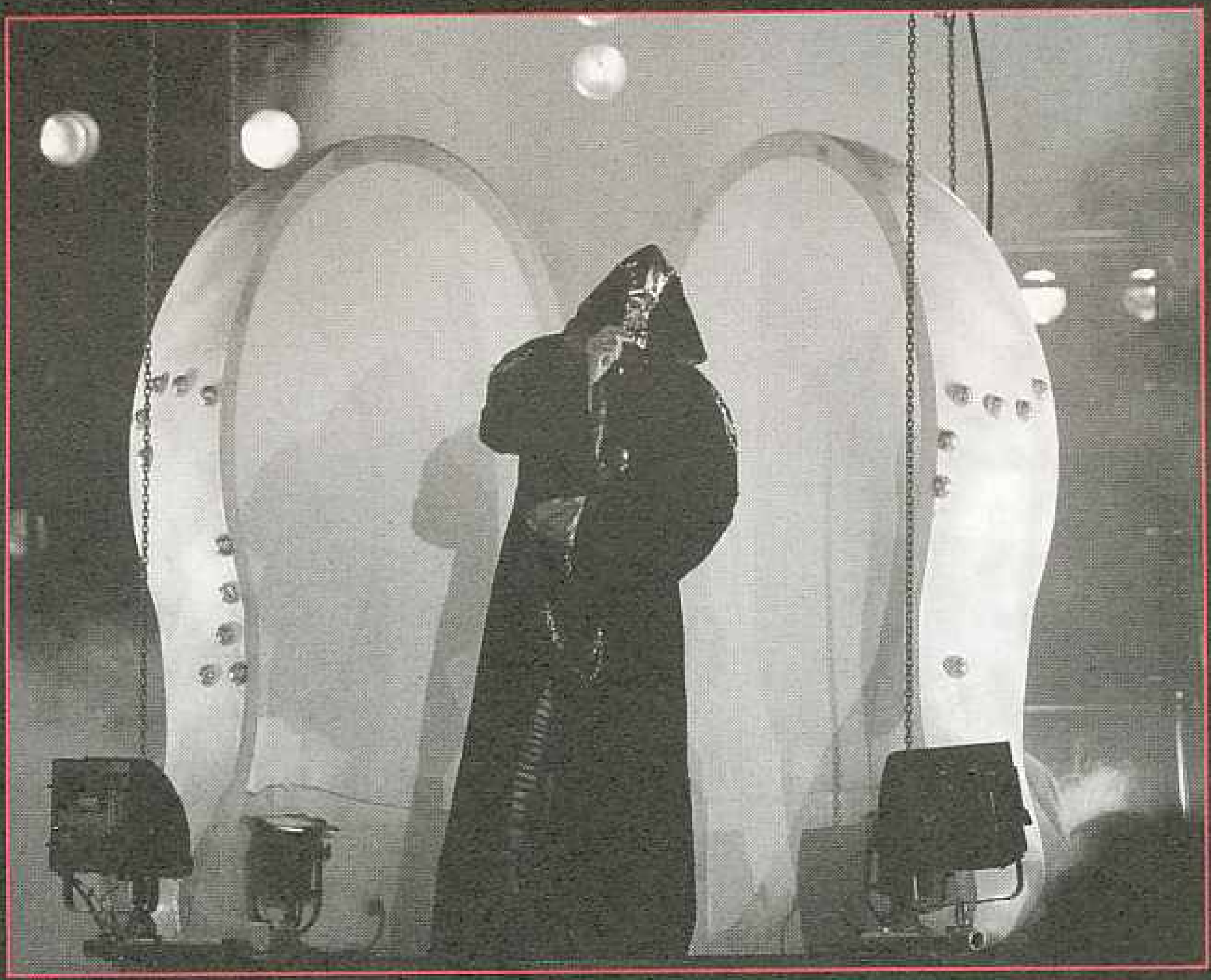
斉藤 ホントに（笑）。小川は翌年に『ハッスル』を去ってしまいますね。

X 『ハッスル』の失速は、そこが原因じゃないですか？ 小川さんを許容できないって部分で。小川さんは世間への窓でしたから。そこがなくなれば内に入っていくしかない。

斉藤 自分は、小川の成長物語として『ハッスル』を観ていたところもあるんですね。格闘プロレスの象徴みたいな人がプロレス界を変えるべく立ち上がって、そしてエンタメプロレスを学習していくという。

――ただ、「ハッスル軍キャプテンは必ずおかしくなっちゃう」っていう話もあって。

斉藤 芸達者の高田総統と向かい合わなければいけないツラさですよね。





06年6月、フジテレビショックによる危機を救ったのはまさかの高田延彦！ ザ・エスペランサー登場の男気にファン、関係者も一様に涙した最高すぎるシーンだ。写真左は小川の"セレブ小川"。銭ゲバモード全開のキャラは最高だったが、このあと『ハッスル』を離脱。7月の『ハッスル』消滅説が本当なら一番戻ってきてほしい男だが……。

X イベントが続くと、だんだん高田延彦一座みたいになるじゃないですか？ 組織としては仮想敵がいるとやりやすくなるから、小川さんにはそういう風当たりもあったんでしょうね。

斉藤 打ち上げも小川は少し顔を出してサッと帰ったり。そもそも小川はお酒をあまり飲まないし。

X でも、高田さんも小川さんには気を使ってみたいだし。小川さんも気を使って、たまに飲めない酒を飲みにきたりしたみたいですね。

斉藤 あと末期は、練習嫌いの小川が道場にも積極的に顔を出してたんですよね。誰かが「小川さん、左利きだからルチャが合うと思いますよ」みたいなことを言ったことがきっかけでTAJIRIにルチャを習ったらしいですけど。

八木 必死で「なじもう、なじもう」としてたんだねぇ。泣けてくる。

斉藤 もともと『ハッスル』は「小川がいつか高田総統と闘う」って話だったじゃないですか。ところがそのあと妖精さん（小池栄子）の力を借りて坂田がエスペランサーを倒してしまった。そして坂田がとうとう自分を語る姿に、当時凄く違和感を覚えたんですが、いまとなってみれば、「それは小川の役目だろう！」って違和感だったんですね。

八木 ある意味で坂田は小川の代役だったんだけどね。

X でも、『ハッスル』を誰よりも愛してたのは、小川直也だったと思いますよ！

斉藤 ただ、この座談会で自分は小川が好きになりましたよ。最近はテレビとかで「まだハッスルポーズやってんのかよ？」って思ってたけど、ドンドンやっていいですよ！（笑）。

八木 しかし、こうして話すといまの『ハッスル』は連続ドラマみたいだけど、明確な柱がない寄せ鍋みたいな初期もおもしろかったねぇ。

X この頃は長い会議をしてコンセプトを作って、というのを毎大会やってたみたいですし。でも、次第にシステマチックになりますから。ただ『ハッスル』は、「プロレスをぶち壊す」っていう役目を終えた感もあると思うんです。結局、プロレスはブチ壊せなかったけど、逆説的にプロレスの素晴らしさは証明したわけですし。

斉藤 ですね。『ハッスル』以降、プロレスはかなり変わりましたしね。

八木 最近、新日本に観客が戻ってるんでしょ？ でも新日本も『ハッスル』以降を踏まえてるみたいだし。

――スキットを入れたり、『ハッスル』的なテイストを組み込んでますから。

X これは昔、ホリオン・グレイシーが初期UFCの頃に言ってたんですが「いつかホイス（・グレイシー）も負けるときがくる。でも柔術の技術によって倒されるなら、それは柔術の勝利だ」と。それと同じですよ！

斉藤 なるほど（笑）。

八木 『ハッスル』のエッセンスを組み込んだ新日本の両国が満員になってるのは、『ハッスル』の勝利だ、と。DSEの巨額の投資もムダじゃなかったんだ（笑）。……ということはさ、結局のところは「山口日昇は経営が苦手」って話になるんじゃない？

斉藤 だから、それはもっと早く言ってくださいよ！

【09年某月某日／『kamipro』編集部にて収録】

134号へのお便り紹介

辰吉の記事がよかった。まさか『kamipro』に辰吉が。今回の企画にピッタリじゃないでしょうか。でも、やりたいから続けるという選手の気持ちと、ファンの感情の持っていき方が難しいなと思いました。梨元さんじゃないけど、引き際は本当に難しいと思います。
【広島県・匿名希望・自営業・30歳】

D なんだい。タツヨシってボーイのインタビューはそんなに考えさせられるものだったのかい？　オレも読んでみないとな。ん？　ユーはいつリタイアするのかって？　Oh～……、勘弁してくれよお。オレはこの仕事で食をつないでるんだぜぇ。

今成ファミリーの記事がおもしろかった。奥さんと子どもの顔出しOKなんて、意外にも今成さんはビッグハートだなと思いました。最近は結婚してもそれを隠すような選手もいると聞きますが、やっぱり器のデカさが違いますよね！
【東京都・タカタカさん・事務職・19歳】

D 確かにマサカズ・イマナリはグレイトだな。ただ、「最近は～」なんて、ティーンの生意気なガキがよく言ったもんだぜ。ジェントルというのはな、ファミリーを守らないといけないから、いろいろ断る理由もあるんだよ。ま、それが下心で結婚を発表しないっていうんじゃあ、どーしようもないけどな！　アッハッハッハ！



柴田勝頼インタビューがよかった。柴田選手の口から「プロレスラーのスピリッツ」の言葉が聞けて最高です。「プロレスの意識を絶やさないようにしないといけない、それが僕の使命です」という言葉もプロレスファンとしては最高です。
【神奈川県・佐々木学さん・会社員・43歳】

D おっと、プロレスファンってヤツはホントに奇妙だぜ。この前、リキ・フクダってヤツの入場シーンで『パワーホール』が流れただけでエキサイトしてたボーイもいたからな。まったく意味不明だ。



脳梗塞からの生還・高山善廣インタビューが読み応えがありました。私は高山選手と同い年ですので復帰して活躍している姿は励みになります。これからは水を飲んで兆候に気をつけたいです。
【兵庫県・春名義行さん・会社員・42歳】

D タカヤマってヤツはノーコーソクにかかってたのか……。そりゃ、ビッグ・シックだぜ。オレなんか、一番大きいシックでおたふくカゼだからな。あんときは、ホントまいったぜ！　アッハッハッハ！

五味隆典関連の記事がおもしろかった。昔のギラギラしている五味選手が好きでした。ファンにもやさしかったし。いまはあの頃をなんとか取り戻そうとしているのかなあ……。
【神奈川県・大内和彦さん・会社員・35歳】

D タカノリ・ゴミに関しては、オレも心配してるぜ。ごく最近からMMAを見始めたボーイズ&ガールズはタカノリがいかに凄いヤツか知らないだろ？　オレはそういうヤツらにもう一回グレイトなタカノリを見せてやりたいと思ってるんだ。……Oh～、オレってなんてハートフルなんだろうって思うよな、もう（照）。

KGめっちゃかわいい！『kamipro』の変態読者たちは1ページ目のアップに顔を近づけてるはずですよ（私はしてません！）。しかも私の大好物のニラ玉が得意料理なんて……。運命を感じます。これでやっと『ハッスル』ナビゲーターのCHIZURUちゃんを忘れることができそうです。あ、個人的には、ジャクソンのコメント好きですよ。たとえすべっていようと。クククク……（シンヤ・アオキ調）。
【福岡県・神吉保さん・会社員・36歳】

D おおおっと！　ここにもジャクソンファンがいるじゃないか。どうしたってんだい？　最近はなんだか人気が出てきたように感じるのは気のせいじゃないよな！　クックックック。タモツはその調子でジャクソンをずっと応援してくれよ！　……KGはその次でいいからな。

プロレス増刊号へのお便り紹介

楽太郎師匠、凄いです！　プロレスラーの衣食住を面倒見るなんて。ハンパなく大変だと思いますが、それを何年にもわたって、しかも一人や二人じゃないわけでしょ？　ビッグハートすぎです。楽太郎師匠、これからもプロレスを愛してください。
【神奈川県・廣木和宣さん・会社員・44歳】

D ラクちゃんは『笑点』の中のジェントルマンだとばかり思っていたが、こんなビッグハートな一面があったとは……。もうラクちゃんだなんて、そんななれなれしい呼び方はNGだ！　これからはシショーと呼ぶぜ。ユーたちもその心づもりでいろよ！

天山×西村の対談は声を出して笑いました。新日の道場って秘話の宝庫ですね。天山&ワカのツーショットは強烈すぎます。しばらく笑いが止まりませんでした。
【栃木県・稲葉修さん・会社員・35歳】

D いままでテンザンというボーイには親近感を抱いていたんだが、あのワカとかいうドッグにペイントしている姿を見て、正直「負けた」と思ったぜ。テンザン、ユーはトップ・オブ・クレイジーだ!!　コングラッチュレーション！



中邑真輔の変態座談会がおもしろかった。中邑選手のハードコアな変態っぷりは存じていましたが、女子プロレスにも通じているところを見ると、根っからの変態プロレスファンなんだなあと。アントンのスパーリング話は最高！
【東京都・東大貴さん・会社員・31歳】

D この企画でシンスケ・ナカムラの印象が変わったというボーイズ&ガールズが多いようだな。クックックック。ズバリ言って、それは『kamipro』の作戦どおりの反応だ。今回は作戦にはまってもまあ問題ないだろうが、ユーたち、あいつらに騙されないように気をつけろよ!!



ライオネス飛鳥の3万字インタビューが読みごたえありました。ジャガーさんはよきお姉さんなのですね。97年の東スポプロレス大賞で蝶野、小橋と並んでいる平成裁恐猛毒GUREN隊の写真もいい味出してます。
【兵庫県・春名義行さん・会社員・42歳】

D 最近『kamipro』は女子プロに夢中らしいじゃないか。クックック。なぜ笑ったのかって？　オレも夢中だからだ！（怒）。

KG（空手ガール）の記事がよかった。カワイイお宝写真が見れたし、30の質問でいろいろわかっておもしろかったから。
【福井県・大平一さん・無職・31歳】

D KGはなかなかの人気のようだな。ヘンタイな『kamipro』読者たちは、ひさしぶりにガールが載ったんでエキサイトしてるんだろ？　まったく、単純なヤツらだ。そんな顔してると、豚インフルエンザにやられちまうぞ!!

谷津嘉章のインタビューがよかった。WJのことがいろいろわかりやすく話されてますね。長州、永島の勘違いぶりがまた最高です。
【大阪府・奥田敵一さん・会社員・40歳】

D WJというのは「カ、カテエ！」というヤツだな。ハッキリ言って意味はわからないが、編集部の連中はやたらと連発してたな。だからといって「カ、カテエ！」がおもしろいなんて思ったら大間違いだ。そんなもん、ぜんぜんおもしろくないんだよ!!（怒）。クックックック。



ヒャッホー！　ユーたち、この1ヵ月元気だったかい？　オレがいなくて寂しかったというボーイズ&ガールズ、その気持ちわからないでもないぜ！　クックックック。しかしよお、オレはバンドのメンバーともだんだん疎遠になり、さんざんフレンズがいないことをアピールしてきたが、クックック。できたんだよ、フレンズが。この前、公園で一緒に全裸になって大はしゃぎしたんだぜ。え？　捕まるんじゃないかって？　でも、これぞ裸の付き合いってヤツだろ？　アッハッハッハ！

134号 おもしろかった記事 RANKING

NO.1 辰吉丈一郎
NO.2 桜井“マッハ”速人
NO.3 五味隆典特集
NO.4 今成正和ファミリー
NO.5 小見川道大

やっぱりタツヨシがトップにきたかあ。オレは個人的にオミガワを推してたんだけどなあ。しかし、ユーたちがそれを選んだ結果だったら、オレも納得だ。ところで、タカノリ・ゴミの企画は大変なことになってるのかい？　オレはタカノリを応援してるようにしか見えなかったけどよお。人それぞれ考え方があるんだな。ま、そんなタカノリも元気でガンバレよな！

ファンキーでクレイジーなアイツが
読者のメッセージを
Check it out!!

"読者ペイジ" ジャクソン

パンクラス増刊号へのお便り紹介

北岡初のピン表紙！ 嬉しくて何冊も本屋さんで買いました♪ 店員さんに「全部同じものでよろしいですか？」と聞かれ恥ずかしかったです……。
【千葉県・高橋朋子さん・販売員・29歳】

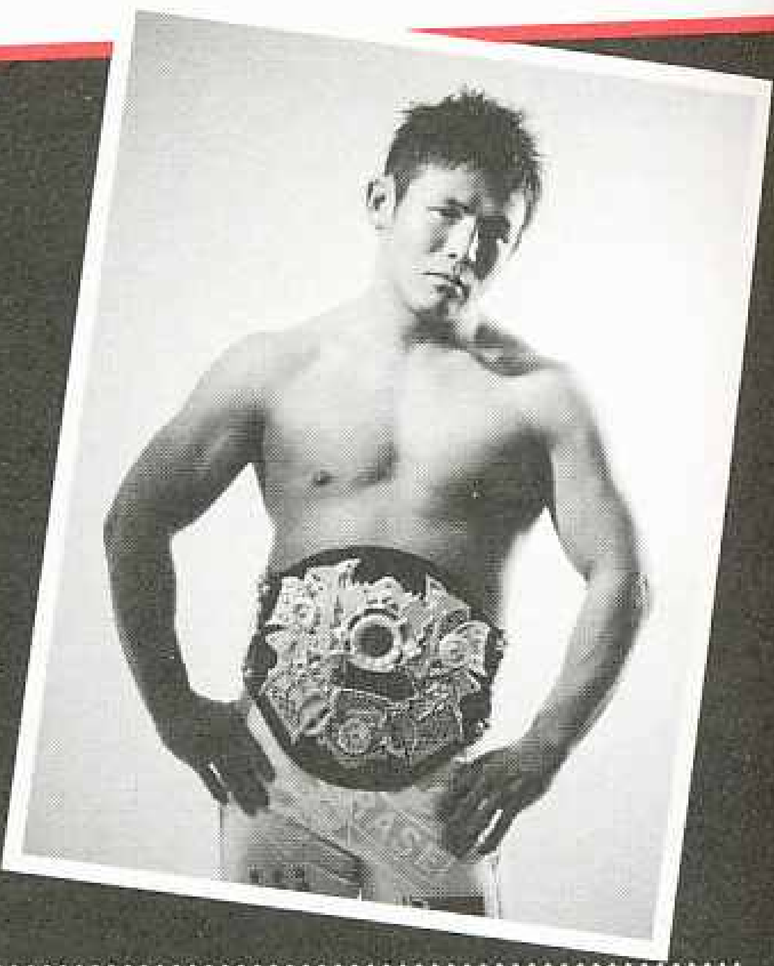
D おっと、ユーはそんなにいっぱい『kamipro』を買ってくれたのかい？ なんというレディなんだよ、まったく。キモ強キャラで大ブレイクしているサトルをそんなにビッグなハートで受け入れるなんて、ユーは〝ヘンタイ〟確定だな！

廣戸総一レフェリーのインタビューが最高でした。まさか、ここまでコクのある人生を送っている方だとは……。思わず4スタンス理論の本、買っちゃいましたよ（中古で）。
【福島県・毒柴さん・流浪の民・37歳】

D ヒロトというボーイの名前はどこかで聞いたことがあるぞ。たしか『リンダリンダ』をシャウトしているグレイテストだろ？ オレにとっちゃー同業者だからライバルってことなんだろうけど、アイツはもう別格でOKさ！

郷野聡寛の「外敵が語るパンクラス」がおもしろかった。内外からパンクラスがわかる爆発男のパンクラス愛に感動した！
【熊本県・杉本信介さん・自営業・32歳】

D ゴーノは最近『kamipro』で大活躍してるじゃないか。技術解説がうまいって？ そんなの、オレだってできるぜ！ 編集部さんよお、ちょっとなんかオレにも仕事くれよお。読者ペイジだけでおとなしくさせておこうだなんて、それにはもったいない人材だと思わないかい？ え？ 思わない？

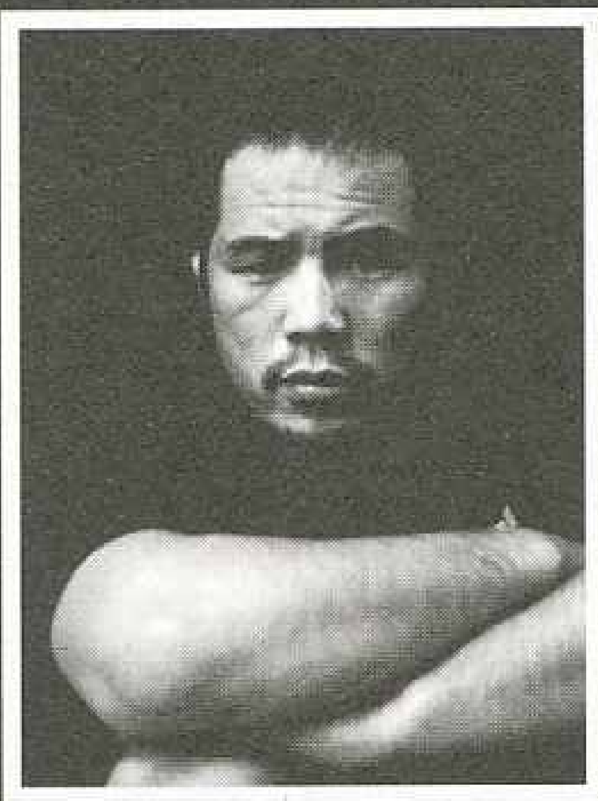


ミノワマンwith柳澤龍志、窪田幸生の「パンクラス同窓会」企画がおもしろかった。団体の昔話と飲み話は最高におもしろい！
【東京都・穂積智彦さん・会社員・41歳】

D 昔話と飲み話がサイコーだなんて、そんなことはないぜ。オレなんか実家に帰ったら、天然アフロパーマでバカにされた昔話と、「早く定職に就け！」という親戚の飲み話でもうウンザリさ。オレの生きたいように生かしてくれたっていいだろう？ ファザー&マザーよお……。

ターザン山本！のインタビューがよかった。インタビューの中で「ハイブリッド肉体改造法」の話が出てましたが、ヤスカクさんが印税だけで500万円もらってた話はビックリしました。
【北海道・安倍正典さん・フリーター・36歳】

D 何ぃ！ ヤスカクってヤツはどこのどいつだい？ いまからでもいいからオレと手を組んで本を出さないかい？ タイトルは『シークレット・オブ・ジャクソン（ジャクソンの秘密）』だ！ どうだい？ 売れそうだろ!? クックックック。



桜井〝マッハ〟速人のインタビューでウエイトについてのつらさを知りました。今回、青木選手は上の階級で試合をしますが、やはりベスト体重でやるのは違うと。今回、青木選手は失うものはありませんが、マッハ選手は自分の階級でもあるうので勝ってあたりまえの立場ですね。
【福島県・紺野春樹さん・会社員・29歳】

D ユーは試合を観る前にハガキを送ってくれたボーイだな。それじゃあ、今度また試合を観た感想を送ってくれよお！ オレの感想は、もっぱら「キモくて強いより、カッコよくて強いほうがいい」だ。アッハッハッハ！ 忘れるなよ！（笑）。

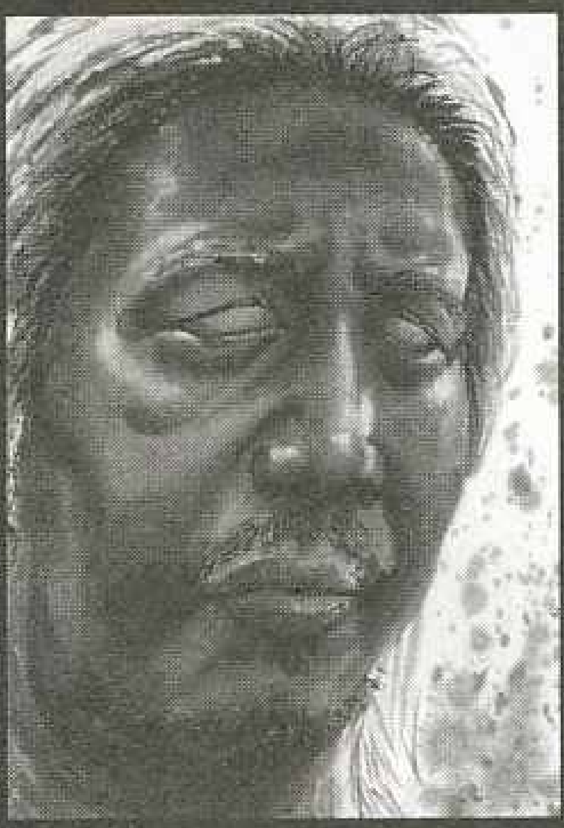
Special MAY号 おもしろかった記事 RANKING

- NO.1 桜井"マッハ"速人
- NO.2 北岡悟
- NO.3 廣戸総一
- NO.4 船木誠勝
- NO.5 郷野聡寛

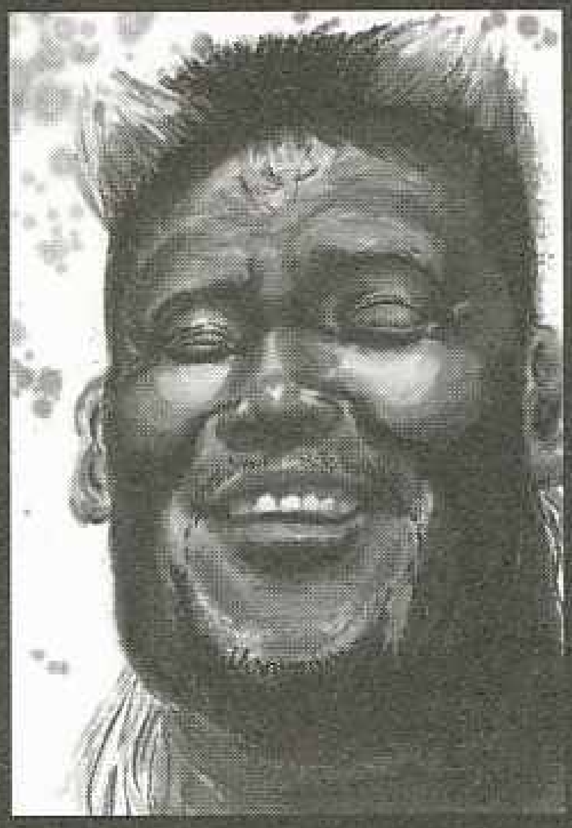
パンクラス特集だなんて、いったいどういう風の吹き回しなんだい？ しかも、サトルの表紙とは恐れ入ったな。しかし、今回のハガキには「サトルがいま一番好きな選手だ」とか書いてるボーイがいたな。いい機会だから、サトル、オレとどっちが人気があるか勝負しないかい？ え？ 負ける試合はしないほうが身のためだって!? ……そ、そうだな。



東京都・サカモトカズヤさん／おっと、これはナイスなKIDだな。いよいよDREAM参戦となっては、カズヤも描かずにはいられなくなったのかい？ クックックック。



大阪府・剣洋人さん／おいおいおい、こりゃまたそっくりなタカヤマがやってきたぜ！ こんな怖い絵を描かれたんじゃあ、ノーフィアーって言うしかないだろうよお。



大阪府・剣洋人さん／なんだ、この薄笑いは!? しかし、ユーはイラストの天才だな！ たまにはオレのイラストも描いてくれよお。

Special SPRING号 おもしろかった記事 RANKING

- NO.1 変態座談会 with中邑真輔
- NO.2 谷津嘉章
- NO.3 天山広吉×西村修
- NO.4 ライオネス飛鳥
- NO.5 若林健治

あいかわらずヘンタイ座談会は人気だな！ ……と思ったら、これはシンスケ・ナカムラもご登場だったのかい？ まあそれも含めて、なんだかプロレス特集号のほうはなんだかゆかいなメンツじゃないか。テンザンとニシムラのジェントルマン対談はオレも交ざりたいと思ったしな！ クックックック。でも、ワカみたいにペイントするのはよしてくれよお。

おハガキ募集!!

おハガキ、どんどん送ってくれよ!
ケータイからでもOKだぜ!!
どんな意見、感想、苦情、抗議、
お悩み、ダメだしでも、ぜーんぜんキャッチするから安心しろって! 待ってるぜ!

こんな情報も24時間どんとこい!
ってヤツだ。
- 譲ってほしいもの
- タレコミ情報
- 選手に対するコメント、試合の感想
- その他、オールOKだ!!

以上、すべてのお便り・
イラストのあて先&メールアドレスは
radical@kamipro.com
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6
パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス kamipro編集部
「誕生日会」係まで。

携帯サイト『kamipro Move』からの
投稿もできるぜ。

チョ、チョ、チョ!
『kamipro』はいったい
何冊出せば
気が済むんだい!?
ユーたちのハガキのせいで
オレの居場所がなくなっちゃうじゃないかよお〜。



団体INDEX

※50音順及びアルファベット順

■アイスリボン
☎048-452-8895
〒335-0003 埼玉県蕨南町2-4-4
http://ice-ribbon.ne07.jp

■アパッチプロレス軍
☎03-3623-2744
〒130-0011 東京都墨田区
石原2-4-4 2F
http://www.apache-pro.com/

■大阪プロレス
☎06-6636-6672
〒556-0002 大阪府浪速区
恵美須東3-4-36 フェスティバルゲート2F
http://www.osaka-prowres.com

■沖縄プロレス
☎098-861-9779
〒900-0014 沖縄県那覇市松尾1-3-1
エスプリコートビル5階
http://okinawa-prowres.jp/

■キングダム・エルガイツ
☎042-376-1639
〒206-8585 東京都多摩市
関戸4-8-18 TOHO聖蹟桜ヶ丘ビル
http://homepage3.nifty.com/z-zone-kingdom/

■健介オフィス
☎048-982-0960
〒342-0041 埼玉県吉川市保1-4-12

■新日本プロレス
☎03-6407-3111
〒153-0042 東京都目黒区
青葉台4丁目4番5号
渋谷スリーサムビルヂング8F
http://www.njpw.co.jp

■シュートボクシング(SB)協会
☎03-3843-1212
〒111-0033 東京都台東区
花川戸2-2-8 ワコー花川戸ハイツ
http://www.shootboxing.org

■掣圏真陰流 興義館
☎050-3599-7872
〒113-0033 東京都文京区
本郷3-6-13 太平ビル2F
http://homepage2.nifty.com/seikendo/

■仙台ガールズ・プロレスリング
みちのくプロレスと同じ
http://plaza.rakuten.co.jp/sendaigirls

■全日本プロレス
☎03-3288-0610
〒102-0073 東京都千代田区
九段北1-5-10 岳南九段ビル6F
http://all-japan.co.jp

■大日本プロレス
☎045-321-1598
〒220-0073 神奈川県横浜市西区
岡野1-13-5 横浜西口サンエースビル7F
http://www.bjw.co.jp

■髙田道場
☎03-5749-5030
〒142-0062 東京都品川区小山3-6-6
ワールドパレス武蔵小山1F&B1
http://www.takada-dojo.com

■日本修斗協会
☎03-5984-3209
〒176-0012 東京都練馬区
豊玉北1-6-13
カエサル江古田B1-101
http://www.alles.or.jp/sshooto/

■ハッスルエンターテインメント
☎03-3221-2431
〒102-0075 千代田区三番町6-1
渡辺ビル2階
http://www.hustlehustle.com/

■バトラーツ
☎048-963-0005
〒343-0046 埼玉県越谷市弥生町9-8
http://www.bat-com8000v.jp

■パンクラス
☎03-5986-2260
〒171-0021 東京都豊島区
西池袋5-26-13 パラスト池袋702号室
http://www.pancrase.co.jp

■フーテン・プロモーション
☎03-5698-5224
〒124-0006 東京都葛飾区堀切
2-41-10
http://fu-ten.jp/

■プロレスリング・ノア
☎03-3527-5311
〒135-0063 東京都江東区有明1-3-25
http://www.noah.co.jp

■マッスル
DDTと同じ。

■みちのくプロレス
☎022-785-7755
〒984-0065 宮城県仙台市
若林区土樋236
愛宕橋マンションファラオ E-08
http://www.michipro.jp

■DRADITION
☎03-3402-2474
〒107-0062 東京都港区
南青山4-2-4
シャトー青山第3-204号室
http://www.muga-world.jp/

■ユニオンプロレス
☎03-5360-6653
〒160-0022東京都新宿区
新宿1-12-3 藤田ビル1F
http://union.ne07.jp

■ワールドビクトリーロード
☎03-3369-2211
〒160-0023 東京都新宿区
西新宿2-6-1 新宿住友ビル35階
http://www.sengoku-official.com/pc/

■DDT
☎03-5360-6653
〒160-0022東京都新宿区
新宿1-12-3 藤田ビル1F
http://www.ddtpro.com

■DEEP事務局
☎052-339-0303
〒460-0071 愛知県名古屋市
中区松原1-2-23 第3栄ビル3F
http://www.deep2001.com

■DREAM(DREAM事務局)
☎03-5775-5065
http://www.dreamofficial.com/

■DRAGON GATE
☎078-333-9797
〒650-0012 兵庫県神戸市中央区
北長狭通7-1-4 サンクチュアリビル
http://www.gaora.co.jp/dragongate

■FEG(K-1事務局)
☎03-3796-2977
〒150-0001 東京都渋谷区
神宮前2-18-22 S&T神宮前ビル3F
http://www.so-net.ne.jp/feg/

■GCM COMMUNICATION
☎03-3556-6201
〒102-0093 東京都千代田区
平河町1-4-3伏見ビル4F
http://www.g-c-m.net

■IGF
☎03-5159-3380
〒104-0061 東京都中央区
銀座1-15-2 銀座スイムビル3F
http://www.igf.jp/

■IWAジャパン
☎03-3352-3366
〒160-0022 東京都新宿区
新宿2-15-13 第2中江ビル402
http://www.iwajapan.jp

■JEWELS
☎03-5458-2536
〒150-0042 東京都渋谷区
宇田川町12-3-1103
株式会社マーヴェラスジャパン

■JWP
☎03-5849-2341
〒121-0052 東京都足立区六木3-6-4
http://www.jwp-produce.com

■KAIENTAI DOJO
☎043-214-6960
〒260-0001 千葉県千葉市
中央区都町3-4-17
http://www.k-dojo.co.jp

■LLPW
☎048-297-9587
〒333-0832 埼玉県川口市
大字神戸162

■NEO
☎044-422-8344
〒222-0002 神奈川県横浜市
港北区師岡町879
http://www.neoladies.com

■U-FILE CAMP
☎044-932-0282
〒214-0014 神奈川県川崎市
多摩区登戸1568
http://www.u-filecamp.com

■U.K.R
☎044-833-4130
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

■U.W.F.スネークピットジャパン
☎03-3337-1889
〒166-0002 東京都杉並区
高円寺北2-15-1-2F
http://www.uwf-snakepit.com

■VALKYRIE
☎03-3556-6201
〒102-0093 東京都千代田区
平河町1-4-3伏見ビル4F
http://valkyrie.livedoor.biz

■WWE JAPAN
☎03-5456-6050
http://wwe.co.jp

■ZERO1
☎03-5730-3966
〒105-0014 東京都港区
芝2-8-13-2F
(株)ファースト オン ステージ
http://www.zero-one-max.com/

■ZST
☎03-5388-0808
〒151-0053 東京都渋谷区
代々木2-23-1
ニューステイトメナ-833号室
http://www.zst.jp

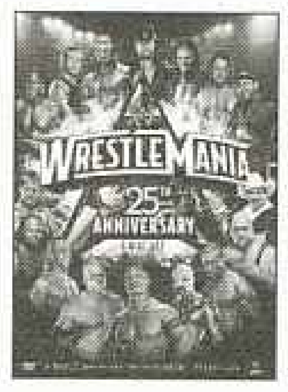
マット界の周辺情報をお届け!!

kamipro Info

DVD

WWE最大の祭典を完全保存せよ!

09年の『レッスルマニア25』が早くもDVDで登場!



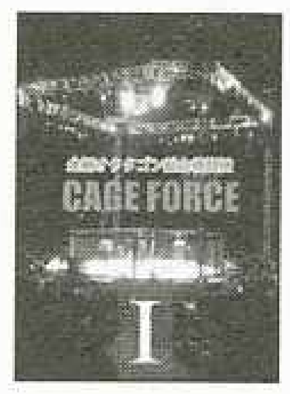
世界最大のエンタメプロレス団体WWEの祭典『レッスルマニア25』09年大会のDVDが早くも登場! この大会では、メインにアンダーテイカーvsショーン・マイケルズという超ド級の好カード。さらにはトリプルH、ランディ・オートン、エッジ、ジョン・シナといった現役スター選手に加え、リッキー・スティムボート、ファンク兄弟の殿堂入りの模様も収録! プロレスファンは必見!

★『WWE レッスルマニア 25』(東宝)
★定価/9,240円 7月8日発売 3枚組

DVD

旗揚げ戦から現在までの名勝負を厳選!!

日本の金網格闘技を目撃せよ! ケージフォースがDVDを発売!!



UFCに通用する選手の発掘を目的の一つとし、金網&オクタゴンを使用する総合格闘技イベント、ケージフォースがDVDを発売! UFCやWECに吉田善行(元ウェルター級王者)、水垣偉弥(バンタム級王者)、中村K太郎、高谷裕之、大沢ケンジといったファイターを送り込んできたケージフォースの名勝負を旗揚げ戦から多数収録! 日本唯一の金網オクタゴン総合格闘技の歴史を振り返れ!

★『金網オクタゴン総合格闘技 CAGE FORCE1』(クエスト)
★定価/5,880円(税込) 6月20日発売 ★収録時間220分

DVD

『戦極』のニューイヤーイベントを完全収録!!

名勝負、名場面が続出! 『戦極の乱2009』がDVDで登場!



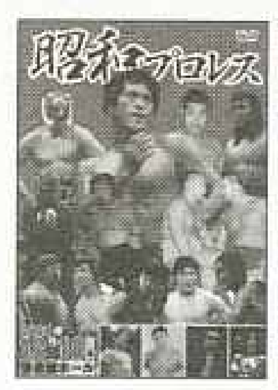
『戦極』勝負のビッグマッチ、『戦極の乱2009』のDVDがリリース! 五味隆典戦での北岡悟の異常なテンションは試合前から勝利者マイクまで目が離せない。ミドル級の名勝負、三崎和雄vsジョルジ・サンチアゴの王者決定戦、吉田秀彦vs菊田早苗の残酷な結末、いまや看板選手と化したキング・モーの勇姿、ド派手な殴り合いを演じたチェ・ムベvsデイブ・ハーマン戦など、熱いドラマが満載!

★『戦極の乱2009』(ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン)
★定価/各5,040円(税込) 6月5日発売 ★収録時間160分

DVD

昭和の往年の名レスラーたちが復活!

オールドファンも必見! 『昭和プロレス』のDVD発売!!



プロレスの全盛期、昭和を熱く盛り上げた名レスラーたちがDVDで復活! 『昭和プロレス』旗揚げ第2戦は、癌から復活した藤原喜明のボディに重爆キックを容赦なく叩き込む初代タイガーマスクとの死闘、そして組長の号泣マイク、さらにヤマハブラザース、栗栖正伸、大仁田厚、ザ・グレート・カブキ、鶴見五郎など、オールドファンならニヤリとする面々、シーンが満載!

★『昭和プロレス』(エースデュース)
★定価/3,990円(税込) 6月19日発売 ★収録時間80分

DVD

新日本プロレスのスキャンダルを再検証!

『新日本事件簿』第3弾!! 事件の当事者が真相を激白!



人気DVDシリーズ『新日本事件簿』の第3弾が登場。今回は、大仁田厚参戦の舞台裏、橋本真也退団の真相、UWFとの業務提携の裏側、維新軍結成の真実、nWo誕生秘話などをテーマに、長州力、蝶野正洋、佐山サトル、大仁田厚、永島勝司、新間寿といった新日本プロレス史の裏側を知るキーマンが証言者として登場し、事件の真相を激白! スキャンダル満載の新日本史を再検証せよ!

★『新日本事件簿 第三章』(ビデオ・パック・ニッポン)
★定価/7,140円(税込) 6月26日発売 ★収録時間180分

CD

"元祖アキバ系女王"が作詞作曲!

長島☆自演乙☆雄一郎の入場曲がマキシシングルで発売!!



K-1 MAXに登場した"コスプレファイター"長島☆自演乙☆雄一郎のために"元祖アキバ系女王"の桃井はるこが作詞作曲した自演乙の入場曲がCDでリリース! 4.21 K-1 MAX福岡大会ではアルバート・クラウスに敗れてしまったものの、TBSでの中継内で最高視聴率を獲得し、その存在感を示した自演乙。そのときの入場曲がこれ。自演乙も大満足のテーマソング。キミも一緒に「乙! 乙! 乙!」。

★『自演乙ソング』桃井はるこ(インディーズ・メーカー)
★定価/1,260円(税込) 6月17日発売

OTHERS

『ノブ・ハヤシ基金』で義援金を募集中

急性骨髄性白血病で闘病中のノブ・ハヤシを支援しよう



名門チャクリキジムからの"逆輸入ファイター"として99年にK-1デビューしたノブ・ハヤシ。だが、現在は故アンディ・フグと同じ急性骨髄性白血病で闘病中だという。治療で貯金も尽き、退院後の治療費もままならないハヤシの状況を見て、友人が『ノブ・ハヤシ支援プロジェクト基金』を設立。集まった義援金は、治療費などに充てられる。義援金の振り込み先は以下のとおり。

★『ノブ・ハヤシ支援プロジェクト基金』
★みずほ銀行 浦和支店 普通口座1265896



ついに開戦！
とことんやれや
DREAM VS『戦極』!!

記念すべきDREAM VS
『戦極』の幕開けは衝撃の結末！
石田光洋VS廣田瑞人の一戦は、
下馬評を覆す廣田の秒殺TKO勝利。
このままDREAMサイドは
黙っていられるのか？
さぁ、闘いの火蓋は切って落とされた！
勝つまでやれや!!

vsDREAM対抗戦に激勝！
『戦極』の“リアル”を見せつけた!!

「俺はこのまま勝ち逃げする気はないですよ」

戦慄の破拳（パグ）

廣田瑞人

左フックに続き、右ストレートが石田を捕らえた瞬間、場内には悲鳴が——!!
『戦極』の代表として、見事にDREAMを打ち砕いた廣田。
拳一つで成り上がろうとする“殴り者”がこの一戦に懸けた思い、そしてその半生を激語り！

聞き手／鈴木佑　試合写真／乾晋也

——いやぁ、見事なＴＫＯ勝利でした！　石田戦を振り返っていかがですか？

廣田　ホント、気持ちよかったですね！　下馬評を覆してやりましたよ（ニヤリ）。

——石田選手有利の声が多かったですもんね。

廣田　やっぱり向こうが格上っていうか、俺がかませ犬的な感じでしたからね。あるサイトでこの試合の勝敗予想が載ってて、俺の勝つ確率が19パーセントって書いてあったってジム生に言われたんですけど、「クッソー、なめんなよ！」って気合いが入りましたね。しかも、長崎の実家の親父まで「どうせ勝てねえだろ」みたいに言ってたんですよ。まぁ、「ざまぁみろ！」って感じですね（笑）。

——狙いすました左フックが炸裂して。

廣田　絶対に当ててやろうと思ってましたよ。こっちから大きく踏み込んでかました感じですね。まぁ、でも俺も石田選手のタックルを一回くらいもらうかなって思ってたんですよ。でも、おそらく入れなかったんじゃないですかね。

——右手に包帯を巻いてますけどケガの具合は？

廣田　打撲です。いままでにも拳は3回骨折してますし、パンチャーの持病みたいなもんですね。まぁ、拳を痛めるくらいに手応えもあったんで。

——今回の一戦は『戦極』vsＤＲＥＡＭという図式になったわけですけど、意識する部分はありました？

廣田　それはやっぱりありましたよ。看板を背負うって言ったらおこがましいですけど、もし負けたらもう二度と『戦極』には上がれないと思ってましたから。もっと言っちゃうと、この試合に負けたら引退も考えてましたし。

——そこまでの覚悟だったんですか⁉

廣田　この正念場をものにできないなら、しょせんその程度の男だなって。この先、そんなんじゃ格闘技で食っていけないだろうって思ってましたから。まぁ今回は勝てたんで、また道が開けたなって感じです。

——試合後には北岡悟選手が保持する『戦極』ライト級王座への挑戦を表明しましたが、横田（一則）選手も挑戦をアピールしてますね。

廣田　俺は横田さんには判定で負けてますけど、今回は試合のインパクトで俺のほうが挑戦者としてふさわしいんじゃないかって思ってます。Ｓ４で北岡選手とやってないのは俺だけですし。今回は横田さんに挑戦権を譲ってもらうかたちで俺がタイトルを獲って、その初防衛戦の相手として横田さんにはお願いしますって感じですかね（笑）。



——王者である北岡さんのイメージは？

廣田　北岡選手の試合って、相手は北岡選手がどういう攻撃を仕掛けてくるかわかっていても、関節を取られちゃってると思うんですよね。そういう意味じゃ相当強いんだろうなって。俺なら北岡選手には身体に触れさせせないように闘います。スタンドvsグラウンドのわかりやすい試合になるんじゃないですかね。

——とりあえず照準はベルトだ、と。でも、石田選手に勝ったことで、このあとの『戦極』vs.ＤＲＥＡＭの展開にも注目が集まると思うんですよ。

廣田　いまは個人的にはとくに意識してないですね。まぁ、でもオファーがあれば

北岡悟のライト級王座に向けて、いざ!!



っと言っちゃうと、この試合に負けたら引退も考えてましたし。

廣田 いまは個人的にはとくに意識してないですね。まぁ、でもオファーがあれば

やるしかないとは思いますよ、このまま勝ち逃げする気はないですから。青木（真也）さんにしろ川尻（達也）さんにしろ俺より格上ですけど、今回の石田戦みたいに「やってみないとわからないですよ」って言いたいですね（ニヤリ）。そもそも俺は有名になるために総合をやってるんで、強くて名のある選手と試合するのはその近道になりますし。

――なるほど。さて、廣田さんは今回が『kamipro』初登場なのでその半生についても聞いていきたいんですが、もともとスポーツ少年だったんですよね？

廣田　そうですね、勉強は大嫌いで体育だけは「5」っていうタイプでした。小学校のときは陸上部だったんですけど、短距離も長距離も学校で一番速かったですね。

――小学校の頃って運動神経がいいとそれだけで人気者になりますよね。

廣田　俺もガキ大将みたいな感じで目立ってたと思いますよ。あの頃はバレンタインチョコもそれなりにもらえてましたし。俺の黄金時代でしたね（笑）。

――そこは過去形なんですね（笑）。あと意外なところでは相撲もやってたとか？

廣田　当時、学校の砂場とかで相撲を取ると誰にも負けなかったんですよ。で、たまたまウチの近くに相撲を教えてるところがあったんで通い始めたんです。両国国技館で開催されたわんぱく相撲の全国大会にも2回出ましたね。やっぱり相撲を経験したことがいまの体幹や足腰の強さにつながってると思います。

――好きな力士はいました？

廣田　千代の富士が好きでしたね。それと、いま高校の後輩が尾車部屋にいるんですよ。北園っていう名前なんですけど、もうちょっとで十両に上がるんで頑張ってほしいですね。あと、相撲の役に立てばいいと思って柔道の町道場にも通ってました。

――本当にスポーツ漬けだったんですね。

廣田　だから勉強する暇なんかなかったんですよ。あ、あと水泳もやってました。体育のときに一人で勝手に1キロ泳いだりして。で、中学入ってからはサッカーにハマったんですよ。ぶっちゃけ、相撲やっててもモテないからっていうのもあったんですけど。

――ちょっと不純な動機もありつつ（笑）。



［5.10 修斗伝承 ROAD TO 20th ANNIVERSARY FINAL］
東京・JCBホール
○廣田瑞人 vs 石田光洋×
（1R 1分33秒 TKO）

石田は左ハイ、左ローで牽制。これに廣田はひるむことなく、にじり寄るようにプレッシャーをかけていく。そして廣田はサークリングで右に回る石田との距離を一気に詰めると、強烈な左フックから右ストレートを炸裂！　ダウンした石田をパウンドで追撃してTKO、完勝といっていい内容で勝負を制した。

廣田　もちろん、真面目に練習もしてましたけどね。一応、市内の代表選抜にも入ってましたし。サンフレッチェ広島のユース代表の選考を受けて、最終審査まで残ったこともありました。で、サッカーの特待生扱いで福岡の高校に進むんですけど……あの、じつは俺、高校は3つ行ってるんですよ。

――え？　どういうことですか？

廣田　まず最初の高校は、サッカー部の監督とソリがまったく合わなくて。俺がけっこう自分の意見を言っちゃうタイプっていうのもあるんですけど。それで親に電話して「ちょっと殴っていいか？」って相談して（笑）。

――それはまた物騒な（笑）。

廣田　で、親に「そういうことするなら辞めなさい」って言われたんで、高2の二学期で部活を辞めて、同時に学校も辞めたんです。次は地元の定時制の高校に、昼間はスポーツ用品店で働きながら通って。で、当時あまり運動してなかったのと、ストレス発散がてらにボクシングジムへ通い始めるんですけど、そこに指導に来てたある高校のボクシング部の監督に「本格的にウチの学校でやらないか？」って誘われたんです。それでまた特待生みたいなかたちでその高校に編入したんですけど。

――ボクシングの素質を見出されてスカウトされた、と。

廣田　まあ、そんな感じですね。当時、俺は18歳だったんですけど、高2として編入したんでクラスメイトより一つ年が上だったんですね。で、その学校にはもともと友だちが通ってたんですけど、休み時間になると1学年下の俺のクラスまで遊びに来るんですよ。そうするとクラス中がシーンってなっちゃって。

――ちょっと別格みたいな感じで（笑）。けっこう廣田さんはやんちゃでした？

廣田　いや、ケンカとかは小学校のときにちょこっとしたくらいですよ。「おまえ、どこ中だ？」みたいなのはなかったです（笑）。まぁ、力が強かったんで一目は置かれてたというか、そもそもケンカを売られなかったですね。

――それ以前に決着がついてた、と（笑）。ボクシングもけっこういいところまで？

廣田　始めて4ヵ月くらいでインターハイに出場しました。その頃に総合に興味を持ち始めたんです。PRIDEのDVDを観て（ヴァンダレイ・）シウバとかにハマって。俺、ボクシングでは攻め込みすぎて反則負けになったりとかしてたんですけど、相手がダウンしても殴り続けるパウンドを見たときに、「俺にふさわしいのはこれだ！」って思ったんです。

――ボクシングよりこっちだ、と。

廣田　あと、PRIDEとかってリングサイドに芸能人が映るじゃないですか？　ああいうのを観て、俺もそのくらい注目される中で闘ってみたいなって。高校を卒業してからは実家の外壁工事の会社を手伝ってたんですけど、やっぱり本腰入れて総合やりたいと思って上京したんです。

――ガッツマン修斗道場を選んだ理由は修斗好きだったから？

廣田　いや、上京したときにたまたま転がり込んだ友だちの家から近かったからです。当時は修斗のことはあんまり知らなかったんですよ。よく買ってたファッション雑誌に載ってたマッハさんや佐藤ルミナさんを知ってたくらいで。

――夢を抱いて総合の世界に足を踏み入



『戦極』ライト級サムライ4人衆、S4見参！　廣田は北岡、横田、光岡と一くくりにされることについて「俺は気にしてないです。盛り上がってくれればなんでもいいかなって思います」と大人の対応。ライト級王座を獲得して、この中から一歩抜け出すか？

お金を稼いで女にモテるためにも
名のある選手と闘って有名になりたい

れたわけですけど、現実はどうでした?

廣田　いや〜、自分は思ったより弱いんだなって痛感しましたね。ヒョロっとした人にも極められまくって。その頃にマッハさんとも練習させてもらったんですけど、ボロ雑巾みたいにされましたよ。でも、辞めようとかは全然思わなかったですね。とにかく俺はパウンド打つまでは辞められないって。アマ修斗はパウンド禁止だったんでよけいにそう思いましたね。

―パウンドへのこだわりが凄いですね(笑)。初代シューターである桜田直樹会長の熱血指導はどうでした?

廣田　とにかく厳しい方ですよ。気持ちの部分で相当鍛えてもらったと思います。もともとあった反骨精神がさらに大きくなったっていうか。

―桜田さんは「廣田は練習もサボらないし意外と真面目」って言ってましたけど。

廣田　そうですか、自分でもそう思います(笑)。もともとは飽きっぽかったんですけどね。どんなスポーツもある程度までいっちゃうと途中で辞めてますし。でも総合はなんだかんだで7年になるのに飽きずに続いてますね。最近になってようやく芽が出始めたというか。

―でも、修斗では新人王を獲って、最初から順風満帆に見えましたけど?

廣田　確かに05年にプロデビューして連勝してた頃は「やっぱり俺ってつええな」って天狗になってましたけど、そのあとに中蔵(隆志)戦、天突(頑丈)戦と連敗して、そこでプロとして初めて大きな壁にブチあたりましたね。そんなときにちょうどケージフォースの話をもらったんで参戦したんですけど。

―リングと比べて金網の感触は?

廣田　圧迫感は感じましたけど、俺には向いてるなって思いました。金網に相手を追い詰めればパウンドも打ちやすいんで。

―そしてケージフォースのライト級王者になって『戦極』の大舞台に参戦するわけですが。

廣田　やっぱりでかい会場でやるのは気持ちいいですよ。緊張しますけど、それよりもあんな大観衆の前で試合できるんだから魅せる闘いをしないとって思いますね。やっぱり判定狙いとか無難な闘い方じゃ、たとえ勝っても人気は出ないと思ってるんで。常にパンチで仕留めるのが俺の理想のスタイルです。わかりやすい勝ち方じゃないと、親父も試合がおもしろくねえって言いますしね(笑)。



ひろた・みずと■1981年5月5日、長崎県出身。05年2月プロデビュー。同年9月に修斗ウェルター級新人王となる。08年4月、ケージフォースライト級王座を獲得。同年8月に『戦極』ライト級トーナメント参戦、1回戦で強豪ライアン・シュルツを撃破するも2回戦では横田一則に判定負け。ガッツマン修斗道場所属。171cm、70kg

―父親の意見を参考にする、と(笑)。

廣田　いまって、北岡選手や青木選手みたいな寝技の人が脚光を浴びてるじゃないですか? そこに俺はジェラシーを感じるんですよ、寝技の時代にしたくないっていうか。俺はやっぱりシウバやミルコ(・クロコップ)に惹かれたクチなんで。

―試合スタイルに強いこだわりがあるんですね。ちょっと話は変わって廣田さんのプライベートのことも聞きたいんですけど、オフは何をしてすごしてますか?

廣田　東京はあまり仲のいい友だちがいないんで、そんなに遊んだりはしないですね。地元に帰ったり、地元の友だちがこっちに来たら羽を伸ばす感じです。お姉ちゃんがいるところに飲みに行ったり。

―あ、そういうところにも(笑)。

廣田　キャバクラとか全然行きますよ、女の子好きですし(笑)。やっぱりそういう息抜きは大事ですから。

―意外ですね〜。S4のほかの3選手はマイクアピールなんかを聞いてるとコミカルな一面も感じるんですけど、廣田さんは真面目というかストイックなのかなって勝手に思ってました。

廣田　あ、そのイメージのほうがいいですかね(笑)。でも、高校卒業した頃はナンパばっかりしてましたよ。土曜の夜に女の子がナンパ待ちしてる公園に車で行って。

―ちなみに東京でのナンパ活動は?

廣田　東京は……冷たいですね、全然相手にされないです。で、こっちが追いかけるばかりじゃつらいんで、もっと格闘技で有名になって逆に声かけられるようになりたいですね。仲間もそこを期待してるみたいで「頼むぜ」みたいなメールとかもらいますよ。やっぱりモテるには強くなって目立たないと!(力強く)。

―目立つという意味では髪型にもこだわりを感じますね。

廣田　もはや試合のたびに変えなきゃ気が収まらないんですよね。友だちがスタイリストなんで毎回相談して。今回はサムライブルーらしいです。

―赤コーナーで青が映えてました(笑)。あとはタトゥーも個性的ですよね。いつ入れたんですか?

廣田　上京する1年前だから20歳のときですね。単純にファッションとして入れたいなと思って。でも竜とか虎とかありきたりのじゃなく変わったのを入れたかったんで、ウチで飼ってたパグにしたんです。リキって名前なんですけど。パグって、ラテン語で拳を意味する言葉(パグナス)が由来らしいんですよ。だからちょうどいいなって思いましたね。まあ、これはあとで知ったんですけど(笑)。

―なるほど(笑)。では最後に今後ますます活躍が期待される廣田さんに、女性ファンに向けて自分のチャームポイントをアピールしてもらいましょう!

廣田　う〜ん、やっぱり毎回変える髪型とアグレッシブなファイトスタイルですかね。あとは見た目よりも怖くないよってことを声を大にして言いたいです! とりあえず、今回の試合に勝ったことで注目も集まりましたし、もっと有名になってお金を稼いで女にモテたいですね。キャーキャー言われたいです。

―まだまだ成り上がってやる、と。

廣田　俺、『戦極』で一番ハングリーだと思うんですよ。それに絶対に一番強いと思ってるんで。これからもどんどん上を食っていきますよ!

【09年5月12日/都内・ガッツマン修斗道場にて収録】

選手、関係者が観たDREAMvs『戦極』開戦!!

廣田瑞人vs石田光洋 証言集

勝者と敗者のコントラストが残酷なほど鮮明に浮き彫りとなった二大メジャーの初遭遇。この一戦について、DREAM&『戦極』の関係者、選手に直撃！

構成／鈴木佑



『戦極』広報

國保尊弘

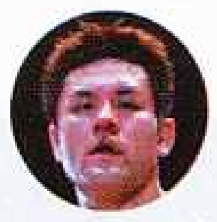
今回の廣田選手の勝利は予想どおりでしたね。石田選手はPRIDEやDREAMで活躍してきて知名度は廣田選手よりも上だったと思いますが、プロとしての実力は廣田選手のほうが上だと思っていました。石田選手が勝つとしたら石田選手らしい闘い方しかないと思っていましたが、結果的には打撃で勝負してきましたから完勝ですね。今回の試合に関してはいえば、あれが現実です。あの試合展開では何回やっても同じ結果になるでしょうね。この号が発売される頃には正式発表できていると思うのですが、8月の北岡選手のタイトルマッチの挑戦者は廣田選手になると思います。今後も『戦極』とDREAMの対抗戦を期待される方も多いと思いますが、いまのところ次の予定はないですね。



グラバカのポジティブ王

横田一則

いや～、廣田くん、やってくれたなぁの一言ですね。石田選手は五味戦と同じような負けのパターンというか、自分の持ち味であるタックルを出せなかったのが痛かったですね。僕は廣田くんと実際に闘ってますけど、とにかく気持ちが強い選手なんですよ。実際に今回も石田選手に蹴られてもドンドン前に出てプレッシャーをかけてましたし。とにかく『戦極』代表として勝ってくれたのは凄く気分がいいですね。僕もvsDREAMは気にはなりますけど、まずは8月の北岡選手のライト級王座挑戦が目標です。でも廣田くんも名乗りを挙げたんですよね？　まぁ、あとは主催者にお任せします。でも、これで廣田くんが挑戦者になったら正直ちょっと複雑ですね……。いや～、やってくれたなぁ。



グラバカのボス

菊田早苗

石田選手はこれまで強い選手にも勝ってきてる選手なんで、『戦極』的には廣田選手の勝利はよかったですよね。『戦極』は実績は凄い人が多いんですけど、知名度的にわからない選手が多いっていうイメージがあると思うんで、今回KOでスパッと勝ったんで『戦極』のレベルとか選手層の厚さが証明できたってところもあったんじゃないですかね。まあでも、今回は二人とも修斗出身で修斗のリングってことで実現したと思うんですけど、政治的にはDREAMvs『戦極』っていう流れが続くかどうかっていうのは難しいところでしょうね。自分もDREAMでいえば桜庭さんとか田村さんという名前が出てくると思うんですけど……どうなんですかね？（苦笑）



S4の熱愛プリンス

光岡映二

石田選手はどうしてタックルにいかなかったんですかね？　僕も経験がありますが、タックルだけで試合が終わるっていうのは葛藤があるので、ちょっと迷いがあったのかもしれませんね。打撃だと廣田選手に分がありますし、そこに付き合ってしまった感じがしました。逆に廣田選手は自分の闘いができたんじゃないですか。僕は純粋にこの試合を楽しみにしていたので、『戦極』vsDREAMの対抗戦という意識では観ていませんでした。僕も『戦極』が好きだし、DREAMにも内容で負けているとは思っていないので、もし修斗のリングで再度DREAMとの対抗戦があるなら準備はできています。



『戦極』ライト級王者

北岡悟

廣田選手の試合でしたね。おそらくは石田さんの中でいままでのスタイルにいろいろプラスしたいと思っていたんでしょう。そこにいつもどおりの廣田選手がいいかたちで当たった、と。僕は石田さんがテイクダウンして、しっかり勝つと予想してたんですけど。（S4の中では廣田選手とだけ対戦していないが）僕にたどり着くことすらできなかった人ですよね？　でも、廣田選手は『戦極』ライト級トーナメント後の2試合はいい相手といい試合をやっているんで、機運としては悪くないと思います。廣田選手は『戦極』で注目されるようになって、磨かれてる部分もあるんじゃないですか。ただ、そういう部分でも僕はゴシゴシに磨かれてるんで、雲泥の差だと思いますけどね。



DREAMイベントプロデューサー

笹原圭一

結果は無念ですけど、DREAMvs『戦極』みたいなお互いの看板を背負った闘いはやっぱり煽りやすいですよね。ただ内容で言うと、石田選手は一回もタックルにいけなかったじゃないですか。らしさを出す前に負けてしまったのは凄く残念です。その点、この試合は廣田選手のほうがおもいっきり闘えた試合だったと思うんですよ。名前でいうと全然石田くんのほうがビッグネームなので、廣田選手は『戦極』の看板うんぬんの前に「俺よりビッグネームを食ってやろう」という感覚があったと思います。その差が出た気がしましたね。でも本当にこういう対抗戦というのは凄く日本的な感じがして、興行的にはわかりやすくてよかったですね。



DEEP代表

佐伯繁

オレはこの試合をDREAMvs『戦極』の対抗戦として見てなかったなあ。だって二人ともベースは修斗だし、修斗での試合のほうが全然多いじゃん。だからあれは修斗の試合だと思ったね。そういえば昔はうちで修斗vsパンクラスやってたね。あれがDREAMvs『戦極』というのは周りがこじつけてる感じはするよね。まあそのほうが盛り上がるからいいけど。対抗戦って言うんなら、やっぱり青木vs北岡だったらおもしろいね！　ただ、今回の試合を世間が対抗戦として見てるんだったら、石田くんの負けは大きかったかもしれないね。彼がもしゼロから再起したいんだったら、いつでもDEEPでその舞台を用意するよ。



DREAMの大黒柱

青木真也


石田選手の負けは悔しかったですね。DREAMが『戦極』に負けたということよりも、PRIDE消滅から「やれんのか！」、そしてDREAMと同じ道を来てるから。やっぱり川尻選手やマッハ選手、石田選手には誰であろうと負けてほしくないんですよね。彼らと試合になったら、いろいろ言っちゃうんですけどねぇ。ククク。それより五味選手が凄かったなあ。PRIDE武士道の頃の華がありましたね。五味選手と試合ですか？　もしそうなったら俺、バカだからまた言っちゃうんだよなあ。「一昔前のスタイル」「五味狩り」とか。そしてブッ殺されるかもしんない。でも、俺もブッ殺す自信はありますよ。こっちがパンチで失神するか、五味選手を絞め落とすかでしょうね。



石田のチームメイト

川尻達也

悔しい、それだけですね。やっぱりファンはDREAMvs『戦極』って見ますし。試合展開は廣田選手が勝つならあのパターンだろうなって思いました。彼の一番いいところが出たんじゃないですかね。試合前の石田くんはいつもどおりでしたよ、特別緊張してるというわけでもなかったですし。試合後に本人と話してないですね、負けた選手に対してどうこう言うのもあれなんで。僕自身は目先の試合に精一杯ですし、vs『戦極』という意識はないです。いま僕がやるべきことはDREAMのリングを盛り上げることなんで。とにかく今回はずっと同じリングで頑張ってきた仲間、同じジムの仲間が負けたことが本当に悔しいです。



戦極フェザー級GP準決勝進出!

ネコ好き戦士が“猫百烈拳”!!

“ネコ柔道”ついに完成!?

小見川道大

本誌前号で7匹の愛猫と暮らすネコ御殿を公開し、格闘技ファンのみならず猫好きのハートもがっちりキャッチした小見川道大。
5.2『戦極～第八陣～』でのフェザー級GP2回戦ではナム・ファン相手に理想の戦闘スタイル“ネオ柔道”の完成を思わせる内容で完勝!
見事ベスト4へ勝ち上がった小見川に決勝ラウンド、そしてネコの話を聞いたニャー!!

聞き手／阿修羅チョロ　撮影／乾晋也

猫ひろしもビックリ!? これが小見川の"ネコ柔道"だニャー!!





［09.5.2『戦極〜第八陣〜』］
東京・国立代々木競技場第二体育館
◯小見川道大 vs ナム・ファン×
（1R 4分52秒 TKO）

ボクシングのワタナベジムで猛特訓を積んだ小見川は打撃の得意なナム・ファン相手にスタンドでも終始優位に立ち、組んでも柔道のテクニックを活かし相手をコントロール。最後は、まさに"猫百烈拳"といった感じのパンチの連打からパウンド連発で勝利!

――ナム・ファン戦での鮮やかな勝利、おめでとうございました！

小見川　ありがとうございます！

――前号では7匹のネコと住んでいる自宅におじゃまさせてもらいましたが、ネコちゃんから勝利の祝福はありました？

小見川　ありましたね。家に帰ったらみんな喜んでくれたんで。

――それはよかったです。ちなみに、前回の試合の勝利後には、血まみれの鳩をプレゼントされたってことですけど、今回は何か勝利者賞はあったんですか？

小見川　（即座に）今回はトカゲですね。

――それ、絶対に話作ってるでしょう？

小見川　いやいや、ホントにいましたよ、トカゲが。朝起きたら家の中でピクピク伸びてました。「カーッ」つって（笑）。

――死にかけのトカゲをプレゼントされたわけですか（笑）。

小見川　「俺も仕留めてきたよ」って、ちょっと得意げでしたね（笑）。

――それにしても、強豪のナム・ファン相手に危なげない勝利でしたよね。

小見川　そうッスね。ダメージも全然ないし、完勝だったんじゃないですかね。

――紹介映像では小見川さんが掲げる理想の戦闘スタイル"ネオ柔道"がクローズアップされてましたが、今回の勝利で完成の手応えをつかんだんじゃないですか？

小見川　完成にほぼ近い状態だとは思うんですけど、まだ完璧ではないッスね。

――どのへんが足りない感じですか？

小見川　具体的にどこっていうより、自分としては優勝しないと納得できないし、完成しないかなって。内容と結果が出て、はじめて完成と言えるんだと思います。

――決して、ふざけて言うわけじゃないんですけど、試合中の小見川さんの動きを観てると、大好きなネコの動きに近いんじゃないかと感じて、ズバリ言って"ネオ柔道"ではなく"ネコ柔道"なんじゃないかって声も出てたんですよ（笑）。

小見川　それ『kamipro』さんだけじゃないですか、言ってるのは（笑）。

――いやいや、ウチだけじゃないと思います。フィニッシュ間際のパンチのラッシュなんかも、「あれは"猫百烈拳"だ！」って盛り上がりましたし。

小見川　ね、猫百列拳!?

――ダメですかね、猫百列拳。

小見川　いや全然いいッスよ。昨日のパンチのイメージは猫百烈拳でしたから。「ニャニャニャニャニャ〜ッ！」って感じで（笑）。

――よくネコ同士のケンカで高速の引っかき攻撃とか目撃しますけど、小見川さんのパンチとか

スタンドの動きなんかも、ちょっとネコっぽいなって思って。

小見川　ホ、ホントっすか⁉　たぶん、一緒に暮らしてるんで、無意識のうちにネコの動きが刷り込まれた……ような気がするなぁ。まあ、そういうことにしましょう。それ、おもしろいんで（笑）。

――じゃあ、〝ネオ柔道〟ならぬ〝ネコ柔道〟も完成間近って思っていいんですね。

小見川　は、はぁ（笑）。GPで優勝したら完成できるかな、と。そのためには、また〝猫百烈拳〟を磨いておかなきゃ。でも、〝猫百烈拳〟じゃなくて〝柔道猫百烈拳〟でいいんじゃないですか？

――いや、柔道をつけたいのはよくわかるんですけど、それだと凄いんだか凄くないんだか、わかりかねますよ。まあ、むやみに勢いだけは感じますけど（笑）。

小見川　じゃあ、それで頑張ります。

――GP開幕戦後は「俺が負けると思ったヤツ、クソったれ！」と不満を爆発させてましたけど、今回は「クソったれ！」モードではなかったんですか？

小見川　まあ、今回もクソったれモードでしたよ。試合前は「ナム・ファン、クソったれ！」と思ってずっと練習してたし、試合中もそう思って闘ってたんで。

――べつにナム・ファンに何かイヤなことをされたとかじゃなくて、試合前は常に「クソったれ」モードなんですね？

小見川　そんな感じですよ。まあでも、勝ったあとで対戦相手に「クソったれ！」とか言えないじゃないですか（笑）。

――ボコボコに殴られたあげく、「クソったれ！」なんて言われたら、ホントに踏んだり蹴ったりというか（笑）。

小見川　そうッスよね。

――昨日の試合はスタンドで多少ボディにパンチを食らったぐらいで、組んでも寝技でも全局面で圧倒した感じでしたね。

次は誰でもいい。3人もろとも「かかってこい!」って感じです



◯日沖発 vs ロニー・牛若×
（1R 3分09秒 三角絞め）

メインに登場したGP大本命の日沖は1回戦で"スーパー高校生"山田哲也に勝利した牛若と対戦。「男なら打ち合おう」と戦前アピールしていた牛若相手にあっさりとグラウンドに持ち込んだ日沖はグラウンドで牛若をコントロール。最後はマウントから流れるような三角絞め&パウンドで牛若に圧勝!



◯金原正徳 vs ジョン・チャンソン×
（3R終了 判定3-0）

3人残った日本人の先陣を切って登場した金原は"コリアン・ゾンビ"の異名を持つ韓国のチャンソンと激突。試合は何度かテイクダウンに成功した金原が極めを狙うも、チャンソンは逆に下から極めを狙いにいったり蹴り上げで逆襲したりと猛反撃。一進一退の攻防を制した金原がベスト4に進出!



◯マルロン・サンドロ vs ニック・デニス×
（1R 0分19秒 KO）

MMA戦績無敗同士の対決となったパンクラスフェザー級王者のサンドロと、1回戦でパンクラスの川原誠也を下したデニスの一戦。試合はわずか19秒、サンドロが強烈な左フックからのパウンド連打でデニスを秒殺!　サンドロは右足にケガを負いつつも危なげない勝利で決勝ラウンド進出を決めた。

小見川　そう、シャットアウトです！

――そんな感じでしたよね。試合後は「今回のGPに出てる選手の中で一番勝率が悪いのは僕です」とマイクアピールしてましたけど、意外にも昨日勝ってもまだ6勝7敗と負け越しているという。

小見川　そうなんですよ。優勝したら勝ち越しになるんで、優勝しないとなぁ。

――これまでの戦績は70キロ級での闘いがほとんどだったっていうのもあると思うんですけど、開幕戦と今回の2回戦を終えてみて、65キロ級は自分に合ってるって実感してるんじゃないですか？

小見川　それは感じますね。自分の持ち味を活かせるのがこの階級かな、と。

――ここ2試合で覚醒した感の強い小見川さんですが、じつは（桜井）マッハさんと同級生で、もう34歳になるんですよね。

小見川　一緒ですね。

――どうですか、体調的には？

小見川　逆に体調的にはいま上がってる感じなんで。スタミナとかも全然あるし、ボクシングのスパーリングとかやっても6ラウンドぐらいできる感じなんで。体力的には全然余ってますね。

――余ってますか（笑）。でも、GPで優勝するためには一日2試合勝たなきゃいけないわけですが、柔道時代は経験あると思うんですけど、総合では初ですよね。

小見川　総合ではないッスね。初ですね。

――ぶっちゃけ、不安はあります？

小見川　まだ8月まで時間があるんで、一回ガス抜きして強い精神力と身体を作って、誰が相手でもブッ倒しますよ！

――自信満々ですね。GP決勝戦は8月2日で、まだ3ヵ月あるわけですが、3ヵ月って長いと思います？

小見川　いや、すぐじゃないですか。すぐだと思うんですけど、やっぱり一回ガス抜きしないと頭とかも研究を重ねてやってきてパンパンに張りつめてたんで。

――ガス抜きっていうのは具体的には？

小見川　仲間とどっか旅行したりとかそんな感じッスね。温泉でもゆっくり浸かってのんびりしようかなって。

――よけいな心配ですけど、旅行とか行くときはネコはどうするんですか？

小見川　そんときはネコには悪いんですけど、お留守番ってかたちで（笑）。

――さすがに7匹連れて温泉には行けないでしょうからね（笑）。で、今月26日にはDREAMでもフェザーGPの2回戦が行なわれますけど、あまり意識はしてないって言ってましたよね。

小見川　そうッスね。他団体を意識するっていうより、自分は『戦極』っていう舞台を選んで、そこの一番になりたいと思ってトーナメントに出てるんで。

――結果的に日本人3人にパンクラス王者のサンドロ選手が残ったわけですけど、とくにこの選手とやりたいっていうのは



フェザー級GP2回戦は日沖、小見川、金原にパンクラス王者サンドロという日本陣営3人vs外国人という構図となったが終わってみれば日本陣営が全勝という結果に。8.2『戦極～第九陣～』では、この4人のあいだで準決勝&決勝戦が行なわれるが、ミドル級のサンチアゴ、ライト級の北岡に続き、王者となるのは誰だ!?

ないんですよね？

小見川　今回のフェザー級GPが始まるときから、この16人の頂点に立つってことに意味があると思ってるし、俺がなりたいのは『戦極』のチャンピオンなんで、誰とやっても勝たなきゃ意味ないです。

――國保広報も、できれば4選手の総当たり戦が観たいってことでしたけど、どうですか、そのアイデアは？

小見川　いや、やるんだったらいいですよ。目の前の敵をブッ倒すだけなんで。

――開幕前から日沖選手がぶっちぎりの優勝候補と言われてるじゃないですか？

小見川　いや、もうね、日沖選手に限らず残った選手はみんな強いッスから。ベスト4までくると。それに、強いっつっても、俺は強い選手二人倒してるんで。

――倒した二人も優勝候補と言われていましたからね。

小見川　「何人優勝候補がいるんだよ！」って話で（苦笑）。まあ、自分のやってることを出せれば問題ないッスよ。

――金原選手は日沖選手とやりたいと指名をしてましたけど。

小見川　やりたくないんじゃないですか、俺とは（笑）。

――そういうことなんですかね（笑）。

小見川　俺の名前はどっこにも出てこないし。みんな、俺とやりたくないんじゃないですか。

――小見川さんは誰でもいいと？

小見川　気持ち的には3人もろとも「かかってこい！」って感じですね。

――いいですねぇ。

小見川　おもいっきり言っちゃえばそんな感じですよ。「もうめんどくせえから、まとめてこいよ」って。どんな強いヤツだろうと、負ける気しないんで。

ネコちゃんのためにも〝猫百烈拳〟でみんなブッ飛ばしてやりますよ！

MICHIHIRO OMIGAWA

――つい先ほどはベルトを前に撮影をしたわけですが、あらためてあのベルトが似合うのは俺しかいねえって感じですか。

小見川　似合うかなっていうか、似合うでしょ？（キッパリ）。

――はい、似合うと思います（笑）。ベルトを手にするには、あと2勝しなきゃいけないわけですけど、二つ勝ったときが〝ネコ柔道〟の完成のときだと。

小見川　いやいやいや（苦笑）、ネコ柔道は完成しなくてもいいですけど、ネコ柔道が完成するときです！（キッパリ）。

――ネコ柔道って言ってるじゃないですか⁉（笑）。

小見川　あ、間違えた。ネオ柔道ですよ、ネコじゃなくて（笑）。それが完成したら、ベルトも俺の腰に巻かれてる、と。

――そのときはネコちゃんたちも、鳩とかトカゲよりも豪華なプレゼントを持ってきてくれるんじゃないですかね。

小見川　そうッスね。ウチのかわいいネコちゃんたちのためにも〝猫百烈拳〟でみんなブッ飛ばしてやりますよ！

【09年5月3日／都内・某ホテルにて収録】

戦極フェザー級GP準決勝進出の日沖と金原インタビューは『kami-pro.com』でアップ!!





ウェブサイト『kami-pro.com』では小見川とともに決勝ラウンド進出を決めた日沖発と金原正徳にもインタビューを敢行！　試合への意気込みはもちろん、小見川に負けじと日沖が猫好きをアピールすれば、金原も意外なペット話を公開。こちらも必見です！

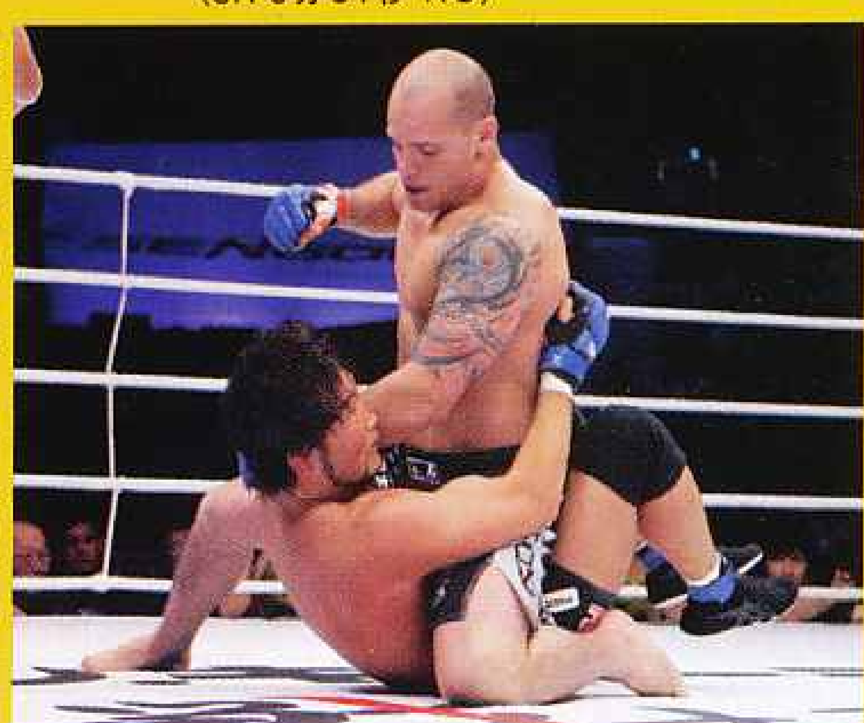
シャキーン！ 5.2『戦極～第八陣～』ダイジェスト

◯横田一則 vs レオ・サントス×
（3R終了 判定2-1）



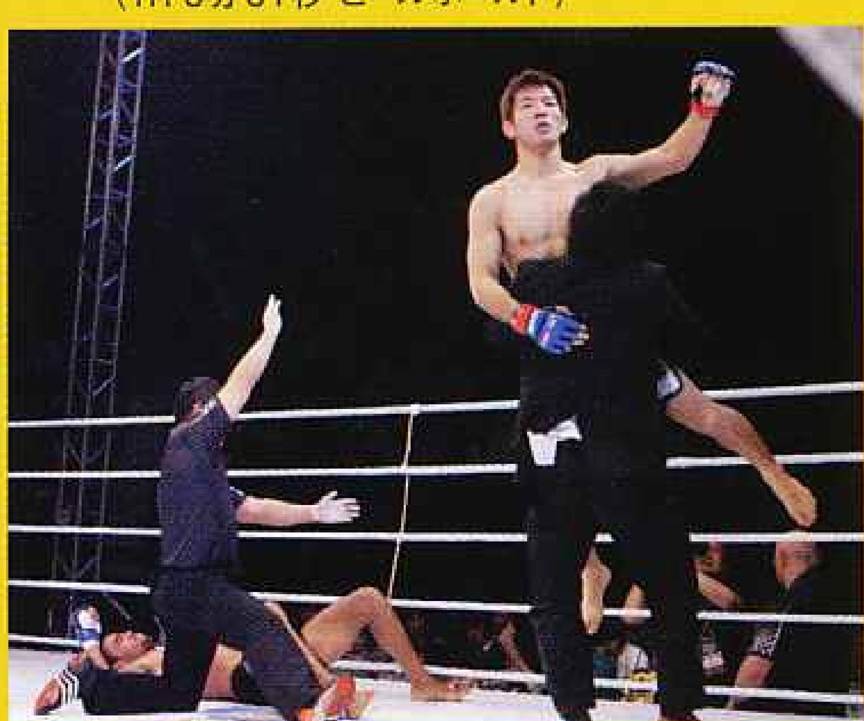
北岡のライト級王座への査定試合的な意味合いを持つ一戦はサントスに横田がスプリット判定で辛勝。試合後、「キミとやりたい」と北岡にアピールした横田だったが……⁉

◯シャンジ・ヒベイロ vs vsKEI山宮×
（3R 0分51秒 KO）



柔術世界王者のヒベイロが杉浦貴戦以来の『戦極』登場。「噛ませ犬にはならない」とアピールしていた山宮だったが、ヒベイロの右フックを食らいまさかのKO負け！

◯瀧本誠 vs マイケル・コスタ×
（1R 3分31秒 ヒールホールド）



ウェルター級に階級を落とした瀧本が『戦極』は二度目の登場となるコスタと激突。試合は足関節の取り合いを制した瀧本が勝利、敗れたコスタは瀧本に聖書をプレゼント！

◯スタニスラブ・ネドコフ vs トラビス・ビュー×
（3R 0分42秒 TKO）



藤田和之にも勝利しているビューとブルガリア出身のネドコフの一戦は金的を食らいまくったビューがパウンド連打で敗戦。試合後は旧友・琴欧洲がネドコフを祝福！

◯毛利昭彦 vs 真騎士×
（1R 4分20秒 反則※サッカーボールキック）



戦極育成選手の真騎士と毛利元就の末裔の『戦極』参戦ということで注目された毛利の一戦は、真騎士が右フックでダウンを奪うもサッカーボールキックで反則負け！

DREAM、ストライクフォースに共闘呼びかけ!
世界的なUFC包囲網が完成か!?

ワジム・フィンケルシュタイン

[M-1グローバル代表]

「大晦日にヒョードルが出場するイベントをDREAMと共同開催したい」



4.29『M-1チャレンジ』日本大会のために来日した、M-1グローバルのワジム代表。しかし、今回は自身がマネージメントする"皇帝"ヒョードル、『アフリクション』のトム・アテンシオ副社長らと一緒に来日とあって、大会視察だけが目的とはとても思えない。そこで早速、ワジム代表にインタビューを申し込むと、DREAMとストライクフォースを巻き込んだ一大プランを考えていることが明らかになった。この夏以降、何かが起こる!?

聞き手／堀江ガンツ

——今回、ワジムさんは『M―1チャレンジ』のために来日されたと思いますが、それ以外にも目的がありましたか？

ワジム　確かに『M―1チャレンジ』だけのためではありません。今回はDREAMとM―1、アフリクションが共催で、ヒョードルに日本で試合をさせよう、という交渉をしにきたことも来日の理由です。

——ヒョードルの試合が日本で観られそうですか！　それはいまM―1とアフリクションが結んでいる協力関係にDREAMも加わってもらうということですか？

ワジム　我々は『やれんのか！』でうまく協力しながらイベントを開催した経験があるので、たとえばそういうスキームもオプションの一つですね。その大会を大晦日に開催できたらと考えていますが、それは今後の交渉次第です。

——『アフリクション』は7月にも大会が予定されていましたが、これは予定どおり開催されるのでしょうか？

ワジム　7月ではなく8月の第一週にずれ込む可能性もありますが、夏には開催しますし、その大会にもヒョードルは出場予定です。

——『アフリクション』はこれまで2大会行なっていて、大会自体の評判はいいですが、収支の面で苦戦しているとも言われています。その点についてはどうですか？

ワジム　確かに、ファイトマネーを払いすぎているきらいはあったかもしれません。しかし、我々がファーストステップとして、UFCと同規模のイベントが生まれたことを世界にアピールするためには、それぐらいの投資が必要だったんです。そしてそれによって、いま『アフリクション』にはヘビー級トップ10の中で5人のファイターが集まっています。

——これまで2大会を行なう中で、UFCからかなりの妨害工作があったらしいですね？

ワジム　はい。UFCからの妨害は常にあります。たとえば前回の大会について言うと、UFCはその一週間前と数日後にわざわざ大きな大会をぶつけてきました。そして、大会当日にはまったく同じ時間にランディ・クートゥアーの試合を無料でスパイクTVで流したり、また最初の大会でも、やはり同日同時刻に無料の試合を流したりと、できるだけ自分たちのパイが流れないようにしているんです。

——ワジムさんは「UFCがなんでも独占しようとするのが、MMAの発展を妨げている」と発言されていましたよね？

ワジム　まったくそのとおりです。UFCは自分のところでモノポリーを確立しようというのがポリシーです。自分のところだけが儲かれば、このスポーツ全体がどうなろうがいいという考えなんです。たとえばDREAMやストライクフォースという組織を我々はパートナーとして見ているわけで、そこがUFCとの違いだと思います。

——DREAMだけでなく、ストライクフォースもパートナーとして考えていますか。

ワジム　まだこれは交渉段階にすぎませんが、たとえば『M―1チャレンジ』で勝ち上がった選手がストライクフォースに出ることに我々はまったく反対しませんし、その逆も同じだと思います。いいファイターというのは、いろんなところで闘う権利があると思います。UFCは排他的ですが、我々はそうじゃない。そこが大きな違いですね。

——選手の貸し借りや交流を考えているわけですね。

ワジム　そのとおりです。『アフリクション』、DREAM、ストライクフォース、UFCのチャンピオン同士が闘う。それこそまさにファンが求めているものだと思います。DREAMについては、すでにある種の協力関係にありますし、ストライクフォースも代表のスコット（・コーカー）は非常にいい人間なので、彼とは一緒に仕事ができると思っています。こういったファンの夢を妨げて、自分のパイだけを守ろうとしているのがUFCなんです。MMAというのは非常に大きな世界で、どこか一つの企業がそのすべてを掌握することは不可能です。UFCはいまのところ、自分のところにある大きなケーキをそのかけらすらほかに渡さないという姿勢でいますが、遅かれ早かれそれを渡さなくてはならないときは来るのです。いま、確かにUFCは繁栄していますが、それは長く続かないでしょう。UFCのオーナーが破産の危機とも言われていますが、そうでなくとも、彼らのやり方では限界がくるのではないでしょうか。

——ヒョードル選手のUFC参戦が実現しないのは、UFCのなんでも

UFCは自分たちのビジネスを失なうことが怖くて他団体との交流ができないんです

独占するという体質が一番のネックになっているわけですか？

ワジム　まったくそのとおりです。我々としては、ヒョードルをUFCに送り込んでも、向こうのチャンピオンがこちらでヒョードルと闘ってもいいという姿勢でいるのに、UFCは自分たちのモノポリーを作ることにこだわり続けている。いまではボクシング界でさえも団体の垣根を越えた闘いや、タイトルマッチが可能なのに、UFCは自分たちのビジネスを失なうのが怖くてそれができないでいるんです。

――UFCのダナ・ホワイト代表はワジムさん側が「ロシアにアリーナを建てろ」だとか「興行権をよこせ」というのが問題だと言っていますが、そういう事実はあるのでしょうか？

ワジム　まったくのデタラメです。確かにダナ・ホワイトとは会いました。それはM−1グローバルという組織ができる前の話です。ヒョードルのUFC参戦を軸にいろんな条件の話し合いをしたのですが、そのときUFCにアリーナを作らせるのではなく「私がロシアにアリーナを建てる」と言ったことはあります。そして「将来的にUFCがそのアリーナで大会を行なってもいい」ということは言いました。それだけです。

――発言がねじ曲げられている、と。

ワジム　彼らはロシアでもビジネスを独占したいのでしょうが、そのやり方は失敗してます。現在ロシアでは『M−1チャレンジ』には8000万人の視聴者がいますが、片やUFCは30万人の視聴者しか観ていない。ここで歴然とした世界的な差が出ているのです。これは日本も同じで、UFCはあくまでも独自で日本進出を考え、日本にあるDREAMなどの団体は潰してしまおうという発想です。だから、なかなか日本に来ることはできない。我々はそうではなく、DREAMと協力してヒョードルの試合を日本で組もうとしているのです。



ディファ有明で日本大会が行なわれた『M-1チャレンジ』は、現在、16カ国が参加して国別対抗戦が行なわれている。これを「MMAのワールドカップ」につなげたいというのがワジム代表の考えだ。

――なるほど。このDREAMやストライクフォースとの協力関係構築の計画は、団体間の横のつながりを強化して、〝UFC包囲網〟的なものを作ろうということでもありますか？

ワジム　まだDREAMやストライクフォースは正式なパートナーとなったわけではなくて、あくまでも交渉段階ではあります。そして、いまの我々の課題というのは、世界中のまだ発掘されていない、しかし潜在能力があるファイターたちを発掘し、チャンスを与えていくことです。その選手たちをDREAMやストライクフォースと協力しながら育てていくことによって、UFC以上の選手層を持つ組織となり、それをベースにUFCと競争ができると思うんです。

――だからこそ、『M−1チャレンジ』のような大会が重要になってくる、と。

ワジム　そのとおりです。UFCというのは、いまでは本当に大規模なビジネスの一つになっています。我々ももちろんお金は稼ぎたいと思っていますが、その前にきちんとした世界的なスポーツ組織を作りたいと考えているんです。UFCは16人程度の選手を選んで、そのファイターたちを一つの家に押し込めて、どれだけビールが飲めるか、どれだけ乱痴気騒ぎをするか、どれだけケンカして、どれだけ仲良くするかという模様を放映して、スターを作ろうとしている。しかし、それはサムライの道ではありません。本当の強いファイターは、なれ合いの中から生まれるものではないのです。

――リアリティショー『TUF（ジ・アルティメット・ファイター）』のことですね（笑）。

ワジム　それに対し、我々がやろうとしているのは、世界中のファイターたちが努力して、勝ち上がっていけるシステムを作ることです。『M−1チャレンジ』は、そういった構想の元で行なわれています。そしてロシアでは、すでに『M−1チャレンジ』の選抜チーム5人の枠に入るために、50人の選手が国内選抜を競う『M−1セレクション』という大会もスタートすることが決まっています。つまりサッカーと同じ構造ですね。地区リーグがあり、そして最後にはワールドカップがある。

――そのワールドカップがヒョードルも出場する『アフリクション』の本戦というわけですか。

ワジム　そうですね。そしてM−1、アフリクションだけでなく、その流れにDREAMも加わってもらうことによって、本当のジャイアントショーを行なうことができるのではないか。そして、それを日本でやれば、かつてのPRIDEのように、さいたまスーパーアリーナで4万人の観客を集めて行なえるのではないかと思います。

――なるほど。そういったジャイアントショーの一環として、まずは今年の大晦日にイベントを共催できないか、ということですか？

ワジム　そういうことです。

――一部では、その大会でヒョードルvsジョシュ・バーネット戦も考えているとうかがいましたが、その可能性はありますか？

ワジム　選択肢の一つではあります。しかし、交渉がすべて済んだわけではなく、次の試合が日本になるのかアメリカになるのかも決まっていないので、公式発表はできませんが、可能性はあります。

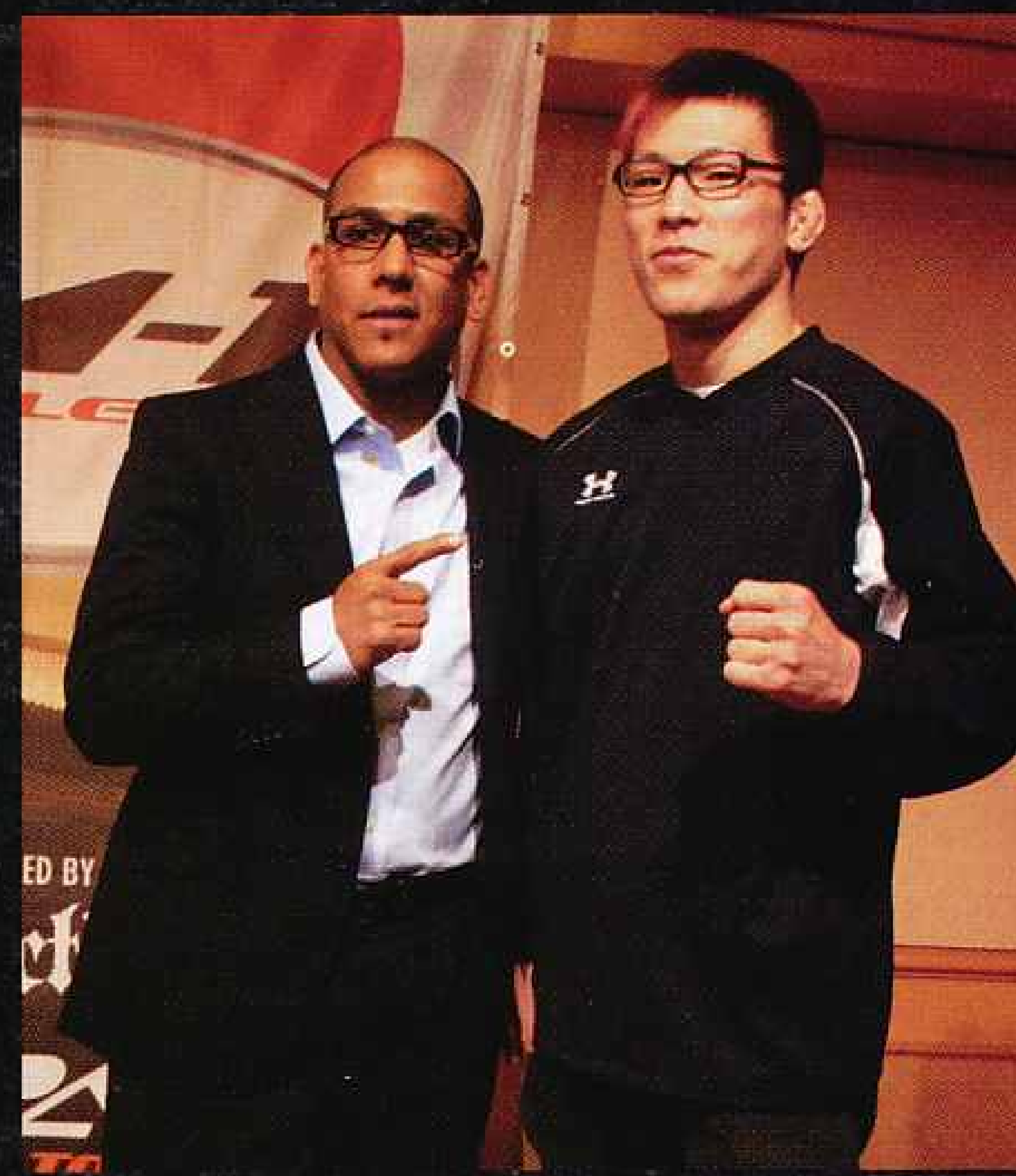
――ヒョードルvsジョシュ・バーネット戦を世界で一番観たいのは日本のファンだと思うので、ぜひ日本で実現してほしいですね。

ワジム　我々もそう願っています。いずれにしてもヒョードルvsジョシュは、夏か大晦日に実現させたいと思っていますから。

――わかりました。では、いずれにしても、ヒョードル選手の試合がまた日本で観られることを期待しています！

ワジム　我々もPRIDEのときから、大晦日にさいたまスーパーアリーナのビッグショーを楽しみにしていました。あのときのPRIDEは世界最高のショーでしたから、またそういったイベントを開催できることを期待しています。

【09年4月28日／都内・某ホテルにて収録】



アフリクション
副社長
トム・アテンシオ
日本大会開催の可能性を語る

格闘技オタクの青木真也が「かっこいいな〜」を連呼して「Tシャツください」と積極的に営業していた、いま最もオシャレな格闘技イベント代表・アフリクションのトム・アテンシオ副社長に日本大会開催の可能性を聞いてみた。

聞き手／坂井ノブ

―単刀直入にお聞きします。今回の来日の目的は日本大会の開催準備ですか?

アテンシオ　そうです。そのためにM−1グローバルや日本の団体としっかり協力していきたいと思っています。よく典型的なアメリカ人は、外国でも自分たちのやり方でなんでもできると思い込む人がいますが、とくに外国で何かをやる場合はその国の文化ややり方をしっかり理解して、地元の人たちと協力しなければいけません。自分は幸運にもいままでいろんな国を旅行して、さまざまな人たちと知り合う機会がありました。いわゆる典型的なアメリカ人ではないんです。こう言うと典型的なアメリカ人を揶揄しているように聞こえるかもしれませんが、そういう意味じゃないんです。

―じゃあ、あなたの言う典型的なアメリカ人というのは?

アテンシオ　何が違うかというと「自分たちだけで、自分流で、どこでも何でもできる」という考え方は私にはまったくないです。

―いまの話をうかがって、自分たちのやり方でなんでもやろうとする人の顔が一人思い浮かんだんですけど……。

アテンシオ　ダナ・ホワイト氏ですか?

―そのとおりです（笑）。

アテンシオ　私はホワイト氏とは対極の人間になりたい。彼とは根本的に物事の進め方が違うと思います。支配者になり、独裁者になるとなんでも自分の思いどおりになると思い込み、いろんな人の気持ちを踏みにじってしまいます。ただ、それは彼だけのせいではないでしょう。強大な権力を握っている期間が長いと人間は誰でもああいうふうになってしまいがちです。どの独裁者もいずれは没落するときがきます。彼にもくるはずです。私はああいうふうにならないように、アフリクションはM−1グローバルやDREAMの人たちと協力しながらやっていきたいです。

―あなたは、2月にUFCが危機ではないかと言ってましたね。財政的な問題がある、と。現在の状況はどうご覧になってますか?

アテンシオ　これはまず言っておきたいんですが、その発言をしたのは私の元ビジネスパートナーでした。さらにその発言の対象はUFCではなく、その兄弟会社にあたるステーションカジノについてです。

アフリクションの今後の戦略とは?

ステーションカジノは実際に破産申請をしましたので、そういう意味であの発言は正しかった。それがUFCにどういう影響を及ぼすかまではわかりません。

―『UFC100』が開催される7月11日に、アフリクションの3回目の大会が開催されるという噂がありましたけど。

アテンシオ　それは単なる噂です。7〜8月のどこかでやりたいです。8月の初めがいいでしょう。なるべく選手に準備の時間を与えたいですから。

―それが日本で開催される可能性もあるわけですか?

アテンシオ　可能性の話をすれば0パーセントではありません。それもあっての来日なんです。何かを一緒にできる可能性がある方々と会談をしました。ただ、申し訳ないですが現時点ではハッキリしたことは言えません。

―ヒョードルは「まだ闘ったことがない世界トップ10レベルの選手と闘いたい」と発言していますが、そうなると相手はかなり限定されてきますよね。

アテンシオ　ジョシュ・バーネット選手や藤田和之選手とは話をしているというのは、すでに公になっています。現在は5名の選手と話しているところです。世界トップ10の中にはUFCと専属契約している選手がいるので、だいたいそれぐらいの人数になってしまいます。元WWEのボビー・ラシュリーについては候補に挙がりましたが、まだ検討段階です。プロレスから転向してUFCで活躍しているブロック・レスナーのような例もありますが、急いで大舞台に上げるよりも大事にしていきたいと考えています。

―そのボビー・ラシュリーがボブ・サップと試合をする大会で、あなたが試合をするという噂がありますよね。

アテンシオ　はい、そのとおりです（笑）。じつはダナ・ホワイトとはいつか試合をしたいと思ってるんです。日本のファンは喜んでくれますかね?

―そりゃ観たいですよ！　でも、トレーニングはしてるんですか?

アテンシオ　毎日やってますよ。いまは出張中だから練習できていませんが、アメリカに戻ったらすぐに練習を再開します。プロ戦績は1勝0敗です。本来は155ポンドがいいんですけど、42歳だと減量がきついのでもうちょっと上のウェートになるでしょう。ケンカっぱやい方ではないですが、子どもの頃はケンカをしながら育ってきました。大人になってからもずっと格闘技をやってきたから、生活の一部です。このスポーツが大好きなんです。いつかは日本で試合もしてみたいですが、もう42歳ですからね。

―なるほど。日本には佐伯繁さんというちょうどいい対戦相手がいますので、ぜひアフリクション vs DEEPのトップ対決を実現させてください（笑）。

【09年4月28日／都内ホテルにて収録】



Tom Atencio■1963年7月28日、米国カリフォルニア州出身。ネイティブ・アメリカンとメキシカンの血が入っている。15年前からジョー・モレイラのもとでトレーニングを開始。その後、マルコ・ファス、元シュートボクセ・アカデミーのハファエル・コデイロらのトレーニングを受けている。写真は『M-1チャレンジ』の会場に突如現われたクイントン・"ランペイジ"・ジャクソンと。



ストライクフォース代表

スコット・コーカー

が語るDREAM、M-1との交流

アオキ、マッハに参戦オファーを出しています

エリートXC買収とそれに伴なうCBSの地上波放送を獲得し、一躍、UFCに次ぐMMAイベントとなったストライクフォース。かねてからDREAMとは友好関係にあるが、ワジム代表からのラブコールを受けて、どう動くのか？

聞き手／堀江ガンツ

——M-1グローバルのワジム代表が、小誌のインタビューで「ストライクフォースとも選手交流等で協力関係を築きたい」と発言していましたが、この案についてスコット代表はどう思いますか？

コーカー　以前からM-1グローバルとは個人的な付き合いも含め良い関係を築いておりますが、選手交流等の具体的な内容に触れて正式な話をしたことがありませんでした。しかし、M-1グローバルにはストライクフォースの選手とマッチメイクさせたらファンに喜んでもらえるカードがたくさん組めますので、ビジネス的にも、またMMAのファンの一人としても非常に興味のある提案ですね。

——ではM-1側から話があれば、話し合いを持つ準備はありますか？

コーカー　ストライクフォースはいつもオープンですので、話し合いを持つ準備は常にできていると言えます。M-1との関係を正式に築くことはお互いにとってメリットのある話になると思いますしね。ただ、ご存知のとおり、ストライクフォースはエリートXCを買収、4月にショータイムと第1回大会を開催したばかりです。もう少し落ち着いてから、いいタイミングで新たな交流ができたらと思っています。

——M-1グローバルが全面協力している『アフリクション』という大会については、どう評価していますか？

コーカー　格闘技ファンの一人として観ても興味のあるマッチメイキングが多く、ファンが喜ぶ大会を開催していますよね。ヒョードルvsアンドレイ・アルロフスキーのカードおよびその内容は、格闘技界全体から観てもベストと言えるほど素晴らしいものだったと思います。

——『アフリクション』に上がっている選手で、興味がある選手はいますか？

コーカー　もちろん、たくさんいますよ。たとえばいまはビクトー・ベウフォートに非常に興味がありますね。対戦相手として、ニック・ディアス、スコット・スミス、ロビー・ローラー、フランク・シャムロック、カン・リーなど、素晴らしいカードが何通りも組めて、ファンに喜んでもらえると確信しているからです。また、ヒョードルvsアリスター・オーフレイムというのも、最高のカードの一つと言えるのではないでしょうか。

——そのアリスター・オーフレイムは6月にストライクフォースに上がる予定があるそうですが、これはDREAMとの協力関係の中で実現することですか？

コーカー　アリスターとは彼が所属するキャンプと個人的にも親密な関係があり、直接契約して出場してもらう予定ですが、これはDREAMも協力関係の中でサポートしてもらっています。

——アリスターはステロイド疑惑がありますが、その点についてはどう考えていますか？

コーカー　ステロイド疑惑ですか？　どのような経緯でそのような話になっているのか疑問ですが……。アリスターは07年11月にもストライクフォースに出場していますが、その際に行なわれたテストではステロイドの使用は確認されていませんし、また今後参戦するときも、コミッショナーがテストをすることになると思いますので、とくに心配していません。

——現在、DREAMとの関係は良好ですか？

コーカー　密に連絡を取り合っており、いい関係を築けていると思います。今度、選手交流を行なうことにより、この関係を具体化させていけたらと思っています。ただし、お互い毎月のように大きな大会を開いており、そのスケジュールに追われてしまって、なかなかカードが組めないというのが現実です。しかし、お互いに協力関係は確認し合っていますから、8月か10月に行なわれるストライクフォースのビッグマッチに、DREAMのトップ選手に出場していただけたら、と思っています。

——青木真也と桜井"マッハ"速人がストライクフォースに上がるという噂がありますが、交渉は進んでいますか？

コーカー　ご指摘のとおりDREAMには、彼らがストライクフォースに参戦していただけるよう依頼はしているのですが、お互いのスケジュールが噛み合ったときに、という感じでしょうか。

——五味隆典選手がフリー宣言をしましたが、彼と交渉したい意向はありますか？

コーカー　フリーエージェントということで契約することに障害がなければぜひストライクフォースの金網に入ってほしいですね。もしストライクフォースに来るなら、ギルバート・メレンデス、ジョシュ・トムソンはもちろんのこと、まだ日本ではなじみはないでしょうが、9勝無敗のビリー・エバンゲリスタなど興味深いカードが考えられます。

——DREAMとは今後、どのような関係を築いていきたいですか？

コーカー　今後ともお互いに信頼できる関係を築きあげ、選手交流等、現在協議している内容のものを早急に行動に移せたらと思います。また、ファイトビジネスを成功させ、業界全体を大きく成長させるためにもDREAMやM-1グローバルはもちろんのこと、ほかの団体とも協力してビッグショー&ベストカードを実現させていきたいですね。

【09年5月8日／メールインタビューを再構成】



昨年9月に行なわれたストライクフォース・プレイボーイマンション大会で、ツーショットに収まるコーカー代表と、アフリクションのトム・アテンシオ副社長。表だった交流こそなかったが、ストライクフォースとアフリクションの関係は以前から良好だったことがうかがえる。

青木真也

WAMMA世界ライト級王者

“チーム・やれんのか！スペシャル対談”

エメリヤーエンコ・ヒョードル

WAMMA世界ヘビー級王者

ワオ木さん、念願かなって皇帝とのプリクラをゲット!?



4.29『M-1チャレンジ』有明大会で、ヒョードルvs青木の夢のサンボジャケット着用エキシビションマッチが実現！その試合直後に史上初、本誌と『格闘技通信』、『ゴング格闘技』による3誌同時取材を行なった。一昨年の大晦日、ともに『やれんのか！』に出場した“チーム・やれんのか!”の同志であり、同じWAMMA世界王者に認定されている二人は、はたして何を語り合ったのか？　ぱいーん！

聞き手／堀江ガンツ（ほか2名）　撮影／平工幸雄

――今日はヒョードル選手と青木選手のビッグ対談ということで、史上初の3誌同時インタビューなんですよ（笑）。

青木　聞き手が3人って凄いプレッシャーですねえ。

――では、今日のエキシビションマッチを行なった感想からお願いします。

ヒョードル　非常に私としてはおもしろかったです。（エキシビションとはいえ）一つの試合として挑みましたから。お客さんに喜んでもらうために、どういう瞬間に、どんな技を仕掛けなくてはならないか、ずっと考えながら闘わなければならなかったので、そういう意味でも、アオキサンと闘うことができたのは私にとっても有意義でした。

――青木選手はどうですか？

青木　もう夢のような時間をすごさせてもらって。いつまでもいつまでも味わっていたいような、幸せな時間だったと思います。

――エキシビションとはいえ、最強皇帝と向かい合ったときに緊張感あったんじゃないですか？

青木　そうですね。相手は世界最強の大人ですからね（笑）。

――ヒョードル選手は青木選手と肌を合わせてみて、どんな印象を持ちましたか？

ヒョードル　やはりアオキサンの距離感などを感じることができ、いいファイターだな、と思いました。もちろん自分よりは軽かったですけどね（微笑）。

――今日のエキシビションでお互い、「こんな技をかけてやろう」と狙っていた技はありましたか？

ヒョードル　それは私としてはありませんでしたね。やはりアオキサンと向かい合ったときのインプロビゼーション（即

興）を大事にしたいと思ってましたから。

――青木選手は？

青木　もう～もうもうですよ！

――なんですか（笑）。やりたいことがたくさんあったってことですか？

青木　そうですね。やっぱり道衣を着てやるっていうのが特別だったんで。あと、どれだけ技がタイトなのかを感じたかったですね。実際、アームロックのヒザの締めつけとか、腕を取る角度とか凄くタイトで「ああ、凄いな」と思いましたね。やるとわかるんですよね。

――過去、味わったことのないタイトさでしたか？

青木　凄かったです。柔道とかでもいないですよね。「木村政彦がこうだったんだろうな」って思いましたよ！

ヒョードル　ドウモアリガト（微笑）。

――ずいぶん投げられてましたけど、投げ技はどうでした？

青木　今日、投げられると思って、柔道の全日本選手権観てから来ましたから（笑）。

――投げられる心の準備（笑）。

青木　もうバッチリです。でも全日本選手権で観れたのは、棟田（康幸）選手の上手出し投げだけでした。柔道なのに上手出し投げかよって。相撲じゃねえかよって（笑）。あとヒョードルさんは小斉（武志）先輩と柔道で試合してるんですけど、小斉さんは自分の中で凄い人なので、その小斉さんとやるぐらいだから、ヒョードルさんは柔道の立ち技も凄いんだなって思いましたね。ヒョードルさんは柔道出身ですよね？

ヒョードル　出身というとサンボになりますが、柔道とサンボは非常に似ていますし、私自身、柔道もやってて、ロシアの選抜チームに入っていたことがあります。

ヒョードルさんは腕を取る角度が凄くタイトで「やっぱり凄いな」って思いましたね



アオキサンは腕から足関節への動きが良くプロフェッショナルなサンビストのようです

――いまでも道衣を着てトレーニングしたりしているんですか？

ヒョードル　もちろんです。柔道やサンボの練習はいまでもしていますし、ロシアのコマンドサンボの試合は道衣を着て行なうので、そのための練習もしますからね。

――ヒョードル選手は今日、青木選手とやってみて、「この動きはいままで体験したことのない動きだな」というものはありましたか？

ヒョードル　足をつかみにいく動きが速くて、自分の足が取られそうになりましたね。あとは腕の関節から足の関節へのコンビネーションもよかったと思います。プロフェッショナルなサンビストのようでした。

青木　僕も一応サンボやってましたからね。サンボっていってもサンボルールで柔道やってたみたいなもんですけど（笑）。

――ヒョードル選手は今回のエキシビションマッチを行なう前から青木選手を高く評価しているような発言があったと思うんですけど、青木選手のどのような技術が素晴らしいと思っていましたか？

ヒョードル　グラウンドの動きですね。自分が常に優位に立つ動きにいつも感心しています。

――青木選手、いつも感心してるらしいですよ。

青木　発言が大人ですよね（笑）。僕は永遠の少年なので、凄いなと思って。僕が5～6年経っても絶対にこうならないだろうなって。いまと同じようなこと言ってそうですからね。

――青木選手はこれを機会にヒョードル選手のところで長期的に練習したいとか、何かを得たいという気持ちはありますか？

青木　行ってみたいですけど……寒いですか？

ヒョードル　冬は寒いですよ（微笑）。

青木　やっぱりかあ。寒くなかったら行ってみたいんだけどな～。

ヒョードル　じゃあ、夏に来たらいいですね。

青木　ヒョードルさんは山でトレーニングするって聞いたんですけど、それって雪山ですか？

ヒョードル　雪が積もっているときにすることもありますけど、いまの時期はもう雪はないです。

青木　そういえば、雪の中、上半身裸で走ってる映像観たことありますよ！

ヒョードル　それはエルブルス山というロシア、コーカサス山脈の高い山でトレーニングしたときの映像でしょうね。

青木　やっぱ雪の中で走ってるんだ。すげえなあ。あと僕はヒョードル選手のマネをして、ハンマーで一生懸命タイヤを叩いているんですよ。

ヒョードル　あれはパンチを強化するには非常にいい練習ですね。

青木　あれってパンチを強化する練習なんですか⁉

ヒョードル　あと忍耐力もつきます。

青木　忍耐力！　そうだったんだあ。

――知らずにやってましたか（笑）。

青木　どのくらいの重さのハンマーを使ってるんですか？

ヒョードル　計ったことがないからわかりませんね。いろんな大きさのものを使いますし。

青木　じゃあ、何発ぐらい叩くんですか？

ヒョードル　「発」じゃなくて、3分ぐらい叩き続けます。

青木　単位が違うよ！（笑）。

4.29 M-1 CHALLENGE DIFFER ARIAKE

Emelianenko Fedor vs Shinya Aoki

M-1チャレンジ有明大会で、ヒョードルvs青木のサンボジャケット着用の3分間エキシビションマッチが実現！　エキシビションとはいえ、普段は実現不可能な夢の顔合わせだけに、ディファに集まった満員の観客は大熱狂。間近でヒョードルが観られたのも貴重だった！



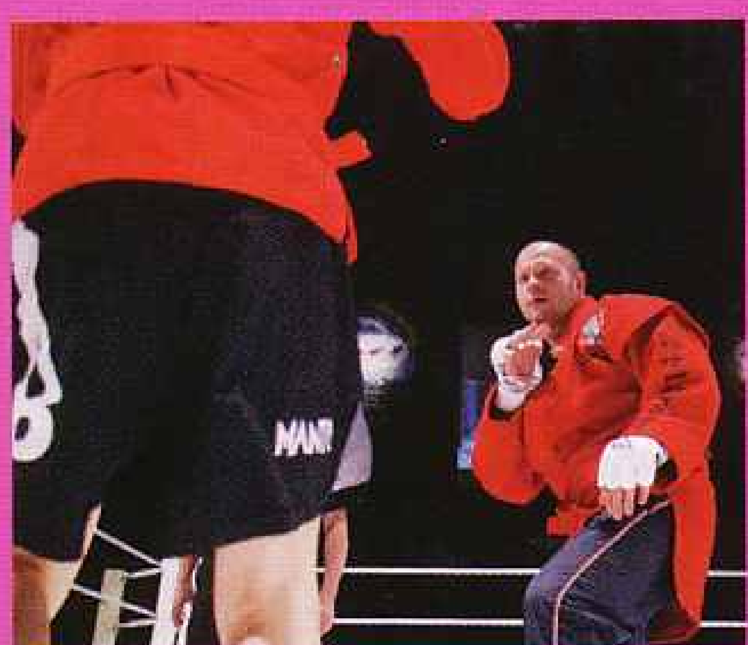
ゴング直後、ヒョードルは組みつくと、いきなりフロントスープレックス！　こうした動きは新鮮だ。



きっちりと上のポジションを取ったヒョードルは、上からはパウンドを落とす構え。ホントに殴りはしなかったが、実戦だと思うと恐ろしい。



エキシビションマッチながら、試合前には佐藤大輔制作の煽りVが流れた！　これだけでも思わず大コーフン。



スタンドでじりじりとプレッシャーをかけていくヒョードル。エキシビションとは思えない緊張感だ。



柔道でロシア選抜だったヒョードルが、柔道の日本ジュニア選抜だった青木を払い越しで投げる。さすがの迫力。



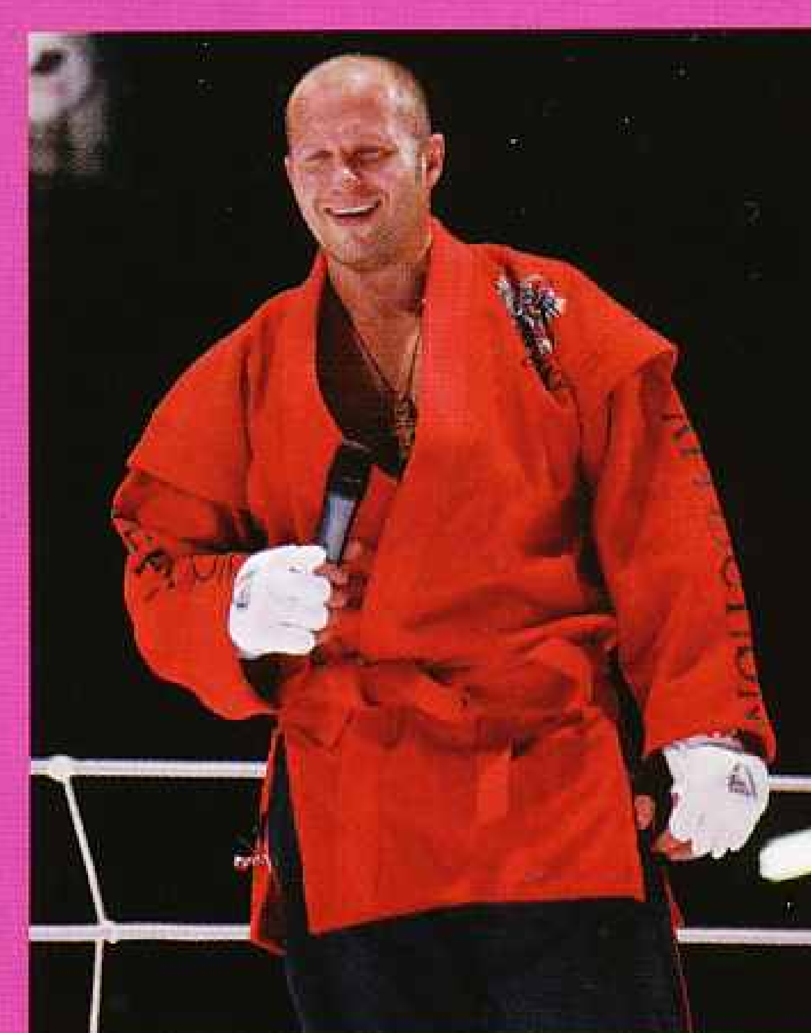
投げられた青木は下から腕十字を狙うが、それを軽々と持ち上げるヒョードル。かつての猪木vsアンドレのようだ。



青木をぶん投げたヒョードルは、一気に腕十字固めへ。エキシビションとはいえ、これまた力の入る攻防だ。



試合後、ガッチリ握手した二人。試合中に道衣を脱いだ青木は「裸で何が悪い!」と時事ネタを絶叫した。



あっと言う間の3分間が終了したあと、マイクでファンに挨拶したヒョードルはこの笑顔。ヒョードルが微笑みではなく、これだけ表情を崩すのも珍しい。青木戦が楽しめた証拠か。

——ちなみに青木選手は何発ぐらい叩くんですか？

青木　30回ぐらい叩いてることにしてください（笑）。でも、いいっすよね。あんだけハンマー叩く力があったら、薪割りがうまくなりそう（笑）。

ヒョードル　実際、薪割りは上手になりますよ（微笑）。

青木　でも、ロシアでお風呂沸かすのはガスですよね？　薪をくべてないですよね？

ヒョードル　ロシアは普通のお風呂はあまりないんですよ。でも、ロシア式のサウナがたくさんあって、そこはちゃんと薪を使ってますよ。

青木　へえ、ロマンありますねぇ！　サウナに入って、そのまま雪のあるところに行ったりするんですか？

ヒョードル　そういうこともありますね。もしくは冷たい湖や川に飛び込んだりします。

青木　へえ……そりゃ強くなりますね（笑）。ロマンがあるのがいいですよね。前になんかの記事で「ロシアの選手が強いのは水がいいから」とか書いてあったのを読んで、ウソに決まってるじゃんって思ったんですけど。

ヒョードル　ん？　どういう話ですか？

青木　ロシアは硬水だから強いって書いてあったんですよ。

ヒョードル　それはミネラルが豊富で硬度の高い水が有名なキスラボスクというコーカサス地方の選手じゃないですかね。

青木　ヒョードルさんは違うけど、そういう選手もいるんだ。

——さっきハンマーの話もありましたが、ヒョードル選手はほかの選手がやってない特別な練習はしていますか？

ヒョードル　いや、練習はみんな同じようなことじゃないですか。特別なことはありません。大きな岩を投げたりしますけど。
青木　充分、特別ですよ！（笑）。食べ物はどんなものを食べてるんですか？
ヒョードル　なんでも食べますよ。謝肉祭があって、その期間は昼間は食事をしないという習慣があるんですが、それは守るようにしています。
青木　ごはんを食べない⁉
ヒョードル　完全に食べなくなるわけじゃないんですが、動物系の食べ物は食べませんね。
青木　ごはんを制限するのは厳しいなぁ。
ヒョードル　神のご加護があればすべて可能です。
青木　よし、俺も耐える！（笑）。でも、もっとロマンがあることを言ってほしかったですね。黒パンしか食べないとか（笑）。
ヒョードル　（クスリとも笑わず）そんなことはありません。
青木　失礼しました（笑）。ところで今回はディズニーランドには行くんですか？
ヒョードル　今回は時間がないので行けませんね。次回はディズニーランドか遊園地に行きたいと思います。
――そういえば、青木選手はヒョードル選手とプリクラが撮りたいって言ってましたけど、撮れましたか？
青木　（残念そうに）撮ってないんですよ～。
（※128ページのプリクラは写真を本誌が加工したものです）
ヒョードル　では、次回は一緒に撮りましょう（微笑）。
青木　ウォォォォォ！　凄い嬉しいです。プリクラはいいっすよ。京都まで行って、清水の舞台から飛び降ります！
――意味がわからない（笑）。次にヒョードル選手が日本に来たとき、青木選手が案内したい場所はありますか？

ヒョードルvsレスナー戦より、ダナ・ホワイトとヒョードルさんの試合が観たいですよ（笑）



Emelianenko Fedor■1976年9月28日、ウクライナ出身。2000年にリングスへ初来日。ヘビー級と無差別級王者となったのち、PRIDEへ参戦し、ヘビー級王者に君臨。現在はWAMMAヘビー級王者。180cm、104kg。

あおき・しんや■1983年5月9日、静岡県出身。06年2月に修斗世界ミドル級王座奪取。同年6月よりPRIDE参戦。昨年はDREAMライト級GPで準優勝。大晦日にはエディ・アルバレスを撃破した。180cm、70kg。

特別な練習をしているわけではありません。大きな岩を投げたりすることはありますけど

青木　日本で連れていきたいところか……やっぱり新大久保のコリアンタウンにぜひ！
――それってDEEP道場から近いだけじゃないですか（笑）。
ヒョードル　でも今回、日本に来る前に韓国に寄ってきたばかりです。
青木　うわ～、そうなんだ。俺ってつまんねえ。ホントに申し訳ない。
ヒョードル　韓国のお土産はもうかなりたくさん買ってあります（微笑）。
青木　ホントに申し訳ない！
――ちょっと話を変えて、お互いに印象に残っている試合ってありますか？
ヒョードル　いろいろいい試合を覚えてるんですけど、前回のアオキサンの試合（マッハ戦）も負けてしまったけどいい試合でした。最初は凄く良かったのが、最後のちょっとしたミスが残念でしたね。
青木　僕はですね、ヒョードル選手がチェ・ホンマン選手とやる前、ヒョードル選手の周りの人たちが「チェ・ホンマン？　曙と同じスモーレスラーだろ？　楽勝だ」ってナメすぎてたんで、ヤベえんじゃねえのかって心配しました（笑）。
ヒョードル　でも、チェ・ホンマンは実際に強い選手でしたね。身体的にも屈強で、上に乗られたとき、これは返せないなって思いましたから。
青木　あの試合はシビれましたよ。ヒョードルさんが勝った瞬間、会場が爆発しましたからね。
――青木選手はヒョードルさんとこの選手の試合が観たいっていう選手はいますか？
青木　これがもういないんだよねぇ、ぶっちゃけ。もう（アンドレイ・）アルロフスキーもぶっ倒しちゃいましたからね。彼とやる前は、ヒョードルvsアルロフスキーっていうのは、僕の中では最高に……ボッ起じゃなくて、興奮するカードだったんですけど（笑）。それをああやってパンチ一発でクリアしちゃったんで、もうスゴロクでいうところの「上がり」じゃないのかって。
ヒョードル　アリガトウ（微笑）。
――UFCチャンピオンのブロック・レスナー戦とかじゃ興奮しませんか？
青木　もうそんなのどうでもいいです。俺が観たいのはエメリヤーエンコ・ヒョードルvsダナ・ホワイトですね（笑）。メチャクチャ観たい！
ヒョードル　（ただただ微笑）。
青木　失礼しました（笑）。
※ここでM－1グローバル関係者より「最後の質問で」という声がかかる。
青木　もう皇帝閣下はお時間みたいですよ（笑）。
――では最後に、ヒョードル選手。DREAMの大黒柱を宣言している青木選手に激励の言葉をいただけませんか？
ヒョードル　とにかく止まらずに前進あるのみで、DREAM発展のために引っぱっていってほしいと思います。その過程で自分の欠点を改善しながら、これまでどおり努力してください。成功を祈ってます。
青木　ありがとうございましたあ！
【09年4月29日／都内・ディファ有明にて収録】



空手幻想を甦らせた男

打撃で相手を破壊するDEEP新王者
今夏、いよいよ大舞台に殴り込み!!

菊野克紀

「青木選手を一撃で倒したい」

いま日本で最も選手層が充実しているライト級に、また一人、とんでもない強者が現われた！
その男の名は菊野克紀。6年間の内弟子生活を送った極真空手をベースに、
〝世界のTK〟髙阪剛に弟子入りし、空手を活かす総合格闘技のスタイルを確立。
とくに前蹴りと中段蹴りの中間の軌道で蹴る「三日月蹴り」は、まさに一撃必殺の武器であり、
総合での空手幻想を見事に甦らせた。そして去る4・16DEEP後楽園大会では松本晃市郎を破り、
DEEPライト級王座を奪取。今夏、いよいよ大舞台へ殴り込みかける！
これは事実談であり、この男は実在する！

聞き手&試合写真／堀江ガンツ　撮影／タイコウクニヨシ

――先日のDEEPのタイトルマッチ、凄かったですね！

菊野　ありがとうございます。

――何が凄かったって、まずは320人もの菊野応援団が凄かったんですけど（笑）。

菊野　あ、そっちですか（笑）。なんか一人の選手が呼んだ数ではDEEP史上最高だったらしいですね。でも、これで負けたら興行が台無しだったんで、勝ててホッとしました。

――320人も集まったというのは、べつに菊野選手自身が営業を頑張ったわけじゃないんですか？

菊野　いや、頑張りました（笑）。鹿児島の県人会とか、人が集まるところにはよく顔を出しましたね。基本的に人が好きなんですが、プロとして自分を知ってもらうのも大切な仕事の一つだと思うんで。

――なるほど。じゃあ「自分がプロとして大きくなっていくんでよろしくお願いします」っていう感じで。

菊野　そうですね。「必ず来年はチャンピオンになります」って去年からずっと宣言してて、さらに今年に入ってからは「今年の大晦日は絶対に出ます」ってずっと言ってて。名刺にもタイトルマッチの前から「DEEPライト級チャンピオン」って入れてましたからね（笑）。

――勝つ前から（笑）。

菊野　ここまで言ったら、もう勝つしかないですからね。

――あえて口に出すことで自分を追い込むということですか？

菊野　そうですね。僕、あまり気が強いタイプじゃないんですよ。三日坊主で継続が苦手なタイプですし。だからこそはっきり口に出して引っ込みをつかなくしてます。退路を断たないと逃げちゃうんで……。

――でも、そんな気の弱い人が極真の内弟子を5年間もやってたんですよね？

菊野　内弟子っていうのは逃げ場がないんですよ（笑）。

――なるほど！

菊野　あそこで練習をサボるなんてありえないですからね、もう怖くて。だから僕の弱い心を内弟子生活の中でかなり鍛えてもらいました。

――そしてタイトルマッチはまさに圧勝でしたけど、完全にプランどおりの試合ができましたか？

菊野　そうですね、やるべきことをやったっていう感じですね。僕のいままでの気持ちと格闘技に懸けた年数の差があの結果だったんじゃないかな、と思うんです。



Katsunori Kikuno

4.16DEEP後楽園大会で、松本晃市郎を破りDEEPライト級王者となった菊野。試合前から「DEEPチャンピオン」の名刺を発注するほどの、予告勝利だった。

聞き手&試合写真／堀江ガンツ　撮影／タイコウクニヨシ

――最初っからペース握ってましたよね。

菊野　そうですね。初めて僕のスタイルと闘うことになった松本選手はちょっと不運でしたね。闘いながら「なんだこれ？」って感じだったと思うんですよ。

――両手を前に出した構えで、ローキックを打ちながらプレッシャーをかけてきて。かなりやりにくそうでしたね。

菊野　あの構えは空手の三戦（さんちん）っていうふうに言ってますけど、最初から三戦の構えにしようとしたんじゃなくて、いろんな試行錯誤を重ねるうちに、気づいたら「あれ⁉　これって三戦じゃん！」みたいな（笑）。

――いろんな構えを試した結果、空手の三戦にたどり着いた、と。あと目についたのは、松本選手が組みつきにいったところを、闘牛士のようにスルッと避けてましたよね？　あの動きも空手のサバキかなんかですか？

菊野　完全に空手の技術というわけじゃないんですけど、基本的に僕、ディフェンスが得意なんですよ。これまで7試合やって、一度もダメージを受けたことがないですから。

――ダメージを食らったことがない⁉

菊野　ビデオを観てもらえばわかると思うんですけど、僕はほとんど攻撃を食らってないですし、いままで効いた攻撃はありませんから。僕は格闘技をスポーツではなく武術として考えているので、絶対に相手の攻撃を食らわずに倒すっていうのは意識の中にあるんですよ。ナイフで刺されるかもしれないってぐらいの意識で。だから自分の間合いに入ってくる相手に対するセンサーっていうのは、凄く働いていると思いますし、今回も全然食らう気がしなかったですね。

――これまで総合格闘技で空手家がなかなか活躍できませんでしたけど、ここにきて、菊野選手、LYOTO、ジョルジュ・サンピエール、アンドリュース・ナカハラなど、空手出身選手が素晴らしい活躍をしていますよね。これは、いままでの空手出身者と何が違うんだと思いますか？

菊野　僕は自分のことしかわかりませんけど、総合の試合に出るからには、最低限、レスリングや関節技、そのほか細かい技術など、総合で必要な技術ができなければ、どんなに打撃が強くてもダメだと思うんですよ。これまで空手出身選手で結果が出せなかった人は、そこが欠けていたんじゃないかと思います。

――いままでは空手家が空手で総合に出てた？

菊野　アンドリュース・ナカハラ選手も柔術をしっかりやってるみたいですし、LYOTO選手やGSPは寝技だけでも相当強いですよね。僕も柔道出身で、髙阪さんからしっかり総合を教えていただいて、それがあったうえで空手を活かしてるってことですね。

――なるほど。総合格闘技をしっかりと学ぶことで、あらためて空手が活きてくるわけですね。

菊野　メチャクチャ活きてきてますね。

僕の蹴りは極真の中では普通も普通。
でも、それを総合で活かせるのが僕

僕の蹴りなんて極真空手の中では普通も普通なんですよ。でも総合の基礎をしっかりやることで総合の試合において圧倒的な威力を発揮するんだと思います。

——ド素人みたいな質問しますけど、三日月蹴りって中足と呼ばれる足の指のつけ根で突き刺すように蹴りますけど、あれは自分の足の指を突き指とかしないんですか？

菊野 いや、これは足の指を鍛えてない人がマネしたら、自分の足が壊れますよ。

——壊れますか！

菊野 前蹴りもそうですけど、極真空手家はそういう蹴りをするために、拳を握るように蹴り足のかたちを作る練習を毎回するんですよ。だから普通の人がマネしようとしてもできないんですよ。蹴り方だけ真似しても自分が怪我するだけなんで。たとえばハイキックを蹴ってガード上げさせて三日月蹴りで刺す、それはチョン・ブギョン戦でやりましたけど、そういう技の仕掛けができて初めて三日月蹴りが必殺の技になるんですよ。

——なるほど。拳を鍛えるのと同じような意味なわけですね。で、菊野選手は拳もとんでもないゴツい拳をしてますね。

菊野 空手の拳なんでしょうね。殴られると痛いらしいですね、僕の拳（笑）。

——グローブしてても関係ない（笑）。

菊野 でも、空手ってそういうものじゃないといけないと思うんですよ。ガードされたらそのガードを壊す、効かせるじゃなくて、破壊する意識でやってますからね。

——このあいだの松本戦もパンチでKOしましたけど「あ、これぐらいで効いちゃうんだ」みたいに言ってましたよね？

菊野 僕、プロに上がってからパンチでKOしたの初めてだったんで、ビックリしたんですよ。これまでは肩に力が入ってたんですけど、今回はリラックスして出せたんで、これからはパンチでKOが増えるかもしれないですね。





ご覧のように両手を前に出した独特の構えで、じりじりとプレッシャーをかけていく菊野。この体勢から相手が突っ込んでくれば強烈な突きを放ち、少し離れれば極真仕込みの重いローキック叩き込む。対戦相手の松本は、菊野のこの間合いを崩すことができずに、最後は中段蹴りから顔面への突きの連打によりKO負けを喫した。はたして菊野独特のこのスタイルは大舞台でも通用するか？

僕の打撃が当たれば青木選手や五味選手を一発で倒す自信があります

——でも、あれってパンチというより「突き」ですよね。

菊野 じつはそうなんですよ。パンチと突きの違いで言うと、要はパンチでは瓦や板は割れないんですよ。でも突きは、インパクトの瞬間、自分の身体を一つの固まりにして全体重を相手にぶつける。だから破壊できるんでしょうね。あの突きは、僕が極真空手を修行した6年間、何十万本、何百万本とずっと突いてきた結晶ですよ。

——先日、マッハ選手がパワーと一発の破壊力で青木真也選手にKO勝ちしましたけど、菊野選手もそういった面では自信があるんじゃないですか？

菊野 そうですね。基本的に同じ階級だったら、フィジカルで負けることはなかなかないだろうとは思ってますね。青木選手とマッハ選手は通常体重の違いが出たと思いますけど、僕もライト級で試合をするときは14キロぐらい減量してますからね。ただ、身長が低いんでリーチ差は気になったりしますけどね。

——リーチといえば、青木選手は身長が180センチぐらいあって、手足も凄く長いですよね。そういう青木選手と向かい合うことも、すでに想定しているわけですか？

菊野 そうですね。

——シミュレーションの中で、打撃で倒すイメージはすでにできていますか？

菊野 できてますよ（キッパリ）。

——おお〜〜！

菊野 でも、僕と青木選手がやったら、ジャンケンみたいなもんだと思うんですよ。僕の打撃が当たれば一発で勝つ自信がありますけど、組まれたらさすがに勝てないですよね。そして青木選手はいろんな方法で組みにくると思うんですよね。ミドルキックを打ちながら組んだり、跳びヒザ蹴りをしてからつかんできたり。そういう動きをしっかり対処して一撃で倒す、それができれば僕が勝つと思います。

——ところで、このあいだの松本戦のテレビ中継はご覧になりました？

菊野 サムライですか？ 観ました。

——あの試合を青木選手が解説していましたけど、青木選手は松本選手と練習していることもあるんでしょうけど、発言的にかなり……。

菊野 ちょっと冷たい感じで（笑）。

——「菊野？ あんまり興味ねえよ」的なものを感じる解説でしたよね（笑）。

菊野 逆に意識してもらってるのかなって……わかんないですけど。でも僕は日頃から青木選手の名前出しちゃってますから。もしかしたら、ちょっと「コノヤロー」と思ってくれてるのかもしれないですし、対戦相手として見てもらえてるなら嬉しいですね。

——「ナメくさりやがって」って思ってるかもしれないですね（笑）。

菊野 ナメてないですよ、全然。凄く尊敬

僕のスタイルはオリジナルですから対策の立てようがないでしょうね

してます。青木選手はスマートで理にかなった闘い方をしますよね。自分のダメージを最小限に抑えてスマートに勝つ。しかも相手にあまりケガをさせないという、凄いですよね。頭がいいし、その戦略を冷静に実行できる度胸がある。

――理にかなった闘い方という点では、スタイルは違いますけど、青木選手と菊野選手の考え方は近いかもしれませんね。

菊野　だから僕は青木選手の試合は必ず観ますし、青木選手の発言も共感する部分が多いんですよ。そしてあれだけの実績を挙げている選手ですし尊敬しているからこそ闘いたいですし勝ちたいですね。青木選手とはホントに色がまったく違うんで、逆におもしろいと思いますし。

――先ほどの話じゃないですけど、打倒・青木真也をすでに考えているわけですね。

菊野　考えてますね。僕の技の一つ一つが、彼に勝つためにどうすればいいかっていう発想なんですよ。やはりトップに立つためには青木選手に勝たなきゃいけないわけですから。

――「青木真也、もし闘わば」という発想で練習をしている、と。

菊野　そうです。だから組みつかせずに勝つために三日月蹴りみたいな技も必要になってくるんです。やっぱりワンツーじゃ青木選手に勝てないですよ。一発で倒さなきゃダメだと思うんで、それをいま磨いているところです。

――打倒・青木真也と同時に打倒・五味隆典も考えているんですよね？

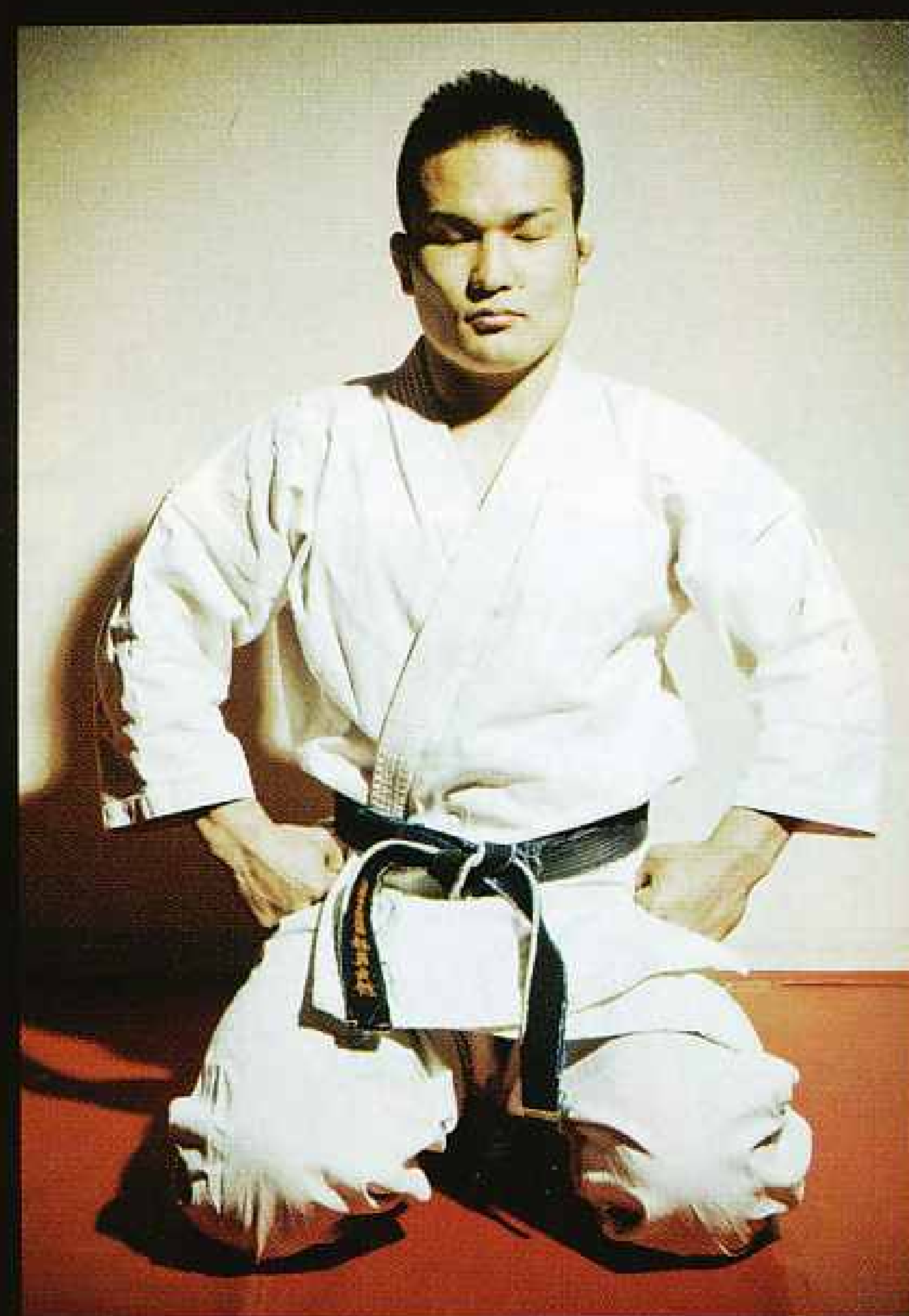
菊野　はい。頂点に立つためには五味選手も勝たなきゃいけない選手だと思うんで。いまちょっと調子を落としてますけど、いまの五味選手ではなく、全盛期の五味選手に勝つことをイメージして練習と研究をしています。五味選手に勝つには、青木選手とはまったく違う対策が必要になりますから。

――いやあ、でも早くも青木戦や五味戦が観たくなりますよ！

菊野　そうですか？　ありがとうございます（笑）。

――今年のこれからのプランというのは、できあがっているんですか？

菊野　7月と9月にDREAMがあるんで、どちらかにお声がかかれば、と思ってます。ただ、まだ正式にDREAMからお話があるわけじゃないんで、いまはいつでも闘えるように心と身体を作っておきます。



Katsunori Kikuno

きくの・かつのり■1981年10月30日、鹿児島県出身。高校卒業後、極真会館（松井派）鹿児島県支部の内弟子生活を6年間送り、その後、髙阪剛が主催する『A-SQUARE』に入門。06年にプロデビュー後、7戦全勝。現DEEPライト級王者。170cm、70kg。

――大きな舞台に上がったら、まず最初に闘いたい人っていますか？

菊野　DEEPのチャンピオンの扱いがどんなもんかわからないですけど、ぜひ強い選手とやりたいですよね。その選手に勝ったら一夜にして「凄い男が現われた！」って思われるような強い選手とやらせてもらいたいです。

――逆に言うと、一試合で世間を驚かせる自信もある、と。

菊野　あ、もう全然あります。普通に勝てると思ってますから。

――普通に勝てますか！

菊野　僕はチャンピオンを目指してますから。いまでも自信がありますけど、さらにどんどん強くなっていますからね。皆さんからも僕の底は見えないんじゃないですか？　我ながら、どこまで強くなるか楽しみですね（笑）。

――ほかの選手にとったら、菊野選手は底知れないぶん、一番闘いたくないタイプでしょうね。

菊野　そうですよね。僕が誰かに負けて対策法がわかってから闘いたいとか思ってるんじゃないですか（笑）。ハッキリ言って、現時点では僕の対策って立てられないと思うんですよ。何をしてくるかわからないし、こういう闘い方の選手がいませんから、練習相手もいないでしょうし。

――確かに「仮想・菊野」みたいなスパーリングパートナーはなかなかいないでしょうね。

菊野　僕のスタイルは総合と空手を融合させたオリジナルですから、極真の人に聞いても、対策法は「わからない」って答えるでしょうね。

――対策が立てられないっていうのは、相手にとっては恐怖でしょうね。何か話を聞いてるだけで幻想が巨大化してますよ（笑）。

菊野　その幻想をどんどん膨らませていきたいですね。そういう心理戦も格闘技においては重要ですから。とにかく、このまま連勝して大晦日に出場して、チャンピオンになりますんで、期待してください。

――有言実行に期待してます！

【09年4月28日／都内・A-SQUAREにて収録】

師匠TKが語る菊野の恐ろしさ
「克紀は自分の“危なさ”にまだ気づいてない」

克紀はね、自分の“危なさ”にまだ気づいてはいないんですよ（笑）。まあ、ある程度はわかっているから、三日月蹴りも「必殺技」というふうに自分で言えるんでしょうけど、本人以上に周りが「あんた気づいてないよ。あんたの打撃は、相手を壊しかねないほど危ないよ」っていうね。

普通、試合前の練習の相手をしてて、いい打撃をもらっても「痛い!」って言わないでしょ？　「いまの蹴りいいよ」とか盛り上げなきゃいけないのに「痛い!」だからね（笑）。そして、その「痛い」蹴りにしても、克紀からしたら抑えて蹴ってるわけだから。試合で初めて食らった人は、ビックリしちゃうでしょうね。

あるときなんて、試合直前に控室で「今日は人をおもいきり蹴っていい日だ」とか言ってるんですよね（笑）。普段蹴られてるウチの選手連中は、相手の方に手を合わせてお経を唱えてましたよ。

ただ、この克紀の試合っていうのはね、総合格闘技全体を見渡している自分の立場からすると、複雑な気持ちもあるんですよ。試合をするたびにその打撃で相手を潰してしまうんじゃなかって。それはちょっと勘弁してくれないかキミっていうね（笑）。でも、師匠としての立場からすると、相手を完全にブチのめして勝ってほしいと思ってるわけで。

まあ、DEEPのチャンピオンになったことで、これからさらにレベルの高い選手としか試合が組まれないと思うんで、試合の中で、どこまで強くなれるのか。チャンピオンにはなりましたけど、自分も克紀も始まったばかりだと思ってるんで、2～3年後にいまの克紀の試合を見返したときに「なんて甘いことをやってたんだ」って思えるようにしたいし、ならなきゃダメですよね。



マット界一のお騒がせ男が総括！

SMAP 草彅くん全裸騒動

ザ・グレート・サスケ

今年4月、世間をおおいに騒がせたのがSMAP・草彅剛の公然わいせつ罪での現行犯逮捕だ。この号の発売時には復帰へ向けてなんらかの具体的な動きも出ているかもしれないが、基本的に“全裸上等”のマット界の話題が中心の『kamipro』でもこの騒動を総括する必要があるだろう（なぜだ?）。というわけで登場いただいたのが、今年2月の逮捕騒動も記憶に新しいザ・グレート・サスケさんです!

聞き手＆撮影／阿修羅チョロ

―サスケさんの逮捕騒動が一段落したと思ったら、今度はSMAPの草彅（剛）くんの全裸騒動が勃発したわけですが、この問題を語れるプロレスラーといえば……。

サスケ　（さえぎって）もう私しかいないでしょうね！

―ですよね。どうでしょうか、サスケさんから見て今回の騒動は？

サスケ　もう一通り報道もされつくした感じだけど、今回の騒動っていうのは深読みすればいろんな見方ができるんだよね。

―ほぉ。それは芸能界や警察とかの闇の部分の話とか？

サスケ　まあまあ、そういうのも含めてね。でも、今回の騒動の発端は単純に「公園にうるさいヤツがいる」っていうところから始まったんだと思うんですけど、この報道の内容を聞いてですね、私は非常に草彅くんに親近感を覚えたんですよ。

―まあ、プロレスラーは「全裸になって何が悪い」って人も多いですし、もちろんサスケさんも……。

サスケ　いやいや、私は全裸はマズイと思ってますから。どちらかというと全裸反対派とでもいいますか。

―え～っ、それは意外です！

サスケ　まあ、その件は本題になるので、まずは置いといて、じつはですね、私は草彅くんをはじめ、SMAPとは何度かテレビで共演させてもらってるんですよ。

―知らない仲ではないと？

サスケ　ええ。草彅くんに関して言えば、凄く人懐っこい方でね。昔ね、SMAPが司会のスポーツ王ナンバーワン決定戦みたいな番組に一緒に出たときも、草彅くんが私のヒジの内出血のあとを見て、いきなり触ってきて「へぇ～、凄いですねぇ」なんて言ってたことがあって、ずいぶん人懐っこい人だなぁって。

―それって人懐っこいっていうんですかね（笑）。

サスケ　まあまあ、そんな印象があったりして、よく言われるように「いい人だな」と思ってたんですけど、今回凄く親近感を覚えたんですよ。なんでかというと、私も同じようなことをしてたから（キッパリ）。

―サスケさんも「全裸になって何が悪い！」と騒いだことがある、と。

サスケ　いやいやいや、残念ながらポイントはそこじゃない。私が今回の件で注目した点はね、草彅くんが脱いだ衣服をキレイに折りたたんでそばに置いてあったという報道があったでしょ。じつはですね、私もその経験があるんですよ。

―サスケさんも全裸になるときは、衣服をキレイに折りたたむ？

サスケ　そう、そうなんですよ。もう6年ぐらい前ですかね？　盛岡で仲間内で飲んで、悪酔いしちゃって、仲間と別れたあと、なぜか飲んでるお店が入っているビルの屋上に上がって、靴と衣服をキレイに脱ぎ揃えて裸になったことがあってね。全裸ではないんですけども。

―ビルの屋上で靴をキレイに脱ぎ揃えてっていうのは、ちょっと穏やかじゃないですよね（笑）。

サスケ　ねっ！（笑）。かといって、飛び降りるわけではなく、その屋上

今度、草彅くんに会ったら、下半身を覆うマスクを私からプレゼントします！

のコンクリートの床にうつ伏せになって、両腕をピーンと真っすぐ前に伸ばして寝ていたんですよ。

——は？ それは何かのお告げかなんかですか？

サスケ いやいや、なんでだろう？ 潜在意識の中で、飛び降りたいという衝動があったのかどうかわからないんだけど、朝方、その格好で誰かに発見されたわけですよ。

——それは非常にマヌケですね（笑）。

サスケ でしょ（笑）。そんなこともあって凄く草彅くんに親近感を覚えてね。「あ、同じことやってるな」と。もちろん、私も裸になったりも多々あるんだけども、さすがにパンツまでは脱がないよ、と。

——裸になっても、サスケのジュニアは見せない？

サスケ そう！ どんなときでも、パンツだけはギリギリ穿いてる、と。ほかはすべて裸になったとしても。

——その場合、マスク……。

サスケ （さえぎって）ちなみにマスクは私の顔ですから！ 当然、マスクは着けたままですよ。これは当然です。

——し、失礼しました。

サスケ さすがにフルチンは穏やかじゃないなというのは私も感じましたよ。ただ、プロレス業界には「フルチンなんかは珍しくないよ」という人たちも多いですからね、実際。

——草彅くんが捕まるなら、プロレス＆格闘技業界は逮捕者続出という声もありますよね。

サスケ 間違いないよね（笑）。そういう部分では、草彅くんにちょっと同情もするんだけど、でも問題は、その後、家宅捜索が行なわれたんでしょ。

——そうみたいですね。

サスケ やっぱりね、そこは何か酒に酔ってるだけではないんじゃないかという、へんな憶測が飛んじゃうのも仕方がないですよ。行動も異常だしね、全裸になって「慎吾〜ッ！」って絶叫したあげく、「裸になって何が悪い！」と。

——このご時世的ですから、薬物うんぬんと疑われてもしょうがないというか。

サスケ まあね。そういうのも含めて家宅捜索ってことになったんだろうけど、結局何も出てこなかった、と。警察としては、もっと大きな獲物を狙おうとしていたんじゃないかなということは容易に推測できますけどね。

——もともと草彅くんをマークしていたとか？

サスケ いや、マークはしてないと思うんですけど「もしかしたら？」という読みがあったんじゃないかな、と。結局それは外れたってことなんでしょうけど。まあでも、芸能界はプロレス業界以上に流れの早い世界ですから、時が経てば世間の風潮も変わってくるんじゃないですか。もうすでに、「草彅くん、かわいそう」とか「何もそこまで」っていう空気にもなってますしね。

——復帰の話もぼちぼち出てきていますが、地デジのCMをはじめ、仕事への影響はかなり大きかったみたいですね。

サスケ そうだね。私が捕まったときも多少影響があったんだけど、CMタレントという立場からすると、やはり「自覚がなかった」と言われてもしょうがないよね。鳩山（邦夫）法務大臣は「最低の人間だ。絶対に許さない」なんて言ったみたいだけど、あれはあれで凄いよね（笑）。



ざ・ぐれーと・さすけ■本名・非公表。1969年7月18日、岩手県盛岡市出身。新日本プロレス学校を経て、90年3月にユニバーサル・プロレスでデビュー。現在はみちのくプロレス会長として、さまざまなリングで活躍中。また、小見川道大にも負けぬ愛猫家としても知られている。180cm、88kg。サスケブログアドレス→http://ameblo.jp/thegreatsasuke/

——その発言へのバッシングがジャニーズファンとかからも凄いみたいですし。

サスケ だから、そこまで言われるのもなんだかかわいそうだなと思いながらも、言われても仕方がない部分もあるという、我々芸人にとっては考えさせられる事件でしたね。他人事ではないというか、明日は我が身的なね。気を引き締めてやっていかないとイカンな、と。

——最後に一応、確認しておきますが、サスケさんはリング上はもちろん、悪酔いしたときでもフルチンには絶対にならないと？

サスケ そうです。私は決してフルチンにはなりません。そこが大事な点ですね。昔、FMWでネイキッドマンマッチっていうのをやったことがあるんですよ。

——ありましたねぇ。敗者は全裸にならなければいけないという試合形式で。相手は黒田（哲広）選手でしたっけ？

サスケ そうそう。あのときも私はパンツは脱ぎませんでしたからね。それが私のこだわりというか、サスケ流で。たしか、当時は問題になって『週プロ』とかは掲載拒否したんじゃなかったかな。

——編集長が佐藤正行（現・週刊ベースボール編集長）さんになったばかりで、新編集長の「マット界の公序良俗に反する」という判断で詳細は報道されなかった気がします。

サスケ あったよねぇ……（しみじみと）。でも、あのときも私は全裸にはなってないですから！（なぜか得意げに）。

——でも編集部で昔の写真とかを探していると、サスケさんの全裸写真とかよく目にするんですよ（笑）。

サスケ ガハハハッ！ まあ、昔『紙プロ』で撮った写真とかはモザイクありきの撮影がほとんどだからね。あれはプライベートじゃなくてビジネスですから、ノー問題！

——ビジネスだったら問題ない、と。

サスケ そういうことです。まあ今度、草彅くんに会ったら、下半身を覆うマスクを私からプレゼントしたいな、と。

——そんなグレートなマスクが存在するんですか？

サスケ いやいや、特別にそういうものを作ってあげようかな、と。「酔ったときも、これで安心！」みたいな（笑）。

——当然、股間の部分にはサスケさんの顔があるわけですよね？

サスケ もちろん、もちろん。

——それはそれで捕まりそうな気もしますが……。

サスケ （気にせずに）というわけで皆さん、人前で全裸になるのは絶対にダメですよ！ ただ、もしも、もしもですよ!?

——は、はぁ、なんでしょう？

サスケ 万が一、限りなく全裸に近い格好の私をどこかで見かけたとしても、私は絶対にフルチンにはならないですから、もう前からうしろから斜めから、バンバン写真を撮っちゃってください！

——そういうオチですか（笑）。ありがとうございました！

【09年5月7日／都内・新宿ロフトにて収録】

THE GREAT



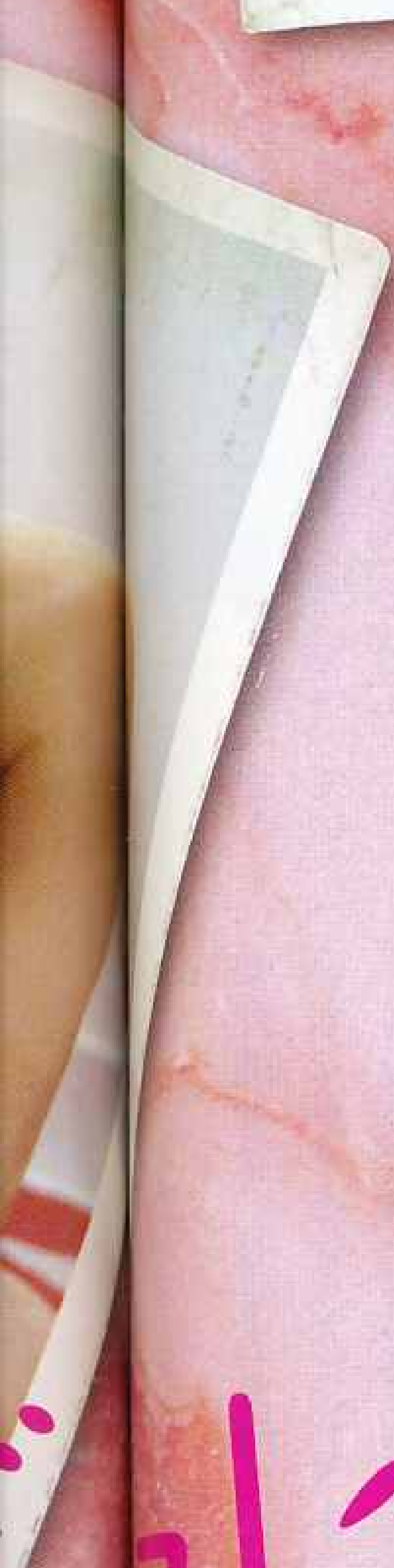












水着にきがえて

おい、ホントかよ!?

あの“無気力レスラー”は真の三國無双バディだった!?

マニアのあいだで注目を集めている“無気力レスラー”真琴が、
じつはバツグンのスタイルだったことが発覚!
そんな彼女が水着になって、大好きな三國志についてか細い声で激語り!
え? なんで水着で三國志かって? まぁ、あまり深いことは考えずにご堪能あれ!

本文構成/ジャン斉藤







真琴（アイスリボン）が
三國志を語ったら

……あ、よろしくお願いしますっ。ええと、『レッドクリフ』は、DVDはいただいたんですけど、まだ観てないです。三國志は、ゲームの**『三國無双』**で、知って。はい、はい。

家族がやっていて。おじが、『三國無双』、やっていて。もともとゲームをやるのは好きで。スゴくハマってしまって。『三國無双』の魅力は……中華的なところが。**貂蝉**（チョウセン）というキャラの衣装が、かわいくて。でもビジュアルというよりは……生き方、生き方が、好きです。

貂蝉は**呂布**（リョフ）と付き合ってましたけど、呂布は、呂布は、そんなに好きじゃないんですっ。生き方っていうのは身を挺して正義のためにつくすっていうか……。あと**甄姫**（シンキ）も好きですねっ。ゴージャスなところが。ほかには……**張郃**（チョウコウ）です。オカマのキャラなんですけど、そこが好きです。オカマ。

やったらみんなハマると思います。ええと、はい、ゲームのやり方は、とにかく雑兵を、殺しまくるんです。弓兵も、殺します。1000人くらい、殺します。殺しまくるのは気持ちいいです、いっぱい死んでくれて。

シリーズで5まで出てるんですけど、全部持ってます。あと『三國無双』のコスプレもしてるんです。一着しか持ってないんですけど、それは、貂蝉です。その衣装で、試合は……着たら動けないんです。着るのにも、30分くらいかかっちゃうんで。すいません。かかった費用は5万くらいです。

コスプレした写真ですか？　……（小声で）捨ててしまったんです、恥ずかしくて……。私なんかが、貂蝉を、やっていいのかな、と。

それに、いまは太って着れなくなってしまったんです。すいません、貂蝉。コスプレの衣装屋さんにオーダーして作るんですけど。私は、他人と話したり、自分から行動するのは、苦手なんですけど。そこは頑張って、頑張って。ずっと、引きこもっていて……自分が外の世界に出るきっかけが、それだったので。

『三國無双』をやるようになって、『三國志』の小説も読むようになりました。作者は…………あ、ちょっと、名前はわからないです。読んだ感想は……ゲー



まこと■本名非公開。1989年9月26日、兵庫県出身。2006年7月25日、東京千本桜ホールのりほ（当時・小学3年生）戦でデビュー。対人恐怖症で元引きこもり、そしてその底抜けの弱さからマニア層を中心に話題を呼ぶ。今年7月末にイメージDVD『アイスリボン真琴』（税込3990円）を発売予定。166cm、50kg。

ムと違うので難しかったです。一番違うのは、張郃が、オカマじゃない。あとは、貂蝉が、実際にはいないと聞いて、凄くショックでした。

でも、本を読んで、もっと『三國志』が好きになりました。本を読んで好きになったキャラは……やっぱり、貂蝉です。あとは……**孟獲**（モウカク）。個性的なところが。

『三國無双』は、周りでやってる人がいないんです。え、勧め方がよくない？　はい、そうだと思います、すいません、すいません……。けっこう寂しいですけど、なんでも一人でやるのに慣れてるんで……。一人は、慣れてるんで……。

一緒にやるのは妹です。妹は**関羽**（カンウ）が好きみたいです。私は、関羽のヒゲがあんまり……。妹は、関羽一筋です。妹は関羽のコスプレはしないです。三國志だけのコスプレイベントもあるんです。貂蝉の人もいます、ライバル意識ですか？　いや、あ、はい……写真を撮らせてもらったり。まぁ、でもキレイな人にやってもらいたいなって思います。キレイな人じゃないと、悲しくなってしまいます、自分もやってしまってるんですけど……。

三國志で、一番人気があるキャラは**趙雲**（チョウウン）だと思います。男前だと思います。でも、私はビジュアルよりも生き方が優先なんで。

プロレス界で貂蝉っぽい人ですか……え、え、んーと、イメージカラーがピンクなので……バンビさん。張郃は……あ、男

三國無双
97年に「コーエー」より発売された三國志を題材とするプレステ用3D対戦格闘ゲーム。00年にはプレステ2用ソフトとして『真・三國無双』シリーズが発売される。真琴が好んでやっているのはこのシリーズ。

貂蝉
史実には登場しない架空の人物であり、後漢の臣王允の養女とされている。楊貴妃、西施、王昭君と並び、古代中国四大美人の一人に数えられている。小説『三国志演義』に登場。

呂布
後漢末期の武将。三國志の世界では最強の武将として描かれることが多々ある。また、欲望に弱く判断力に欠けるなど、人間らしさも持ち合わせた個性的な存在として知られる。

甄姫
中国魏朝の初代皇帝曹丕の妻で、二千石の高官の家柄出身。幼少時より聡明であり、乱世の中で家族に慎ましやかな生活を説くなど、謹厳実直な性格の持ち主とされている。

張郃
中国後漢末期から三国時代の魏にかけての武将。有名な黄巾の乱から50年近くも第一線で闘い続けたとされる。ちなみに吉川英治の『三国志』では作者のミスによって3回も戦死している。

孟獲
三国時代の蜀漢期の南方の豪族。諸葛孔明との「七縦七禽」のエピソードで知られる。『三国志演義』では南蛮の王と称され、コミカルな部分を強調した描写をされている。

関羽
中国後漢末期に劉備に仕えた知勇兼備の武将。見事な鬚髯をたくわえていたため〝美髯公〟とも呼ばれる。信義に厚いことから、商売の神として世界中の中華街で祭られている。

趙雲
中国後漢末期から三国時代の蜀に仕えた軍人で、蜀の五虎大将軍の一人。あの諸葛孔明から『子龍は満身これ胆である』（＝とってもない肝っ玉の持ち主）と高く評価されていた。





敵を殺しまくるのがなんか気持ちいいんです……





色ディーノさん！　関羽さんは……ヒゲなので（ミスター）雁之助さん。趙雲さんは……趙雲子龍さんがいるので。私ですか？　私は……雑兵、雑兵……。

自分は、チャイナな感じが、好きなんです。横浜中華街とかも好きです、一回しか行ったことないんですけど。散歩に行ったんですけど、幸せでした……（しみじみと）。あとはお台場の台場小香港ってところに、ときどき行きます。でも、でも、中国は行ってみたいとは思わないです。危険が、いっぱいあるので。猫肉を食べたり、ダンボール肉まんとか……。行けないですっ。中華なものは好きなんですけど、中国は好きじゃないんです。

ほかに好きなゲームですか？　……『戦国無双』です。殺しまくる。1000人くらい。は、はい。

『戦国無双』で好きなキャラは、お市（オイチ）です。生き方というか……ピンクなのが惹かれてしまいます。あと、あと、阿国（オクニ）です、踊っている人です。『戦国無双』は、まだコスプレしてないんですけど、やってみたいです。妹は『戦国無双』のほうが好きです。私は中華のほうが好きなんですけど、妹は和風なほうが。

あと『デビルメイクライ』が好きです。それも殺しまくる。え、殺しまくるのが好き？　は、はい、なんか気持ちいい（照）。ストレス解消というか……血が出るのが。現実でそういう衝動にかられたことはないです。リングで一度そういう格好で試合したらおもしろいですね。（突然）我こそは三國無双なり！　……いつかリングで言ってみたいです。今日は、ありがとうございました。はい。

【09年5月2日／埼玉県・アイスリボン道場にて収録】


サラブレ
2歳馬情報
7317頭リスト掲載 POG大募集
特別付録
小冊子
馬産地で話題の2歳馬写真満載
2歳馬 Photo Book
JRA-VAN スタートキット CD-ROM
過去23年分の中央競馬のデータを収録!
Rulership
(エアグルーヴの07)
NIPPON DERBY
2009&2010
ダービー馬見つけた!?
特集 関係者の証言を交え、頂上決戦の結末を占う
日本ダービーの行方
2009 DERBY
Unrivaled
ブエナビスタ、安藤勝己騎手インタビュー
ウオッカ、ディープスカイ参戦、安田記念
6月号 2009 June
特別価格 780円
絶賛発売中!


©SEGA
ULTIMATE GUIDE
StarHorse2 FOURTH AMBITION™
アルティメット・ガイドブック
種牡馬 タニノギムレット 出現コード付き
堅実継承型で使いやすい!
ウオッカの完全再現配合が可能に!
※種牡馬タニノギムレットの受け取りには STARHORSE.NETへの登録が必要です。
『スタホ』究極の攻略本が登場!
種牡馬・繁殖牝馬・アイテムデータはもちろん、開発チームへの独占取材を始め、サラブレ編集部が独自で調査したゲームデータを元に最新の攻略法を公開!
A5判 定価1680円(税込)
絶賛発売中!

ありがとう、忌野清志郎!!

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①〜⑧の質問の答えをご明記の上、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2009年6月25日(木)以降発送予定です)。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦K-1で一番好きな選手は?⑧今後のK-1に望むことは?

【宛先】〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス『kamipro』編集部
「Oh、ベイベー!!」係まで

※応募締切は2009年6月15日(月)当日消印有効

PRESENT*01

FRONT



BACK

1名様

グラップル×リバーサル コラボTシャツ

[リバーサル/¥5,040(税込)]

修斗20周年を記念して初期八角形リングをモチーフにして作られたコラボTシャツ。リバーサルのサイトでも近日中に通販を開始。サイズはLです。

リバーサル■http://www.rvddw.com/

PRESENT*02

FRONT



BACK

1名様

ノッチ「相方をCHANGE!!」Tシャツ

[アートジャンキー/¥3,675(税込)]

オバマ大統領就任で注目を集めるお笑いコンビ「デンジャラス」ノッチのオバマものまねがTシャツに。サイズはS。YES,WE CAN!!

アートジャンキー■http://www.artjunkie.jp/

PRESENT*03

1名様



サイン入り

小見川道大サイン入り『戦極』パンフレット

[戦極/¥2,100(税込)]

5.2『戦極〜第八陣〜』の大会パンフレットに、いっこく堂のモノマネが得意な小見川道大選手のサインを入れてプレゼント!!

PRESENT*04

1名様



日沖発サイン色紙

[戦極/非売品]

本誌ウェブサイト『kamiproドットコム』のインタビューで猫好きを語ってくれたフェザー級GP本命・日沖発のサイン色紙を1名様に!!

PRESENT*05

1名様



金原正徳サイン色紙

[戦極/非売品]

本誌ウェブサイト『kamiproドットコム』のインタビューでフェザー級GPにかける意気込みを激白した金原のサイン色紙を1名様に!!

戦極■http://www.sengoku-official.com/

PRESENT*06

1名様



宮田和幸サイン色紙

[BRAVE/非売品]

5.24『ZST』に初出場する元・五輪代表、宮田のサイン色紙を1名様にプレゼント。北千住にある宮田のジム『BRAVE』は会員募集中!!

BRAVE■http://k-miyata.net/brave/

PRESENT*07

1名様



M-1キーホルダー

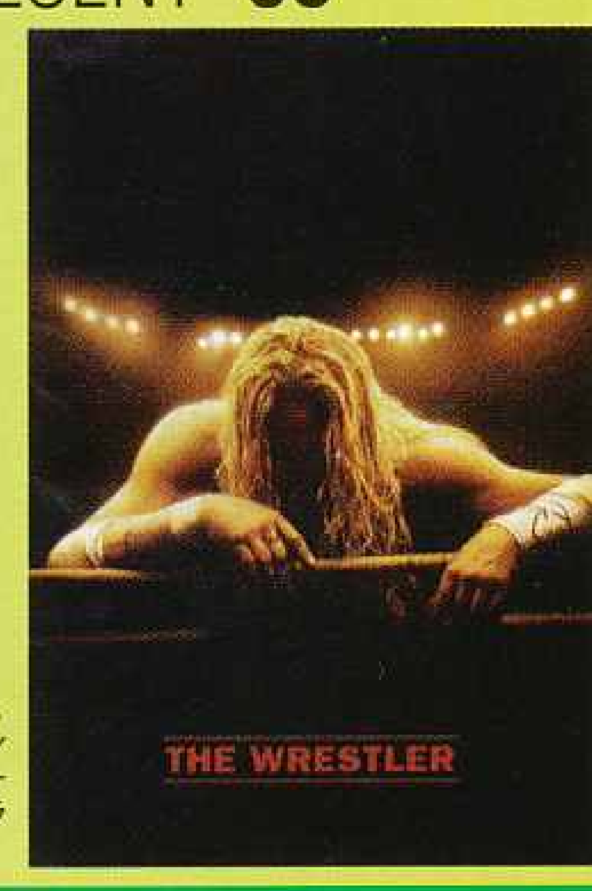
[M-1/非売品]

4.29『M-1チャレンジ』の前日記者会見でファイターやマスコミに配布されたM-1キーホルダーをプレゼント。ズバリ言って、これは貴重だ!!

M-1■http://www.m-1global.com/en

PRESENT*08

1名様



映画『レスラー』マスコミ用資料

[非売品]

6月13日(土)シネマライズ、TOHOシネマズ、シャンテ、シネ・リーブル池袋ほか全国ロードショーの大注目作『レスラー』のマスコミ用資料です!!

映画『レスラー』オフィシャルサイト■http://www.wrestler.jp/

PRESENT*09

1名様



DVD『息吹2008』

[クエスト/¥5,880(税込)]

吉田万里子が若手の活躍の場として05年に旗揚げした息吹。08年の激闘42試合、特典映像として吉田の20周年記念大会全5試合を収録。

PRESENT*10

1名様



DVD『早川光由柔術技法・下』

[クエスト/¥5,880(税込)]

日本を代表するブラジリアン柔術家として活躍する早川光由の多彩なテクニックを紹介するDVD。ボトムポジションからの技を紹介!!

PRESENT*11

1名様



DVD『SHOOT BOXING S-CUP 2008』

[クエスト/¥5,880(税込)]

シュートボクシングのビッグマッチをまるごと収録!! アンディ・サワー、緒形健一、宍戸大樹、ルイス・アゼレード、MIKU、風香らが出場!!

クエスト■http://www.queststation.com/

kamipro135 応募券
愛し合ってるか〜い!!

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! http://kamipro.com/

kamipro 紙のプロレス

No.135
2009年6月5日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
真下義之
大川義之
スズキィ
八木賢太郎（お宮参りのため非番）

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子

編集次長（依然○○継続中!!）
松林 貴

デザインGM
出田さん（TwoThree）

デザインプレイングマネージャー
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂マツくん
谷タニやん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
白木みのる（以上、TwoThree）

トメさん
はなえちゃん（以上、さおとめの事務所）

デザイン練習生
遣田やっちゃん（TwoThree）

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
タイコウクニヨシ
梅木麗子
丸山剛史

お勘定
工藤ちゃん

製造中
入江ワクチン（TwoThree）

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

助っ人営業
上野宏樹

業務部
樽本“シェルルック”義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

終身名誉編集庶務
高木由美子

編集チアガール
金川“学生飲み”奈津子
白倉“マカロン”明子

アゼリア・マダム
廣橋久美子

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

印刷
図書印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

■広告掲載のお問い合わせは下記まで
株式会社エンターブレイン
スポーツ企画編集部 ☎03-3265-7166

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

［カスタマーサポート］
☎0570-060-555
（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00〜17:00）
メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL: http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。



NEXT ISSUE

フェザー級GP2回戦に世界超人選手権も開催!
5.26『DREAM.9』速報!!

kamipro Special 2009 JULYは6月6日（土）発売予定!

魔裟斗の相手、そして『キン肉マニア』はどうなった!?

No.136は6月23日（火）発売予定!

※地域によっては多少発売が遅れます! ゴ〜メンナサイ!!



ka
No.135
2009年6月5

発行人
浜村弘一
編集人
斉藤慎一
編集統括本部
ジャン斉藤
編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガン
阿修羅チ
松下ミワ
真下義之
大川義之
スズキィ
八木賢太
終身名誉バイ
吉田 豪
助っ人
ジャイ子
編集次長(仮
松林 貴
デザインGM
出田さんの
デザインプレ
金井ヒサ
デザイン
松坂マツ
谷タニや
廣田ブン
野口ノグ
白木みの
トメさん
はなえち
デザイン練習
遣田やっ
カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
タイコウ
梅木麗子
丸山剛史
お勘定
工藤ちゃ
製造中
入江ワク
雑誌営業
堂前秀
中村宣
助っ人営業
上野宏
業務部
樽本"シ
編集庶務
原 正典
山内ユリ
終身名誉編
高木由美
編集チアガ
金川"学
白倉"マ
アゼリア・マ
廣橋久美
発行所
株式会
〒102-
☎0570
印刷
図書印
協力
BUSHI
FightS

kamipro 2009 135

魔裟斗からターザンまで!!
K-1をナメくさりやがって!!

2009年6月5日
発行人／浜村弘一　編集人／斉藤慎一　発行・発売所／株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
印刷・製本／図書印刷株式会社

enterbrain

9784757748774

特別定価：本体895円＋税
雑誌 61957-36 Ⓗ2009.9
Printed in Japan 図書印刷株式会社

ISBN978-4-7577-4877-4
C9476 ¥895E

1929476008954



kamipro 2009 135

今月の一言「五味vs青木を趣味でやりたい」(石井教義)

2009年6月5日
発行人/浜村弘一 編集人/斉藤慎一 発行・発売所/株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)

enterbrain

kamipro 2009 135 魔裟斗からターザンまで!! K-1をナメくさりやがって!!



特別定価: 本体895円 +税
雑誌 61957-36 Ⓗ2009.9
Printed in Japan 図書印刷株式会社